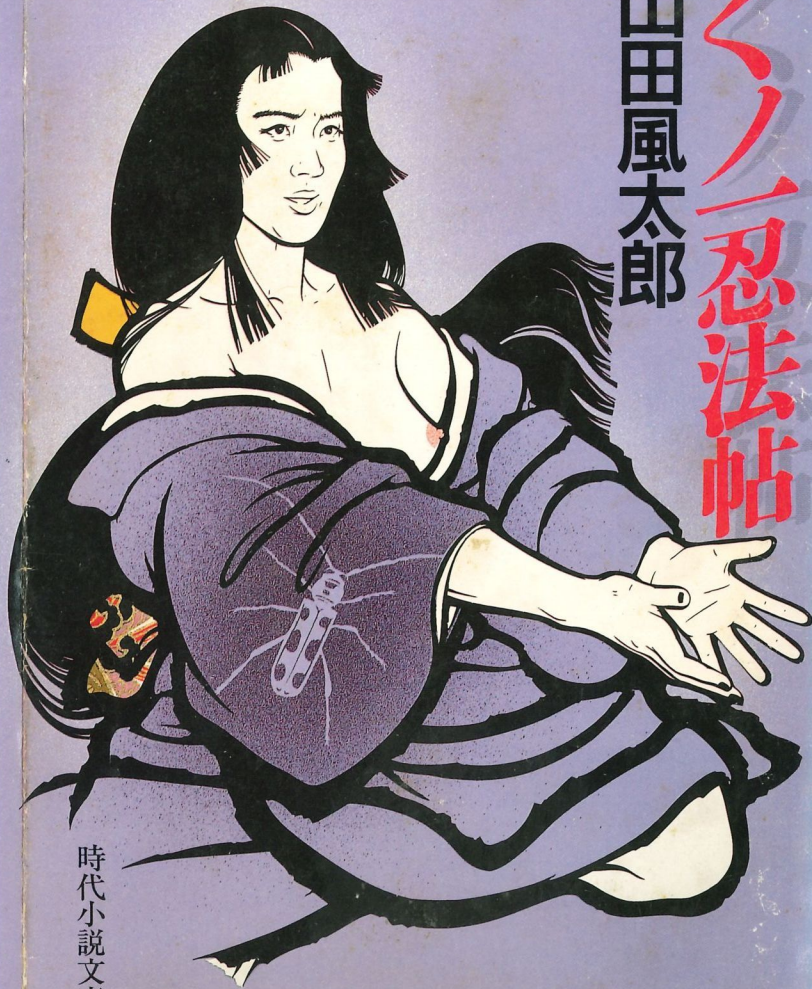
くノ一忍法帖
山田風太郎
時代小説文庫

くノ一忍法帖

「よいか、そなたら5人、ことごとく秀頼さまのお子を生んで、かならず徳川家にたたれよ」真田幸村の眼にぶきみな笑いが漂った。「ただ、秀頼さまはいたく御憔悴。蛇まといの秘法でおん腰を巻きたてまつらねば相成らぬぞ。吸壺の術を忘れるな」──翌日、大坂城は落城した。

千姫の侍女の中に、豊臣家の胤を宿した者がいる事を知った家康は驚愕し、伊賀の服部半蔵を呼んだ。真田の命を受けた信濃忍者と伊賀忍者との間にすさまじい性戦が……。

家康の千姫への愛、春日局の権勢欲、復讐に燃える丸橋らを背景に描かれた、極めつけの忍法帖！

カバー装画　百鬼丸
カバーデザイン　熊谷博人

くノ一忍法帖

山田風太郎

時代小説文庫

29-11
520 Ⓟ

くノ一忍法帖

山田風太郎

時代小説文庫

ISBN4-8291-1244-1
C0193 P520E 定価520円
(本体505円)

富士見書房

—時代小説文庫—
山田風太郎作品集

伊賀忍法帖
柳生忍法帖(上)(下)
江戸忍法帖
忍法忠臣蔵
風来忍法帖
魔界転生(上)(下)
海鳴り忍法帖
甲賀忍法帖
くノ一忍法帖

カバー　暁印刷

くノ一忍法帖

山田風太郎

時代小説文庫 244

時代小説文庫 244

くノ一忍法帖

山田風太郎

富士見書房

時代小説文庫 244

富士見書房

くノ一忍法帖

山田風太郎

忍法「くノ一化粧」

一

元和元年七月半ば、駿府にかえった徳川家康の笑顔ほど満足しきったものはなかった。

それも当然だ。これは、この五月、大坂城を攻めほろぼし、その残党を完全に掃蕩しきっての凱旋であったから。

しかも、将軍秀忠は一足さきに江戸にかえったが、一足あとには、孫娘の千姫が東海道を下ってくる。

「炎のなかを逃げてきたあげく、暑い旅をさせるのじゃ。いそぎ富士の氷室に人をやって、あるかぎりの雪をとって参れ」

じぶんの旅装もとかないうちに、そんなことをせきたてる老人に、近臣たちは、大御所のこの有頂天ぶりは、ひょっとしたら豊臣家をほろぼしたことより、千姫さまをぶじにとりかえした一事にあるのかもしれぬ、と考えたほどであった。

しかし、家康のこの手ばなしの満悦は、おそらく生涯ではじめてであったろうが、同時

に最後のものでもあった。明日はいよいよ千姫がこの駿府に入ってくるという夕方、その前駆のごとくかけこんできた騎馬の男が、いそぎ城に上って、ひそかに報告した内容が家康を震駭させたのである。

「なに、秀頼の子を身籠った女が、お千の侍女の中におると？」

「御意」

男は、平伏した。伊賀者の頭領服部半蔵である。

伊賀の郷士から出て徳川家につかえ、伊賀甲賀の忍者の総帥となった服部岩見守に三子があった。忍者という、いわば黄昏に舞い出す蝙蝠のような人間どもをあつかう職能のせいか、服部家の家運はふしぎに悲劇的であった。

はじめ長子の源左衛門正就が家をついだが、性質にやや狂的なところがあって、十年前輩下の叛乱をひきおこし、おのれは逐電して行方不明となった。そのあとを受けた次子の正重はたまたまその妻が大久保長安の娘であったため、二年前大久保一族が逆謀のうたがいで家康から誅戮をうけたさい、これも浪々の身となった。いま、家康のまえにおどろくべき一事を告げにきたのは、第三子の半蔵正広である。

そして、彼の報告のなかに、思いがけず登場したのは、長兄の源左衛門の名であった。十年もその姿をけしていた源左衛門は、このたびの大坂の役を以前の罪をあがなう絶好の機とし、ひそかに徳川家のためにはたらいていたというのだ。むろん、忍者として。——

服部源左衛門が、落城前夜の大坂城に潜入するという余人の企ておよばぬ離れ業をしてのけたのは、忍者という特異な能力と、右のようなつきつめた動機があればこそであった。

二

五月六日の深夜である。

その日の戦闘で、後藤基次、木村重成、薄田隼人正などの勇将を失い、敗色とみに濃くなった大坂城は、三十万の東軍の鉄環にしめつけられて、なおもえつづける町のなかに、瀕死の巨人のように暗天にそびえていた。

まひる、城外からの相つぐ悲報のたびに、城内は火の鞭でもあてられたような痙攣をしめした。怒号、悲鳴、発狂、失神——そんな渦のなかに、金をつかんで脱走をはかる者、上官を刺して日ごろの恨みに酬いるもの、惚れていた女を人目もおそれず犯す者の光景をみて、源左衛門はこの城の運命もあと一両日と判断した。

すでに偵察の目的を達し、夕闇とともにふたたび城外へ去ろうとしていた彼をとめたのは、収拾のつかないほどの混乱におちいっていた城内が、そのときにいたってどういうわけか、まるで荒天の海にあぶらをしいたように鎮まってきたからである。

そのふしぎな理由を、源左衛門はやがて知った。

「真田どのだ」

「左衛門佐どのがかえってこられた」

はてな、と源左衛門はくびをかしげた。真田といえば、ひるまの戦闘でほとんど総くずれになろうとした西軍のなかにあって、屹然として誉田に布陣し、勢いにのって雪崩れかかる伊達隊を迎撃してこれを潰乱させ、大坂方になお真田あり、と東軍に水をあびせた男で、この夜まで茶臼山にあって、東軍ににらみをきかせているはずだったからだ。

「その左衛門佐が帰城したというのは、すでに城に最後のときがきたと覚悟したのか、それとも、きゃつのことだ、また何やら天外の奇想でも授けにかえってきたのか？」

源左衛門は、篝火のかげをひろい、蝙蝠みたいに石垣や、壁をつたってうごいていった。

——そして、本丸桜門にちかい書院のなかに、その真田の姿を見出したのである。

土足のまま出入りできるようにつみあげた畳を背に、幸村は坐っていた。そのまえに五人の女が半円をえがいてならんでいた。まわりには、武具や、燭台や、はなやかな寝具、かいどりのたぐいまでが散乱している。

「いよいよ、その時がきた」

と、幸村は錆をふくんだ声でいった。学者のように荘重な顔に、ひときわ森厳な眼のひかりである。

「明日にも城はおち、秀頼さまは御討死あそばすであろう。秀頼さまにも、御得心あらせられた。そなたらの胎内におん胤をおのこしあそばすことを」

庭の弾ふせぎの土俵のかげに這っていた源左衛門は、眼をしばたたいた。そなたらの胎内に、胤をのこす？——のびあがってみたが、短檠のあかりに五人の女の背が、ことごとく若々しいとみえただけで、顔はわからない。

ただ、ひとりの女の声がきこえた。

「——千姫さまも御承知でございますか」

「御承知なされた」

と、幸村は無表情にうなずいて、

「みな存じておるように、お袋さまは千姫さまをお疑いであれど、千姫さまは秀頼さまとおなじ蓮におのりなさるお覚悟にお迷いはない。それどころか、このいくさのなりゆきから、祖父の大御所の心のむごさ、冷たさを、秀頼さま以上におにくしみじゃ。ふっつり御生害のお覚悟ではあるが、たとえ生きのこっておわそうと、もし千姫さまの御胎内の豊家のおん胤がのこっておれば、それを見のがす家康ではない。したがって、あくまで豊家のおん血をつたえようとすれば、そなたらの腹をかりるよりほかはないのじゃ」

そして、つぎにつぶやくようにいった幸村の言葉は、源左衛門を戦慄させたのである。

「よいか、そなたら五人、ことごとく秀頼さまのお子を生んで、かならず徳川家にたたれよ」

五人の女はうなずいた。幸村の眼に、はじめてぶきみな笑いが漂った。

「ただ、秀頼さまは、この一両日、いたく御憔悴の体におわす。それに五人でかかるのであれば、蛇まといの秘法でおん腰を巻きたてまつらねば相成らぬぞ。また、かならずおん胤をつかせねばならぬゆえ、吸壺の術を忘れるな」

幸村はたちあがった。

「さらば、ゆけ。秀頼さまはもはや山里丸糒蔵にお待ちなされておる」

――それからしばらくののち、源左衛門は、糒蔵のたかい軒の下に、黒とかげみたいに貼りついて、下を見おろしていた。

ひとり軽装の武者をしたがえた幸村とともにあるいてきた五人の女は、武者のあけた扉のあいだから、糒蔵のなかに入っていった。庭の篝火に明滅する五人の女の顔は、いずれもばら色に上気して、この世のものとは思われないほど美しかった。武者は、扉をしめた。

城をとりまく雲霞のような攻囲軍は、この時刻になお示威の声を、重々しい海嘯のようにあげている。城方は、それにこたえなかった。すべての城兵が、この最後の夜にいたって行なわれようとする奇怪な祭典を知っていたわけではあるまいが、しかし、たしかに無数の人々の熱ッぽい祈りの心がこの糒蔵にそそがれている感じがあった。源左衛門は耳をすました。蛇まといの秘法――吸壺の術とは何であろう？

そのとき、蔵の横の明り窓から――たしかに蔵の中から、女のさけび声がながれ出たような気がした。何事が起ったかはしらず、男の魂をかきむしるような女の声であった。そ

の窓の方へ、音もなくうごきかけた源左衛門の耳に、ふたたび女の声がきこえた。ふるえた源左衛門の指から、眼にみえないほどな軒の塵がおちた。

「才蔵」

幸村の声だ。はっとして見おろした源左衛門の眼が――おのれの姿はまったく闇にしずんでいるのに――あきらかにじぶんをはたと見あげている武者の眼と合った。

武者の腕があがると、赤い流星が旋回しつつ飛びきたって、彼の軒をつかんだ手の甲につき刺さった。それが、篝火にかがやくマキビシだと知ったとき、源左衛門は間髪をいれず一方の手に忍者刀をぬきはなって、縫いとめられた手の甲を、手くびから斬りはなしている。

「しまった」

はじめて、才蔵という武者の口からそのうめきがもれたとき、源左衛門は音もなく土蔵の屋根にのがれていた。

――服部源左衛門がともかくいっとき命をつないだのは、彼が忍者であったことと、大坂城そのものが、断末魔のあがきのなかにあったという理由のほかに何もなかった。しかも、彼は城がおちるときまで、城の外へ脱出することは不可能であったのである。

その翌日、大坂城はおちた。真田も秀頼も死んだが、しかし千姫は炎のなかを救い出された。そして、それまで城の一隅にひそんでいた服部源左衛門もようやくのがれ出て、攻

囲軍に加わっていた服部半蔵のまえに姿をあらわしたのである。
この不遇な兄が、弟に顔をみせたのは十年ぶりであった。切断した手くびからの出血のために、彼はすでに瀕死の状態にあった。そして彼は、城内でみたあの奇怪な事実を告げて、そのまま落命したのである。

三

……なぜ、これほど驚倒すべき事実をいままで告げなかったのか。
それは、服部源左衛門が日蔭の忍者でしかないという遠慮のほかに、半蔵にも、とみには信じられないほどの奇怪事であったからだという。
家康も、半蔵を叱責することを忘れた。家康にしても、それだけの話ならば、半蔵の正気をうたがったに相違ない。それが彼にただならぬさけびをあげるほどの衝撃をあたえたのは、その話に、いっそうおどろくべき事実が尾をひいてきていることを伝えられたからであった。
「……秀頼の子を身籠った女が、お千の侍女の中におると？」
「御意」
ふたりは、もういちどその言葉をくりかえした。
「なにゆえ、それがわかったのじゃ」

「桑名からの、千姫さまの御座船に真田家で見た女の顔のあるのに、不審の語をもらした本多さまの御家来があるのです」
「本多の――お、そう申せば、本多は真田の縁つづきじゃの」
それは、こういうわけだ。いまの桑名の城主は、本多美濃守忠政だ。剛勇をうたわれた平八郎忠勝はその父である。この忠政の姉が真田伊豆守信幸に嫁づいていた。信幸は幸村の兄である。
むろん徳川家と真田家が、いまのような関係となる以前の縁むすびだが、とにかくそういうことから、本多家の家臣で近年まで真田家に出入りしている者があり、ひいては幸村が隠栖していた紀州の九度山にも、幸村が大坂方につかぬよう極力すすめに往来した者もあった。そのひとりが、こんど千姫が桑名から乗りこんだ船を護衛するためにちかづいて、はからずもその侍女の中に、かつて幸村の身辺にみた顔を発見したというのであった。
「その女が……いま申した大坂城で、秀頼の待つ糒蔵に入っていった女じゃと申すか」
「それは、わかりませぬ」
「五人、みんなおったというか」
「それも、わかりませぬ」
糒蔵に入った女を目撃したのは、死んだ服部源左衛門ひとりなのだから、それは当然だが、家康はじぶんの迂濶な問いに苦笑するのもわすれていた。

「いずれにせよ、千姫さまのお身ちかく左衛門佐の匂いのする女がおるとは、容易ならぬことでござる」
「よし、その本多の家来を呼べ」
「その男は、死んだそうでございます」
「なに?」
「船が七里の渡しを渡りきるまえに狂い出して、みずから海へとびこんで失せたと申すことでござります」
――その男は、船中でしだいにだまりこみ、はては坐りこんでしまったが、眼がぶきみに充血し、真夏の犬みたいにあえぎ出し、はじめ船酔いでもしたのかと見ていた同僚も、彼があきらかに慾情にもだえる眼を千姫一行にそそいでいるのに、これは、とうろたえた。しかし、その男は、平生から剛直できこえた人間だった。「どうかしたのか」と、きくと、じぶんでも、「どうもおかしい」と苦悶の眼を蒼空にあげた。しばらくすると、そこに裸の女人が踊っている、といい出した。が、同僚の眼にみえたのは白い帆と白い雲だけであった。小鼻をぴくぴくさせ、歯をくいしばっていたが、そのうち突然淫らな言葉を口ばしって、千姫一行の方へはしり出そうとしたのに、同僚たちが狼狽してとりおさえたが、ふいに蒼い海面をみて、「あ……海に数もしれぬ女がおよいでおる。女の波じゃ、女の海じゃ」とさけびながら、恐ろしい力でみなの腕をふりはらって、海の中へとびこんでしまっ

たという。――
その話は、服部半蔵はあとできいた。千姫をぶじ宮へおくって、かえって船からおりてきた本多の家臣のうわさを、たまたま所用で京から桑名へきていた半蔵が耳にしたのである。うわさの中に、その奇怪な水死者が発狂するまえに、「はてな、千姫さまのお腰元に、真田のものがおるが」と首をひねってつぶやいていたという話をきくと、彼は愕然とした。半信半疑ながら、この五月、兄からきいたあの話は、半蔵の胸にぶきみな凝塊となってのこっていたのである。それで、もはやこれはひとりでおさえておくことがらでない、と判断して、そのまま馬をとばし、千姫一行をも追いこして、一足さきにこの駿府へかけつけてきたというのであった。
家康はうなった。
「半蔵、その本多の家来の死にざまをどう思う」
「それでござる。拙者……案じまするに、そのものは呪法をかけられたのではあるまいかと存じます」
「呪法?」
「おそらく、その真田に縁のある女――ひとりか、五人か、それはわかりませぬが、忍法を心得ておるとしか考えられませぬ」
「忍者か!」

と、家康はさけんだ。この鉄血の大御所のからだがふるえた。

「お千の身辺に真田の忍者がおる。しかも、それが秀頼の子を身籠っておると申すか？」

四

その翌日の夕方、千姫の一行は駿府に入ってきた。

千姫の乗物をかこむ三十人ちかい侍女たちのきらびやかさも海道の人々の眼をひいたが、一方ではその前後にしたがう甲冑の荒武者たちを指揮する男の、焼けただれた醜顔にも人々は袖をひきあった。千姫を落城の炎のなかから救い出し、このたびの道中守護を命じられた坂崎出羽守とその一党である。

家康は城の大手門まで出迎えた。将軍秀忠を迎えるときにすらみせない態度である。眼も口もとろけそうな顔であった。

八つのとき大坂城に人質同様におくった孫だ。そのあいだ、秀頼はしらず、その母の淀君がどんなにこの孫につらくあたったか、家康もきかないではない。とくにこのいくさで、どれほど苦労したであろう。ふびんなやつ、いじらしい孫――と思うと、事と次第ではその千姫を城もろとも焼くことを辞さなかったくせに、いや、それだけにいまとなっては、彼女のこれからの倖せのためには、たとえ日本中の宝の半ばをあたえても悔いはないとさえ思う祖父であった。

すでに江戸城竹橋門内には、吉田修理介という家臣に命じて、彼女を迎える御殿もいそぎ建築中であるが、家康は、たとえ予定をたがえても、一日でもながくこの城に千姫の足をとどめておきたかった。

「お千、お千」

うわごとみたいにくりかえす家康の声は、涙ぐんできこえるばかりだ。

しかし、千姫は冷やかであった。このあどけなく、また妖しいまでに臈たけた十九歳の未亡人は、祖父の可笑しいほどのきげんとりに、まったくとり合わなかった。その態度がなんに由来するか、大心理学者たる家康にもわからない。いやうすうすわかってはいるのだが、じぶん自身に対しても、知らない顔をしようとしている。それより、眼ばかり大きくみえるほどやつれた千姫が、ちょっとでも大きな物音がすると、ぴくっとからだをふるわせたりするのを、長年の苦労やこんどのいくさの恐怖からの神経症だと判断した。

この可憐な孫に、なおとり憑いてはなれようとせぬ豊臣の亡霊め！　じぶんのしたことは棚にあげて、家康がむらむらと腹をたてたのは、いうまでもなく姫に従ってきた侍女の中にいるという真田の忍者にであった。

その夜家康は、まったく不用意に、そのことを千姫に話したのである。

「お千……そなたの腰元のなかに、敵がまぎれこんでおることを知っておるか」

「――敵？」

「豊臣家の――くわしく申せば、真田の息のかかった女じゃ」
千姫は氷のような眼で祖父をみた。
「お祖父さま、豊臣家はわたしの敵ではございませぬ。わたしは豊臣家の女でございます」
家康はじっと孫をながめた。表情に毛ほどのうごきはない。
「ふびんや、お千がそう思うのもむりはない」
皺のあいだに老獪な微笑がよどんだ。
「そう思うならば、当分はそう思え。……したが喃、お千、その真田のまわし者が、秀頼の子を孕んでおるとしたら、いかがいたす？」
「御存じでございますか」
千姫の声はしずかであった。
「神も御照覧、お千が生ませて、育てます。いのちのあらんかぎり、徳川家にたたるようにと。――」
「そなたも、承知のうえか！」
はじめて、愕然として家康はさけんだ。顔色が変っていた。しだいに面がおちたように凄じい形相になり、せきこんで、
「お千、その真田の女はどれか申せ。このまま、見のがすわけには参らぬ」

「申せませぬ」
「いえぬ？　たわけたことを――ならば、よし、上方からついてきた女ども、ひとりのこさずこの城で誅戮してくれる」
三十人あまりの侍女のうち、十人ほどは千姫が伏見城にいるあいだにこちらから新しくつけてやったものだが、あと二十人ばかりは、千姫がたすかったときいてあつまってきた大坂の城の女たちであった。落城前後ににげ出した女たちで、むろん千姫のゆるしを得てふたたび召しかかえられたものだった。そのなかに、例の女たちがいることは、千姫は承知のうえだったのだ。果然、服部源左衛門の話はいつわりではなかったのである。
千姫はいった。
「御勝手になさいませ。ただし、そのときはお千も生きてはいますまい」
家康は狼狽と憤怒と苦悶のために両手をもみあわせた。
やがて、ひくく、ぞっとするようなしゃがれ声でいった。
「お千、そのわがままをゆるしては、おれの大仕事にひとみが入らぬ。豊臣家の血は、一滴たりともこの世にのこしてはならぬのだ。見ておれ、かならずその女ども、ひっとらえて成敗してくれるぞ」
千姫は凄艶な笑顔をみせた。
「お祖父さま、恐れながら、お千はお手むかいつかまつります。豊臣家はやぶれました。

けれど、わたしはやぶれてはおりませぬ。これがお千のお祖父さまへの果し状でございます」

少くとも、五日や七日は手もとに置いておきたい――という祖父のはじめの願いもむなしく、千姫一行は翌日駿府を江戸へ去った。

城の本丸の白壁に「君臣豊楽、国家安康」という文字がかきのこされていることに気がついたのは、そのあとである。

「君臣豊楽、国家安康」――それは、豊臣家を祝い、徳川家を呪うものとして、家康が大坂を滅ぼす口実につかった例の大仏の鐘銘の文字であった。人々は顔色をかえた。

しかも、それは墨でかいたのではなかった。暗褐色に変色はしていたが、たしかに血でかいたものらしく思われた。家康は不快そうな表情でそれをみていたが、ただ「よいわ、消しておけ」と命じただけであった。この文字をかいたものがだれか、彼にもよくわかったのである。

ところが――その血文字はきえなかった！ 水であらっても、湯をそそいでもきえず、はては手斧でけずっても――おどろくべし、壁の中からはてしもなく「君臣豊楽、国家安康」の文字が浮かび出てくるのである。

「……？」

壁のまえにたちすくんで、家康はかっと眼をむき出したままであった。

五

家康は三日間沈思黙考していた。それから、服部半蔵を呼んで、何事かを命じた。

命に応じて西へはしった半蔵が、五人の男をつれて駿府へかえってきたのは、四日ののちであった。その五人の男が、伊賀の忍者だときいても、人々は駿府から伊賀までの往返百五十里にもおよぶ道程をかんがえて、唖然としたにちがいない。

曾て、家康は或ることから、やはりこの半蔵の推挙によって、いまだ世に出ぬ伊賀甲賀の忍者をみる機会があって、その生理の可能性の範囲内にありながら、常識を絶した秘技に舌をまいたことがあった。家康は、突如もちあがったこのたびの難問題を解決するのに、彼らの力をかりるよりほかはないという思案に達したのである。

彼らが到着したのは、もはや夜に入ってからであったが、家康はいそぎ篝火を焚かせて、彼らを庭前に召した。

「伊賀国鍔隠れの谷の郷士、鼓隼人、七斗捨兵衛、般若寺風伯、雨巻一天斎、薄墨友康と申すものにござります」

と、半蔵が紹介した五人を、家康は見わたした。姿、容貌にそれぞれの相異のあることは当然だが、いずれも剽悍な山岳の気と、うすきみわるい妖気のただよっている点では共

通している。

「大儀じゃ」

と、家康は会釈して、

「事の次第は半蔵よりきいたと思うが、引受けてくれるか」

「御諚により、五人召しつれましたなれど、五人のものいずれも、かかる用は一人にて足りると申しております」

と、半蔵はいった。

「何、一人で？――それはもとより、余もなるべくはひそやかに、隠密のうちに事をはこびたいと切に念じておる。出来るならば、それにこしたことはない。少々難儀の仕事であるぞ。ただ、その五人の女を誅戮すればよいというものではない」

と、家康は指をおった。

「まず第一に、姫の身辺より、その女どもを探し出さねば相ならぬ。いま五人と申したが、一人か、二人か、三人か、四人か、それもわからぬ」

「……………」

「第二に、その女どもを成敗するのに、こちらの手がおよんだと姫に知られてはならぬのじゃ。もしそうと知れれば、姫は余に面当に、どのようなふるまいに出るか、それを苦にやんでおる。その女どもは、あくまでおのれから狂って死ぬなり、胤をながすなり、そのようにみえねばならぬ」

「……………」

「第三に、この用を果たすに、時のかぎりがある。五月に身籠ったとすれば、六月に閏があったから、子の生まれるのは来年の一月という勘定となる。いま七月――あと五月ばかりのあいだに、事をすませてしまいたいのじゃ」

家康は、五人の男が、いずれも不敵なうすら笑いをうかべているのに気がついた。

「出来るか」

「それがしが」

と、右端のひとりが水面を漂うようにまえにすべり出した。

「それくらいの御用ならば、それがし一人で充分と存ずる」

たしか、薄墨友康という男であった。その名のごとく、色は煤をぬったようにうす黒く、頬骨とのどぼとけがとび出して、ややつりあがった眼だけ白くひかっている。髪は総髪というより、腰のあたりまで背にたれている。

それが、功をあせる風でもなく、平然といい出したのに、他の四人もにやりとしてそれを見ているのが、べつに臆して遠慮したわけでもないらしく、彼ら忍者の結束と自負を実に自然にあらわしていた。

家康は眼をしばたたきながら、

「そちに、いま余の申した条々、相まもれるとな？」
「御意」
「――どういたす」
「恐れながら、女性――最も貞操堅固と思わるる女性を借用つかまつりとうござる。御前にて、拙者の技を御覧に入れる」
家康は相手の唐突さにちょっとまごついた風であったが、すぐにいまじぶんの命じた用件の性質を思い出したようだ。しばらくうち案じていたが、うなずいて、
「胡蝶を呼べ」
と、いった。
やがて、胡蝶という侍女が呼び出された。
白羽二重の小袖に檜垣綸子の裲襠をきて、白元結をかけたおすべらかしがふさふさとゆれる。大御所の会っている男たちの素姓も知らぬらしく、両手をつかえ、ふしんげに小首をかたむけて見あげた顔は、たとえようもなく清純であった。
「大御所さま、何御用でございましょうか」
「用は、こちらでござる」
庭先から声をかけられて、縁側に坐った白い顔が何気なくそちらへむけられた。そのとたんに、彼女は「あっ」とさけんで顔を覆った。

「な、何をいたす」
と、うろたえる家康に、
「針を吹いたのでござるが――なに、大したことはござりませぬ。たんぽぽの毛ほどの針――傷ものこりませぬ。痛みももはやありますまい？」
と、薄墨友康は恬然とこたえて、音もなくたちあがり、庭さき十歩の位置まで歩んできた。
胡蝶は、ひたいと頬に刺さった数本の針をはらいおとした。おちれば、ゆくえもしれぬ微小な針であった。しかし、そのおどろきのゆえであろうか、彼女はまっ黒な瞳を茫とひらいて、庭の醜怪な忍者を見つめている。――そのまるい肩がしだいに波うち、頬に紅がみなぎってきた。胡蝶のからだに、別な異変が起ってきたことに、ようやく家康も気がついた。彼女の唇はかすかにひらかれ、愛くるしい舌がのぞいてみえた。眼は異様なひかりをたたえて、友康にくいいっていた。
「ござれ」
と、薄墨友康はいった。
胡蝶はふらふらと立って、縁をおりた。吸いつけられるように、友康の方へあるいてゆく。薄墨友康はあらあらしく、無造作にこれを抱きとめると、胡蝶の襟をぐいとはだけ、薄紅の花のようなその乳房をつかんだ。

「あ……これ、待て」

と、家康が浮き腰になるのを、

「いま、しばらく」

と、友康はおちつきはらっていった。そして、片腕に胡蝶を抱いたまま、片手で乳房にふれていたが、やがてその手は、女の裾に下っていった。胡蝶の乳房は嵐のように波うち、まつげはふさとじられ、口はあえいでいる。ときどきひきつけるような発作がはしるたびに、裾のあいだから絖みたいなふとももが露わになって、白い足袋のさきがぴんとそりかえる。

この侍女のこのような姿態は、家康にいままで想像もつかなかった。処女であることはいうまでもないが、なかでもこういう淫らな行為にはもっとも程遠い娘と見たからこそ、家康は彼女を名ざしたのである。——さっきの吹針に、女をけだものにかえる毒がぬってあったに相違ない、とようやく家康も気がついた。

眼をそむけずにはいられない光景が、篝火のあかりのなかにつづいていた。七十五歳の家康の顔も、あかくなったり、蒼くなったりした。もしこれが、おのれの命じた大事につながるものでなかったら、「もうよい、やめよ」と彼はさけび出したにちがいない。——白いあごをあげ、黒髪を地に垂らし、弓なりにのけぞっていた胡蝶は、そのまま地上に横たえられた。

裾は大きくみだれ、かきひらかれたふくよかな象牙のような下肢のあいだに、薄墨友康の顔はきえていた。猫が、水をなめるような音がきこえた。胡蝶が大きなうめき声をあげ、四肢をぶるぶるとふるわせて、急にぐったりとうごかなくなった。

「薄墨」

「死んだのではござらぬ。——いや、法悦のために死んだも同然と申そうか。まもなく甦えることはまちがいはありませぬが、あと一ト月は半病人でござろう」

と、笑いをふくんだ声とともに、薄墨友康は顔をあげた。

家康は、友康の顔がぬれひかっているのをみて、思わず眼をそむけようとしたが、ふっとその視線がうごかなくなった。相手の容貌に、微妙な変化をみたような気がしたからだ。——その顔は、醜怪さをけしていた。顔のみならず、からだにも、何ともいえないやさしい線がうかび出た。彼はまるで甘露のしたたりでも反芻するように、舌なめずりした。みるみるうちに、そのとび出した頬骨とのどぼとけがなめらかになって、顔全体がまるみをおびてきた。白味をおびた眼が黒い瞳に変り、青銅の皮膚が象牙色になった。

「……あっ」

家康は、思わずさけんだ。そこに立っているのは、女——しかも、胡蝶そのままの女人の姿ではなかったか。

変形した薄墨友康はかがみこんだ。その腰のうごきはなまめかしかった。そして、する

すると地上の胡蝶のきものを剝いだ。それから、じぶんも衣服をぬぎすてた。さすがの家康が、名状しがたい恐怖に襲われて、もはや声も出なかった。——見よ、友康の胸に、むっちりとふたつの乳房がもりあがり、一瞬股間にみえたものは、幽かにけぶるような女陰ではなかったか。

彼は、胡蝶の衣服をまとった。檜垣綸子の裲襠に、ばさとみだれたながい黒髪も凄艶に、何かのぬけがらみたいに白い裸身を横たえている胡蝶をよけて二、三歩出ると、つつましやかに両手をそろえてうずくまった。

「伊賀忍法——くノ一化粧にござります」

声は胡蝶のものであった。

あとの四人の鍔隠れの忍者は、しずかに笑って家康を見ていた。

薄墨友康が江戸へむかって去ったあと、家康は服部半蔵からきいた。女という字を分解すればくノ一となる。すなわち「くノ一」とは「女」をあらわす忍者の隠語であった。——しかし「化粧」という語を、これほど凄じい適切さでなぞらった変化ぶりは、またとこの世にあるまい。薄墨友康があのようにあざやかに女人に変形したことは、もとより彼のほこる忍法の妙術にちがいないが、いまの言葉でいえば、女性ホルモンの作用でもあろうか。

六

——幸か不幸か、千姫の身辺に、真田の息のかかった女がほんとうにいるのではないか、という疑いをもったものが、ほかにもいた。伏見から江戸まで、千姫を護衛してきた坂崎出羽守である。

彼もまた、桑名からの渡船のなかでの、あの本多の家来の怪死と、その直前のつぶやきを見聞きしたのである。これをたんにききながすことのできなかったのは、ちょうど服部半蔵に、大坂城で兄の目撃した奇怪な事実の裏づけがあったのとおなじで、彼にも道中露骨にしめされた千姫の言動が、「もしや」という疑惑を起させた。

千姫を大坂城の炎の中から救い出す直前に、「姫をたすけてくれた者に、姫をやる」という家康の言葉をたしかにきいた。その約束にうごかされて猛火にとびこんでいったのではないが、面をやいた炎と、背をやいた姫のからだの感覚が、出羽守を煩悩の虜にかえてしまった。それなのに、道中、千姫は終始さげすみとにくしみの眼で彼をながめ、

「わたしは豊臣家のおんな」

と、事あるごとに昂然と口ばしるのが、出羽守に、余人のように寛大にききながす余裕を失わせた。本多の家来のいった「真田の女」が、まさか秀頼の胤を身籠っているとは知りようがないが、すくなくとも、豊家をわすれぬ女がなお千姫にまつわりついているおそ

れは充分ある、とかんがえられたのである。

柳原にある坂崎の屋敷で、鬱々と腕ぐみをしていた出羽守が、思い決したように近臣を呼びあつめたのは、江戸へかえって五日めのことであった。

帰府以来、主人の憂鬱の原因が、道中の千姫の態度と、駿府で家康が例の約束ごとをおくびにも出さないで、けろりとわすれたような顔をしていたことにあるのを見ぬいて、心中憤慨していた家来たちは、すわとばかり、そのまえにつめかけた。

「おれは、もういちど駿府にゆきたい」

と、出羽守はいい出した。

「御心中、お察し申す」

「殿が大御所さまに、あの件についてなぜ申し出されなんだのか、拙者どもも歯痒うござった」

と、家来たちは口々にいった。

「あの際じゃ。いいそびれたのよ」

と、出羽守はやけただれた面体をひきつらせて、にがく笑った。

「姫がまだ御帰府もなさらぬに、左様な私事はもち出せなんだ。と思っておったが、この二、三日、いろいろ思案をしてみるに、日がたてば、かえって証文の出しおくれとなるような気がしてならぬ。そこでじゃ、大御所様が例の御約束、やわか忘れ顔をなされぬうち

に、釘をうっておきたい。ただ、それにしても、手ぶらで、それのみの用件ではおしかけにくい」

そして出羽守は、例の疑惑を口にしたのである。もし千姫の侍女のうちに、真田につながるものがあれば、それをひっくくって土産としたいというのであった。

「もし、それが事実ならば、まことに捨てておかれぬ一大事」

「まさか、姫がそのことを御存じではあるまいが――」

「それを知れば姫も真田の執念に水をあびたような思いをなされ、大御所さまも、こりゃ千姫の身は坂崎にまかすにかぎると決心あそばすは必定でござろう」

一大事とはいったが、むしろ彼らは軽躁に評定したのである。その結果、成瀬十郎左衛門、戸田伴内、大友彦九郎という三人の家来が、じきじき千姫の屋敷をおとずれて、その実否をただすことにきまった。

江戸城竹橋門内に建てられた千姫の屋敷は、まだ壁も生乾きのありさまであった。これでも、あたらしく家老を命じられた吉田修理介が五月以来、昼夜兼行で工事を督励してきたものである。ひるまはまだ何百人という大工や左官が槌音をひびかせ、泥まみれになってはたらいている。父の将軍秀忠が、しばらく城内に住むようにすすめたにもかかわらず、すねたように、いちはやくここに入った千姫であった。もっとも江戸城そのものが未完成で――いや江戸ぜんたいが、まだいたるところを切りくずし、埋めたて、覇府草創の土け

むりの中にある時期でもあった。

その千姫屋敷に、夕刻ちかく、坂崎から三人の使者がおとずれて、いそぎ吉田修理介に面会を申しこんだ。修理介はおりあしく不在であったが、「千姫さまお付きのものの身分について、内密に御意を得たいことがある」という使者の用件を千姫がふときいて、みずから会ってやろうといい出した。

成瀬十郎左衛門と戸田伴内と大友彦九郎は、肩ひじはって奥へとおった。もともと坂崎家は徳川譜代の臣ではない。曾ては家康らとともに豊臣家五大老の一人であり、関ヶ原では西軍の総帥ともいってしかるべき宇喜多秀家は、出羽守の従兄にあたり、出羽守はこの秀家と不仲となって家康の麾下にはしったもので、家柄といい、関ヶ原以来の武功といい、たとえこんどのことがなかろうと、後家の千姫をもらうのにさほど随喜の涙をこぼすまでのことはない、という彼らの鼻息であった。

夏ではあったが、雨催いの日で暗い夕暮であった。すでに短檠をつらねた書院に、千姫はひそと坐っていた。左右には五人の侍女が影のごとく従っているばかりで、男気はない。

このとき彼らは、すでに名状しがたい妖気がぞくぞくと背を這っているのを感じていた。「壁がぬれているからではないか」と思う。「女ばかり――男の影がひとりもみえないせいではないか」とも思う、――いずれにせよ、妙にしめっぽい、蒼い靄のようなものが屋敷全体にながれているのであった。

使者のあいさつに、千姫はわずかにうなずいた。道中のときとおなじように、冷やかで傲然としている。ただ暑い旅上とちがって、この世のものとは思われないほど幽暗な美しさがあった。なんとなく勝手のちがった畏怖から、それに反撥するように成瀬がずばりと例の件についてきり出した。

それに対して千姫のこたえはこうであった。

「存じておる」

それっきりだ。三人は啞然とした。すぐに戸田伴内がかみつくように、

「御存じあそばすとは……それでは姫には真田の女を――」

「わたしの召使うものの素姓に、そなたらの指図はうけぬ。……用は、それだけか？」

大友彦九郎がさけんだ。

「恐れながら、姫のおつかいあそばすものについて、われら、他家のこととして拱手傍観は相成りませぬ」

「なぜ？」

「姫君には、やがて拙者どものあるじ坂崎出羽守へ御輿入れのはずでござれば」

「なぜ？」

三人は満面を朱にそめた。

「大御所さまの御誓言でござる！」

「お祖父さまはしらぬ。わたしは誓言せぬ」
そして千姫は、何ともいえない冷たい笑いをうかべた。
「お祖父さまは、太閤さま御臨終のさい、秀頼さまに御奉公の儀は太閤さま御同前、表裏別心、毛頭存ずまじきことと起請文をかかれたお方じゃ。それは天下のひとみな知るとおり。それを承知でお祖父さまといっしょに大坂城を攻めほろぼしながら、笑止や、おのれのこととなれば、お祖父さまの御誓言を信じたのか？」
三人は、こんどは蒼白になって、千姫をにらみつけていたが、すぐにきっと顔を見あわせて、
「ただいまの仰せ、たしかに承わった。そのむね、ただちに主人出羽守へ申しつたえるでござろう」
と、跫音あらくたちあがった。そのとき、千姫でない声がした。
「かえることはならぬ」
三人はふりかえった。千姫のすぐ右にいるひとりの侍女と眼があった。
むしろ稚ない、まる顔の少女だとみえたのは一瞬である。三人は、異常に大きく、まっ黒なその瞳に吸いつけられた。視線をはなそうとしたが、はなれなかった。三人の眼は——魂そのものは、瞳の深淵にひきずりこまれた。黒い沼から、ぼうと黒い霧がたった。それはあたりにぼやけ、ひろがり、書院はみるみる異様に暗くなった。短檠の燈心もいっせ

いにめらめらと黒い油煙をあげはじめたようであった。
そのなかに、白日の牡丹のようにゆれうごくものがある。たちすくみ、あごをつき出し、じっと見いる三人の眼に、それが裸身の女人とみえてきて、
「——や？」
と、息をのむ、牡丹はひとつからふたつにふえた。みるみる五つから七つにふえた。
愕然として見まわすと、周囲の唐紙にも、天井の木目にも、幾十人ともしれぬ全裸の女が、くねくねと白蛇のようにもつれうごいている。
「——変化じゃ！」
だれがさけんだのかわからない。それはへんに遠い声であった。無数の女が暗くけぶる空中を漂ってきて、彼らにふれた。彼らは背におしつけられる乳房の脈搏と、口すれすれに、あえぐ匂やかな唇と、ちかぢかとのぞきこむうるんだような眼を、まざまざと感じた。
もはやものもいわない。三人の武士の腕は宙をなでまわし、金魚みたいに口をぱくぱくさせた。——腕は空をつかむだけであった。しかも彼らは、じぶんのももをくすぐり、下腹をもてあそぶ柔かい指のうごめきすら感覚するのだ。三人は息のつまったようなうめきをあげた。
幻の女の雲は、なまめかしく、しずかに移動しはじめた。三人は、そのなかをおしながされてゆく。肩を波うたせ、牡犬のような息をはいて、彼らは書院から廊下へ、廊下から

庭へおよいでゆく。

　井戸があった。三人はその井戸のふちに手をかけて底をのぞきこんだ。三方からのぞきこむおたがいの姿はみえず、水にうつるほそい三日月もみえず――彼らは、何を追うのか、ひとりずつ、高速度撮影のようにゆっくりとその井戸の底におちていった。

　――三日月の下で、声があった。

「お眉。……あの三人は、どうしてかけ出したのじゃ。そなたはたもとから、たくさんの小さな普賢菩薩をとり出して、まえにならべおったが」

「姫さまの御覧あそばしたのは普賢菩薩でございます。けれど、あの人には、ちがう菩薩さまがみえたのです」

　と、若々しい声がこたえた。

「真田家につたえられた信濃忍法――幻菩薩の術とはこれでございます」

七

　翌朝、千姫屋敷の、先日掘られたばかりの井戸は厚い板をうちつけてふさがれていた。

　千姫さまがこの方位に井戸のあることをおきらいあそばしたからという理由であったが、大工たちがくびをかしげたのは、井戸はそのままにして、その上に小さな持仏堂をいそぎ建立するように命じられたことであった。

　まだ木の香も匂う持仏堂の縁の下に、虫が鳴いていた。夕ぐれ、美しいふたりの女がその持仏堂に入った。やがてあかあかと燈明がともる。――

「南無……竜淵寺天真源性……」

　その祈りの声が、ふいに「あっ」というひくいさけびに断ちきられた。

「何とする、お志津。――」

「お奈美さま、竜淵寺真何とやらは、秀頼さまの御法名でございますね？」

　燈明は、そのまえにふきけされていた。闇にとざされた持仏堂のなかで、お奈美という侍女は、頬に刺さった毛のようなものが針と知って、

「おまえは！」

　と、もういちどさけんだが、そのからだをぐいと抱きしめられた。持仏堂につれて入ったのは、たしかに婢のお志津だ。声もお志津にまぎれもない。しかし、抱きしめた力は、たしかに男のそれであった。

「お志津、おまえは――」

「お志津は、きのうから、この下の井戸に浮いております。坂崎の家来、またこの持仏堂をつくった大工たちの屍ともつれて――わたしはそれを知っております。それからあなたさまが真田左衛門佐から下知をうけた五人の女忍者のひとりであることも――ただ、おまえさまとわたしと、ふたりだけになれるときを、いままで待っていたのです」

と、お志津の声は笑いをふくんで言った。闇の中で、ただあえぐ声がきこえた。

「そうれ、息がかわってきた。血はあつくなり、乳くびはうずく。女がこうなってきたからには、おれも男にかえらずばなるまい」

声がのぶとい男のものに変った。

「お、おまえはだれじゃ」

「おれは、駿府から来た伊賀の忍者、薄墨友康」

そう名のられても、女はもはや悲鳴もあげず、のがれようともしない。いや、いちど必死に抵抗するように両手をさしのばしたが、腰をかかえられてからだは弓なりになり、腕はむなしく空(くう)をかいた。ふとももものあいだを這(は)う男の指から、電流のようなものが全身にうねりつたわり、肌はあつくうるおい、彼女は眼をなかばとざして、ついにうめき声をたてた。

「どうじゃ、伊賀の忍法——まけて悔いはないであろ？　女をよろこび死させるのが、薄墨友康の忍法じゃ、おお、この繻子(しゅす)のような腰、腹——この腹のなかに、秀頼の子がおるのか？」

お奈美はくびをふった。しかし、言葉としての声は出なかった。ただ、腕を友康にまきつけ、その腰と腹を吸いつかせて、身もだえした。

「なに、そんなに焦(じ)らすなというか——まてまて、いましばらく待て、おれにそなたという女の香を心ゆくまでしゃぶりつくさせてくれい」

そして闇の中で、猫が水をなめるような音がひびきはじめた。ときどき、ごくりごくりとのどを鳴らす音もきこえた。女はひきつるような声をあげた。

「おお、死ね、死ね」

もはやまったくおのれの術中に入ったとみて、薄墨友康はあざわらった。

「お奈美、こうしておれ恋しさにもだえてくれるそなたを死なすは、友康、腸(はらわた)がさけるようじゃ。しかし、そなたは死んでくれねばならぬ。つぎの女忍者、お瑤(よう)、お喬(きょう)、お由比(ゆい)、お眉(まゆ)らにちかづくために喃(のう)。おれがお瑤にちかづいて殺しても、千姫さまは、お奈美が殺(あや)めたとおかんがえあそばすであろう。つぎにお喬にちかづいて殺しても、みなお瑤のしわざと思うであろう。おれのいうことがわかるか、お奈美」

友康は立って、燈明をつけた。燈の環(わ)のなかに、床に白い雌蘂(めしべ)をひろげたようなお奈美の姿がうかび出した。が、その四肢は投げ出され、眼はうすくひらかれたまま、虚脱したように身うごきもしない。

友康はその顔のうえに、顔をかぶせた。

「みよ——おれは、女の精を吸って、その女に変るのじゃ」

なかば死んだようなお奈美の顔と相対して、生気にみちたお奈美の顔があった。

「伊賀忍法——くノ一化粧——」

と、ささやくようにいって、友康がお奈美の乳房の下に懐剣をつきたてたとき、女の唇がかすかにうごいた。
「信濃忍法――月ノ輪――」
「なに？」
しかし、真田の女忍者は、そのままがっくりとこときれた。
――しばらくして、また燈明がきえた。ひそやかに何かを洗うような水音がきこえ、つぎに床板をのける音がして、深い地底で重い物がおちたような水音がひびいた。
すでに暮れつくした晩夏の庭を、お奈美の優雅な姿が、精霊のようにかえっていった。
「お奈美」
呼ばれて、彼女は顔をあげた。
むこうの廊下を千姫さまが歩をはこんできた。うしろに侍女のお喬とお眉がしたがっている。お眉は雪洞をささげている。
「どこへいっていやった？」
「御持仏堂へ、燈明をあげに参っておりました」
「それは、大儀。――」
といいかけて、千姫の眼がふとひろがった。何かいい出そうとするまえに、お喬がしずかに声をかけた。

「お奈美さま、お顔のあたりに妙なものがついておるようでございます。お待ちなされませ」
といって、すぐひきかえしてゆく。
お奈美の顔にかすかに狼狽がはしり、手が頬にあてられたが、そのまま千姫がじっと見つめているので、身うごきはできなかった。
千姫がつぶやくようにいった。
「お奈美、そなたが秀頼さまのお胤はつかなんだと申したのはまことらしいな」
「は？」
小ばしりに、お喬がもどってきた。両手に小さなたらいをささげている。縁側において、
「まず、お洗いなされませ」
お奈美は、そのたらいの上に顔をもっていった。お眉の雪洞がさしよせられた。
両手を水にひたそうとして、お奈美のからだがぴたと静止した。――水にうつる自分の顔――その口からあごにかけて染まった鮮血の色。
ここへくるまえ、彼女は持仏堂の閼伽桶の水で、いくどもていねいに洗い、うがいしたはずなのに。
水珠をちらして、たらいに手をさし入れた。

「とれぬ、とれぬ、その血はきえぬ」
と、雪洞をもったお眉がしずかにいった。
「それはお奈美の忍法月ノ輪の血じゃもの。――」
同時に、そのひたいから真一文字に斬りさげられたお奈美は、たらいのふちに両手をかけて、数秒間じっとじぶんの顔を――みるみる薄墨友康にかえってゆく顔をのぞきこんでいた。
「駿府からきた化物か！」
真田の女忍者お喬の第二の刃が下るまえに薄墨友康は、たらいの水が真紅にそまるのをみた。それはおのれの血であった！　次の瞬間、その青銅色の顔はしぶきをあげて、真っ赤な血だらいのなかへがくと沈みこんでしまった。

忍法「天女貝」

一

江戸城竹橋門内にある千姫屋敷にのりこんでいった三人の家臣がそれっきりかえらないので、坂崎家では「はてな？」と動揺した。半月ばかりたって、家来のひとり、莚田忠兵衛というものが、主人のところへいってみると、出羽守は、重だった家臣にかこまれて、腕をくんでかんがえこんでいたが、莚田の姿に顔をあげて、
「忠兵衛、どうであった」
と、きいた。
「はっ、あれ以来手をまわして門番などからきき出しましたところ、当夜千姫さま御屋敷では、べつに何の騒動もなかったそうでござる」
莚田忠兵衛は主人の出羽守に命じられて、千姫屋敷を探っていたのである。それによると、ひるまは大工や職人がたくさん入りこむけれど、夜になると家老の吉田修理介とその家来、門番、庭働きの中間など、それも老人ばかり十数人をのこして、あとは女だけになってしまう。あの夜もそのとおりで、何の異常もなかったというのであった。

「それに、奇怪なことをききました。これは門番の口からではなく、このごろ御作事まったく終って出入りをやめた職人どもの噂でござるが、その中の十幾人かが、神かくしにあったように千姫さまお屋敷から消え失せてしまったとか。——」

「なに？」

「どうやら、持仏堂とやらの建立に従っておった連中の由でござる」

みんな、だまって忠兵衛の顔を見まもっていた。何とも判断しようがなかったのである。

「——いったい、そやつら、どうしたのか？」

と、家臣のひとり、黒沢主膳がつぶやくと、そばの関主殿助という家来も、

「いや、その大工風情はしらず、成瀬、戸田、大友ほどの男どもが、なんの手むかいもいたさず、やすやすと消えるはずがない。毒酒でものまされたのではないかという疑いもあるが、あのお屋敷に真田の息のかかった女がいるのを承知で出かけた人間が、やわか、左様な子供だましの策略にかかろうとも思われぬ」

「相手は女ばかりというのに——よもや、大工どもとともに、女護島の虜となって、夢うつつにくらしておるのではあるまいな」

と黒沢主膳がつぶやいたのに、みな笑いかけたが、すぐにしんとした。そんなふしだらな男たちでないということは、だれにもわかっていたからだ。相手は女ばかり——そのことが、ここにいる千軍万馬の侍たちに、かえってぬらりと冷たい妖気をおぼえさせた。

「相手は女と申しても、真田に飼われておった女じゃ。十郎左たちが、どんな罠にかけられたかもしれたものではない」

と、出羽守はうめいた。

「左様ならば、もはや一刻の猶予はなりますまい。いそぎ殿おんみずから駿府にお上りあって、大御所さまに御注進なされた方が——」

と、いい出したのは、老臣の落合閑心であった。出羽守はいちどうなずいたが、なおうごかなかった。

「さればよ、しかし……千姫さまには、はたして御承知であろうか？」

「ささ、それをたしかめに十郎左どもが参ったのでござるが——」

「千姫さまが、まさか御存じであろうとはおれには信じられぬ。いや信じとうないのだ。それゆえ、得べくんばおれの手で、おれの手のみで千姫さまに憑いた女狐どもを退治したいのじゃ」

出羽守の声には、思いつめた調子とともに、どこやら照れくさい感じがあった。大御所さまへの忠義立てよりも千姫さまへ御自分というものの存在を強めようとしておられるのだ、とみなすぐ直感した。その一同の眼に、出羽守はやけただれた顔をいっそうあからめて、

「だいいち、成瀬、戸田、大友らがたしかにこの世にないともまだ断じがたい。いずれに

せよ、家来をやってかえらぬから、と泣面かいて駿府へかけつけたと、それが徳川家にかかわるほどの大事であるかないかは別として、あの大御所のおんあなどりを受けるは必定、いや大御所さまどころか、ほかのだれにきかれても坂崎の面目まるつぶれだと思わぬか」

いわれてみれば、そのとおりであった。また、中年すぎた出羽守が、その醜顔をあからめていい出したことに、主人の千姫へのなみなみならぬ執心をみてとって、家来たちは、ふだん粗暴なこの主人へむしろ可憐の感すらもよおした。

すぐに、三人の第二の使者がたてられることになった。菰田忠兵衛と黒沢主膳と関主殿助である。いってかえらぬ第一の使者の先例があるだけに、これは使者というより、はじめから万一の覚悟を要する斥候乃至刺客の役目であった。

さらに数日を経て、すべての後始末をすませ、きょうの身支度をととのえて、関主殿助は、坂崎邸の長屋を出た。出ると同時に、はっとした。

そこにひとりの美少年がたっていた。

「主殿助さま」

「初音どのではないか」

初音は成瀬十郎左衛門の妹で、ことし十八になる。背もたかく、豊満なからだであるが、きびしい十郎左衛門が父代りにしつけただけあって、武芸も達者だし、りんとした美少年

の感じがあった。しかし、現在その初音が、前髪立ちになり、男同様に袴裃をつけて立っているのをみると、主殿助は眼をまるくせずにはいられなかった。

「千姫さまのお屋敷へ参られますか」

「きかれたか」

「なにゆえ、わたくしにも一言きかせて下さいませぬ」

「いや、これはただの使者ではない――万一、事と次第では、命にもかかわるほどの使いゆえ――」

と、狼狽してこたえて、主殿助はじぶんの言葉にいよいよ狼狽した。それだからなぜだまってゆくのかと責める初音の、張りのある瞳であった。彼女は彼のいいなずけだったのである。

それにしても、初音のこの異装は――と、すでになかば推察しつつ、おさえつけるように、

「それはともかく、その姿はどうなされたか」

「あなたさま方にお供するつもりでございます」

むしろ、しずかな口調でいったが、眼には一歩もあとにひかぬ決死のひかりが宿っていた。

「そ、それはならぬ、女のそなたを」

「女としれぬように、この姿でございます。また知れたとて、どういうわけもございますまい。あちらさまも、女性ばかりと申すことではございませぬか」
「……初音どの」
と、主殿助は眼をすえていった。
「おれは大言するようだが、胆ぶとさに於ては、さほどひとにはおくれはとらぬ男のつもりでおる。大坂の陣ではじめて敵というものと向いあったとき、べつに武者ぶるいもいたさなんだ。ところが――このたびの役目、なぜかしれぬが、無性に気味がわるいのだ。まるで蛇の穴へ入ってゆくような気持なのだ。その役目に、そなたを――」
「それは可笑しゅうございます。相手は女ばかりと申しますのに」
と、初音はもういちどくりかえして、ほんとうに可笑しそうに笑った。
「それほど恐ろしいお屋敷なら、是非ともわたしもいってみとうございます。兄の安否をさぐらねばなりませぬ。もしあなたが兄とおなじように、ふたたびおかえりあそばさぬなら」
「美少年」の眼に、主殿助を無抵抗にさせる涙がうかんだ。
「わたくしひとり、この世に生き残っても無用でございます」

二

水中の花がひらくように、千姫は笑った。
「それでは、坂崎の家来三人がわたしのところへきたまま、かえらぬと申すのか」
「されば……」
「いかにも、三人のものは来た。が、口上を申したてて、すぐひきとったぞ。ひきとって、どこへいったか、わたしは知らぬ。せっかく出羽守に土産物をつかわしたに――」
「土産物？」
「玉手箱をの」
千姫の美しい眼は、嘲りにかがやいていた。
「主人も何やらものほしげな男ゆえ、家来にも主人の性がうつったのであろう。かえる途中であけてみて、中からぱっとたちのぼった白煙に老人となり、面目なさにかえるにかえれず、どこぞへ逐電したものに相違ない」
はぐらかす気配はない。目下のものに対して、はぐらかすような育ちも気性も享けていない千姫であった。これは公然たる挑戦である。挑戦の眼が、冷やかにうごいていって、最後の美少年のひたいにとまった。女にも見まほしい美しさに、ちらと憐れみと惑いの翳がさしたようである。
しかし、坂崎の四人は、それが徳川家そのものに対する深刻痛烈な挑戦であることまで見とどけかねた。ただ主人出羽守に対する手ひどいいやがらせととって、恐怖よりも怒り

に身をふるわせた。

「恐れながら」

と、莚田忠兵衛が歯ぎしりしていい出した。

「下手人をおひきわたし下されい」

「下手人？」

「ただいまの仰せで、三人のものどもがここで落命いたしたことは分明に相成りました。これがなみの場合ならば、上様の姫君さまの御屋敷でいかような御成敗をうけましょうとも、ただただ恐れ入ってござるが、このたびのことにかぎり、下手人の詮議立てをいたさねば相成らぬ」

「なぜ？」

「彼らほどのものが、やわか通常の婦女子に討たれるはずもないし――姫、よもや、御存じではございますまいな――と申しあげたきところながら、ただいま承わったおん口ぶりでは、恐ろしや、すべて、御承知の上とみるよりほかはございませぬが、まさに天魔に魅入られあそばしたか、おそばちかく真田左衛門佐の息のかかった女がひそんでおるはず、彼らを討ったものは、その女とより考えられませぬ」

千姫は微笑した。

「よう見ぬいたの」

そして、ふりむいて、

「天魔、出やれ」

うしろに侍っていた四人の女のうち、三人がしずかに立って、坂崎の使者たちのまえに坐った。

「うぬらは……うぬらは……」

莚田忠兵衛と黒沢主膳は、千姫と、眼前の女たちのあまりの不敵さに絶句した。

彼らはもとより真田の女がいく人いるか、人数までは知らなかった。それが三人もいることにはあきれはてたのだが、ましてやそれが秀頼の胤を身ごもった忍者であると知ったなら、のけぞりかえって気死したかもしれぬ。それくらいだから――千姫のうしろに、ただひとりのこったもうひとりの侍女が、このときたもとから、手の中に入るような普賢菩薩の像をあとからあとからとり出して、まえにならべはじめたのに気がつかなかった。

「真田の女か！」

と、ようやく絶叫したのは関主殿助だ。

「御免」

猛然と立ちあがると同時に、そのこぶしに何やらきらめいた。もとより大小は次の間においてきたが、ふところにかくしもっていた短刀だ。

しかし、彼は懐剣をふりかぶったまま、このときうしろによろめいた。同時に、黒沢主

膳と莚田忠兵衛も、おなじく短刀をつかんだ姿勢をおよぎ出させている。まるで盲目になったように、三人の女のあいだをよろめいて抜けて、一方の手で腰のあたりをなでさすった。

　初音には、何が起ったのかわからなかった。三人の男の眼には、このときまるで座敷が夜霧につつまれたようにくらくなり、そのなかに無数の白い女の肌がもつれあってみえはじめていたが、初音には何もみえなかった。みえないだけに、恐怖につきあげられてこれまたたちあがったものの、ぼうとして眼を見はるばかりだ。

　三人の男は短刀をとりおとして、身体をくねらせた。眼が急激な酔いを発したように血ばしってひかりはじめ、あらい息をはき、口からよだれがながれ出した。何が何やらわからぬままに、それは初音にとってはじめてみる、犬のようにあさましい男の姿にみえた。これは、どうしたのだ、あの主殿助（とのものすけ）さままでが。――

　千姫のうしろで、ひとり普賢菩薩の像を将棋のようにあやつる女――お眉の忍法「幻（まぼろし）菩薩（ぼさつ）」であった。三人の男は、まぼろしの女のあえぎをかぎ、まぼろしの女の舌をすい、まぼろしの女の乳房をおしつけられ、まぼろしの女の繊手（せんしゅ）にもてあそばれた。

「お瑤（よう）」

　と、千姫がよんだ。

「はい」

　と、うす笑いして侍女のひとりがたちあがる。雪のような頬とあごの肉に、椿の花弁にまごう唇がぬれて、息をのむほど肉感的な大柄（おおがら）な美女であった。

「出羽め、うるさい奴じゃ、この四人を成敗いたせば、またぞろ血迷うて、いよいよのぼせあがって、新手（あらて）をよこしてくるは必定（ひつじょう）、なんぞこれきりあきらめさせる手だてはあるまいか？」

「持仏堂へおよこし下されませ。わたくしはさきにいって待っております」

「何をしやる」

「ひとりだけ、男の魂をぬいて、追いかえしてやりましょう」

　と、彼女は笑顔で会釈して、さきにはしり出していった。

　そのあとを追うように、虚空（こくう）をかきむしりながら庭へよろめいてゆく三人の男を、

「あっ、待って！」

　と、はじめて悪夢からさめた初音はよんだ。その声と身ぶりに、愕然（がくぜん）とお眉が顔をあげた。

「あれは。――」

　と初音を指さして、

「女ですっ」

　それは初音の美貌よりも、その「美少年」が幻菩薩（まぼろしぼさつ）の妖術にかからなかったことに気が

ついた刹那の忍者の直感であった。
裳裾をふんだふたりの侍女は初音におそいかかっている。縁のはしで、初音はふりかえって、二条の懐剣の閃光をみるや否や、反射的にそのたもとから鎖をほとばしらせていた。玉鎖という、鎖のさきに分銅をつけた武器だ。初音が関主殿助についてきたのは、それだけの覚悟があった。

「あっ」

むしろ、女だと知ったのが、追撃者に不運であった。さすがの、女忍者も、この思いがけぬ反撃と武器に、狼狽しつつ懐剣でふりはらったが、分銅は懐剣をはねて、なおその姿勢で、くるくるっとひとりの女忍者を巻いて、はっしとその腹部を打った。彼女はうめいて、縁に伏した。

初音は縁を蹴った。その陰に、もうひとりの女忍者の手から流星がすじをひいて、袴にとまった。庭にとびおりた初音は、走ろうとしてどうとふしまろんでいる。宙にひるがえった袴の裾を懐剣で縫われたのである。

もがくところをとりおさえられた。地をつかむ手の甲に、袴からぬきとった懐剣がまっすぐに突きたてられて、縫いとめられた。

「うっ」

華麗な蝶みたいにのたうつ初音のふところに、女忍者の手がさしこまれている。

「お喬――女か？」

と、縁まで出ていた千姫がこちらに顔をむけた。玉鎖にうたれてつっ伏したままの女忍者を抱きあげていた。

「女でございます」

千姫はこちらの返事にはこたえず、「お由比、お由比、しっかりしや」と、胸の女忍者をゆすぶっていた。女忍者は眼をあけて、ゆがんだ微笑をみせた。

「不覚……お恥ずかしゅうございます」

「腹をこの分銅がうったらしいが……ややはぶじであろうか。わたしよりも、だいじなからだじゃ。すぐに医者をよんで手当をしてつかわすほどに、しばらくあちらで休んでいや。……にくい奴が、あの女はきっとわたしが成敗してやろう」

苦痛に、這うようにしてお由比が去ると、千姫は庭におりてきて、初音を見おろした。

「女。……女の身をもって、坂崎の使者に加わったのはなにゆえじゃ」

「兄を、どうなされました」

と、初音も掌の痛みに歯をきしらせながらいった。

「兄？」

「先日、お屋敷へ参上した三人のうちのひとり――」

さすがに、やや鼻白んで、千姫は沈黙した。手を縫いつけられたまま、初音はその方へ

わななく顔をねじむけて、

「もし、兄をいかがあそばしたか。それから……いまの三人、あれはどこへ参ったのでございます。あのなかには、わたくしのやがて祝言する男もおります。どうぞ、あの男のそばへ、わたくしをやって下さりませ。死ぬなら、いっしょに死にたいのでございます」

「娘」

と、千姫はひくくつぶやくように、

「思えば、このたびのことは、女の心というものをしらぬ男への恨みからわたしも肩を入れたことゆえ……女であるそなたを敵にまわすは本意でないが、このことにかかわりあった以上、ふびんながら二度と坂崎へかえせぬ。千姫はすでに人間の心をすてて、みずから地獄に堕ちておる。ましてや、あのお由比のだいじなややをいためた女――もしあれでさしたることもなく生まれたならば、よほど徳川家にとって悪運つよいややが生まれるであろう――いずれにせよ、そなたは豊家の子に無礼をしかけた罰はうけねばならぬ」

千姫のひとりごとの意味は、初音にはわからなかった。「女の心というものを知らぬ男」が、姫の祖父大御所をさし、「お由比のだいじなやや」が秀頼の子をさすものだとは、まさか思いおよばない。千姫の高貴な顔に、しかし仰いで眼をとじずにはいられないほど凄絶なうす笑いがうかんできた。

「せめて、兄と未来の夫のそばにいって死ね」

そして、お喬をふりかえった。

「お喬、この女をくくって、持仏堂へつれてきやい」

三

秋のひかりが寂然としずもっている持仏堂のまえに、ひとりの男があらわれた。はじめ、それがだれやら、初音にもわからないほどであった。

顔色は蒼いというより透きとおって、そのくせ皺だらけなのだ。皺のあいだから骨が透けてみえるほど、おとろえはてていた。眼はくぼみ、頬はげっそりこけて、持仏堂のひらいた扉から出てきたときは、まるで幽霊が這い出してきたかと思われた。

「……莚田さま！」

じぶんが縛りあげられているのもわすれて、初音はさけんだ。

しかし莚田忠兵衛は、すぐ眼のまえをあるいてゆくのに、初音たちの姿もみえず、その絶叫もきこえぬ風で、糸にあやつられる人形みたいに、門の方へよろよろと去っていった。骨が、カタカタ鳴る音がたしかにきこえた。

つづいて、扉のまえに、お瑤があらわれた。白い日光が、そのまわりだけしぶきとなって渦まき、きらきらとしたたりおちてみえたほど豪奢な、傲然とした姿であった。

「お瑤」

と、千姫は叫んだ。
「いまの男を、どうしやった？」
「いまの男は、もはや男ではありませぬ。男の精はおろか、血もほとんどからっぽでございます。信濃忍法筒涸らし——あれは、男の精と血を吸いとられたかわり、わたしが吹きこんでやった言葉どおり、坂崎へかえって復命したら、あとは精根つきて死ぬばかりでございましょう」
「あとのふたりは？」
「これは手ごころを加えませなんだゆえ、一滴のこらず吸いとりました。蟬のぬけがらになったからだは、井戸の中へ——」
「左様か。……大儀でありました」
千姫はなぜともなく、ふかい息をついた。それから、初音の縄をとったお喬に、ふたりの顔から眼をそらしていった。
「その女を井戸へ……罰は罰として、なるべく女は殺しとうはない。わたしはすこし思いなおした。お由比のややがながれなんだら——そして明年一月、みなのややがぶじに生まれたら、いのちばかりは助けてこの屋敷から追い出してやりたいのじゃ」
江戸城から神田の柳原へ——それだけの距離を、莚田忠兵衛が坂崎の屋敷へかえってき

たのは、もう夜半であった。忠兵衛がかえってきたときいて、寝もやらず待っていた出羽守と家臣たちはかけ出した。
「忠兵衛？」
みんな、たちすくみ、色を失った。このひからびはてた老人が、あの強壮な莚田忠兵衛であろうか？
その男はまるで枯葉がくずれるような音をたてて坐った。
「——殿。……」
「——千姫さまに、かまわれるな。……」
糸みたいにぼそぼそしているが、まさしく莚田忠兵衛の声だ。
「な、なにを申す。莚田っ、その姿はどうしたのだ。主膳と主殿助はいかがいたしたかっ」
「——千姫さまにかまわれると、坂崎家が滅び申す。……」
その言葉にかっとしたのではなく、忠兵衛の洞穴みたいな眼窩のおくに白くむき出された眼とひょいと眼があった刹那、出羽守は忠兵衛が妖怪にでも変ったように恐怖にうたれ、夢中で抜討ちに斬りつけていた。
「こやつ、魔魅にでも魅入られたか！」
莚田忠兵衛は、音もなくまえへたおれた。肩から胸へ、袈裟がけに斬りさげられて、し

かし、ほとばしる血は一滴もなかった。

四

つきとばされるように持仏堂に入り、うしろ手に扉をしめられると、中は黒闇々であった。が、すぐ足もとでぎいと厚い板をおこす音がすると、そこから、ぼうと妖しい蒼いひかりがさした。

「それ、その中に、そなたの兄も夫もおる。念仏となえて神妙に暮しておれば、そのうち姫の御慈悲がありましょうぞ。食物だけは投げいれてやるほどに――」

そうお喬の声がすると同時に、初音はどんとその蒼い穴へつきおとされた。両腕こめて胸をいくえにもしばりあげられた初音は、くるくると回転しながら、十メートル以上もおちていった。落ちると同時に、まるで独楽のひもをふりきったように縄がからだから失せていた。

蒼いひかりに、その縄はするするとひきあげられていった。そして、たかい頭上で、どんと板がおちて穴に蓋をするのがみえた。初音はその板から周囲に、散大した眼をうつし、だんだんと下げていった。まわりは、苔にぬるぬるしたせまい石の壁であった。そして、彼女は、じぶんの半身もまたぬるぬるした泥にひたされていることにはじめて気がつき、眼をおとして、名状すべからざる悲鳴をあげていた。

持仏堂の中央に、井戸の口のひろさだけきりひらかれていた穴をもとどおりにふさぐと、まわりはふたたび黒闇々にぬりつぶされた。

つかつかと扉の方へあゆみかけて、お喬はふと顔に霧のようなものがふりかかってきたのを感じた。ふと立ちどまる。持仏堂には異様な栗の花みたいなかおりが、むせぶほどに満ちている。彼女はちょっと肩で息をした。それが、なんの匂いか、彼女は知っていた。

しかし、たったいまここでくりひろげられたお瑤の忍法「筒涸らし」の秘図をまぶたにえがくと、お喬はこころとのどのおくでふくみ笑いの音をたてて、そのまま持仏堂を出ていった。

しんと日のひかりの満ちた庭に、葉鶏頭が咲いている。きれながの眼、唇のしまったお喬のいわゆる小股のきれあがった姿態は、その秋の日のひかりよりも清麗であった。

初音は半身を汚物にまみれさせて立ちあがった。これは死びとの沼であった。

ふくらはぎまでめりこんだ足もとには、関主殿助と黒沢主膳の死体があった。いずれもからだが半透明になって、ひからびはてて、ほんのさっきまでみた顔かたちとは別人のようだ。しかし、それをみて初音が、最初の悲鳴のほかに、つぎに声も息ももらさなかったのは、それがだれかわからなかったせいではなく、あまりにも凄惨をきわめる周囲の光景

に、のどもあたまも痲痺してしまったからであった。

そのふたりをのぞいては、下に折りかさなった死体はだいぶふるい。紫藍色にかわった四肢、まんまるくふくれあがった腹、眼球がながれおちてふたつの孔となり、ところどころ肉をねばりつかせた歯をむき出した顔、ぬけた髪はとろろ昆布のように這いまわり、うごくものとてはないのに、間歇的に音ともいえない音がひそやかにひびくのは、したたりおちる膿汁に腐爛屍がぬめり、ぷつぷつと泡をたてているからであった。そのなかに浮かんでいるきものからみると、どうやらこれは大工、左官を職とする男たちだったらしい。

それにしても、この地獄そのもののような地底の穴に、ふしぎに蒼いひかりが明滅しているのは何であろう。ときどき蛍みたいにぼうとあかるくなっては、またくらくなる。――それは、屍体から発する燐光であった。

もえあがる鬼火のなかに、初音は彼女自身死びとと化したように凝然と立っている。そのふくらはぎからうちももへ、ぞろぞろと這いのぼってくる白い蛆にも気がつかず。――

頭上に音をきいたのは、そのときだ。井戸の穴がひらいていた。そこから、するするとひとすじの縄がなげおとされた。初音がそれにすがりつきもしなかったのは、じぶんを助けにきてくれる者のあるはずがないという自覚よりも、すでに脱出の気力も意志も喪失していたからであった。

縄をつたって、ひとりの男がおりてきた。浅黄色の忍者頭巾をすっぽりかぶって、眼ばかりのぞかせ、同色の筒袖にたっつけ袴、鍔の大きな忍者刀を一本たばさんでいる。

足が屍体の沼にとどこうとした位置で、彼は初音を見おろした。

「これ」

「…………」

「おまえはなんだ」

「…………」

片腕でひょいと縄をつかんだまま、もう一方の手で気死したような初音のあごに手をかけて、ぐいとあおのかせたが、明滅する鬼火にその美しい顔の曲線をながめ入って、

「――や？」とふしんげな声をもらして、いきなり腰の一刀をひらめかした。胸もとから袴にかけて、髪ひとすじの手練で衣服だけをきり裂かれて初音の乳房から腹部がむき出しになった。

「あっ」

このときはじめて初音はわれにかえったようであった。あわてて裂かれたきものをかきよせたが、すでに頭巾の男はかすかな鍔鳴りの音をたてて一刀を鞘におさめている。

「やはり、女か？」

精悍な眼が笑っている。

「おれはいままで上の持仏堂の天井におった。この穴に生きた人間がなげこまれたのをふ

しんとみて、入ってきたのだが、おまえは何者だ」
　彼の眼はすでに井戸の底の無数の屍体をみているはずだが、そのひとみに動揺の翳はさざなみほどもゆれなかった。
　初音はかすれた声をあげた。
「こ、殺して――」
「望みなら、殺してもやろうが、そのまえにおれのきくことに返事しろ。おまえは、どうしてこんなところに投げこまれたのだ。さっき持仏堂でぬけがらとされて殺された男どもの同類か」
「殺して――」
「そうだ、あの女め、男のひとりに、千姫さまに手を出すなと、かえって主人の出羽守に告げよといっておったな、出羽とは、あの坂崎のことか？」
「あなたは、だれですか」
「おれは駿河の大御所さまに、このごろ飼われた伊賀者よ。雨巻一天斎というのが、おれの名だ。さあ、おまえも素姓を名のれ」
「あっ、では、駿河の――」
女だ、あさはかに初音は狂喜した。助かったとは思わなかったが、何よりこれで兄や主殿助がむざんな死をとげた理由が、大御所さまのお耳に入るとかんがえた。真田の女が、

千姫さまにとり憑いていると知ったら、大御所さまもすておかれまいし、兄や主殿助の死もこころからのあわれみをうけるであろう。――彼女は、じぶんの知っていることをみんなしゃべった。
「左様か。坂崎では、どうしてそれを知ったかの」
　雨巻一天斎は、初音の話をきいても平然としていた。
「それで、その真田の女が、秀頼の子をはらんでおることも存じておるか」
「えっ、あれが……」
「ははあ、そこまでは知らぬか。それは、そうであろう。……」
　一天斎はどこかうわのそらでつぶやいた。頭巾のあいだから、妙に黄金いろにひかる眼が初音の顔から胸もとに這いさがり、また這いあがる。
「女、たすかりたいか？」
「はい……いいえ」
「兄も夫になる男も死んだゆえ、じぶんも死にたいと申したの。どちらでも、望みどおりにしてやるが」
　初音の背をぞっと冷たい風が襲った。相手の忍者の眼が、なんの同情もない残忍そのもののような炎をあげてきたことに気がついたのだ。
　あわれむべし、初音は、いかに勇敢な娘であったにせよ、みずからとびこんだのが大御

所さまですら苦悩するほどの徳川家の秘密の淵で、転瞬のまにまきこまれた忍者同志の死闘の渦が、どれほど非情なものであるか知らなかった。

「生きようと、死のうと、まずおれのいうことをきくのがさきじゃ」

と、猿臂をのばして、初音の肩をつかんだ。きり裂かれていたきものは、やすやすとはぎとられて、初音は白い裸身をおよがせた。

「鮎のようなからだで、死びとの池にもぐりこむ気か」

と、雨巻一天斎はその腕をつかんで笑った。たちまち初音はひきずりよせられた。

このとき一天斎は縄から片手をはなして、屍のうえに立っている。もともとすこしは水もたまっていたらしい古井戸の底に、腐爛した屍体がおりかさなって、まるでどろどろの沼のようなのに、奇怪にも彼はくるぶしもうずめず、悠然とそのうえに立っていた。片手で頭巾をとった。口が裂けたように大きく、歯も耳もとがって、狼に似た恐ろしい顔があらわれた。初音の胸をつりあげるようにして、上からのしかかって、嗄れた声でいう。

「先刻な、おれは持仏堂の天井で、妙なものを見物した。女が、三人の男を犯すのよ。三人の男が、女を犯すのではないぞ。おお、そのなかにはおまえの夫になる男もいたと申したな、はて、どやつであったか？　いや、どやつもおなじざまであった。女におさえつけられて、総身しぼり出すような法悦のうめきをもらしておったぞ。娘、だから、死んだ男に操立てするのは愚かだ」

彼は顔をちかづけて、初音の唇をするどい歯でかんだ。恐怖のためにふたたび痲痺したようになっていた初音のからだに、そのときどんな反応を感じたのか、一天斎の手が音もなくいなずまのようにはしると、初音の白いあごが、がくりとさがって、口をひらいた。

「舌をかもうとしたな。そうはならぬ」

初音のあごがはずされていた。一天斎は何事もなかったようにしゃべりつづける。

「そうだ、総身しぼり出すような声――まさに、三人の男どもは、あの女にひとしずくものこさず男の精を吸いとられたのだ。はじめは、得べくんばこちらも御相伴にあずかりたいと、天井からよだれをたらしていたおれだがな。そのうち男どもがつぎつぎに、まるで蟬のぬけがらのようになって、ついには息の根もとめられてしまうのをみて、おぞ毛をふるった。あぶないところであったよ。あれは、ただの女ではない、あれこそ徳川家に仇なす真田の忍者だ。……天井から一太刀で斬り伏せるはたやすい。しかし、おれが大御所さまから殺すことを命じられた女忍者はまだほかにおる。のこらずそれを討ち果たす見込がつかぬうえは、かるがるしく一人のみに手は出せぬのだ」

ひとりごとのようにしゃべりながら、一天斎は初音の片腕に縄をまきつけている。

「おれは忍者だ。しかも、女を相手に絶妙の技をもっておる。伊賀忍法『恋しぐれ』と『穴ひらき』……『穴ひらき』というのはな、おれとひとたび交わった女は、おれを恋うて、さかりのついた牝犬のようになって、もういちど望んで、狂気のようになる。ところ

が、二度めに交わったとき……女は、死ぬのだ！」

一天斎は、もう一方の初音の腕に縄をまきつけた。

「じゃが、その『穴ひらき』が、あの女にはきかぬ。交わって、蟬のぬけがらとされるのでは万事休すだ。それがわかっただけでも命びろいであった。そこでおれは、もうひとつの忍法『恋しぐれ』をふらした。おれの精をあびせてやったのよ。それは、女の肌にしみいり、おれに犯されたと同様の効めを発する。女はもだえはじめ、心みだれ、やがておれの恋しぐれをあびた場所を牝犬のようにかぎさがして、三日も経たぬうちにこの持仏堂にもどってくる。……」

初音は両腕をたかくひきのばされて、のけぞるような姿態になっていた。弓なりにそった胸にみごとに盛りあがった乳房が、明滅する燐光に映えて、青びかりして喘いでいる。

「もどってくるはずではあるが、しかしおれもこの技はひさしぶりにつかうのだ。めったに女を殺すこともならんでの。それがかんじんの女を相手に、万一やりそこねると一大事、そこで、おまえでいまいちどためしてみようと思う。ただ、この井戸の、このしとねでは、寝るもならぬ、うごきもままならぬ。それで――」

一天斎は狂暴に歯をかみ鳴らした。すでに彼は、最初おのれの名を名のった時から、この娘は所詮生かしてはおけぬと考えている。ただ、それは、真田の女忍者をすべて斃してからのことだ。

その女どもを成敗するのに、こちらの手がおよんだと千姫に知られてはならぬ――というのが駿河の大御所のつけた条件であった。実は、千姫はすでにその手がおよんできたことを承知で、まなじりを決して防戦を開始しているのだが、一天斎はまだそのことは知らなかった。条件がむずかしければむずかしいほど、それを克服して命令を遂行する点に忍者の誇りがある。彼は、坂崎出羽守一党も千姫の身辺に真田の女がいることをさぐりあてたと知った。ならば、その真田の女をつぎつぎにたおしてゆく手は坂崎のものであったと千姫に思わせよう。それは簡単だ。すべて終ったのち、この娘をこの井戸から出して、刃でももたせて屋敷のなかをうろつかせればよい。二度と交わってやらなければ、そのころはこの娘はおそらく狂乱しているであろう。おそらく千姫は、ひと思いにこの娘を殺さなかったことを歯がみしてくやしがるであろうが、それはあとの祭りだ。

そのための傀儡ではあった。またいまみずから忍法の実験だといった。しかし、ほんとうのところは、さっき持仏堂の秘戯の死曼陀羅を俯瞰して、やがてやってくるに相違ない真田の女忍者がまちきれぬ一天斎の獣の狂奔であった。

「すぐにいま、おれをおまえは恋う。おまえはおれを恋う。死んでもういちど交わりたいと、泣き声あげて身もだえするようになるぞ！」

毛だらけの一天斎の腕が、そりかえった初音のまっしろな胴に巻きつき、くびれこんでいった。

五

――三日のちだ。

持仏堂に、よろよろとひとりの女が入ってきた。髪をみだし、襟をかきひろげ、帯をひきずって狂女さながらのこの姿を、だれがあのきりりとしまったお喬だと思うであろう。眼は酔ったようなひかりをおび、口は大きくひらかれて、はっ、はっ、とみじかい息をきざんでいる。

「切ない……切ない……からだのなかに火がもえているようだ。死ぬ、わたしを抱いてくれる男がいなければ、わたしは……」

闇のなかにつまずいて膝を折ると、そのまま四つン這いになって、彼女は牝犬みたいに這いまわった。

「ここ……ここ……ここだ。わたしを呼ぶ声がきこえるのはここだ。……」

闇のなかでだれにもみえないはずであったが、ただひとりそのあさましい姿を見おろして、うす笑いしている眼があった。堂の隅に、朦朧と立っている影だ。

「ここだ」

と、彼はしゃがれた声でいった。

お喬の両腕がその足にからみついた。皮膚に爪をたてるようにして、ふるえながら次第

に這いのぼってゆく。

「おれだ。おまえの血のなかで、おまえを呼んでやったのはおれだ」

ささやく醜怪な口に、かぶりつくようにお喬の唇が吸いついていた。手も足も膠のように巻きついて、渇えるもののごとく身もだえする。

「うれしいか?」

雨巻一天斎は、すでに半裸のお喬のきものをはぎとった。床に横たえられただけで、お喬はもう腰をくねらせあえぎはじめた。それは情慾だけの一匹の美しい獣のようであった。このとき一天斎は、女が敵であることさえもわすれた。彼は、折れるばかりに女を抱きしめ、のしかかった。が、女の唇と舌をむさぼり、波うつ乳房にふれ、四肢をからみあわせてころがりまわり――狂熱の一瞬、お喬のたかい忘我のひと声が尾をひいた刹那――一天斎はふいとわれにかえって、その恍惚の顔をのぞきこみ、はじめて勝利の言葉を吐いたのである。

「真田の女。……おれの勝ちだ」

「……?」

「おれは、駿河から送られた伊賀者、雨巻一天斎。かような縁をむすんですぐに別れるのははかないが、おまえはゆかねばならぬ。あの世へ」

お喬のきれながの眼が、かっと見ひらかれて、一天斎の顔をみた。そののどからふいに

苦痛の声がもれ、四肢がぶるぶると痙攣した。闇の中ながら、一天斎の忍者の眼には、女の顔色がすうと鉛いろにかわってきたのを見た。

一度交わり、二度交わると、女が死ぬ。――これを現代の医学で強いて説明すれば、アナフィラキシー現象であろうか。抗原性をもつ物質で動物を感作すると、一定の潜伏期を経てから、感作に用いた物質に対して、はじめと変った過敏な反応をおこし、甚だしきはショック症状において、窒息死をとげることがある。――

お喬の唇がわなないた。

「信濃忍法――天女貝。――」

はっとして、四肢をはなそうとした。お喬の手足は膠着して、はなれない。一天斎の手がうごいた。がくり、というような音をたてて、女の手が一天斎の背からはなれた。つづいて、女の腰のあたりに手がはしると、またぶきみな音がひびいて一天斎の腰から女の足がおちた。

雨巻一天斎は突如たまぎるような苦鳴をあげていた。恐ろしい緊縛を彼は感覚した。それは一点に於て、まるで魔の貝のふたをとじたように、彼をしめつけてきた。

「うっ」

激痛の衝撃が、焼火箸のように全身をつらぬいた。一天斎の満面はむらさき色になり、手足はねじくれた。

「こ、こやつ――」

のたうちつつ、お喬のくびをしめつけた。頸椎の折れる音がした。しかし、それ以前にお喬はすでに絶命している。夢のように甘美な死微笑を浮かべて。

――しかも、一天斎は彼女からはなれることができない！

苦悶のあぶら汗をしたたらす一天斎の耳に、そのとき庭の方でよぶ声がきこえた。

「お喬どの――お喬どの――姫君さまのお呼びです」

一天斎は狼狽した。死力をふるって這いずり出した。からだの下にお喬のからだをつけたまま、奇怪なやどかりのように。――

例の井戸のふたのうえで、刀をひろったが、斬りはなすことはできなかった。それはおのれ自身をきることになる。

「お喬どの、お喬どの――」

声はちかづいてくる。

一天斎はふたをあけた。ふたの内側には、鉤をうちつけた縄がたれさがっている。それにぶらさがり、ふたをとじるまでに、雨巻一天斎の髪の毛根からは一本のこらず血漿がふき出すかと思われた。いちどぬきはなった刀身は、もがきぬくからだと蓋のすきまから、井戸の底へおちてしまった。

縄にぶらさがった一天斎は、下から呼ぶ声を聞いた。

「一天斎さま……一天斎さま……はやく、初音のところへ——」
屍骸（しがい）の沼の底から、髪ふりみだしてあおいでいる初音であった。いまは一天斎恋しさに狂乱し、ついに一天斎を井戸からにげ出させたほど、いどみぬく女に変っていたが、その声がふとやんだ。
「それは……あなたといっしょにいる女は？」
お喬は一天斎のからだから、嫋々（じょうじょう）と垂れさがっている。くび、かた、腰と、すべての関節をはずされて、それは白い花環か瓔珞（ようらく）のようであった。完全に死んで、しかも一天斎を捕虜としている。背骨をぬきとられるような重みと痛みに一天斎は獣みたいにうめきながら、この死んだ女をたとえずたずたに斬り裂こうと、彼をとらえた貝の肉がくされおちるまではなれないであろうことを知って、われしらず、忍者らしくない恐怖のさけびをあげていた。
「まあ、よその女と——にくい、くやしい、一天斎さま！」
怒りに顔を紅潮させて、初音は身をうねらせた。手に、さっきおちてきた刀をにぎりしめ、ふりかざしていた。
雨巻一天斎はなお数分間宙（ちゅう）に浮いていた。そのからだにはだかの天女のような美女を吊ったまま。——その奇怪な蜘蛛（くも）と蝶（ちょう）を、鬼火の脚光が蒼（あお）くてらし出した。が、ついに力つきて、この伊賀の忍者は、死せる真田の忍者とからみあったまま、狂女の哄笑（こうしょう）にゆれる一

本の刀の上に一直線におちていった。

忍法「やどかり」

一

元和元年九月二十九日、家康は駿府を発して江戸にむかった。これに供奉するものは、家康の第十子左近衛権中将頼宣をはじめとして、本多上野介、秋山但馬守、板倉内膳正、南光坊天海らの重臣である。将軍秀忠よりの使いとして、箱根まで安藤対馬守が出迎え、小田原まで酒井雅楽頭が出迎え、十月十日、行装も重々しく、大御所は江戸城に入った。

五月に大坂を攻めほろぼしてから、はじめて家康が江戸入りをしたのには、さまざまな目的があった。表むきは、大坂の役のため中止していた江戸城本丸の本格的拡張工事の地鎮祭に列するためと、あと武蔵野の放鷹のためであるが、まことは孫の千姫の様子をうかがいにきたというのが、それにおとらぬ大事な目的であった。

千姫の身辺に、秀頼の胤をはらんだ女がいる。それを刺すべく駿府から送ったふたりの伊賀の忍者はついにかえらぬ。想像もできないことであるが、おそらく彼らは何かのつまずきで斃されたものにちがいないが、それにしてもめざす女はどうしたのか、五人の女の

うち、何人しとめたのか。それともまったく失敗したのか、かいもく不明で、しかも千姫の屋敷が古沼のごとくしずまりかえっているらしいのが、さすがの家康にも、いてもたってもいられぬほどうすきみわるさをおぼえさせたのであった。

すでに大御所が出府するとあって、道中につぎつぎと閣老級の重臣を出迎えさせるほどの心をつかっている秀忠だ。家康が西城に入る前後のさわぎもひととおりでなかったが、家康はふきげんであった。出迎えのひとびとのなかに、かんじんの孫の千姫の顔がみえないのである。

「お千はいかがいたしたか」

と、彼はきいた。秀忠は恐縮してこたえた。

「お千は病気の由にてお迎えできませぬが、お祖父さまには何とぞ御健勝にてごゆるりと御在府あらせられますよう、なお日ごろよりたびたび御見舞の御使者かたじけのうございます、との口上で――」

家康は爪をかんだ。――関ケ原のいくさが逆睹しがたい形勢にあったときも、彼は爪をかんでいた。心に容易ならぬ鬱屈したもののあるときの家康のくせである。

――二十五年前、家康が秀吉に移封を命じられて、はじめて江戸にきたときは、みわたすかぎり茫々の草土で、城といっても、かたちばかりのものといってもよかった。爾来、

城は持続的に修理と拡張をかさねてきたが、秀吉の眼のくろいうち、また大坂に秀頼があって豊家恩顧の諸大名が疑惑の眼をむけていたころと、いまとは事情がまったく一変する。これは名実ともに、未来永劫にわたり覇府の象徴として、もはやだれはばかるところもない巨城たるべき運命の地であった。

城に入った翌日には、家康はもう矍鑠たる顔色で、西の丸と吹上をへだつ局沢から、谷のおくにある紅葉山へむかってあるいていた。一帯は、まさにその名のごとく紅葉にいろどられて、まるで深山のごとく秋の小鳥が鳴きしきっている。うろこ雲がひかりつつながれていた。この谷、この山、その一石一木も、家康の壮大堅実な築城眼には意味のあるものであった。彼はいちいち杖をあげて、それを説いた。うしろには秀忠夫妻をはじめ、十数人の重臣や侍女がしたがっている。

家康はその途中から、それらのなかに、ただならぬ眼つきをしたひとりの男に気がついていた。すきあらば、じぶんのところへかけよって来そうな気配をかんじて、わざとそしらぬ顔をしていた。――満面やけただれた坂崎出羽守だ。

家康はれいの約束をわすれてはいないが、それを果たすことはまったく不可能だとかんがえている。約束をしたときは本気であったが、あの面体になっては、いかになんでも千姫を嫁にやるのはむごすぎると思う。その醜顔になったのもあの約束のためと思えば、出羽守にもちとわるい気がするけれど、何にしても、だいいち千姫がうけつけそうにない。

そもそも現在ただいま、相手が坂崎であろうとだれであろうと、再婚どころか、豊臣家にのぼせあがって、この祖父にすら途方もない挑戦の矢をむけている千姫なのだ。

「大御所さま」

ついに、やってきた。あの猛火のなかへとびこむほどの男だから、知らぬ顔の半兵衛をきめこんだくらいでひきさがるやつではあるまいと案じていたが、とうとうたまりかねたらしく、出羽守は血相かえてやってきた。

「出羽か」

出羽守はまえにひざまずいた。家康のしぶい表情にも無神経に、思いつめた眼をあげて、

「恐れながら、内々言上つかまつりたき儀がござる」

家康のまわりに人けのすくない機会をえらんだものであろうが、それでもすぐそばに三人の護衛の武士がいたし、ややはなれて、秀忠夫妻、嫡孫竹千代、その乳母阿福、南光坊天海らがたたずんでいた。

「出羽――いりくんだ話ならばあとにいたせ」

「あいや、出羽、思い決して申しあげることにござります。千姫さまのおんことにつき――」

「あの話か、あれは、しばらく待て。お千はまだ心も傷だらけ、どうやらからださえ病んでいる様子――」

「いや、お心はしらず、おからだはたしか御無事のはず。大御所さま、姫君には実に恐ろしき人間をお飼いでござりまするぞ。はじめ拙者は、姫君も御存じではあるまいと推量いたしておりましたが、このごろつらつらかんがえてみるに――」
「出羽、もうよい」
と、家康はいった。その顔に驚愕のいろがはしったのを出羽守はみた。
「これは徳川家の一大事にて――」
秀忠たちが、はっとしたようにこちらをみた。家康はいよいよ狼狽して、
「出羽、千姫のことはもう申すな。おまえにかかわるところではない。要らざるくちばしをいれるな。しかと申しつけたぞ、さがりおれ」
と、叱咤して、ひとりさきに、背をみせた。
なお追いすがろうとした出羽守のまえに、うっそりと三人の護衛の武士が立った。――その男たちと眼があって、出羽守は思わずたじろいだ。熱した彼を、まるで氷とかえるような異様な眼光をした男たちであった。戦場往来の出羽守も曾てみたことはない――人間ではないものの眼だ。
すぐ彼らは、家康のあとを追った。茫然として見おくって、しかも出羽守はさっきの家康の驚愕した表情を思い出した。むろん家康のおどろきが、出羽守もまたあの秘密を知っていることにあったとは想像もつかない。いまはじめてそのことを耳にして愕然としたと

思っている。それにもかかわらず、家康はじぶんの口を封じてしまった。なぜか？――それはじぶんと千姫とかかわりあうことを一切拒否したいためだ、と出羽守はかんがえた。
彼はのどのおくでうめいた。
（よし、もはや言うまい。が、大御所が左様なおきもちならば、おれはあくまで千姫さまにかかわるぞ。男の意地にかけて、千姫さまが徳川家に何を企らんでおらるるか、おれの手でつきとめずにはおかぬ）
うごき出そうとして、ふいに出羽守はまえにふしまろんだ。両足の指が地上に膠着していたのだ。草履のふちが、いつのまにやら二個のマキビシで地面に縫いつけられていることを知ったのは、そのあとであった。

二

にがにがしげにあるいていた家康は、ふとたちどまって「捨兵衛」とよんだ。あとを追ってきた三人の従者のうち、ひときわ大兵肥満の男がおじぎをした。
「坂崎がの」
と、家康は爪をかんで、
「例の件、どこまで知っておるか、どこまで首をつっこんでおるか、探ってまいれ」
捨兵衛とよばれた男はおじぎをした。とみるまに、その巨大なからだが、まるで空をた

だよう風船のようにむこうの樹立のなかへきえてしまった。下に灌木が密生しているのに、その葉が微風に吹かれたほどにもうごかないのである。

あわててあとについてきたものの、なおためらっていた秀忠をめぐる一群のなかから、やがて意を決した風で、ひとり阿福がちかづいてきた。

「いかがあそばしましたか、大御所さま」

秀忠たちもやってきた。阿福は息をひそめて、

「ただいま出羽守が千姫さまのおんことにつき何やらききずてならぬ言葉を吐き、また徳川家の一大事とやら申しあげたようでございますが」

家康は困惑した眼でしばらく一同を見まわしていたが、ややあってかたわらの石に腰をおろした。

「きいたか」

と、つぶやいて、

「よいわ、おまえたちだけには申しておこう。将軍家、御台、僧正、阿福、そなたらのみ寄れ、あとのものは、あちらにひかえておれ」

と、いった。秀忠夫妻と南光坊天海と阿福だけが、家康のまえにあつまった。

いや、それ以外にも、家康のそばからはなれないものがある。ついいましがた一人がどこかへかけ去ったが、あとにのこっている二人の護衛の武士である。駿府からしたがって

きた両人だが、むろん譜代のものではない。ひとりは白皙長身の若者、ひとりはまっしろな総髪を肩にたれた老人だが、ほかの家来たちとは大いに異色がある。野性剽悍の気が全身にただよい、江戸城内にあって、ゆきこう重臣貴女に目礼もするどころか、どこかひとを小馬鹿にしたようなうす笑いすらうかべている。とくに侍女たちにむける眼には不遜な興味があった。最初から阿福は、彼らの素姓をふしんに思い、また不愉快に感じていた。

「大御所さま」

「なんだ」

「そのものどもは、いかような男たちでございますか」

と彼女は思いあまってきいた。

阿福が春日局の称をうけたのはずっと後年のことで、このとき彼女はまだ三十七歳、色白でふとり肉の姿態にはまだ色香が匂っていたが、それをほとんど相手に意識させない才気と威厳がみちていた。たんに嫡孫竹千代の乳母という資格のみではない。むしろ次男の国千代の方を愛して、ひそかに継嗣を決していた秀忠夫妻に抗して、竹千代を未来の三代将軍の座におくべく、大御所の断を下させたのは阿福のはたらきによるものである。それ以来、大奥には御台所よりもむしろ阿福の力の方がつよいくらいであった。いや、その大奥の厳粛な制度そのものをつくりあげつつあるのも、この阿福なのである。いま家康がいままで将軍にすら秘していた千姫のれいの一件をうちあける気になったのも、阿福に一目

も二目もおいていたからだ。というより、政治好きなこの才女にかぎつけられた以上、なおかくしとおそうとしても所詮は不可能であるとあきらめ、かえってさきざきおもしろくないことがおこると判断したからであった。

「このものどもか。――仔細ない」

と、家康はかるく手をふった。ふたりの男は、れいの小馬鹿にしたような不遜な眼で、阿福を見あげ、見おろして、へいきな顔である。

家康は、千姫が大坂からつれかえった五人の女のことをしゃべり出した。秀忠夫妻、阿福はもとより、古沼のごとき怪僧天海ですら顔色をかえていた。

「その真田の息のかかった女どもが、みな秀頼の子を身ごもっておると仰せでございますか。――それはまことに徳川の一大事」

と、秀忠はこぶしをふるわせてうめいた。

「それを承知で徳川にはむかうとは、いかにいちどは豊臣にやったわが娘とは申せ、なんたる大それたやつ、もはや一刻も猶予はなりませぬ。即刻討手をむけてそやつらを誅戮いたさねば――事と次第では、お千もろとも成敗を加えることに相なろうと、是非はござるまい」

「……それがやすやすとできるならば、わしがこれほど苦労するかよ」

と家康はにがく笑って、

「お千は、殺してはならぬ。あれは、わしにとって、いまのところ竹千代、国千代よりもかわゆい。――」

と、つぶやいた。千姫の若い人生を犠牲にしたという罪の意識は、秀忠夫妻にもあるだけに、これには声もなくさしうつむいただけである。家康はうろこ雲をあおいで、

「もとより、お千の心は病んでおる。病んでおるゆえ、こちらの出よう次第では、何をやり出すかわからぬ。……つらあてに、死ぬかもしれぬ。わしにはそれがいちばんこわいのじゃ。されば、いままでお千のもとにおくりこんだ忍びの者にも、その真田の女を成敗するのに、こちらの手がおよんだと姫に知られてはならぬとかたく命じておいた。それが、二人やったが、二人ともかえってこぬ。どうやらきゃつらがしくじったらしいのは、左様なくつわをはめたゆえであったか。それともあの坂崎までがかぎつけた様子ゆえ、出羽めが要らざるちょっかいを出して、みすみすお千に網を張らせたか。――」

要するに、その女どもは絶対殺さなくてはならぬ。しかし、千姫は絶対殺してはならぬ。したがって、その女たちがみずから死をえらんだようにみせなくてはならぬというのが家康の希望であった。そのこころはよくわかるが、実に至難な希望だといわなければならない。秀忠はきいた。

「それで、どうあそばすおつもりでございます」

「さればよ、それで苦にやんで、よい智慧でもあらばと、こうしてうちあけておる」

およそ目的のためには魔王のごとき智略をめぐらす家康が、ほとほと進退両難におちいっているのは、いうまでもなく千姫への愛という泣きどころがあるからであった。
「ここにおるのは、その伊賀の忍びの者の生き残りじゃ。当人どもは地だんだふんでいさみたっておるが、なにせ、すでにやった二人がかえって来ぬがいぶかしく、しばらくわしがひきとめておる」
と、家康は、ふたりの伊賀者をあごでさした。若い方が鼓隼人で、老いた方が般若寺風伯であった。
「その女たちは五人と申されましたな」
と、阿福が顔をあげた。
「五人。ただし、さきにつかわした二人の忍者が手ぶらでむなしく討たれたはずはない、と、こやつは申す。されば、いま何人のこっておるやら仔細はしれぬ」
「その顔もわからないのでございますね」
阿福は、いらいらしたように両手をにぎりしめて、思案していたが、
「まず、その女どもを千姫さまのお屋敷からひき出さねばなりませぬ」
「ひき出す手だてはあるか」
「大御所さま、しばらく御不快にならせられませ」
「なに、わしに病気になれと申すか。そりゃまたなにゆえじゃ」

と、家康は阿福の唐突さにややあきれた表情である。阿福の眼はかがやき出していた。
「十日のちに、お城直しの地祭がございます」
「ふむ」
「これは徳川家千年の礎となる行事ゆえ、徳川の血につながるものは一人のこらずまかり出でよと仰せられ、大御所さまもおん病をおして輿にのって出られませ。それでは千姫さまもおいであそばさぬわけには参りますまい」
「ふむ」
「一方で、この地祭の巫女を、徳川御一門につかえる処女らのうちからえらび出すゆえ、それまでにどの御一門におかせられても、すべての侍女をお城にさし出されたいとお触れ下さりますよう」
「ふむ」
「それが何千人あろうと、まことにめざすは千姫さまの侍女のうち——調べるに、骨はおれませぬ。五月に身籠った女とすれば、六月に閏がありましたゆえ、いまはかれこれ六か月、いかにたくみに衣裳で覆おうと、ふくらんだ腹をかくしおえるものではありませぬ。また念のため、それがまことの処女かどうか——ということに口をかりて、阿福がはだかにして調べてもよろしゅうございます。そのなかに身籠っておるものがあれば——」
といって、阿福は微笑した。恐ろしい微笑であった。

「待て」
と、家康はとめた。
「お千が、その女どもをさし出すか」
「若し、姫君のさし出された侍女のうちに身籠った女が見あたらなければ、お屋敷におかくしなされている何よりの証拠でございます。そのときは——地祭当日、姫君がお城に入られましたあと、お屋敷にふみこんでその女どもをとらえましょう。いいえ、大御所さま、それをお知りなされたとき千姫さまがどのようなおんふるまいをあそばすか、それが気がかりじゃとの仰せはよくわかっておりますが、そのときはこの阿福、いのちにかえて姫君をおいさめつかまつります。女どうしならば、またお心のほぐしようもあるというものでございます。それは大御所さま、阿福をお信じ下されまし。姫が左様に恐ろしい御謀叛におん肩をおいれあそばすというのは、ひとえにそばに女狐が憑いておるからのこと、それをひきはなせば、あとはこちらのものでございます」
「それで——もし首尾ようとらえるか、または姫のさし出した侍女のうちその女狐めらを見つけ出したとき、どういたす」
「そしらぬ顔で、処女のあつかいをいたします」
「なに」
「そして、他のまことの処女を五、六人、または七、八人をえらび、あわせて十人、お城

の人柱として生きながら地中に埋めてやりましょう」
「人柱として——」
「もしその女狐らのみを成敗いたせば、姫君もおさわぎでございましょうが、他の処女とまぜておごそかに人柱といたせば、姫君はあっとお胆をつぶされ、お胸をみだされ、とっさには、とりかえしのつかぬおんふるまいに及ばれる御気力は萎えはてられるものと阿福は推量いたします」
なんという破天荒な思いつきか。たしかに人間の心理としてそんなこともあり得るかもしれぬ、とようやく家康もうなずきかけていた。
「したが、阿福、その——罪なき他の処女たちはいずれより求める？」
「わたしの使いまする女どものうちから」
と阿福は平然としてこたえた。
「わたしの使いまする女どもは、これは神かけてまことの処女ばかりでございますが、人柱——これこそお城のみならず、お家御安泰のための人柱に、うれし涙をこぼして立つことでございましょう」
たっぷりとした白い笑顔に、眼ばかり秋の霜のように冷たいのをみて、さすがの家康も、背すじがすうとさむくなるのをおぼえた。
そのとき、すぐちかくで梟みたいな声をたてて笑うものがあった。

三

阿福はきっとなってふりかえった。伊賀の忍者のうち、老人の方がそっぽをむいて笑っている。

「風伯、なにが可笑しい？」

と、家康がとがめた。般若寺風伯はふいにまじめな顔つきになって、

「いや、こちらのことでござる」

「何をお笑いなされたか。わたしの申したことに可笑しいことでもあったといいやるか」

と、阿福はするどい声で、その老忍者につめよった。風伯はじろっと阿福をみて、またにやりとした。

「ならば、申そうか。可笑しかったのは、お手前さまの使われる女どもが、神かけてまことの処女ばかりといわれたことじゃ」

「え、それが、なぜ可笑しい？ わたしの使う女たちのなかに処女でないものがあるとでも――」

「仰せのとおり。しかも、身籠っており申す」

と、般若寺風伯はそらうそぶいた。

「何をいいやる。それはだれじゃ」

「名は知り申さぬ。しかし、指さすことはできる」

「さしてみや」

「あの女でござる」

と、風伯は、遠く一団となってこちらをながめている家臣や侍女の方へ、骨ばった指をあげた。

「あの大銀杏の下にむらがっておる女人のうち、いちばん左はしの――それ、いまかがみこんで銀杏の葉をひろった女でござるわ」

阿福は息をのんだ。それはその娘がもっとも若く、もっとも利発で、阿福がだれより眼をかけている御使番の娘であった。――それを指さしてながめているこちらの姿に、侍女たちはいっせいに白い顔をむけた。

「桔梗、参れ。――」

地にかがんでいたその侍女は、呼ばれてあわててたちあがって、きょろきょろと見まわしたが、朋輩におしえられて、いそいではしってきた。笑顔の歯が白く、新鮮であった。

「何か御用でございますか」

と、息はずませて、草の上にひざをつく。

阿福はその姿を見おろして、しばらくだまっていた。この娘が身籠っておると？――どうみても、そんなことは信じられない。そんなふしだらなことをする女ではないし、だい

いちからだつきからして、すんなりとういういしい。このえたいのしれぬ伊賀の老忍者のでまかせを、とっさのこととはいえ、よくも本気になってきいたものだ。——しかし、すでに呼びよせた以上、あとへはひけなかった。
「この仁がの」
と、苦笑して、
「そなたが身籠っておるといわれるが」
といい出したとき、桔梗の頬から血の気がひいた。それをみたとたん、阿福の顔も蠟面みたいにかたくなっていた。それでは、老忍者のいったことはまことなのか。まことならば——
阿福はかっとなった。あざむかれたという怒りより、大御所のまえで、とんでもない失態をみせたという恐怖と狼狽のために逆上したのである。彼女を信頼して、大奥の総監督たることをゆるしている大御所のまえであった。
「桔梗、まさか、左様なことはあるまいの」
「……はい」
と、桔梗は草に顔をふせてうなずいた。般若寺風伯は笑った。
「まず、おれは四月めとみる」
「まだあんなことを——もし、そなたの申すことが謬りであったら、どうしやる？」

「さればさ、ふ、ふ、じぶんでこのしわ首きりおとして、首なしで大手門まであるいてごらんに入れよう。ところで、この娘のいうことがうそであったら、いかがなさる？」
「成敗する」
「成敗？　この娘を殺したとて、おれは何にもならぬ」
突然、この老忍者は阿福の耳に口をちかづけて、実に途方もないことをささやいたのである。
「おまえさまのからだを抱かして下されい」
阿福はあっけにとられて、風伯の顔をみた。このやせこけた老忍者は、ひげのなかから歯のない口で、きゅっと笑っていた。
「十年ぶりで出した色気じゃが、おまえさまのつんと気位のたかい女ぶりをみておったら、ふいに妙な慾が出てござる」
阿福は怒りにふるえながら、ものもいわず大御所の方へひきかえそうとした。般若寺風伯はふいに大声で呼びとめた。
「もし、ほんとうにこの女を成敗なさるのか」
「万一、大奥の掟をやぶった罪とわたしにいつわりを申した罪があきらかとなれば。——ただし、そなたの指図はうけぬ」
「お待ちなされ。まことにその気ならば、ただいまおれが白状させてごらんにいれる」

阿福がふりかえったとき、風伯の口から秋のひかりに、たんぽぽの毛のようなものが桔梗の顔に吹きつけていったのをみて、はっとした。

家康は、それが曾て駿府城内で薄墨友康が胡蝶という侍女に吹きつけた針――催淫液をぬった吹針だとすぐに見ぬいて、思わず声をあげようとして、あやうく制した。この老忍者のさいぜんよりの言葉のふしぎさへの好奇心がすべてをおさえたのである。

桔梗はあっとさけんで、しばらく顔を覆っていたが、やがてその手をとったとき、満面はうすくれないに染まっていた。眼もうるおい、唇もぬれて大きくひらき、肩が波をうちはじめた。それから、くねくねとからだをくねらせて――曾て阿福がみたこともないなまめかしい姿態で、般若寺風伯の方へいざりよっていった。そして、寒巌のような老人の腕のなかへ身をすりつけて、白い歯並をかすかにのぞかせた美しい唇を半びらきにして風伯へむけたのである。

恥じる風もなく、般若寺風伯はその口をじぶんの髯で覆った。さけび出そうとしたのは阿福ばかりではなかったが、このときそれを見ていたものは、同時に、風伯に、風伯の腹のあたりからのどぼとけへむかって、瘤みたいなのが波うってきえたのも見とめて、ぎょっと眼を見はったのである。

いつのまにか、般若寺風伯はしぼりあげるように桔梗をたたせていた。老忍者とうら若い侍女は、数分間、からみあったまま立っていた。

ふいに、風伯はすうと桔梗からはなれた。桔梗の腕はなお宙に輪をつくって何者かを抱いているのに、老人はけむりのごとくそれをぬけて五、六歩あとへさがったのである。

「伊賀忍法――日影月影」

と、彼はひくくつぶやいた。

人々は息をのんだ。それにかぶせるように、野ぶといしゃがれ声をきいたからである。

「さて、おれはこれからどうするのだ」

その声が桔梗の唇からもれていることは、彼女を凝視している場合でなかったら、だれにも信じられなかったろう。それはまさしく般若寺風伯の声であった。

「……ふ、風伯……」

と、家康はわれしらずうめいて、杖をにぎりしめた。

「これはいったいどうしたのじゃ」

「もうひとりの風伯を、この女の体内へ吹き入れたのでござる。月が日に照らされるがごとく、あの女はわしの魂の照り返しをうけておる。このわしが日影ならば、あの女は月影のようなもので――」

と、老人はぼそぼそとつぶやいた。そして、月影というにはあまりにも物すさまじい――裾をふみはだけて仁王立ちになっている桔梗をじっと見つめていたが、やがてじぶんの腰の山刀をぬきとって、ぽんとなげた。桔梗はそれを片腕でうけとめた。ぶきみなふとい

声で、
「おれはこれからどうするのだ」
と、もういちどいった。風伯はうす笑いしてこたえた。
「腹の胎児にはこまったの」
「さればよ、男のおれがはらんでおる」
と、桔梗もにがにがしげに笑う。風伯がいう。
「男には、出す穴がないでな。それ以上育つといよいよ始末にこまるぞよ。いっそ、いまのうちに——胎児を出した方があとくされがなかろう」
桔梗はうなずいた。山刀を口にもっていって鯉口をぷつりときると、スラリとぬきはなった。とみるや、刃を袖でつつんで逆手ににぎり、なんの造作もなく、下腹から胸へすうと撫であげたのである。
きものがたてにさけた。腹の皮もたてにさけた。きらびやかな衣服とまっしろな肌がもつれあってみえたのも一瞬、樽から醤油のあふれるように、血しぶきが草に奔騰していた。
みな、何をさけんだのかわからない。しかし、だれしも足は大地に膠着したきりであった。そのまえで、桔梗はさもうれしげににやりと笑い、一方の手を血まみれの腹におしこんで、それからえたいのしれないものをつかみ出したのである。
まるで、それをひきずり出したおのれの手の力にひきたおされたように、桔梗はまえに

四つン這いになった。四肢がぶるぶると痙攣した。が、その痙攣する指のあいだにしかとにぎりしめているものに気がついて、さすが気丈な阿福も、眼のさきがすうと昏くなるのをおぼえたのである。
それはまっかな蛙みたいな形と大きさをもった一個の胎児であった。

「まず、ききたい」
と、家康がようやくきいたのは、西の丸にひきあげてからである。ふたりの忍者のほかには、天海と阿福のみが同席していた。
「風伯、そもそもなんじはいかにしてあの女が懐胎しておると見ぬいたのか」
「さればでござります。あそこには三十二人の人間があつまっておりました。それで、心ノ臓の音は三十三きこえたのでござります。しかし、心ノ臓の音をふたつ出している人間はどやつかと耳をすませたところ、その音の出どころはあの女でござった」
と般若寺風伯はこともなげにこたえた。
「なに、心ノ臓の音がふたつ？」
「成人とことなり、トッツ、トッツ、トッツ——と、音の強さはみなおなじ、澄んで早うて——ひとつはあの胎児の出す音だったのでござります」
まひるの江戸城内に、物音はなかった。家康にも天海にも阿福にも、澄明な秋の大気が

氷の底みたいに感じられ、だまっていると凍ってうごけなくなってゆきそうなおびえにとらえられた。

ややあって、家康はふいに大声をたてた。

「それで、例の件を片づける手だてが出来た」

と手をうって、

「阿福、千姫の侍女どもをことごとく調べるにはあたるまい。一同を呼び出してこの風伯に心ノ臓の音をきかせてやれ」

阿福は蒼い顔でうなずいた。この才女にはめずらしくだまりがちである。

「それから、その女に——この風伯から、日影月影の忍法をかけさせたらよかろう。その女めは、みずから腹の胎児をひきずり出して死ぬ」

「おれが要らざる殺生をごらんにいれたのは」

と、風伯はおちついていった。

「左様に存じたからでござります」

四

「陰謀」は、阿福の案のごとくに実行された。三日めから、徳川一門の諸家につかえる女たちが続々と江戸城にあつめられ、阿福の指図のもとにそれぞれ何人かの巫女の候補者が

えらび出されて、あとはかえされた。何日かたって、さらにそのうちの大半はもっともらしい理由をつけて、雨だれのようにつぎつぎに下城をゆるされた。のこったのは、各家一両人ずつの若い侍女ばかり——直後大奥につかえる女たちのなかからより出された九人とあわせて、二十人ほどである。むろん真の目的は、その九人とあとの「一人」——実は、その「一人」にあった。

その一人は、千姫のさし出した侍女のうちからえらばれた。般若寺風伯の見つけ出した——いや、きき出した「心ノ臓の音を二つもつ女」が一人だけだったからである。阿福の輩下から九人の女中がえらび出されたのはそのためであった。

——千姫のもとに、めざす秀頼の胤をはらんだ女が何人いるか分明しなかったから、さしあたっては、それ以上、どうすることもできなかったのである。

事実は、千姫屋敷に該当者は三人いたのだが、そのうちの一人だけさし出し、あとの二人をかくしたのは、千姫方でもこのもっともらしい触れに一抹の疑惑をいだいたからで、千姫自身は三人ともかくそうとしたのだが、一人がみずから望んだために、彼女のみを城へやったのである。結果はそれがよかったのだ。

二十人余の女たちは、神官から地祭の儀式の次第を教えられ、権の巫女の講習をうけたが、さらに数日後にいたって、その人数はきれいにふたつにわけられた。一方の十人が、阿福の口から厳粛に、地鎮の人柱たるべき運命を宣告されたのは、当日の前夜のことで、

すでにこのとき彼女らの入れられた西の丸大奥の座敷はものものしい雰囲気につつまれ、さらに、見えない闇の外界は、服部半蔵の指揮する伊賀甲賀者が鉄環のごとくとりまいて、彼女らの脱走を不可能としていたのであった。

大奥は、本丸にも西の丸にもある。西の丸は隠居もしくは世子のいるところで、ふだんは竹千代が住んでいるが、いまは大御所もここに滞在していた。むろん、本丸ともども後世のように厖大なものではなく、まして――隠居してなお数十人の愛妾をもっていた後代の将軍の時代とちがって、いま十二歳の世子竹千代の居住しているばかりの西の丸は、女中の数も六、七十人にすぎなかったが、それでも大奥と表の別は厳として、主人以外の男性が大奥に一歩も入ることはゆるされなかった。そういうことには異常なばかりにきびしい阿福のつくり出した戒律である。

「隼人」

――その大奥と表をへだてる御錠口の杉戸の外にある伊賀者詰所で、般若寺風伯が鼓隼人に話しかけた。ふだんここにいる伊賀者はすべて七つ口そのほかの警戒にあてられて、そのとき詰所にいたのは、ふたり以外はおなじ鍔隠れの谷からやってきた七斗捨兵衛だけであった。

「あしたはいよいよ人柱さわぎだが」

「うむ」

「ばかな話だ。おれはじぶんの見つけ出した女の顔もみぬ」

「おぬしが遠方で心ノ臓の音をききわける術をみせたからだ」

「大広間にあつめた女のうち、その女のいどころを唐紙の外から探させられただけじゃ。それというのも、あの阿福という女、立身出世の慾の権化だな。おのれの手柄をこちらにとられはすまいかと、そればかり気にかけておる。――いまいましいが、あの女、ちょっぴりおれは惚れたぞよ」

「うふふ、風伯老がいったいどうしたのだ。あのようにいばりくさった姥ざくら」

「おぬしは若いから笑うが、おれはその姥ざくらのいばりくさったところに惚れたのじゃ。このあいだ、あの局沢でちょいとちょっかいを出したので、いっそうあの女め、おれを遠ざけようとしておるらしい。――ま、それはよいがな」

「うむ」

「おれの気にかかるのは、千姫屋敷へいった薄墨友康と一天斎のことよ」

「それはおなじことだ。あれらがあのまま消息を絶ったのは、何とも判断がつかぬ」

「その消息をただすのに、せっかくめざす女をとらえながら、この杉戸の奥にとじこめられて、あしたはそのまま地中に埋められてしまうとは、まったくもったいないことではないか」

「おれもそう思うが、いまの場合、どうしようもない」

「いや、そこでさっきからかんがえていたのじゃが、おれはちょいとこの奥へ入ってこようと思う。そして、心ノ臓の音の二つきこえる女にきいただすのだ」

「ほ、いかに風伯老でも、この厚い杉戸はどうにもなるまい。この杉戸のむこうには、御錠口衆の女がひかえてもおる。ほかの出入口には、伊賀者の眼がひかっておるぞ」

「なに、日影のおれは、ここにすわっておるわさ。――そうれ、月影がやってきた」

と、風伯は笑って、のっそりと詰所から出ていった。

廊下を、雪洞をささげた小姓をつれて、阿福がしずしずとやってきた。

「お通りあそばす」

と、小姓が声をかける。

三人の忍者は神妙に平伏したが、まず般若寺風伯が身をおこしたとき、風もないのに、手の雪洞がふっときえた。雪洞のみならず詰所をあかるくしていたいくつかの提灯も、いっせいにきえたのである。

「や、どうしたのだ」

と、小姓は狼狽して、

「灯を――火打石を」

と、さけんだ。闇のなかを詰所へもどる跫音がして、なかで、「さて、火打石はどこにあるか。新参にはとんとわからぬわ」とうろたえる隼人の声がきこえた。小姓はあせって、

じぶんもその方へかけていった。

灯は三、四分でついた。阿福は杉戸のまえに厳然とたち、その足もとに般若寺風伯は平蜘蛛のごとく伏している。

杉戸があけられ、阿福は男子禁制の奥へひとり入った。小姓はひきかえそうとして、ふと雪洞にキラリとひかるものを廊下の上にみつけた。思わず立ちどまって、

「針か」

と、のぞきこんだが、女ばかりの大奥は杉戸一枚の向うだ。阿福さまか、ほかのお年寄でもおとしていったものであろうとすぐ考えて、

「あぶない、僕ひろっておけ」

と、平伏している老人にあごをしゃくって、表の方へかえっていった。そのあとも見おくらず、老人は杉戸に直面して、うすきみのわるい笑顔をつくった。

五

眼にみえる格子こそなかったが、眼の格子があった。白衣をきせられ、一室にとじこめられた十人の若い娘たちは、厠へたつのにも単独ではゆるされず、おたがいに対話さえも禁じられた。彼女たちはいたるところに蜘蛛の網みたいな監視の眼を意識したが、そのなかのただひとりだけは、ほかの九人とちがって、それ以上に、みえない眼を感じとった。

遠い樹立の中、屋根の上、あらゆる出入口にひかる無数の伊賀者の眼だ。
九人の娘は、じぶんたちがただひとりの女を埋めるための土にすぎないことはしらされず、こんどのお城直しの人柱を命じられたと信じていたが、それをほんとうに名誉にかんがえているものはひとりもなかったであろう。阿福の思いがけない宣告にひたすらおどろきかなしむばかりであったが、やがてこの時代の女らしく、もはやのがれるすべはないと観念してからは、みな哀れにしずかであった。ひとりの女は、もとより江戸城の人柱になるというこころはまったくなく、脱走の意志を抱きつづけていたが、しだいにその自信を失ってきた。せめて、じぶんはたとえ殺されるにせよ、なんとかして腹の胎児だけは生かしたい！ 彼女はもだえた。まわりが女ばかりなのが、かえって彼女の能力を空気のようなものにしていたのである。ひとりでも、そばに男がちかづいてこないものか？
——その男が入ってきた、と感じて、彼女はふりかえって、眼を大きくみひらいた。座敷に入ってきたのは男ではなく、阿福であった。
女たちのなかで、思わず悲鳴をあげたものがあった。この阿福が実に恐ろしいひとであることは、こんどのことで思いしらされているが、それにしてもいま入ってきた阿福は、ひとめ見ただけで悲鳴をあげたくなるほどぶきみな姿であった。だまって仁王立ちになり、じろりと女たちを見まわした眼は、獣みたいに赤くひかっているのだ。
つかつかと、ただひとりの女のまえにあるいてきた。

「真田の女狐」
と、呼ぶ。
「薄墨友康、雨巻一天斎をどうしたか？」
女は顔をあげ、阿福を凝視したままだまっていた。
心中、彼女は愕然としていた。こんどの人柱が、ほんとうに地鎮のためのものか、まさか自分を殺すためだけに、罪もない九人の娘をいけにえにするとは、常識でかんがえられないので、九分まではそう信じていたが、しかしあとの一分は、或は、とも覚悟をしていた。だから「真田の女狐」とよばれてもいまさらおどろきはしないが、彼女を驚愕というよりえたいのしれない混乱におとしたのは、阿福の声が女とは思われない野ぶとくしゃがれていることで——そして彼女がさっき入ってきたとき、「男だ」と思ったじぶんのふしぎな感覚であった。
「あの駿府からきたふたりの忍者」
と、つぶやきながら、彼女はたもとから小さなものをつかみ出して、まえにならべた。いくつかの普賢菩薩の像である。
「死にました」
「なに、死んだ？」
そうこたえたとき、阿福のからだに異様な変化が起った。ふっと宙に眼をすえたきり、

うごかなくなったのである。ややあって、唇が何かを吸うようなかたちになり、両手で臍のあたりをなでさすり、大きな呼吸をつきはじめた。

男の眼だけに女体の雲のみえる忍法「幻菩薩」――女は、お眉であった。

阿福はふいに、およぐようにあるき出した。お眉がそのあとを追う。追いながら、忍法をかけたお眉がなんとも判断のつかない奇怪さにおそわれている。この阿福は、女なのか、男なのか？

「はい、どこへでもお供をいたします。何でもおきき下さいまし」

座敷を出て、廊下をあるきながら、お眉はくりかえした。要所要所にたっていた監視の女たちは、阿福がお眉の手をひいて、どこかへいそぐ姿を見、またその言葉をきいて、たがいに顔を見あわせたままで見おくった。

暗い無人の座敷におびきこんだとき、お眉は阿福にしがみついた。阿福は狂気のごとくお眉の唇を吸い、抱きしめ、身もだえした。

「女か……これが女か？」

声は獣のようなうめき声だ。

お眉の手が阿福のもすそをかきわけて、脂肪にぬめるうちももを這って――ふいにとまった。

「女か……これは女だ！」

それは、茫然たるお眉のつぶやきであった。

言葉としてきこえたのは、ただそれだけである。やがて漆黒の闇の底に、甘美のあえぎとも苦痛のうめきともつかぬ声がもつれあい、断続しはじめた。……しばらく、死んだように絶えたかと思うと、また波のようにたかまり、泣声となり、消えてゆく。――いったいふたりの女は何をしていたのか。

あとでわかったことだが、その座敷のたたみには、実におびただしい血しおのあとがのこっていたのである。それにもかかわらず、死んだものも、怪我したものも、ひとりとしていなかったことも、あとであきらかになったことであった。

「阿福さま、お使い番として、御広敷へ参ります」

そういって、御錠口衆に内側から杉戸をあけさせた女があった。黒紫に銀糸で花鳥を染め出したかいどりに、ながいおすべらかしの髪をたれ、葵の紋のついた文筥をささげた女は、あけられた杉戸から表へ出た。

「風伯」

と、外の伊賀者詰所にいた鼓隼人と七斗捨兵衛は狼狽して、廊下の壁にもたれかかっていた般若寺風伯をゆりおこした。夜もふけていたが、風伯はそんなところで居ねむりをしていたのである。

「あ。……」
と、顔をあげて、そこに幻のように立っている奥女中の姿をみると、あわててべたと平伏した。かいどりからみても、相当身分のたかい御女中であることはたしかであった。
「御役目、大儀」
と、奥女中は三人に会釈して、しずかに表の方へ去っていった。——風伯は、またぼんやりとして坐っている。
「おい、どうしたのだ、風伯老。まさかねむっておるとは知らなんだ」
「おかしい。……おれはねむっていたのか。なにか、気絶でもしていたような気がする」
「なんだと——気絶?——御錠口をあずかっておって、たよりないな。いまの御女中以外にだれも通行したものがなかったからまだよいが、まだ寝ぼけ顔をしているのではないか」
「いや、醒めた。いまの御女中の心ノ臓の音が一つであることもはっきりきいておったよ。はははは」
と、風伯はやっと笑ってたちあがり、詰所の方へあるき出そうとして、うっと下腹をおさえた。
「どうも、妙ないたみがするぞ。まるで……」
「まるで、なんだ」

「むりむたいにふとい棒でもつきこまれて……さればさ、強姦でもされたような」
と、顔を大袈裟にしかめたのに、ふたりの伊賀者はげらげら笑い出した。白髪だらけの老人が強姦されたようなという形容を吐いたのに、失笑を禁じ得なかったのである。風伯は笑いもせず、
「いや、妙な夢をみたわ。はじめ、蛇桶のように女のもつれあう地獄へおとされてな。もがきまわっているうちに、それが、どうじゃ、えたいのしれぬ血塊やら胎児やらに変って、あっと思ったときから、何もかもわからなくなってしまったわ」
「——風伯、このあいだの桔梗とやらいう女を非業に殺したからではないか?」
「あれか。——」
と、風伯はつぶやいて、ふいにぎょっとしたように顔をあげた。
「あれよりも、おれのさっきかけた月影——あの阿福さまが気にかかるて」
　その阿福が御錠口にあらわれたのは、それから半刻ばかりののちであった。どうしたことか白衣姿に変って、しかもそれが狂人としかみえない兇暴な眼いろで、ふとい声で、杉戸をあけるように命じたのに、御錠口衆はあっけにとられたが、しかし大奥で権勢第一の阿福にまぎれもないので、あわてて杉戸をあけた。
　三人の忍者が平伏したまえを、阿福は、これは会釈もせず、幽界をよろめくような足どりで通りすぎた。手に何やら紙を一枚にぎりしめている。

「風伯。……まだ術がかかっておるぞ。いまのうち呼びとめて、奥できいたことをきき出さねば、なんのために月影にしたかわからぬではないか」

と、捨兵衛が早口にささやいた。が、風伯はまだ茫として阿福の姿を見おくっている。

「何をしておる。呼びとめろ、さなくば忍法をとけ」

「はてな」

「あの姿を大御所にでもみられたら、先例があるだけに、おぬしの仕業とわかる。――お、そういっているうちにも、向うに伊賀衆らしい影がみえる。はやく、解け」

もはや、月影の阿福からきき出すいとまがなかった。風伯は口を大きくあけた。何かを吸いもどすように――のどから下腹へ、異様な瘤みたいなものがうごいていった。

むこうの阿福がたちどまった。その全身を鎧っていた猛々しい輪郭がすうとうすれて、みるみる女らしい線に変った。女らしいというより大病人のように憔悴したうしろ姿だ。

その手から、紙片がおちた。

「あ……何かをおとして、気がつかないでいってしまう!」

と、隼人が腰をあげ、はしり出そうとしたとき、般若寺風伯がふいにしぼり出すように、

「しまった」

と、うめいた。

「どうした、風伯」

「おれがいままで膝をつねっていたのは――阿福さまの心ノ臓の音がふたつきこえたからだ。こ、こ、こりゃいったい……」

阿福の姿は、もう御廊下のむこうにきえていた。しばらく風伯の顔をじっとみつめていた七斗捨兵衛と鼓隼人が、

「まさか……さっきの御使い番の女が――」

「ばかめ、腹の中の胎児がよその女にひっ越すなど――」

と、眼をむいてあえいで、ふいに猛然とはしり出した。半刻まえに逃げた女をいま追っても無益の沙汰であったが、それよりも、阿福のおとしていった紙片の赤いものが眼を射て、おどりこえようとしたふたりの足をはたとととどめた。

紙には血でかかれた文字が、「信濃忍法、やどかり」とあった。

忍法「筒涸らし」

一

竹千代の乳母阿福は、じぶんの身の上に何が起ったのか知らなかった。おぼえているのは、大奥へかえろうとして、御錠口の杉戸のまえにたたずんでいたとき、ふいに灯がきえたということばかりであった。気がつくと、依然として御錠口の外の御廊下を、夢遊病者のごとくふらふらとあるいていたのである。ただ、嘔気がし、腹が張り、全身にひどい疲労感があり、頭痛がし、そして肌は悪夢からさめたような汗にぬれていた。

阿福は、しかしこのからだの異常について、みずからたしかめる余裕をもたなかった。西の丸は、そのとき、まるで地鳴りのような狼狽と混乱におちていたからだ。

——逃げた！

——人柱の処女のひとりがみえぬぞ！

——逃げたのは、千姫さまおさし出しの女じゃ！

叫喚のなかに、愕然としてたちすくみ、じぶんの耳をうたがったのもしばし、すぐに阿福はわれにかえった。怒りに、彼女はかっとした。阿福は瞬時にして、本来の明敏な阿福

にもどっていた。

その千姫家さし出しの侍女の姿が、大奥はもとより西の丸のどこにも見あたらぬことがたしかめられ、その女が御錠口からお使い番に化けて悠々と脱出してしまったらしいことが判明したとき、阿福は怒りに冷たくなった息をしずめてきいた。

「御錠口をかためていた伊賀者はだれじゃ」

そういった刹那、阿福のあたまをふいにえたいのしれないおびえが這いすぎた。それまで、きえた女の捜索に狂奔していた伊賀者のひとりがひざまずいてこたえた。

「は、詰所におったのは服部の手のものでござらぬ。大御所さまお手飼いの鍔隠れ衆で——」

そのとたんに阿福は、いまじぶんを襲った恐怖のゆえんを知った。そうだ、先刻、じぶんが大奥に入ろうとしたとき、杉戸の番人をしていたのはあの不愉快な忍びの者であった。……同時に、あのとき、ふいに灯がきえ、闇のなかで何者かに抱きしめられ、声をあげようとした口をふさふさとした髯で覆われたことを思い出した。しかし、それっきり、あとの記憶はない。あれから何が起ったのか、たしかじぶんは大奥へかえろうとしていたはずだが、大奥に入ったおぼえはなく、そのあいだまるで中有の闇に沈んでいたとしか思われないのが、悪寒をもよおすように不安である。

「あの男どもが詰めておったと？」

「されば、にげた女は、あなたさまのお使い番と申したてて、表へまかり通ったそうでござります」

「それはきいた。しかし、わたしの使い――左様な使いをやったおぼえはない。うつけ者どもが――」

と、阿福は蒼白い唇をかみしめてつぶやいた。それから、伊賀者をじっと見つめて、

「そのうつけ者どもに、この失態の罪をあがなわせねば相ならぬ」

「は――?」

「腹をきるように伝えてくりゃれ」

伊賀者はためらった。

「あいや、仰せごもっともでござりますが、あの鍔隠れの衆は大御所さまおんみずから駿府より召しつれられたものにて――」

「大御所さまには、わたしよりそのように申しあげておくでありましょう。あの女をのがしたことで、大御所さまの御苦心がことごとく水の泡となった。阿福の申しつけた仕置をほめられることがあろうと、おとがめのあるはずはない。おのれから腹を切らねば、討ちはたして仔細はありませぬ。しかと、申しつけましたぞ」

と、阿福はいいすてると、伊賀者の返事も待たず、つかつかと背をみせてあゆみ出した。

阿福がふいにあの忍者たちの成敗をいいつけたのは、たしかにいまじぶんのいったような理由からに相違はなく、虜としていた女が千姫のもとへ逃げかえった以上、これからのやりようをきわめてむつかしいものにしてしまったという失態の責任はのがるべからざるものがあったが、それを大御所の意向にもはからず、独断で命じたのは、この失態とじぶんの記憶の空白に何か関係があって、それをあの忍者たちが知っているのではないか、という漠然たる、しかし恐ろしい想像がはたらいたからであった。さすがは聡明な阿福である。この想像は的中した。

じぶんへの不安の根源をつきとめるより、まずそれを知るものを抹殺したいというのは、彼女らしい自我であり、虚栄心だ。さすがにそこにかすかな良心の痛みがあって、阿福は一室ににげこんで、遠い悲鳴の声を焦れて待った。

深夜である。座敷に灯はなかったが、入るときにあけたままの唐紙のあいだから、御廊下の壁につらなる蠟燭が、真鍮の網ごしに、たたみに灯の帯をしている――よろめくように坐って、ふとそのたたみに眼をやって、彼女は眼を見ひらいた。

血のあとがあった。滴々と三つ、廊下から彼女の坐っている位置までに。――はじめて気がついたことである。しかし彼女は、じぶんの月のものはまだはじまる時期でないことを知っていた。

「……?」

しかし、そういえば下腹部に異様な感覚がある。あきらかにじぶんの落した血である。

しばらくじっとその血をながめていた阿福は、ふと立つと、唐紙をしめた。座敷は闇となった。そのなかで阿福は裲襠をひらき、裾をまくりあげ、片手をさしこんでみた。阿福ならずとも、余人のだれにもみせてはならぬ女の姿であった。

「そこまで、そこまで」

ふいに声がきこえた。

「忍者は闇でもまざまざとみえるのでな」

ちがう声が、こんどはうしろからいった。――阿福は、恥ずかしい姿勢のまま、硬直してしまった。声はたかい天井からふってくる。阿福がこの座敷に入って以来、だれもそのあとを追って入った影はない。はじめからそこにいたことはあきらかで、一瞬、闇の中にきっと姿をただすと、

「何奴じゃ」

と、阿福はさけんだ。すると、またはなれた天井の一隅から、

「いま、おまえさまが、腹切るように申された当人どもじゃが」

と、こたえたふくみ笑いがまぎれもなく般若寺風伯のものなのに、阿福はふたたび全身金しばりになってしまった。

「左様な途方もない下知をくだして、おまえさまがあるき出された一足めの方角、足どりの顔いろから、おそらくこの座敷あたりにお入りであろうと見込みをつけて、さきに待っ

ておりました」

「曲者、だれか――」

「大御所お召し出しのおれたちを曲者とはおどろいた。だれか――と呼んだところで、俗人づきあいに技のなまった服部一党の黒鍬者らの手にかかるおれたちかよ」

と、風伯はあざ笑った。

「それに、阿福さま、余人を呼ばれぬ方がお身のためであろう。他にきかれてはとりかえしのつかぬ内密の話がござる」

声が高い空中に浮いているところ――ようやく闇になれた視覚に朦朧とうつる影から、阿福は三人の忍者が、それぞれ天井の三つの隅から蝙蝠のように逆さにぶらさがっていることに気がついた。

「情なくもわれらに成敗を申しつけたおまえさまの心はにくいが、御錠口を見張っておって、まんまと眼をだまされたおれたちの罪はたしかにある。それにおれは、少々おまえさまに惚れてもおる。じゃによって――」

「要らざる口をきくより内密の話とやらをはやく申しゃい」

と、阿福はふるえる声でいった。怒りに息をはずんでいたが、先刻のじぶんの不安を思い出し、彼のいわくありげな口吻に、反撥しつつも耳をとられたのである。

「阿福さま、おまえさまの月水はいつごろでございます？」

「わたしの——」
阿福は、そのぶれいをきわめ、意表外に出た問いに絶句した。
「その時期がきて、おまえさまの月のものがなければ一大事」
「風伯、それはどういうわけじゃ」
「おまえさまの腹中から、もうひとつ心ノ臓の音がきこえます。——ということは、つまりおまえさまが身籠っていなさる胎児の心ノ臓の音。——」
「たわけ、わたしが身籠っておるなど、ぶ、ぶ、ぶれいな——」
「阿福さま、腹をなでてごらんなされ。——そのたたみの血は、経血ではない。忍法やどかりの荒修法をうけた名残りの血」
「忍法やどかり。——」
「されば、阿福さま、めざす女は忍者であったことをおわすれではござるまい。先刻おれは、まんまと眼をだまされたといったが、正しく申せばあざむかれたのはおれの耳で、御錠口を出たあの女の心ノ臓の音はただ一つであったゆえ、うかと見のがしたのじゃ。そのかわり、おまえさまから、いま心ノ臓の音が二つきこえる。つまり、あの女は、おまえさまの腹の宿に、胎児を捨て子してにげ去ったものでござるわ」
阿福は白痴みたいになっていた。あたまから四肢は空洞になっていた。血も肉も、すべ

てが腹部だけに恐ろしい凝塊となってあつまったようである。そこからピクリ、ピクリとつたわってくるものが、まさしく胎動でなくて何であろう。
般若寺風伯の声が苦笑した。
「未来の三代将軍のお乳の人、徳川家随一の忠義者と評判たかいおまえさまの腹にござるのは、豊臣秀頼のおとし胤じゃ」
ものもいわず、阿福は懐剣をぬいて腹につきたてようとした。そのとたん、ふわと空中から風がおもてをうつと、その手がつかまれた。
「日影月影の忍法もかけぬに、桔梗同様に腹切ることはござるまい」
「風伯、はなしゃ。このようなからだになって、生きておられようか。秀頼のおとし胤をこのまま刺し殺してくれる」
「待ちなされ。はやまってはならぬ。いや、人を呪わば穴二つ、とはこのことじゃて。人にかるがるしゅう腹を切らせいと申しつけたむくいで、おのれが腹を切らねばならぬ破目となる。——と笑いたいが、おれは笑わぬ。それ、さっきいったように、ちょいとおまえさまに惚れておる弱味でな。阿福さま、秀頼の胤をはらんだからとて、御自分も殺すことはござるまい。入る穴があれば、出る穴もある。胎児はながせばすむことじゃ」
なまぐさい息が、阿福の顔にかかった。
「闇から闇へ——それでおまえさまは何くわぬ顔をして、栄達の座にすわってゆける。——」

——ただの、胎児はすでに六か月、もはや爪も生え、髪も生えておる。おまえさまが手前勝手に妙な小細工をなされると、おまえさまのいのちもながすことになるは必定でござるぞ。また、まさかお城でめったな治療をして、もし人の眼、人の口にかかるようなことがあれば、何もかもぶちこわしじゃ。風伯がながして進ぜる。風伯を信心なされ」

手ははなされたが、阿福は凝然とうごかなかった。風伯はささやいた。

「何はともあれ、ここでは何もできぬ。おれたちが宿としておる服部半蔵どのの屋敷においでなされ。今夜とはいわぬが、善と子堕しはいそぐに越したことはないと申しておく」

二

秋の灯のなかに、三人の女が坐っていた。しずかにただよう香煙のむこうに、仏壇がうすびかっている。千姫屋敷の持仏堂である。

女は、お瑤とお眉とお由比である。お瑤の肉感的な華麗さ、お眉のういういしい可憐さ、お由比の霞のごとき幻想的な美しさ——だれがこの女たちを恐るべき破天荒の秘法を身につけた忍者とみるであろう。しかし、いま灯をうけた三人の半面には、憂いと焦燥の翳がゆれていた。

「わたしの考えがいたらなんだ」

と両手をねじりあわせて、お眉がつぶやいた。ほかのふたりは、だまっている。その言

葉を肯定するがごとくである。沈黙にたえきれないもののように、お眉はまたつぶやく。

「わたしは大奥からのがれられようとは思わなかった。ただ、じぶんは死んでも、腹のなかの胎児だけを残したいとかんがえたのです。それが、思いがけないことで、あの阿福のからだにやどかりの忍法をつかうことができて、あとはたとえ、西の丸を出るまでにじぶんが討たれようと、胎児だけは生きてゆけるとかんがえたうれしさから、つい、忍法やどかりといたずらな落し文をのこしていったは、おっしゃるようにわたしの軽はずみ。——わたしとしては、もしじぶんがぶじにのがれることができたなら、阿福がからだの異変に気がつくまでに、何とかしてまた胎児をとりもどすつもりだったけれど、あれを秀頼さまの落し胤と知っては、なるほどあの女は死ぬか、流すか、むしろ胎児にとってはむざんな運命がくるは必定。——ああ、わたしはどうすればよいのか」

お眉は、もだえた。あれから、七日たつ。そのあいだ彼女は、いくどふたたび大奥にもどって、阿福の腹中にのこした胎児をとりかえそうと悩んだことかしれない。しかし、お眉の顔はもはや大奥に知られている。ふたたび入ることは、虎口に入るにひとしかった。

ただ、いままでのところ、阿福の様子に変ったことはないらしい。あの翌日、お城直しの地祭はとどこおりなく行われた。九人の処女は予定のごとく人柱となって地中に埋められたが、その恐ろしい儀式に、蒼ざめた顔色ながら阿福は列して冷然と見まもっていたということでもあるし、それ以来、医者にかかったという話もなければ、病臥したという噂

もない。それは千姫がそれとなく、何もしらぬ大奥の女を介してさぐり出したことである。ふしぎなことに――いや、それが当然のことかもしれないが、その地祭に千姫が出なかったことについても、巫女としてさし出した侍女のひとりが姿をくらましたことについても、城から千姫家へ、なんの詰問もなかった。とにかく、いまのところは胎児が安泰であることはたしからしい。しかし――

「千姫さまは、しばらく待てと仰せなさるけれど」

「胎児はいまや六月、七月めに入れば、もはや生きながらとりもどすことはむつかしい」

と、お瑤とお由比も懊悩の吐息をもらした。

そのとき、持仏堂の扉がひらいて、千姫が入ってきた。ただならぬ顔色である。

「ぬかったわ」

と、さけんで、唇をふるわせた。

三人の女はふりむいた。

「姫さま、いかがなされました」

「阿福めが城から出たそうな」

「えっ、阿福が、どこへ？」

「それが、わからぬ」

と、千姫はくやしげに、

「きょうのひるすぎ、御中臈滝山の名を以て、半蔵門を出た乗物があったそうなが、それがいま探ってまいったものの話では、どうやら阿福らしいのじゃ。どこへゆこうと、だれにはばかるもののないはずの阿福が、他人の名をかりて外出したこととこそいぶかしい。しかも、なおいぶかしいことは――半蔵門を出てから、江戸のどの方角へいったのやら、そのゆくえがまったく知れないのじゃ」

三人の女は、茫然として千姫をあおいだきりである。

阿福が、いまにいたるも腹の異常に気がつかないということはあり得ない。その阿福が名をかえてひそかに城を出たという以上、かならずそれに関係したことに相違ないが、いったい彼女はどこへいったのか。

見合わせた四人の女の眼は、焦燥の焦点を灼いた。そのとき、持仏堂の扉がそとに、たん、と何かがつき刺さったような音がした。

「あ。……」

さけんで、すぐに千姫が出ようとする。それを制して、まずはしりより、扉をあけたのはお眉であった。

外は夕ぐれだ。蒼茫たる空に風がある。ざわめく雑木林の上を、無数の銀杏の葉が、小さな銀扇みたいな妖光をきらめかしてとんでいた。――お眉はすぐに扉をしめた。

「お眉、何事じゃ」

「これが、扉の外に」

と、お眉は手につかんだものをさし出した。紙につつんだマキビシだ。八方に釘を出した忍者特有の鉄金具で、その釘のひとつが扉につき刺さったのである。が、三人の女忍者がはっとした様子でのぞきこんだのはそのマキビシでなく、それをつつんだ紙片であった。それはしわくちゃになり、釘の数だけ穴があいていたが、墨くろぐろと二行の文字がみえた。

「泊横栬鐄⿰亻赤⿰身紫熿僙⿰亻黒潢⿰身色⿰身黄錆
⿰土色潢⿰身色⿰火青柏⿰身黒⿰土黒⿰身白⿰亻黒⿰火黒鉑⿰木赤⿰亻色」

千姫にはなんのことかわからなかった。読むことさえできなかった。

お由比が読んだ。

「こよひそおんたねみつとなる
はつとりやしきてみさふらへ」

「それは、なんの呪文じゃ」

「今宵ぞおん胤水となる。服部屋敷で見候え――とかいてあるのでございます」

三人の女の顔色に粛然たるものがある。千姫もはじめていまそのマキビシが胸に刺さったようなおももちであった。

「では、阿福は」

「左様でござります。これで阿福のゆくえがしれました。半蔵門を出てから、江戸のどこへいったかわからなかったわけでございます。阿福は半蔵門のすぐそばにいたのですから」

と、お瑤がいった。千姫はもういちどその紙片の怪しい文字に見いって、

「これを投げたものはだれじゃ」

「忍者でございます。この木火土金水の五行に人身をつけ、青、黄、赤、白、黒、紫に色をくわえて、いろは四十八文字を組みかえたものこそは、忍者仲間にのみ通じる隠し文字。――お眉が御錠口をのがれ出たとき、それにおった三人の男がただの伊賀者とはみえなんだと申しておりましたが、おそらくあれが駿府からきた忍者でございましょう。この投げ文も彼らからのものに相違ございませぬ」

「阿福が服部屋敷に入ったというのじゃな。そして腹の胎児を今宵ながすというのじゃな。そ、それにしても、彼らはなぜそれをこちらに」

「むろん、この忍者文字をつかった以上、投げ文の相手はわたしたちでございます。わたしたちを忍者と知って、それにたたかいを挑んできたものでございましょう。来ぬか、見に来ぬか、今宵、秀頼さまのおん胤を水にするが、それをだまって見のがす気か、と」

ふいにお眉がたちあがった。

「わたしがまいります」
蒼白な顔に、眼が黒い炎のようにもえていた。彼女がおのれの蒔いた種をおのれでかりいれる決意をしたことはあきらかであった。しかし、それは、むき出しに挑戦してきた敵の忍者の罠へ、われと身をなげこむことではなかったか。そうでなくとも、めざすは伊賀者の頭領服部半蔵の屋敷である。
千姫がのどをひきつらせてさけんだ。
「お眉は敵に顔を知られておる」
「それでも、みすみす秀頼さまのおん胤を水にするわけにはまいりませぬ」
「胎児は、まだお由比、お瑤の腹の中にもおる」
「いいえ、伊賀の忍者の果し状をにげたとあっては、真田の忍者の名折れでございます」
だまってお眉を見あげていたお瑤がいった。
「なりませぬ」
「え、なぜ？　わたしのいのちはどうなってもいいのです」
「おまえさまのいのちのことではない。かんじんの胎児さまのおんいのち」
「……………」
「おまえさまは、もういちど阿福と抱きあわねばならぬ。阿福はお眉を知っておる。それで、ぶじに胎児をとりもどすことができるとおかんがえか」

「……………」
「わたくしがゆきましょう」
お眉はお瑤を見おろして、眼を大きくひろげた。
「お瑤の腹はふさがっておる。どうしてももうひとりの胎児をいれることができるのじゃ。腹のあいているのはわたしばかり」
お瑤はにっとしてつぶやいた。
「だから、いま、わたしの胎児を、おまえさまにわたしましょう」
万一にそなえてお由比が持仏堂の外に見張りにたち、千姫がお瑤とお眉のかいぞえをした。もしこれが千姫の悲願とする豊家伝統の「儀式」でなかったら、彼女の瞳はくらみ、喪神したであろう。その夕、秀頼の霊をまつる持仏堂の灯明の下でくりひろげられた「やどかり」の秘技ほど、この世のものならぬ凄惨妖艶の光景はなかった。
ふたりの女忍者は、身にまとうものをすべてかなぐりすてた。四本の腕と四本の足は八匹の白い蛇のようにからみあい、そしてお瑤のふくらんだ腹は、お眉のくびれた腰にぴったりとおしつけられた。それは抱きあったふたりの女というより、怪奇な万華鏡の花のような姿であった。やがて、お瑤の腰が、律動を開始した。それは波濤のように去り、しだいに狂瀾の相を呈した。よほどのことがあっても悲鳴をあげぬ女忍者の口から、おさえきれぬうめきがもれ、密着した四つの乳房はしだいにたかく波うち、そのあいだから白い汗

がしたたりおち、そして戦慄し、痙攣する四つの下肢のすきまから、血と羊水がながれおちはじめた。

どれほどのときがたったか——魔酔のごとき時がすぎて——見ているか、いいや、それは、ただ夢をみていると同様であった。なんたる幻怪、上の女の腹部の白い隆起は、徐々にさがってきえてゆき、下の女の腹部が、しだいにむっちりとふくらんでゆく。……

三

服部半蔵の亡父、服部石見守が三千石の禄とともに江戸城のすぐそばに家屋敷を賜ったのは、家康の入府とほとんど時を同じゅうしていた。それ以来、その附近を半蔵町といい、それに面する城の門をすら半蔵門と呼ぶようになったのも、いかにも草創期のこの時代らしい。

半蔵は、いまもいわゆる黒鍬者の頭領であった。黒鍬者とは表面は作事奉行の支配に属し、城の構築、道路の開鑿、戦時屍体の収容などにあたるものだが、一方では、敵陣の焼打ち、破壊、斥候、流言、暗殺などの特殊任務をあたえられ、これこそ忍者の独壇場であって、服部家はその「影の黒鍬者」の宗家ともいうべき家であった。後年この黒鍬者からさらにえらび出されたお庭番が、いわゆる隠密の役をつとめることになる。——この一劃

は、その服部家を中心に、ことごとく伊賀出身の忍者の住む黒鍬者の組屋敷であった。

しんかんとした晩秋のまひる。このうすきみわるい忍者町に、一挺の乗物が入っていった。青漆塗のあきらかに奥向きの女乗物がこの町に入ってくるのもめずらしいが、とがめるものはだれもない。それも道理、西の丸を出たときから、これをかつぎ、これに従っている数人の男は、いずれも黒鍬者ばかりであった。

服部家についた乗物が玄関にとまると、なかからうなだれて、ひとりの女が式台に立った。お高祖頭巾をかぶっているが、わずかにのぞいた眼はたしかに阿福のものである。

案内もこわないのに、主の服部半蔵が手をつかえた。

「鍔隠れの衆は」

と、ひくい声で阿福はきいた。

「奥に」

と、半蔵がこたえたのは、輩下の黒鍬者に乗物をはこび出させたくらいだから、すでに事態を承知してのことだ。それにしても、大奥第一の権勢者を呼んだ当人たちが出迎えもしないのは、いかにも礼をしらぬ彼ららしい。

半蔵にみちびかれて奥へあゆみながら、阿福はなお不安らしく、

「服部どの、このことは大御所さまには何分内密に」

「もとよりでござる。はからざる御災難、心からおきのどくに存じております」

「そのお言葉を阿福は信じてようありましょうね」

「忍法者の口は、おのれが思い決したうえは楔でござる」

と、服部半蔵は厳粛にこたえた。

——が、この事件ののちしばらく、この半蔵正広が乱心というかどで、家名断絶の憂目をみたのは偶然であろうか。これで彼は、ふたりの兄についで浪々の身となり、服部は漂泊の一族となったが、しかし彼は生涯、阿福の秘密について口外しなかった。

じぶんのきめた大奥の法度のひとつ、門限までには帰城しなくては、と御中﨟滝山の名で出てきただけに、心にあせりながら、阿福は服部屋敷の奥に、ひとり捨てておかれた。

彼女を呼んだ鍔隠れの忍者たちは、どこにいるのか、姿をみせない。そのぶれいさを怒るよりも、彼らのあらわれるのが一刻でもおそく、と矛盾した祈りもあったのは、彼らがじぶんのからだに行おうとすることがことだけに、さすがの阿福にも当然な心理であった。七日まえ、城で般若寺風伯におぼえのない妊娠をつげられても、あとになればまさかと思い、きょうまでとつおいつかんがえて、ついに予定の月経のはじまらないのに望みを断って、風伯のすすめにしたがう気になったのだが、心の重いのは是非もない。

思えば悪運の星の下に生まれてきたわたしであった、と阿福は彼女らしくもない呪いの吐息をつく。彼女の父は、明智第一の重臣で光秀の屍とともに粟田口で磔にかけられた斎

藤内蔵助であった。彼女の叔母は、長曾我部元親の妻で、大坂の役に豊臣方に加わり、ついこのあいだ三条磧で斬られた幽夢入道盛親の母であった。本来ならば逆臣一族の女として、落魄の風にふきちらされるはずの阿福だ。それをいま徳川家大奥の総監督ともいうべき地位におしあがったのは、彼女自身の必死の努力以外の何もののせいでもない。それだけに、ひとたびつかんだこの権力を失うまいとする彼女の慾望は、妄執といえるまでに強烈であった。

逆境の前半生、また近年の徳川家継嗣をめぐる政治的暗闘、それを天賦の辣腕と気丈さでみごとにきりぬけてきた阿福も、こんど知らぬまにおのれの腹中に入った胎児だけには完全にうちのめされた。——ただ、じぶんの権威をまもるためには、どんな目にあおうともこれを闇中に始末せねば、という理性だけは冷たくもえている。

どんな目にあおうと？——「ちょいとおまえさまに惚れておる弱味でな」「おまえさまのからだを抱かして下されい」——いとわしい風伯の声はまだ耳たぶにのこっているのに、敢て彼女はここにやってきた。恐ろしい堕胎の報酬として、般若寺風伯がいかなることを望もうともかくごのまえだ。

曾て栄達のために貧しい夫をすてて以来、女盛りの肉体を冷たい大理石とかえて余念なかった阿福は、いまおなじく栄達のために、ぶきみな老忍者にその冷たい肉体をあたえることも辞さぬつもりでいる。——ひとり、寂然と座敷に坐っている阿福の蠟面のような顔

を、しだいに夕闇がつつんできた。

もとより服部半蔵以外、半蔵町の伊賀者は今宵服部屋敷で何が行われるかは知らされていない。ただ、阿福を西の丸からはこび出すことを命じられ、それ以後、あやしい者が半蔵町に入ってくるのをみたならば、ただちに報告するように、ときと場合によっては即座に討ちはたしてさしつかえないと命令をうけたのみだ。

一見するならば、町のどこに、何者が立っているともみえない。警戒すらも隠密裡にはこぶため、人数は十人内外であったが、樹陰、石陰、土塀のかげと、町の要所要所に立ったねずみ色の頭巾は、夕方から曇りはじめた大気に溶けて、常人の眼にこそうつらなかったが、しかしこれは蟻一匹もとおさぬ先代服部石見守独創の「内縛陣」の配置であった。

風が出てきた。半蔵町の空にも、飄々と枯葉がとんでいる。

一本の榎の大木の樹上にいたそのひとりが、空の枯葉をふとあおいで――その雲のなかに、ふと妙なものをみた。女だ。雲の濁流をはだかの女がおよいでいる。――はっとして吸いつけられた眼が、ふいに霧のようなものに覆われた。霧の香りがあった。体温があった。次の瞬間、その伊賀者は枝にまたがったじぶんとひたと胸をあわせて、やはり枝にまたがっているひとりのはだかの女を感じた。

胸に乳房が息づいた。口はやわらかな唇でふたをされた。装束も頭巾の布も透明になっ

たようななまなましい感覚であった。さすがの忍者が、一瞬、その快美に恍惚として、声帯も全身もしびれるのをおぼえたが、口中をうごめく貝の肉のような舌を吸いながら、音もなく一刀をぬきはなったのは、やはり今宵とくに半蔵から警戒を命じられたものほどのことはある。

「変化め！」

うめくと同時に、その刀身をうしろからまわして、抱きついた女の背につきたてた。

悲鳴は彼の口からあがった。一刀は女の胸を霧のようにつきぬけて、彼自身の胸を刺したのである。そのまま忍者の顛落したあとの樹上には、依然としてただからからと枯葉が吹きつけているばかり。――裸身の女のかげもなかった。

数分後、しかし、草むらのなかから、ふたたびすうとねずみ色の頭巾が立ちあがった。何事もなかったかのように、かるがるとまた樹上にのぼる。まえとおなじように枝にまたがり、暮れ沈んでゆく半蔵町を見わたして、さてふところからとり出したのは、いくつかの小さな普賢菩薩の木像であった。彼は「内縛陣」の忍者の配置とみくらべつつ、それをふとい枝のうえにならべはじめたのである。――彼は、いや、装束はさっき顛落した伊賀者のものであったが、頭巾からのぞいているのは、黒曜石に似たお眉の眼であった。

四

般若寺風伯が阿福のまえに姿をあらわしたのは、夜に入ってからであった。
「いままで何をしていやった。もはやお城の門限もちかいというに」
と、阿福はいらいらとした眼でにらんでいった。
「お待ちかねか」
と、風伯は、髯のなかからきゅっと歯のない口で笑った。
「失礼つかまつった。少々用がござってな」
「わたしを呼んでおきながら、なんの用」
「それは、あとで申しあげる。ただ、胎児をもらうかわりに、お城に土産をもってかえっていただけるとだけ申しあげておこう」
「わたしに、なんの土産じゃ」
「いや、おまえさまへではない。大御所さまへじゃが」
と、風伯は謎のような言葉を吐くと、それっきりだまって、阿福の姿をじっとながめいった。笑っている眼が、しだいに、老人らしくない獣的なひかりをおびてきた。屋根を、雨の音がうちはじめた。
大御所でさえおそれぬ阿福が、この人間ではないもののような眼には、かくごはしていたものの、恐怖にじんとあたまがしびれる思いがした。

「はやく、はやく」
と、息をきざんでいう。
「はよう、胎児を堕ろしてたもれ、ど、どうすればいいのじゃ」
「おれといっしょにねて下され」
と、風伯は平然としていった。眼は依然として、彼女のからだをなめまわしている。阿福はすべての衣服をはぎとられて、はだかの肌を蛇が這いまわっているような気がした。
「……そうすれば、胎児がながれるのか」
「べつでござる。胎児をながしたあとで、またおれのたねを仕込んで、もし大奥に二代目風伯でも生まれたら、つぎの将軍さまお乳の人も御当惑であろう」
風伯は、にやにやした。
「だいいち、胎児をながしたあとでは、すぐさまつかいものにならぬわ」
阿福は歯をくいしばった。しかし、いまはどのようなはずかしめをうけようと、腹の胎児だけは消してもらわなくてはならないのだ。この矜持にみちた女が、顔色をあかくしたりあおくしたりしてふるえながらたえているのを、般若寺風伯はたのしんでいるかにみえる。彼は白髯のあごをしゃくった。
「となり座敷にな、もう閨をつくってあるそうな。いって、ねて下され。まるはだかの方

が、うれしゅうござるな。そのあとで、まちがいなく胎児は堕して進ぜる。用意ができたら、たたみを二つたたいて下され」

閨の枕頭にともされていた灯がきえた。たたみをうつ音がきこえた。

般若寺風伯はうす笑いをうかべて、そろりと立つと、その座敷に入った。

灯はけされたが、忍者の眼には灯のともっていると同様だ。閨の足もとの方に、何やらうずたかくかさねられているのは、掛夜具と、ぬぎすてられたかいどりなどであろう。……女は、もはや観念したのか、掛夜具さえもとりはらって、ほの白い裸形をのべている。ふとり肉の阿福ではあるが、もりあがった乳房や、ゆたかな腰は、三十七歳の女とは思われぬほどなまめかしい色香の露にぬれていた。さすがにきものの一枚をひきよせて、袖で顔だけを覆っていた。

風伯は見おろして、もういちどにやりとした。彼もすでに衣服をぬぎ去っている。舌なめずりすると、彼は女のからだの上にじぶんのやせたからだを伏しかさねた。

「真田の女忍者」

と、ひくくよんだ。

「待っていたぞよ」

下の女の腹がはねあがりかけたのを、じぶんの腰でぴたりとおさえつけた。巌でおさえ

られたように、女の腰はうごかなくなり、ただ上半身をうねらせた。

「千姫屋敷の投げ文で、何匹這い出すか、夕から見張っていたのだ。さすがに忍者だ。人数は多くも五人の女忍者とわかっておるのに、うぬらは無用の女も混じえて十挺の駕籠を門から放った。さすがのおれたちも、まんまとまかれたが、あとくらましてめざすこの半蔵町にのりこんだうぬはあっぱれじゃ。ここの黒鍬者たちのたよりにならぬことは知れておったが、それにしても服部の内縛陣をようぬけた。じゃが、この般若寺風伯の眼はあざむけぬ。いいや、耳はあざむけぬ。阿福さまならば、胎児とあわせて二つの心ノ臓の音がきこえるはず、それがうぬの胸から、心ノ臓の音は一つしかきこえてこぬ！　してみれば、うぬは――」

と、片手で女の顔を覆っていた袖をなぎはらった。

「や、うぬは先日御錠口をぬけた女ではないな。――と、すると、これ、秀頼の子はいかがした？　やい、うごくな、これをみろ」

と、もう一方の腕をふりあげた。こぶしのさきに、きらりと何やらひかった。マキビシの釘の尖端であった。

「この釘のひとつには、牛でも殺す毒がぬってある。うぬもあの投げ文でのりこんできたうえは、よほどの忍法にうぬぼれあってのことだろうが、わしはかからぬぞ。黒鍬の未熟者らとはちがう。般若寺風伯、だてに年はとっておらぬのだ」

け、け、け、と兇猛な声をたてて笑った。
「案ずるに、うぬの腹が空いているところをみると、阿福さまの胎児をとりもどしにでもきたか。よし、その代りに風伯のたねを蒔いてくれる。三途の川で産湯をつかえ」
と、わめくと、手のマキビシを口にくわえた。髭のあいだから、一本の釘がとび出して、ひかっている。そのまま、両腕を女のわきの下から鉄鎖のようにからませて、老人とは思われぬあらあらしい動作で、女を犯しはじめた。
女の顔のうえには、毒の釘があった。風伯の首がうごくたびに、それはいまにも眼につき刺さりそうに、或いは唇はふれそうに上下した。その恐怖にもかかわらず、この老忍者の獣的な愛撫が、意志とはべつに女のからだの内部に強烈な潮をまきあげてきたものか、彼女は男のうごきに応じはじめた。星眼には霞がかかって、毒釘すらもみえなくなったか、その下に唇の花がひらいて、熱い吐息をはいていた。
突然、さけび声があがった。風伯の口からだ。同時に顔をふってからくも避けた女のくびすれすれに、死のマキビシは褥におちた。それにも気がつかぬ風で、風伯のうめきは尾をひく。苦悶の声ではなく、快美のきわみのさけびであった。――たとえ片腕おとされても、般若寺風伯は猛然と反撃動作にうつったであろう。しかし、このとき、彼はエクスタシーのうちに全生命が流出するのをおぼえた。夢幻の恍惚のうちに全気力が蒸発するのを感じた。

ぼろぬのをなげたような般若寺風伯のからだの下から、女はするりとぬけ出した。風伯の肌は、みるみる枯葉の色にかわってゆく。やせた四肢がいよいよ糸のようにほそくなってゆく。その股間から、かぎりもなく褥をひたしてゆく精液が、しだいに血をまじえ、ついに血の噴出そのものとなった。
おのれもまた下半身、風伯の血に網目のごとくいろどられながら、全裸の足を仁王立ちにして、じっと老忍者の断末魔を見おろしている女の姿は、美しいとも凄じいとも名状しがたいものがあった。
「信濃忍法――筒涸らし」
と、お瑤はうす笑いしてつぶやいた。
それから、風伯の屍骸はふりむきもせず、つかつかとあるいて、閨のすそにわだかまっていた掛夜具をとりのけた。下から、さっき一瞬に当身でたおされた阿福の失神した姿があらわれた。
――しばらくののち、入ってきたときと同様に、豪華なうちかけを羽織り、お高祖頭巾で眼ばかりのぞかせた阿福の姿が、服部家の玄関にあゆみ出てきた。うなだれて、つかれはてた足どりだ。
はげしくなった雨のなかに、服部半蔵はこぶしをにぎりしめて立っていた。いましがた

まで、鼓隼人も七斗捨兵衛もそこにいたのだが、見張りの黒鍬者に何か異変が生じたらしいことが急報されて、愕然としてかけ去ったところなのである。

「あ……阿福さま」

と、半蔵が気がついて、あわててかけよろうとするまえに、阿福はもう駕籠の扉に半身をかがめていた。

「一件は、おすみでござりますか」

阿福はうなずいた。吹きこんでくる雨をさけて、頭巾の上から眉びさししている。半蔵は外をふりかえり、うろうろして、

「あいや、しばらくお待ち下されい。どうやら曲者がこの町にしのびいった気配があります。御帰城の途中、万一のことでも出来いたせば一大事でござるゆえ」

「……門限に」

と彼女はかすれた声で、それだけいった。

大奥のきびしい門限のことをいっているのだ。秘密に外出してきた用件だけに、その不在があきらかになると、あとで物好きな女たちの詮索がはじまることをおそれているのであろう、と半蔵はつぎの言葉をうしなった。

阿福はすでに駕籠に身をいれている。伊賀者がこれをかつぎ、従い、雨のなかをとぶように半蔵門の方へかけ去った。

五

「風伯、内縛陣が破られておるぞ」

鼓隼人と七斗捨兵衛が血相かえてはせもどってきて、服部半蔵をとびあがらせたのはそのあとであった。服部家秘伝により配置された十人余の黒鍬者たちが、すべて、或いはよだれをたらして放心状態におちいっていたり、或いはあらぬことを口ばしり、淫らな身ぶりにふけっていたりしていることがようやく発見されたのである。

「風伯」

「出あえ、風伯老」

呼んでも応答がないのに、土足でふみこんで、ふたりの忍者はたちすくんだ。信頼していた般若寺風伯は、蝉のぬけがらのようになって絶命し、阿福のみが、ふたりの絶叫に喪神からさめた。腹中の胎児が消えていることがわかったのはそのあとである。

すぐに、先刻出た乗物に追手がかけられた。

半蔵門までは一足とびであったが、そこまでゆく必要はなかった。門前にひとつ置かれた乗物は、雨の中にからっぽであった。これをはこんでいった数人の黒鍬者がひとりのこらず忽然ときえていることこそ夢みる思いであったが、すぐに鼓隼人が、濠の水中に彼らを見つけ出した。彼らはことごとく無傷のまま水死していた。

――深更になって、その半蔵門を、ほとほととたたく者があった。かま鬚をはやした門番が出てみると、土砂ぶりの雨のなかに、一挺の駕籠がおかれ、そばに悄然と立つ女の影がみえた。それについてきた数人の男のうちのひとりが、声をひそめて開門を請うた。

「ばかをいわっしゃい。門限はとっくのむかしにすぎておる」

と、門番を頑然とはねつけた。――そうでなくとも、そのすこしまえに、この門界隈で奇怪な事件があったので、彼は平生にまさる警戒心を発揮していたのである。

「おまえさまはだれじゃ」

「ゆえあって、われらの名はあかせぬが――」

と、男たちは困惑しきった声で、

「あれにござるのは、きょうのひる、ここを出られた、竹千代君お乳の人、阿福さまじゃ」

「ばかをいわっしゃい！」

と、門番はかまひげをくいそらし、いっそう声はりあげてはねつけた。

「きょう、ここを出られた奥女中方といえば、御中臈の滝山さまおひとりじゃ。やい、うぬらは狐か、狸か。恐れ多くも江戸のお城を化かしにかかるとは途方もない奴ら、ゆけ、消え失せろ、早々に退散せぬと人をよぶぞ！」

どんと音たかく門はしまった。凍るような秋の夜に、阿福は幽霊みたいに雨しぶきにうたれつづけていた。

――これが後年、阿福が天下第一の女傑春日局とたたえられてから、門限におくれた局をついに入れなかった門番をあえてとがめず、のちにあつく賞揚したという伝説に変った。国定教科書にも採用されたのはこの夜の挿話である。

忍法「百夜ぐるま」

一

家康は、不起の病にかかるその日まで鷹野に出たくらい、放鷹が好きであった。この元和元年秋に出府したのも、その内密の用はさておき、おもてむきには主として武蔵野の鷹狩という名目だったのである。しかし、出府以来、やがて一ト月になろうとするのに、彼はほとんど遊楽に身をまかせようとはしなかった。秋晴れの好天はつづき、かねて触れのとおり、北は戸田、川越、忍から、東は船橋、千葉、佐倉あたりまで、狩場の用意はととのったという報告はあるのに、大御所が西城にたれこめたままなので、諸人はみなうたがった。年も年であり、病気ではないかという噂さえ城の外にはひろがった。西城にあって近侍するものたちですら、大御所の顔色が冴えないのをみて、そのうたがいをいだいたほどである。

それらの噂を知りつつも、家康は身をうごかす気にはなれなかった。実際にも、病気になりそうであった。例の件が未解決なのだ。千姫は海底の人魚のごとくひややかに身をひそめている。もはや、なみたいていの口実では、竹橋御門の屋敷から姿をあらわそうとし

ない。千姫のことはさておき、彼女の庇護のもとに、秀頼の子が幾人か、日とともに、夜とともに、刻々とかたちをととのえ、この世の門へ胎動しつつある。それはさすがの家康も、夜半いくたびか恐怖のさけびとともにがばと起きなおらずにはいられない、夢魔のような現実であった。

家康の懊悩の原因を知っていて、秀忠もなおふしぎに思った。父はなぜ拱手して日を徒費しているのか。過去に、父の忍耐の効力をいやというほど思い知らされてきた秀忠であるが、こんどのことに関するかぎり、忍耐の意味がわからない。待てば事態はいよいよ悪化するばかりだ。むろん父のためらいが、千姫への愛情によるものであることはわかっている。しかし、隠忍も愛も、ひとたび徳川の安危にかかわると判断したときは、雪片を火焰に吹きいれるように軽がると捨て去る恐るべき意力を発揮してきた父であった。すでにいちどは千姫を捨て殺しにするつもりで大坂の城を攻めおとしている。彼女が助かったのは、千に一つの僥倖だ。いまにいたって、何を逡巡するのであろう。

こういうと秀忠が、じぶんの娘たる千姫の生命を毛ほどもかえりみないようだが、むろんそうではない。父として、この不倖せな娘をふびんと思う心がふかいだけに、いっそう秀忠は大御所にははばかったのだ。徳川家のために、このさい断乎としてお千を誅戮せねばならぬと存ずる、それは熱鉄をのむ思いで、秀忠自身の口から大御所へ進言しなくてはならぬ言葉であった。西の丸へ出かけて、家康にこの無惨の決断をうながせるものは、千姫

の父たる秀忠以外にはなかった。

「ならぬ、ならぬ」

と、家康は、いまはじめてその恐ろしい言葉をきいたもののように身ぶるいしてくびをふった。

「あれは、気が狂っておるのじゃ。お千をひとり、この城へひきこみさえすれば、きっと正気にたちもどらせてみせる」

「父上、お千はもはや心の底まで徳川家を敵と思いきっております。つくづくと、大坂の城から助け出すのではござらなんだ」

「それよ、わしは火の中からあれを助け出した。いま殺しては、なんのために助け出したのかわからぬ。お千を殺してみよ。その血しぶきのなかに秀頼や淀の方の笑い声がきこえるであろう。それはわしがついに豊臣や真田左衛門佐にまけたことになる。――」

庭にくわっと白い日のひかりがみちているのに、老家康は、苦悩のために墨みたいな顔色になっていた。ただ眼ばかり憎悪にひかってはたと秀忠を見すえたが、やがてふいにその眼光が弱いさざなみをちらして、

「秀忠、わしも年がよったものよの」

と、うつむいて、つぶやいた。

「何とのう、大坂の城をほろぼすのに、わしは気力の滴をしぼりつくしてしまったような

――いま、いまにいたって、お千を相手に血みどろの喧嘩をするには、心が萎えて喃。いや、そなたの申したいことはわかっておる。さればとて、だまっておれば秀頼の子が生まれるというのであろう。それを承知で、わしがくよくよと女のように愚痴をこぼしておるばかりなのは、わしの心気がおとろえはてておるせいかもしれぬ」

家康は苦笑した。秀忠はこのときはじめて父の老いを感じた。七十五の老人に対してふしぎなことだが、しかしそれまでこの偉大な父は、圧倒的な生命力で壮年の秀忠を覆いつくしていたのである。

――老いというより、死の影ともいうべき不吉なものをふっと感じて、とっさに言葉をうしない、秀忠がだまって家康をながめたとき、縁側の方から活発な跫音がはしってきた。

「父上、おいでなされませ」

と、さすがにぴたりと坐ってお辞儀したのは、この西の丸に住んでいる嫡男の竹千代である。

「竹千代か。例によって礼儀しらずめ。まずおじいさまに御挨拶せぬか」

と、秀忠はしかりつけた。竹千代のうしろから狼狽したいくつかの跫音が追ってきた。

「おじいさまには、毎日御挨拶申しあげております」

と、竹千代はいった。

「けれど、毎日おねがいしても、竹千代のいうことをちっともきいて下さらないので、お

じいさまがいやになりました」
「これ」
「鷹を狩りにきたと仰せられたくせに、いちども竹千代をつれて出て下さりませぬ」
「秀忠、叱るな」
と、家康は手をあげて、秀忠を制した。さすがに頬の肉がゆるんでいる。神経質な弟の国千代にくらべて、聡明とはいえないが元気者のこの十二歳の竹千代の方を、家康は好んでいるのであった。
それから、急につよいひかりを放ってきた眼を秀忠にむけて、
「よい、明日、鷹狩にゆこう！」
と、いった。
「えっ、明日？」
「さればよ、竹千代の不服はもっともじゃ。わしは思い決したぞ。——秀忠、即刻、お千の屋敷に討手をやれ。得べくんば、お千ひとり助けたい。さりながら、お千を助けるために例の女どもをとりにがすおそれがあれば、かまわぬ、玉石倶に焚け」
それをすすめに西城にきたくせに、秀忠は身の毛をよだてていた。——家康も沈痛きわまる顔色に変っていたが、しかし秀忠がいくどか過去にみたあの恐るべき不退転の意志は、たしかに全身によみがえってみえた。つきあげられたように、秀忠は起とうとした。

そのとき、縁側で「あ」とさけぶ声がした。
「そなたは！」
声は、竹千代を追ってきた阿福のものらしかったが、秀忠はふりかえって、三面土塀にかこまれた庭の白い砂の上にひれ伏しているひとりの男をみた。ほんのいままで、そこに何者の姿もみえなかったのに、忽然と黒い影が坐っているのである。——鳥があるいてもその足跡が印されるはずの周囲の白砂は、一面掃ききよめられたままなのに。

二

「鼓よな」
と、家康はいった。彼のみおどろいた表情ではない。しかし、ふきげんに、
「何しにうせた」
伊賀の忍者鼓隼人は顔をあげた。無造作にたばねた髪が、ばさとひたいにみだれているが、色は透きとおるように蒼白く、唇は朱をひいたようにあかく、美男というより凄味のある男前だ。それが大御所のきげんのわるい顔をみあげて、不敵ににやりと笑った。
「ただいまの御討手の儀、しばらくお待ち下さりましょう」
「待って、いかがいたす」
「まだ、拙者どもがのこっております」

「うぬらには、もうたのまぬ。いまだ真田の女めらはぬくぬくと存生いたしておるではないか。わしはうぬらを少々買いかぶったぞ」
「これはしたり、拙者どもを手綱でひきすえておかれたのは大御所さまではありませぬか」
「なに」
鼓隼人の唇からのぞいていたうすら笑いの歯がきえた。
「大御所さまのおさげすみも御尤もでござりまするが、われら鍔隠れのものども、真田の女五人のうち、ふたりはすでに討ちはたしましたし」
家康はきっとなって庭上の忍者を見まもった。
「死んだ薄墨友康、雨巻一天斎らのはたらきでござります。されば、拙者のさぐったところでは、残るはあと三人と見きわめてござる。——鷹狩にはおいでなされませ。明日も、あさってもおいでなされませ。その方が、千姫さまも御油断あそばすでござりましょう。ただ御討手の儀は、この両三日、お待ち下されい。討手をかければ、千姫さまもかの女狐どもと御運をともにされるは必定、角をためて牛を殺すとはまさにこのこと、やけになるのはまだ早うござる。鍔隠れの忍法をお見くびりになるのはまだ早うござります」
「——両三日も待てとな」
「されば、ここ両三日のあいだに、拙者かならず千姫さまのお屋敷にしのびこみ、のこる

三人を討ちはたすか、少くとも千姫さまを盗みまいらせて御覧にいれる」
家康はじっと鼓隼人を見おろしていたが、急に立って、縁側へあゆみ出た。
「隼人、いかがしてな？」
と、小声でいった。このとき、彼の脳裡に、曾てみせられた薄墨友康と般若寺風伯の幻怪な忍法がうかんでいたことはあきらかであった。——おなじ縁側に、阿福をはじめ竹千代づきの侍女たちが坐っていたが、その阿福が、ふたたび「あっ」とさけんで、庭の方を指さした。
「あそこに、もうひとり——」
鼓隼人の背後のややはなれた白い土塀に、このとき、すうともうひとつの影がうかび出した。その影を阿福が「もうひとり」と呼んだのは当然だ。黒々と立ったその影のまえには、だれの姿もみえなかったから。
塀の影は、横をむいた。その影のかたちが、庭上に坐っている鼓隼人そっくりであることに気がつくよりさきに、阿福は狼狽してたちあがった。竹千代も眼を見はっているというのに、その影はあきらかに男根をつき出したからである。
「やあ」
と、竹千代がさけんだ。家康も狼狽した。
しかしこのとき、その影と相対して、もうひとつの影が、ありありと白い塀にえがき出

された。しいたけたぼにうちかけを着て、まぎれもなく大奥の女の姿である。その影がいきなり懐剣をぬいてふりかぶった動作から、それが阿福の影だと気がついて、家康ははっとして阿福をかえりみた。阿福は怒りの表情で立ちすくんだままであった。しかし、縁側におちているべき彼女の影はなかった。失われたふたりの影は、あらぬ方の土塀に移って、無言の争闘をつづけているのである。

そして——鼓隼人の影は、男根をつきあげて、阿福の影をめがけて、たかだかと放尿した。

「な、何をしやる」

悲鳴をあげたのは、縁のうえの阿福だ。面上から胸いちめん、なまあたたかいしぶきをあびたように感じて、さけびながら顔を覆い、そこに何の液体もないのにうろたえてふりかえると、塀の影はきえ、鼓隼人は寂然として白砂に坐ったままであった。

隼人と阿福と——その足下にあるべき影がもとどおりにおちているのをみて、家康は息をのんだ。

「は、隼人——いまの影は？」

家康の声はかすれた。隼人はにやりとした。

「両人の心の影でございます。伊賀忍法——百夜ぐるま——」

「百夜ぐるま？」

「されば、小野小町のもとへ百夜通った深草少将の車の義にて、女がいかにきらいぬこうと、拙者の心はあの影の車にのって、百夜にても千夜にても女のもとへ参りまする。影は女の心の影をさそい出し——女の心が怒ればその影をなぶり、女の心がなびけばその影とちぎりまする。影と心は一体でござるゆえ、影がちぎることは、すなわち心がちぎることでござる」

三

見わたすかぎり、黄葉の雑木林と、白すすきの波であった。その野と丘のうねり去る果てにくっきりと秩父の連嶺が這っている。

ふだんならば、その樹々と草の葉ずれのほかに声もない武蔵野の大地に、きょう時ならぬ人馬のさけびがある。すすきより無数に、日にきらめいて浮かびつ消えつするのは、幾百ともしれぬ勢子の陣笠であった。

「阿福」

と、丘の上で、この光景を見おろしていた供奉の女房たちのなかで、足ぶみして竹千代がさけんだ。

「もう、わしは見物はいやじゃ。わしもゆきたい。おじいさまのところへゆこう」

「ごもっともでございます」

と、乳母の阿福は微笑してうなずいた。大御所への供というより、竹千代に従ってこの鷹狩見物にきたのだが、活発な竹千代の性として、とうてい見物だけにがまんできるものではないということはよくわかっていたのである。

「大御所さまは、どうやらあの林のむこうにおいであそばすようでございますね。さ、それではあそこへ参りましょう」

阿福は四、五人の小姓のみをつれ、残りの女房たちにはここで待つように命じて、すでにはしり出した竹千代のあとを追って、甲斐甲斐しく裾をからげて丘をおりていった。

やや日がかたむき、風が出た。

大空にとぶ無数の木の葉は、すべて幾千羽かの小鳥と見まごうが、そのなかに狂いのない暗褐色の弾道をひいて滑走する数十羽の鷹は、いたるところで獲物にとびかかり、もつれあっておちていった。その尾羽につけられた鈴が、武蔵野に時ならぬ美しく勇ましいひびきの雨をふらせた。それを追って、鷹匠たちがぱっと散り、さらにそれにつられて、旗本たちも四方へかけ出す。

「やはり、鷹はよいの」

と、竹林のかげで、家康はそばの侍臣のひとりをかえりみた。顔は以前の矍鑠たる血色をとりもどしている。心から家康は、放鷹に出てよかったと満足している。このとき彼は現在のただ一つの憂鬱事たる千姫の一件をもふと忘れていた——。

からから——と、竹林の奥に異様な音がたばしり鳴ったのはそのときだ。はっとしてふりかえるよりはやく、家康のまわりで二、三人の従者が血しぶきをあげてのけぞり、落葉のなかに這っていた。その胸やくびすじに二メートルはあろうかと思われる青竹がつき刺さっていた。

「あっ」

さけびつつ、大御所をとりまく数人の武士のまえに、また五、六本の竹槍が、竹林の奥から同時に飛来して、そのひとりの胸から背へつきぬけた。

「曲者！」

絶叫したが、遠くちかく鷹と鳥を追う勢子の叫びにまぎれてか、とっさに気づくものもない。竹林のなかへかけ入ろうにも、このとき家康の周囲からは、旗本たちがかけ散って、主をのこして曲者を追うにはあまりにも少人数であった。

そのとき、ただひとり草のなかから舞いあがるようにとんできて、竹林へかけこんでいった大きな影がある。

「捨兵衛」

と、家康がさけんだ。伊賀の忍者七斗捨兵衛であった。

まぶしいばかりの晩秋の陽光をさえぎって、ところどころ青い斑としておとしているほかは小暗いまでに密生した薮の中であった。しかし、闇でさえ猫のごとく見わける捨兵衛

の眼には、竹の葉の一枚一枚すらはっきりみえた。それなのに——藪の中には、何者の影もみえないのである。この竹林を縫って、同時に数本の竹槍を投げ出し、そのうえ幾人かをみごとに串刺しにしてしまった恐るべき速度からみて、曲者はすぐちかくに、しかもすくなくとも数人はいることと思われたのに、藪は寂として、かすかな葉ずれの音をたてているばかりであった。

「曲者はどこだ」

ようやく、竹林のなかへ、七、八人の侍臣が入ってきたが、狂ったような息づかいのわりに、彼らの動作はにぶかった。藪はそれほど深かったし、ふりまわす抜刀や槍がいっそう彼らのじゃまをした。

それらを待とうともせず、七斗捨兵衛ははしり出している。巨大な樽みたいに肥満したからだが、まるで竹林をたんなる幻影のように、苦もなくつきぬけてゆくのである。

藪が尽きると、また曠野がひろがっていた。いちめんの萱野に、尾花がひかって吹きゆれているほかは、鷹をおそれてか鳥の影さえみえなかった。唖然としつつ、盲滅法にかけ出そうとした七斗捨兵衛は、ふいにその足をとどめた。すぐそばに、何者かがすわっているのを感じたからだ。

凄じい草と枯葉に覆われて、その堆積のひとつかとみえたが、たしかに小屋だ。こんなところに人間の手でつくられた小屋があって、そのまえにひとりの人間が坐って、びっく

りしたようにこっちをながめていた。

「うぬはなんだ」

捨兵衛はかけよって、しげしげと見おろして、

「女か」

と、あわてた眼になった。

その人間は、菰の上に坐ってはいるが、それでもなお小山のように盛りあがってみえた。それが、頰かむりの下から蓬のような髪をのぞかせ、顔は垢と泥に覆われて、男女の別はおろか獣とも人間とも見わけられない。ただ胸も手足も襤褸からむき出しになったなかに、みごとに盛りあがった巨大な乳房が、はじめて当人を女と知らせるばかりであった。

女は、すぐに捨兵衛から悠々たる白雲にねむたげな眼をうつした。

「乞食」

捨兵衛はさけんだ。

「いまこの藪からにげ去った曲者の姿を見なんだか」

女乞食は、だまってくびをふった。

「ひとりではない。四、五人はいたはずだ。これ、うそをつくとそのままにはすておかんぞ」

「おれ……今まで寝ていたでがすから」

と、彼女はたいぎそうにこたえて、それから腿ほどにふとい両腕を天につきあげて、堂々たる大あくびをした。どなりつけようとして捨兵衛は、その垢と襤褸のかたまりみたいな女乞食の歯が真珠みたいにきれいなのと、腹部が異様にふくれているのに眼をとめた。

——孕み女！

あたまにひらめいたのは、千姫屋敷の孕み女のことだ。もっとも、この女乞食がそれと関係があると思ったわけではない。真田の女忍者のうち生きのこっているのは三人で、そのうちの二人の女は江戸城大奥の御錠口と服部屋敷でかいまみている。まだその姿をみたことのないのはひとりだが、大御所の話や、またそれ以後じぶんと鼓隼人のさぐったところでも、千姫の身辺にこんな大女がいる事実はなかった。それどころか、いまの投槍から曲者はたしかに数人いるはずと見こんでいたから、この女がその曲者だとすらかんがえていなかった。それなのに、

「ちと不審がある。これ、こちらをむけ」

突然そういい出したのは、じぶんほどの忍者の眼をくらまして数人の曲者が消失した奇怪さと、その女乞食の孕んだ腹が、やはり鉤みたいに心にひっかかったからであった。

「うぬは孕んでおるな。亭主はいずれにおる」

「……おっ死んだでがす」

「死んだ？　いつ？」

「この五月十九日に」

いやに正確に返事をしたが、そういって女乞食はにやりとしたのはやはりおかしい。垢だらけなのに存外ととのった顔立ちだとみていたのが、ふいにうすきみわるく弛緩した表情になった。

そのとき、やっと竹林をぬけて、陣笠の旗本たちがあらわれた。

「く、曲者は？」

と、すっとんきょうな声をはりあげて、はしり寄ってくる。七斗捨兵衛はしばらくじっと女乞食をみていたが、

「この女以外に曲者らしい影は見あたらぬ。念のため、とり調べて下され」

「この女を？」

と、旗本連はややへきえきの態であったが、「それ、ひったてろ」と、両側から女乞食の腕をつかんだ。立たせると、旗本連はおろか、巨漢の捨兵衛よりまだたかい、見あげるような大女なのに、みんな啞然とした。人間ではない、牝獣みたいな強烈な体臭があたりに散った。それがじぶんへの嫌疑の恐ろしさを知らないのか、役人などに追いたてられるのは馴れているのか、それともやはり少々足りないのか、にたにたとうす笑いをうかべて、無抵抗にあるいてゆくのである。

四

女乞食は家康のまえにひきたてられた。すぐに竹千代や阿福もそこへやってきて、不安そうに立っていた。むろん彼らはあつまってきた家来たちに幾重にもとりかこまれていた。

「あれはなんじゃ」

女とは、家康にも意外だったらしい。捨兵衛がひざまずいて、

「この薮のむこうに、小屋をかけておった野臥りでございます。何も存ぜぬむきを申したてておりますが、あの女のほかに曲者らしい姿は見えませぬ。少々愚鈍の態に見うけますが、そのように装っているやもしれず――」

「なに、ほかに何者も見あたらぬと？――女ひとりのわざではないぞ」

と、家康はまだそこに青い竹槍を胸につったてたまままころがっている三、四人の屍体を見やった。

「まったく無縁のものかとも存ぜられますが、ただあの女、子を孕んでおります」

「なんと申す」

家康はのぞきこんで、むらむらと不快な表情になった。千姫が駿府にたちよったとき、その侍女たちのなかにこんな大女のいなかったことはわかっていたから、この女がまさか

あの一件と関係があるとは思わなかったが、このごろ「孕み女」のために病気になるほど悩まされていたから、全身の血が墨汁に変ったような気がしたのである。家康も、捨兵衛とおなじひっかかりを感じたことはあきらかであった。

「よし、陣屋へ曳いて、きびしく詮議せよ」

と、彼はいった。それから捨兵衛をみて、

「これ、隼人の方はいかがいたした。捨ておいて仔細はないか」

捨兵衛はにやりとした。

「手伝おうかと申しましたところ、一笑いたしました。それゆえ拙者、わざと離れてこちらにお供仕った次第でござる。恐れながらしばらく隼人の面をお立て下さりまするよう。いや、おそらく今明日にも、吉報をもってお狩場へはせ参ずることと存じまする」

「ふむ」

と、家康はうなずいたが、さすがにもはや興醒めしたらしく、

「去のう」

と、うしろをふりむいた。――この刹那、捨兵衛は電光のようにふしぎな殺気を肌にかんじていた。

「や？」と首をめぐらそうとしたとき、

「まあ、この女は」

と、さけぶ声がきこえた。いままでだまって女乞食を凝視していた阿福がすすみ出てきたのである。同時に、ふしぎな殺気がすうとかききえた。

と、家康は何も気づかず、苦笑の眼を阿福にむけていた。その問いの返事よりはやく、女乞食がうれしそうな大声をあげた。

「これは、はあ、阿福さま、おなつかしゅうごぜえますだ」

阿福は狼狽して、するどい眼で女乞食をにらんでから、大御所の方へむきなおって、

「いえ、存じ寄りと申すほどのものではございませぬ。ここ数年、お城の石垣などのお作事場などをうろついていた乞食で、そこにはたらく男どもになぶられておるのを二、三度たすけてやったり、菓子などをつかわしたことがあるだけでございます。腹の子も、きっと左様な男どもに孕ませられたのでございましょう。禽獣にちかい愚か者でございます」

と、早口でいった。女乞食はにたにたして阿福の顔をみて、

「御親切な阿福さま、また菓子を下せえまし」

と寄ってくるのに、家康はあわてて手をふって、

「これ、寄るな、追いはなせ」

と、命じた。――この女への嫌疑は、ともかくもはれたのである。それからもういちど、

「去のうぞ」

とつぶやいて、さきにあるき出した。帰ろうといっても、城ではない。この鷹狩部隊の陣屋はこのちかくの越ガ谷に設営してあって、明日は葛西へ足をのばす予定であった。

夕焼けてきた空に、法螺貝が鳴りわたった。鷹狩りの勢子たちは、すすきの穂波のかなたへ去ってゆく。――静寂にかえった藪のまえに、ひとり七斗捨兵衛は腕をくんでいた。どうかんがえても、さっき投槍で襲撃した曲者の正体がわからず、そこを離れがたかったのだ。

「七斗とやら」

ふいにうしろで声がした。どうしたことか、阿福がひとりたちもどって、立っていた。

「ねがいがある。褒美はのぞみにまかすゆえ」

ただならぬ顔色である。

「なんでござる」

「いまの女乞食を討ち果たしてもらいたいのじゃ」

捨兵衛は、あっけにとられた。――いま、あの女乞食が大それたことをやるような女でないことを証明したのはこの阿福ではないか。

「な、なぜ？　あれを――」

「わけはきいてたもるな。ただ殺せばよいのじゃ」

阿福の歯は、恐怖にかちかちと鳴っていた。般若寺の忍法「日影月影」をみたときも、な

鼓隼人の忍法「百夜ぐるま」をみたときも、彼女がこれほどの恐怖の相をみせたことはない。

草の波のなかを、赤い夕日にぬれて、女乞食があるいていく。
そのむこうに、水がひとすじひかってみえた。いまの江戸川だが、後年の開鑿改修以前の、或いはふとく、或いはほそく、ただ武州と総州をわかつ自然のながれで、当時はこれも利根川とよんでいたが、むろん本流の大河とことなり、季節によってときには氾濫し、ときには逃げ水のごとく武蔵野へ消え去る川であった。
その川にかかる一本のふとい丸木橋をなかばわたって――ふいに女乞食は片ひざを折って、身をかがめた。背後からその頭上を、まっかに灼けた閃光がうなりすぎた。次の瞬間、こんどは彼女は丸木橋のうえに這い、さらにはその橋に四肢をからめて、くるっと下側にまわった。このあいだにも、数条の赤いひかりは彼女を追って飛びすぎていた。眼にはみえなかったが、それは夕焼にかがやく忍者の飛道具マキビシであった。
「ちぇっ……」
ながれる風船みたいに、橋のたもとにかけ寄ってきたのは七斗捨兵衛だ。必殺のマキビシを一撃のみならずみごとにかわされて――阿福からその女の素姓をきかされず、狐につままれたような気がしていただけに、愕然として血を逆流させていた。ただ、仰天しつつ

も、丸木橋に抱きついた女の行動を不自由なものとみて一刀をぬきはらい、疾風のごとくはせよっていったのはさすがである。
びゅっと、思いがけなくその面上に何かが飛んできた。本能的に宙にあげてふせいだ右手に、それは蛇のごとくくるくると巻きついて、最後に鏘然たる音とともにその手の刀身をくだき折っている。
巻きついたのが鎖で、刃を折ったのがそのさきについた分銅だとわかったときは、あとのまつりだ。片腕をあげたまま棒立ちになった七斗捨兵衛から丸木橋の下へ、ぴいんと張られた一条の鎖――ふつうの女のつかうくさり鎌の鎖はわずか五、六十センチの長さだが、実にこの鎖は五、六メートルをへだてて、なおその余が女のこぶしから水面に垂れていた。
女乞食の鎌の柄を口にくわえた顔が、丸木橋からのぞいた。橋にからませた一方の腕と両脚が徐々にうごくと、彼女はゆっくりと橋の上に立った。
「阿福どのからの刺客か」
鎌を口からはなし、右手にもちかえて、はじめてにっと笑った。
「先刻、すんでのことでこの鎖を家康の背にとばせるところであった。その機先を制してわたしに話しかけたとき、阿福どのの背に冷汗がながれたことであろう。いとこにめいわくをかけてはきのどくゆえ、わざと手をひいてあげたけれど」

「——いとこ？」
じりっとひきよせられつつ、捨兵衛は眼をむいた。この女乞食が、あの阿福のいとこだと？　それにしても怪力では鍔隠れ谷第一との自信をもつ七斗捨兵衛をまるで幼児のごとくたぐりよせるこの女の絶倫さよ。はじめて捨兵衛は、この女ならばあの竹槍を五、六本ひとつかみにとばすことも不可能事ではなかったと想到した。
「ただしく申せば、わが夫のいとこじゃ。もっとも阿福どのはそれを忘れようとしている。もはやこの世にないと安堵していたわたしがあらわれたのをみて、胆もひえる思いがしたことであろう。それをあの場でとりつくろって、あとでひそかにわたしを殺させようとしたところは、いかにもあのひとらしい」
女乞食は大口あけて笑った。歯がきれいにひかった。鎖のくびれこんだ腕からさきへ、橋の上をひきずりよせられつつ、
「うぬの夫はだれじゃ」
捨兵衛の背に、じわっと汗がにじみ出る。
「ほ、阿福はそれをいわなんだのか。刺客のおまえにまでかくそうとしたか。ほほほほ。よし、冥途の土産にきいてゆけ。この腹の胎児の父は、この五月十九日、京の三条磧で首討たれた長曾我部宮内少輔盛親じゃ」
「あっ」

と、捨兵衛はさけんでいた。——長曾我部盛親といえば、大坂の役のみならず関ヶ原でも徳川をなやましぬいた南海の虎だ。捨兵衛は阿福の素姓もしらなかったが、もし阿福と盛親がいとこだとするならば、その妻たるこの女の出現に、さっき彼女が異常なばかりの恐怖をみせたのもむりはない。
——それにしても、いかに夫が豪傑にしろ、恐ろしい女房もあったものだ！　と捨兵衛が総身の毛穴を粟立てたときは、はやくも二メートルの距離にひきよせられて、
「わたしほどのものの手にかかることを誉れと思え」
右手の大鎌が残光にきらめきつつ、捨兵衛のくびを薙いできた。——その刹那、
「……！」
声にならぬ声を発して、ふたりはとびはなれている。捨兵衛は橋をけってもとの岸にはねかえり、長曾我部の妻はのけぞりつつ、たたたたと橋を対岸によろめいていった。
鎖は大きく宙天にはねあがっていた。そのさきには依然として折れた刀身がある。いいや、鎖は依然として一本の腕をとらえている。——一瞬、まるでとかげのごとく捨兵衛は片腕を自切したようであった。しかし、みよ、捨兵衛の右腕はもとどおり健在だ。その肩から消失してはいなかった！
長曾我部の妻は、鎖のからんだ片腕が、まるで蛇のぬけがらのように半透明なのを見た。実にこの刺客は、まるで手甲をぬぐように、皮をあたえておのれの腕をぬぎとったのであ

る。
驚愕の眼を宙にあげながら、しかし水におちることもなく長曾我部の妻がいっきに対岸まではしったのはさすがである。間髪をいれず、もはやその恐るべき鎖が無力化したとみて、ふたたび捨兵衛が丸木橋の上を跳躍して追おうとした。その橋が、ぐらっとゆらぎ、もちあがった。
「化物め！」
さけんだのは、長曾我部の妻だ。彼女はくさり鎌をなげすて、その橋を両腕にかかえていた。丸木橋とはいえ、大木を横にたおしたもので、周囲はひとかかえにあまり、長さは十メートルちかくあるだろうか、それを金剛力でかかえあげた女乞食の姿の凄じさは、もし捨兵衛が化物ならば、本人は何といったらいいだろう。
「これをくらえ」
びゅっと麻幹のごとく薙いできた大木が水面をたたいて、竜巻みたいな水けぶりが立った。
「わっ」
さすがの七斗捨兵衛が、胆をつぶしてとびすさっている。次の瞬間、不覚にも彼らしくなく原始的な恐怖におそわれて、大きな背をまるくして逃げ去っていた。
長曾我部の妻は、落日にきえてゆく男を見おくって、まるで杖でもすてたように手をは

たき、たか笑いをしていたが、ふと腕に抱いた大木に眼をおとし、
「丸木橋か……丸橋……わたしの名とおなじじゃ」
と、苦笑いのつぶやきとともに、それを河へほうりこんだ。もういちど凄じい泥しぶきがあがって、それがきえたとき、彼女の姿も野面にみえなかった。

五

宿直の女は、障子に眼を吸われていた。
はじめ、ほかの女の影かとみていたのである。それが、それと相対して、もうひとつの影がぼうと障子にうかびあがったのに、彼女は息をひいた。——いちじ、百数十人も入りこんでいた大工や職人も工事がおわって姿を消し、あとは門番、中間などをのぞけば、家老の吉田修理介ほか数人の男しかいないはずの千姫屋敷だ。それらはことごとく老人ばかりである。それなのに、いま障子に女とむかいあったもうひとつの影は、たしかに若い男のそれであった。
声をたてなかったのは、その女がたしかにこの屋敷のものらしいとみえたからだ。が、男の影が片手をのばして女の肩を抱きよせたのに、はじめて彼女はさけび声をあげようとした。その瞬間に、彼女はじぶんの肩につよい力をかんじた。鼻孔に何者かの息がかかるのをおぼえた。声は出なかった。唇を熱い粘膜で覆われるのを感覚したからだ。

「う。……」
彼女はうめいた。じぶんのそばにはだれもいない、という怪異を怪異とする知覚を、その刹那に彼女はうしなっていた。
女は舌を出していた。全身をくねらせた。たったひとり――しかも彼女は、じぶんの舌をしゃぶる唇と、くびれるほど胴を巻きしめた力づよい腕をかんじているのだ。恍惚とほそくなった眼は、しかしくいいるように障子の影を見つめていた。
男の影は、女の影の襟をかきひらいた。のけぞった女の影に、くっきりと乳房がなまめかしい半球をえがいてあらわれた。男の影は、乳房をやさしく愛撫した。――宿直の女は、ひきつるような息の音をたてていた。弓なりになった女の影に、男の影はのしかかった。手は乳房から下へさがっていた。女の影は、裾から一本の脚をたかだかとあげていた。足袋のさきが支那靴のようにぴんとそりかえり、それ自身が一個のいきものみたいに身もだえした。――影ばかりではない。座敷のなかで、宿直の女も、裾をみだし、黒髪をみだし、いまはあえぎではなく、泣きじゃくるような声をあげていた。ひとりで腰を波うたせるたびに、裾からなげ出したなまなましい一本の脚に痙攣が波動した。
障子の女の影がのけぞりかえって下にしずむと同時に、宿直の女もあおむけに白いあごをむけてたおれた。快美のあまり、喪神したのである。障子の男の影は、みえなくなった女の影をのぞきこむようにじっと立っていたが、やがてすうとうすれて、これまた消え去

った。
――しばらくして、鼓隼人は座敷のなかに立って、下半身をあらわに気をうしなっている宿直の女を、いまの影そっくりの姿勢で見おろしていた。片頬にえくぼがひとつ、にっとえぐられている。それから、音もなくあるき出した。――妖々と、「百夜ぐるま」がめぐりはじめたのである。

大御所が変幻の忍者をつかっていることは最初からわかっていたことだ。とくにこの二、三日、眼にみえてないのに、たしか何者かがこの千姫屋敷のまわりを風のごとくうごいていった痕跡があった。いや痕跡は何もないが、お瑤、お眉、お由比の三人は、忍者独特の嗅覚で、それをかぎとったのである。それ以来、宿直の女たちもとくに心たしかなものをえらび、その配置も容易なことでその眼と耳をのがれて潜入することは不可能なように心をくばってあった。
しかし「百夜ぐるま」はそれを通りぬけた。音もなく、それはじゅんじゅんに宿直の女たちをおとずれた。この二、三日、鼓隼人がたんに偵察のみにとどめていたのは、屋敷のまどりと、宿直の配置をさぐるためである。壁に、障子に、唐紙にあらわれた男の影は、女の影をさそい出してこれを犯し、絶妙の秘技を以て彼女たちを酔わし、しびれさせ、悶絶させてゆくのだった。――影は次第に奥へ入っていった。

「何やら胸さわぎがいたしまする」

ふいに声がして、唐紙をあけて三人の女が出てきた。三人とも、すでにはっきり目立つ腹をしていた。そのまま、その暗い座敷をとおり、縁側へ出てゆく。

その格天井にひかっていた二つの眼が動揺した。しまった、しめた、という狼狽と、というほくそ笑みのために。

いまの三人がめざす真田の女忍者であることはいうまでもない。挨拶していま出てきた部屋にのこっているのが千姫であることもわかっている。しまった、というのは、こちらから手をくだすいとまなく、その三人がひとかたまりになってどこかへ出ていってしまったことと、その結果、当然、当直の女たちの異常が発見されることが予想されたからで、しめた、というのは、あとに千姫だけがのこされた僥倖にめぐりあわせたからであった。

よし、まず今夜は姫を盗み出せ、と鼓隼人は決断した。ことは、いそがねばならぬ。

つ、つ、つ——と格天井を這いながら、しかし隼人の眼は笑っていた。——大御所の孫娘、豊家の未亡人、しかもこの御殿の奥ふかく、復讐の妖念に高貴な肌をやいている美女。——それをいま、おのれの百夜ぐるまにのせて、思いのままにひきずりまわし、闇天に巻きあげる愉楽の想像は、すでにその笑った眼に血光をにじませている。

——ふっと、雪洞の下から蛾のようなものが舞いたった気配に、千姫は天井に眼をあげ

た。天井に淡墨に似た影がうごいた。それを怪しいものとみる心は、すでに影とともに盗まれている。影はみるみる濃くなり、まるで巨大な黒い白血球みたいにのびちぢみした。千姫の眼は、凝然と見ひらかれている。八方に出た影の突起物が人間の四肢に似ているとその眼にうつったとき、彼女はひたとまといつくあたたかい手足をかんじた。それが明確に現実の男の肉体であるとわかったら、むろん彼女はさけび声をあげていただろう。しかし、その感覚は、いまの天井の影のように、「淡」から「濃」に移行した。その変化は急速であったが、ほとんど意識にのぼらないほど微妙な諧調を経ていた。無抵抗のうちに彼女は、強烈な男性の匂いと触覚の魔縄を肌にくいいらせている。

天井の影ははっきりと、横たわった男女の春宮図をえがいていた。千姫の乳房は波うち、肩と胴はなやましくうねった。彼女は秀頼の愛撫を——この半年わすれていた、若い、あらあらしい男の息吹が肉のひだを灼くのを感じ、おぼえず片腕をついてあえぎ声をもらした。

天井のふたつの影はまつわりつき、移動しはじめた。その女の影がそのままに、しどけない姿態で千姫もまたつぎの座敷に這い出している。まるで白蛇のように全身をくねらせて。

千姫はじぶんを抱いているものが、いつ現実の男に変ったのかしらなかった。——鼓隼人は千姫を抱いて、じっと月明りの縁側に立っていた。千姫は隼人のくびに白い腕をまき、

頬をぴったりくっつけて、夢見ごこちの吐息を吐いていた。隼人はうす笑いして、縁側をあるき出した。

門の方で、ふいに大声がきこえたのはそのときだ。

「千姫さまに見参」

六

ひとりではない。たしかに十数人と思われる跫音が、どどっと土塀から内側にとびおりるひびきがつづくなかに、老人らしいしゃがれ声がながれた。

「やあ、見つかったとあればやむを得ぬ。腕ずくでも押し通れ。坂崎出羽守家中落合閑心、千姫さまにおうかがいの儀あって推参つかまつった。千姫さまはいずれにおわす」

百夜ぐるまの幻法はやぶれた。

「しまった——」

と、鼓隼人が狼狽してふりむいたとき、千姫は鞭みたいに身をとびはなれさせていた。よろめきつつ、恐怖の眼で隼人をみて、

「おまえはだれじゃ」

さけぶと同時に、狂気のごとく、

「お瑤——お由比——お眉——はやくきてたも、曲者じゃ！」

と、絶叫しながら、はやくも帯の懐剣をひきぬいた。廊下をはしってくる跫音がきこえた。

鼓隼人は舌うちをした。いちど千姫をふりかえってにやりとしたが、そのまま庭へとびおりる。石燈籠から立木へ、さっと夜がらすのような影が月明にはばたいてみえたが、お瑤とお眉がかけつけたとき、もはや庭にはなんの影もみえなかった。千姫は夢からさめたように茫然として立ちつくした。

——茫然として立ちつくしたのは千姫ばかりではない。御殿の大屋根に立った鼓隼人は、これはまだ夢をみているような表情で下界を見おろしていた。

ほんのいま、門のあたりでけたたましいわめき声と跫音がみだれたのに、それはたと凍りついたようにきえている。いまの声から、千姫の秘密を知ろうとしてあせり、この屋敷にやった数人の家来がそのまま消息をたったのにごうをにやした坂崎一党のものが、ついにたまりかねておしかけてきたということは、鼓隼人にもわかっていた。時もあろうに、千姫さまをさらうのにあとひといきというところで、なんたるたわけた頓狂者ども——と、切歯して見おろしたのだが、門のあたりに声のみか、ふしぎなことにうごく影もない。

いや、ひとつ——ふたつ——かすかに月明にただようものがある。それはうすい泡のようなものであった。しかもそれが袋みたいに大きいのである。一瞬きらりと月光に虹をながしたようにみえたのに、隼人がはっと眼をこらしたとき、それはふっときえてしまった。

そのあとに、黒装束の形影が地にたおれていた。その影ばかりでなく、あたり一帯の算をみだして伏している十数人の黒装束の男たちを隼人ははっきりとみた。しかも彼らはことごとく、手をちぢめ、足をおり、あたまを胸にめりこませて、まんまるくなってころがっていた。

「……はてな？」

さすが驚天の幻法をあやつる伊賀の忍者鼓隼人も、この光景には判断を絶して、大屋根の上で、眼をかっとむきだしたままである。

――おなじ時刻、江戸の町を北から、ぶらぶらと入ってきた奇妙な影があった。竹杖をつき、頬かぶりに顔を覆い、おそろしい襤褸を身にまとった乞食だが、蒼い月明にくっきりとつき出した乳房から女とわかる。見あげるようなこの大女は、乞食らしくもない堂々たる足どりで、しだいに竹橋御門の方へちかづいてくるのであった。

忍法「鞘おとこ」

一

「千姫さま」

「…………」

「姫さま」

お瑤とお眉は呼んだ。

門の方で、たちさわぐ女たちと、それをとりしずめるお由比の声がやんでからしばらくたつ。そのお由比が入ってきて、お瑤やお眉と二語三語ささやきかわしてから、おなじようにそこにひそと坐ってからもだいぶ時がたつ。真夜中の千姫屋敷だ。

書院のなかに、千姫は坐っていた。白鷺のような姿だが、眼はじっと宙の一点を見すえて、異様にひかっている。さっきの恐怖になかば喪神しているものと、三人の女にはみえた。

「申しわけございませぬ」

「ここまで曲者を推参させたのは、あたしたちの不覚でございました」

「それにしても千姫さまにまでお手むかいするとは……」

三人の女忍者は、ひれ伏した。それから、顔をあげて、お瑤がいった。――いま、おたがいに二、三語ささやきあった言葉がそれであるが、これはこのごろ、ひそかに相談していたことであった。

「千姫さま、どうぞわたしたちにおいとまを下さいまし」

千姫は、はじめて女たちの方へ顔をむけた。かすれた声で、

「なぜ？」

「これ以上、わたしたちがこの屋敷にあっては、姫さまの御一身にも大事がおよびかねませぬ」

「これまでも、大御所さま、また将軍家から、よくわたしたちを御手のつばさでかばって下さいました。かたじけのう存じます。けれど、これ以上は」

「まえまえから、三人で話していたことでございます。これ以上、千姫さまに御苦労をおかけ申しあげては相すまぬ、もはやおいとまをいただいて、三人は何処かへゆこうと――」

と、三人は、こもごもいった。千姫はむしろ冷たい眼で、

「何処へ？――何処へゆこうと申すのじゃ」

といった。

「は、はい……」

と、三人は口ごもる。

「この国の土のつづくかぎり、お祖父さまのお眼のとどかぬところはないわ。それなのに、その見るも重げなからだで、何処へにげようというのじゃ」

千姫の眼はもえてきた。

「お瑤、お眉、お由比――そなたらの腹にいる胎児を、そなたらのみの胎児と思うか。それはわたしにとって、わたしの子も同然、秀頼さまの忘れがたみであるぞ。そのおん子を、わたしの眼のとどかぬところで、野良犬同然に生ませてなろうか」

三人の女は、はっと吐胸をつかれたようにうなだれた。

「わたしの心は、そなたらも知っているはず、わたしがただお祖父さまに眼にものをみせてさしあげるためだけの望みに生きているのは承知のはず。――わたしを離れてはならぬ。いってはなりませぬ。わたしを捨ててたもるな。わたしの眼に、秀頼さまの忘れがたみを見せてたもれ。……」

千姫の白い頬に涙がおちた。三人の女はたたみにひたいをおしつけたままであったが、すぐにお眉が決然と顔をあげて、

「もったいのうございます。千姫さま。……それはわたしたちも、いつまでも姫さまのおそばにいとうございます。けれど、もはやこのお屋敷も鉄の壁をもつ城とはいえなくなり

ました。ここに住まわせていただくことは、わたしたちのためではなく、お子さまのためにかえってあぶなくなったのでございます。大御所さまの刺客——伊賀の忍者どもは、姫君にさえぶれいな手をのばしてきたではございませんか」

「それじゃ」

と、千姫は身をふるわせた。しかしそれは恐怖のためではなく、怒りのためであることが、ようやく三人の女にもわかってきた。

「あの男……わたしをどうしようというつもりであったか？」

千姫は、さっきじぶんの鼻口を覆った男の強烈な匂いと、乳房からもっと恥ずかしいところまで這いまわった男の手を思い出した。いつそんなことになったのか、どうしてそこまでじぶんはゆるしたのか。——それをまるで秀頼の愛撫のような錯覚におちいって、身も世もあらぬ姿をみせたことを思い出すと、恥と怒りのためにあたまがくらくらするようであった。わたしはあの男をゆるすことはできぬ。

「いいや、あの男をつかわされたお祖父さまをゆるすことはできぬ。いまさらいうまでもないが、お千にとってお祖父さまは、来世までの怨敵じゃ。それゆえにそなたらは、あくまでわたしといっしょにいてくれねばならぬ」

と、千姫は歯ぎしりしてつぶやいたが、逆上のため、じぶんがおなじことをつぶやいているのに気がついて、三人の女を見やって、

「けれど、お祖父さまや父上が、わたしを来世まで怨敵とかんがえておいであそばすか、どうか？　なるほど、むこうは忍びの者をむけられた。さりながら、面とむかって討手をよこされぬのが、お千を恐れておいでの証拠、それも道理、お祖父さまや父上は、わたしの所業を責められぬはずじゃ。わたしはあのおふたりに、女の一生という貸しがある。そのうえ、何をわたしから奪おうとなさるのか。もしおふたりが人間の魂をおもちあそばすならば、そのおん眼のまえでわたしの首はきれぬはず。あのようなけがらわしい忍びの者がわたしに狼藉なふるまいをするのを正気で見てはおれぬはず——よし、賭じゃ」

「賭？」

「わたしはこれから城にゆく」

三人の女は、愕然とした。千姫は意を決した表情で、

「いかにもそなたらの申すとおり、このまま捨てておいては、いつかはとりかえしのつかぬことになる。すでにお奈美、お喬は非業の死をとげた。これ以上、いつまでも受身で待っているのは、臆病でもあり、愚かでもある。わたしは、お城にゆこう。お祖父さまは鷹狩に出られてお留守じゃが、父上はおいでのはず。わたしは父上と母上をおたずねしよう。お千の命をとられるか、それともお千の望みをきかれるかと——二つに一つの賭じゃ」

「……千姫さま、それは」

三人の女は顔いろをかえてさけび出そうとして、絶句した。千姫の決意をやむを得ないと容認するより、彼女の必死の眼におさえつけられたのだ。唇をふるわせているあいだに、はやくも千姫はたちあがっていた。

そして、三人を見おろしていった。

「だれかある。乗物の支度を申しつけてたも」

「朝までにわたしがかえらねば、わたしは死んだものと思ってよい。もし、そなたらがこの屋敷を去ろうというならば、そのあとでよい」

——二つに一つの賭と千姫はいった。事実、たしかに死ぬことも覚悟しているつもりの千姫であったが、しかし彼女自身意識せぬ心の底に、父を詰問し、母を鞭うてば、じぶんの望みはかなえられるにきまっているという自信を沈めてはいなかったか。すくなくとも、じぶんをむざと殺せるはずはないと父を見くびってはいなかったか。千姫は温厚な父が、彼女のそんなひそやかな甘えや、良心の期待や、或いは可憐な狂乱すらもふみにじって、ただ徳川の大事という見地からすべてを処置しようとする決意を、祖父以上に峻烈に抱いていることを知らなかった。

彼女が城に入ることは、飛んで火に入る夏の虫である。むしろ大御所の不在をさいわい、将軍秀忠がたちまち彼女を手討ちにし、間髪をいれずこの屋敷に討手をむけて、一挙に禍根を断つ行動に出ることは必然であった。

しかし、乗物は、屋敷を出ていった。

二

乗物はたしかに屋敷を出たが、百歩とあゆまないうちである。

「——や？」

月光のなかで、こんなさけび声がきこえて、むこうから跫音をみだしてかけよってきた十数人の武士がある。

「たしかに、千姫さまのお屋敷から出たぞ」

「この深夜に、何者が、何処へ？」

「閑心老たちはどうしたか？」

そんなさけびをあげながら、彼らはどやどやと乗物をとりかこんだ。深夜、急な用件でもあり、城はすぐ頭上に蒼白くそびえている距離にあるのだから、乗物をまもる供侍や腰元は、十人にも満たなかった。老臣の吉田修理介が、

「これ、おぬしたちは何者じゃ、無礼をいたすな。これは千姫さまの御乗物であるぞ」

と、狼狽しつつ叱咤したのに、武士たちはいちどはっとしてとびのいたが、そのうしろから、

「千姫さま、それは好都合」

と、うなずいて、あゆみ出してきた大兵の武士がある。月明にいよいよ醜怪なくまどりをえがいた凄じい火傷の顔は坂崎出羽守であった。——実は、出羽守は、千姫の一件につき、探索し、驚愕し、思いつめた老臣落合閑心が、今夜ついにじぶんに無断で、手勢をひきつれて、千姫屋敷におしかけたと知って、あわてて追いかけてきたものだが——眼前に当の千姫が出てきたという機会にめぐりあっては、もともと閑心と思いはおなじだ。

「無礼はしばらくおゆるしあれ。千姫さまとあれば、至急御意を得たいことがある」

「やあ、坂崎どの、先刻お屋敷に家来どもを乱入させた罪さえあるに、なおこの上の狼藉をはたらこうとするか」

と、吉田修理介は必死にたちふさがる。

「おお、彼らをいかがなされたか、まずそれを問いたい」

と、きかれたが、実は修理介にもわけがわからない。さっき、突如として、

「坂崎出羽守家中落合閑心、千姫さまにおうかがいの儀あって推参」というさけびに眠りをやぶられてとびおきて、坂崎が例の大坂城落城のさいの約束を根にもって千姫さまに修羅の炎をもやしているという巷間の噂は、きいているだけに、さてこそとあわてふためき、その乱入の跫音が急にきえたのにおそるおそる出てみると、門内に黒装束のむれが算をみだしてたおれているのに、あっと寝ぼけまなこをむいたきりなのである。そのわけをつきとめるいとまもない、急な千姫の登城の触れであった。おそらく、いまの坂崎一党の件に

ついての御用であろうとかんがえたのが、せいいっぱいの老人の判断だ。

そのとき、さきに門の方へはしっていって、のぞきこんだひとりの家来が、

「あっ、——これはみな討死してござる！」

と、絶叫した。「な、なに？」と出羽守はのけぞりかえってその方へかけ出そうとしたが、あやうくふみとどまって、

「うむ、こうなってはもはやここにて問答は無用、おそれながら姫を頂戴して参る」

「あ、これ、姫は大事の御用にていそぎ御登城あそばすところであるぞ。出羽どの、罪を重ねられるな」

「出羽の罪より、もっと大きな罪を犯しておられるお方がある。世の何事よりも恐ろしい徳川家の大事がある。それ、ものども、姫君をおつれ申せ！」

手をふると、家来たちが乗物めがけて殺到した。

このとき、さわぎをききつけて、門のところに三人の女がはしり出てきた。お瑤、お眉、お由比である。しかし、彼女たちはその場に立ちすくんだ。坂崎一党の乱暴に胆をけしたせいではない。その混乱に投げ入れられた一石——いや、みずからゆるぎこんできた巨岩のような影に眼を見はったのである。

「なに、姫君？——この乗物に千姫さまがおわすというのか」

と、野ぶとい声をあげて、乗物のそばにわりこんできたのは、竹杖をつき、頬かぶりに

顔を覆い、おそろしい襤褸を身にまとった乞食であった。

「それならば、わたしが頂戴して参る」

と、にやりと笑った歯が、月明に白くひかった。――あきれはてて、ぽかんとその姿を見まもっていた坂崎の一党が、

「うぬはなんだ」

「狂人か」

と、つきのけようとしたが、乞食の竹杖があがると、みるみる二、三人が、地に這った。かるく打ったとみえたのに、声もあげず悶絶したのである。

二度目のみじかい放心の刹那がすぎて、

「こ、こやつ！」

だれかが発狂したようなさけびをあげると、いっせいに十数本の刀身が月光をはねた。乞食は竹杖をなげすてた。その面上にひとたばとなってたたきつけられた刀身が、氷柱のようにくだかれて散っている。――乞食はとびのいた。たかだかとあげた左腕の上に、ぶうんとうなりをたてて旋回しているものがある。いま数条の刀を一撃のもとに粉砕したものがそれであった。

「オおっ、鎖鎌！」

「くさり鎌だっ」

一瞬、どよめき、たじろいだが、さすがに千軍万馬の坂崎党だ。たちまち八方から砂けぶりをまいてふたたび殺到しようとするのをみて、乞食は「えほっ」というような奇妙な声をあげた。うなずいた頰かぶりの顔に、心得たり、とでもいいたげにまた歯が白くひかったようだ。同時に、きえーっと大気を灼き截って鎖がなげまわされた。

「うふっ」

「ぎゃっ」

刀槍の傷では、これほど恐ろしい悲鳴はあがるまい。とぶよ、とぶ、鉄丸の荒れくるうところ、武士たちのあたまはそのまま一塊の血へどと化した。卵殻みたいにたたきつぶされた頭蓋骨のなかから眼球がとび出し、月光に泥しぶきのごとく脳漿が奔騰した。それはたんなる遠心力で、同円周をうごく武器ではなかった。分銅はまるでそれ自身生命ある鷲の爪のように、自由自在にうねりはばたいた。のみならず、その殺戮とはまったく無関係とみえる位置で、乞食のなぎつける大鎌の下に、三つ、四つ、西瓜みたいに首が大地に斬りおとされている。

逃げろといった者はない。だれがまっさきに背をみせたかもわからない。理性も感情も血のつむじ風に吹きくるまれて、生きのこった坂崎一党はまろびはしっていた。そのなかに出羽守の姿があったのはせめてものことだ。

乞食は血まみれの鎌をぺろりとなめて、縄の帯のうしろにさした。鎖はどこやらへたぐ

りこまれた。さすがに大きく起伏する胸がくっきりと乳房をもりあげて、はじめてそれが女であると知った吉田修理介たちは、まるで夢魔でもみるように息をのんだままであった。

女乞食は、乗物の棒の下に肩を入れた。駕籠者は、むろんどこかへ逃げ去っている。そのままたちあがると、乗物は水平に宙にういた。とみるまに彼女は、千姫をのせた乗物をひとりでかついで、そのまま疾風のように江戸の町へはしり出したのである。

最初彼女が出現してからこのときまで、おそらく五分とたってはいなかったろう。たとえ、それ以上の余裕があっても、誰でも全身金しばりになったように身うごきもできなかったに相違ない。

みるみる月明にかすみ消えていったその影を、しかし、ようやく追いはじめた三つの影がある。三人の女忍者であった。

ややあって、吉田修理介はわれにかえった。

千姫さまが曲者に奪われた！　この大事が、ようやく胸に大鐘みたいに鳴りはじめていたが、しかしその曲者を追う気力は完全に喪失していた。ほとんど白痴状態になって屋敷にとってかえす老人につづいて、供侍や侍女たちもふらふらと門内に入ったが、その彼らをもなおぎょっとさせる光景がそこに待っていたのである。

門内には、十数人の黒装束がたおれていた。さっき乱入した坂崎家の落合閑心以下のめ

んめんだ。夢遊病者のような修理介の足が、そのひとりをふと蹴った。とたんに、その男が突如奇怪なさけび声をあげたのである。

「おぎゃあ」

たしかに、そうきこえた。嬰児そっくりの泣き声であった。

その声に、ながい眠りを呼びおこされたように、つぎつぎに男たちは「おぎゃあ」「おぎゃあ」と泣き声をあげて、亀の子みたいに手足をうごかしはじめた。それまで、首を胸におりまげ、手足をかたくちぢめている奇妙な姿勢から、いったいどうしたのかとみた者も、その生死をたしかめる余裕もなかったのだが、彼らはみな生きていた。——いや、いまはじめて生命のうぶ声をあげたとしか思われなかった。そして、この屈強な男たちは、おぎゃあ、おぎゃあと泣きながら、ふとい指を口に入れ、死物狂いにちゅうちゅうとそれを吸いはじめたのである。

——これはのちの話であるが、彼らの知能、運動機能が完全に回復するまでに約十日を要した。そのあいだ彼らは這いまわり、よちよちあるきをし、白髪の閑心老までがあどけないかたことのおしゃべりをした数日を持ったのである。そして、ようやく以前の記憶がよみがえるようになっても、千姫屋敷に乱入した瞬間以後の記憶は完全に失われていた。したがって、彼らがそこでどのような魔法にかけられたのか、余人はもとより彼ら自身もまったく霧の中にあるといってよかった。ただ——彼らはその霧のなかに、他人にはむろ

ん、自分自身にさえ説明のできない、まるで海底に眠っていたような恐怖と安らぎの漠然たる追憶の痕跡をかんじたのである。

星をも吹きおとしそうな音をたてて雑木林をわたっていったのは一陣の野分としか思われなかったが、しかしたしかに黒い影であった。獣ではないが、人ともみえぬ。一挺の乗物をかついで飄々と宙をとんでゆく影は、満月に供物をささげにゆく武蔵野の地霊としかみえなかった。

三

その月に銀波をくだく大河がみえてきた。多摩川である。

「よいしょ」

はじめて人間の声をあげて、女乞食はそのほとりに乗物を置いた。頰かぶりをとり、その手拭いでさすがに胸の汗をふくと、ひざまずいて、乗物の方に手をかけた。

「千姫さま」

月明が乗物にさしこんで、喪神したようにぐったりと眼をとじている千姫の顔を照らし出した。

「おなつかしゅうございます、大坂以来」

気を失ってはいなかったとみえる。大坂以来ときいて、千姫は瞳をひらいた。あっと思

った表情である。

「お見忘れでございませなんだか。長曾我部宮内少輔の女房でございます」

たとえ大坂城指おりの驍将長曾我部盛親の妻でなくても、これほどの異彩をはなつ大女を見忘れるものではない。

「おう、そなたは」

と、千姫は呼んで、

「そなた、生きていやったか？」

なつかしさとよろこびに満ちた声であったが、千姫を見すえた乞食女の眼は、青い冷炎をゆらめかしていた。

「はい、まだ生き恥をかいております。あなたと御同様に」

千姫は口をつぐみ、きっとして女乞食を見かえした。

「ただ、わたしが生きているのは、夫盛親のかたきを討ちたい一念あってのこと――姫君はどんなお望みで生きておられます」

「…………」

「実はきょう越ガ谷の鷹野で大御所さまをお狙いして、しくじりました。ちかづくのも容易ではありませぬ。あなたさまは、日毎大御所さまにお逢いになれる御身分、大御所さまをみて、心にうかぶ影はありませぬか。亡き秀頼さまの面影はうかんで参りませぬか」

「…………」
「思えば、西東もわからぬ童女のころに大坂のお城に輿を入れられたお方、おきのどくといえばおきのどくでございますが、それでまんまと豊家をあざむく大御所の手品道具となり、最後は炎のなかに秀頼さまを捨て殺しになされて、ぬけぬけ関東ににげもどられたお方、曾ては主といただいたお方だけに、くやしい千姫さま」

怒りに身もだえする巨体はみるからに恐ろしかったが、千姫はもはやまじろぎもせず、じっと長曾我部の妻を見つめている。その眼は冷たい誇りにみちていた。鞭うつ言葉に弁明しようともせず、しずかにきいた。

「それで、どうしようと思って、わたしをここへつれてきた」
「越ガ谷で大御所を討ちもらしたのは、わたしがしくじったせいばかりでなく、さきごろから思案していたことがあったゆえでもございます。ただむざと大御所を討ったばかりではこの胸が癒えぬ。そうじゃ、あの千姫さまをさらって、それを人質になぶりぬき、大御所さまにみせつけてゆるゆると地獄の苦しみを味わっていただこうかと――けれど、いまこうしてあなたさまのお顔をみれば、左様な悠長なことをしておるにもがまんがなりかねます。いっそあなたさまの生首をこの鎖につけて、もういちど大御所の陣屋にまっしぐらにとってかえしたいほどでございます」

ふるえる手には、無意識的にひきずり出したくさり鎌の鎖がかちゃかちゃと鳴っていた。

千姫はふたたび眼をとじて、冷然と、
「そう思えば、そうしたがよかろう。首うちゃ」
といった。おのれの言葉と、相手の傲然としたこのものごしに、長曾我部の妻はかっと激情の炎にあおられたらしく、
「さらば、お覚悟」
と、月に巨大な銀鱗のごとく大鎌をふりあげた。――その大鎌に、さっと白いつばさがとんだ。見あげて、乞食女ははっとした。鎖にひたとまといついているのは一枚の薄衣であった。
「お待ち下さいまし」
「丸橋のお方さま」
月にかすむ草の波のなかで、そうさけぶ声がきこえたかと思うと、つづいて三枚の薄衣がながれてくるように、三つの影がかけよってきた。それがいずれも女であることに気がついて、さすがに殺気にもえた長曾我部の妻も、鎌を宙にしたまま、見ひらいた眼でむかえた。
「うぬらはなんじゃ」
三人の女は、そのまえに立って、小腰をかがめた。
「丸橋のお方さま――あなたさまは御存じではございますまいが、わたしどもは存じあげ

ております。ただいまは千姫さまにお仕えしておりますが、もとは真田(さなだ)家に奉公していたもの――」

「なに、真田どのに？」

丸橋は、大嫌の布をはぎとって、すすみ出た。

「いかに女にせよ、真田どのの禄をはんだものが、どうして千姫さまにいま奉公しているのか。うぬらも豊家を裏切ったか。そこうごきゃるな、三つならべて細首かききってくれる」

「お斬りなさいますか」

と、お眉がにっと微笑した。

「ただ、わたしたちから流れる血は、豊家のおん血と御承知なされまし」

「なんじゃと？」

「わたしたち三人の腹には、秀頼さまのおん胤(たね)がいらせられます」

丸橋は茫然(ぼうぜん)として、三人の女を見まもった。三人の女の腹がふっくりともりあがっているのはたしかにみとめたが、とみには言葉を信じかねたもののごとく、

「出まかせを申せ」

「丸橋のお方さま、もし千姫さまが豊家のおん敵でいらせられるならば、どうして真田の禄をはんだ女をおそばちかくおつかいなされているのでしょうか」

「さっき竹橋御門のお屋敷に推参した侍どもが、千姫さまが大きな罪を犯しておいでなさる、世の何事よりも恐ろしい徳川家の大事があると口ばしっていたのをおききなされませなんだか」

「それはつまり、秀頼さまのおん胤を身籠(みご)もっておるわたしたちを、いままでひそかに御屋敷におかくまい下されていたことを知って、おしかけてきたものでございます」

三人の女はこもごもにいった。むしろ沈痛なその態度に、丸橋はしだいに動揺してきた。

やがて、「そのわけをきこう」といった。

三人の女忍者は、大坂落城前以来の顚末(てんまつ)を物語った。真田左衛門佐(さえもんのすけ)がたんに稀代の大軍師であるばかりでなく、どこか人間ばなれしたような妖異な雰囲気をもつひとであることを知っていた丸橋には、彼女らの言葉を荒唐無稽(こうとうむけい)なものと思えなかった。いつしか丸橋は、草にひざをついていた。

「――いま大御所を討てばとて、そくざに徳川の天下がくつがえろうとは思われず、また大御所も七十五のとし、どちらにせよ、ながい余命とは思われぬ。むしろ大御所を討つよりも、滅ぼしつくしたと思っていた豊家の血をみどり児によみがえらせ、まざまざと大御所にみせつけ、大御所に未来永劫(みらいえいごう)の苦患(くげん)をいだかせたままこの世を去らせた方が、まことの報復となる。――千姫さまのおんかんがえはこうでございます。あ、丸橋のお方さま、お手をあげられませ」

と、お由比はあわてて呼んだ。丸橋は地べたに両腕をついていた。

「わたしのお辞儀しているのは、そなたではありませぬ。その腹の秀頼さまのおん胤にむかってでございます。いいえ、お辞儀しているのはわたしばかりではありませぬ。この腹の中の盛親の子が御挨拶申しあげているのです」

千姫と三人の女は、はじめて丸橋の腹部も大きくふくらんでいることに気がついた。丸橋は腹をなでて笑った。

「この胎児が生まれれば、小さな御主君さまに、さぞ忠節をつくすでございましょう」

彼女は、千姫のそばにいざりよった。

「姫さま、存ぜぬこととは申しながら、途方もないまちがいをいたしました。どうぞおゆるし下さいまし。……いざ、もういちどお屋敷へおつれ申しあげましょう」

「いいえ」

と、千姫はかぶりをふった。

「わたしはもうあの屋敷にはかえらぬ。敵はいよいよ焦りもだえておる。あの屋敷にいてはかえってあぶないと、さっきこの女たちと話していたところじゃ。わたしは思いついた。ちょうどよい機会じゃ。このままそなたらとともに、この広い武蔵野にひそんで、胎児たちの生まれる日を待とう。どうぞ、わたしひとりを離さないでたも」

うずくまった四人の妊婦のなかに千姫は立って、月明に海のごとくひかりうねる野面を

見わたした。その眼には、ひさしぶりに少女めいた浪漫的な微笑がかがやいている。あきらかに、草と水と丘と林と、果てしもなくひろがる武蔵野の醸す夢に酔わされたのだ。

――けれど、この国の土のつづくかぎり、大御所の眼のとどかぬところはないとは、先刻千姫自身がいった言葉ではなかったか、まして彼女らを追う敵には、超人的な伊賀の忍者もふくまれているのだ。はたして曠野の幻法戦に腹中の児をまもりぬいて、首尾よく勝利のうぶ声をあげさせ得るや否や。

四

越ガ谷の鷹野にある陣屋のひとつに眠っていた七斗捨兵衛は、ふいにゆらりと起きなおった。周囲には何も気づかぬ黒鍬者たちが、ひるまの鷹狩につかれはてて眠りこけている。

「隼人ではないか」

「捨兵衛、一大事だ」

声は江戸にのこしてきたはずの鼓隼人だ。それが隼人らしくもなく息せききって、しかもそれをかくそうともしないのは、江戸からここまで韋駄天ばしりにかけてきたせいばかりでなく、容易ならぬ心のあえぎをまざまざと示していた。

「千姫さまがかどわかされた」

「何じゃと？　千姫をかどわかすのは、おぬしの役目ではなかったのか」

「それをいうな、おれとしたことが、不覚をとった。いや、千姫さまをかどわかしそこねたことではない。かどわかしそこねて、あきらめて、一足はやくひきあげたことだ」

隼人は話した。千姫の誘拐に失敗したのは、坂崎一党の飛び入りのせいであるが、それで気をくさらせて屋敷を去ったあとで、千姫がえたいのしれぬ怪物につれ去られたということを。

「虫が知らせて、ひきかえしたときはおそかった。さらわれた姫を追って、例の女どもも何処かへ消えたということだ。姫を乗物ごめにさらっていった化物の正体がさてわからぬ。屋敷の者にきくと、それが乞食の大女というが」

「なに、乞食の大女？」

捨兵衛は息をひいて、

「そ、そりゃ、おれは知っておるわ。長曾我部盛親の後家じゃ」

憮然として、闇中に隼人の顔をみて、

「実はきのうのひるま、その女とやりあって、さすがのおれも尾をまいた。面目のうて顔も出せず、そっとここへもぐりこんで、明日のいいわけに屈託していたところじゃが、こりゃ、おぬしといい、おれといい、少々こまったことになったぞ」

そのとき、遠くから狂気のごとく飛ばしてくる蹄鉄のひびきがきこえた。隼人がいった。

「おれといっしょに江戸を出た馬だ。いまの件を急報する使者よ」

馬のいななきと、誰何する声と、それに対してのどをやぶらんばかりにこたえる声がもつれあったかと思うと、騒然と跫音がみだれて、大御所の陣屋の方へかけていった。

捨兵衛と隼人はちらと眼を見あわせて、

「ちと、様子をみよう」

と、口ほどこまった顔でもなく、のそりと立ちあがった。隼人の眼からさっきの昂奮がきえて、もちまえの冷たい表情にもどっていたし、捨兵衛はひとごとみたいな顔つきをしていた。うすら笑いして、つぶやいた。

「ふん、あの長曾我部の後家も大きな腹をかかえておったわ。いや、こりゃ険呑なはらみ女ばかり現われて、大御所もおちおち眠ってはおられまい。きのどくでもあれば、可笑しくもあるな」

千姫がさらわれたという知らせに家康が案外おどろかなかったのは、声ふるわせて報告する使者のうしろに、いつのまにやらつくねんと坐っている二人の伊賀者――そのうちの鼓隼人の姿に気がついて、彼の言葉をきくまでであった。家康は首尾よく千姫をかどわかしたのは隼人のしわざかと思ったのである。それが、そうでないとわかったとき、はじめて家康はのけぞりかえった。

「そりゃ、何者じゃ」

「きのう、御鷹野でとらえてはなしたあの乞食女らしゅうございます」
と、捨兵衛がいった。
「乞食女——あれが！」
「あれが長曾我部盛親の女房」
家康の顔は蒼白をとおりこして暗灰色にかわった。息までとまったように、数分間だまりこんでいたが、やがてうめいた声は激情のためむしろ沈鬱ですらあった。
「うぬはそれを知っておって、なぜ見のがしたか」
「知ったのは、そのあとでござります。……あのとき、阿福さまがそれを知らせて下さりさえしたら、もとより放免することはござりませなんだ」
捨兵衛はあごをしゃくった。家康はふりむいた。騒ぎをききつけて、そこに阿福もあらわれていた。捨兵衛はおのれがとがめられるまえに、阿福に責任をなすりつける魂胆だ。
「阿福」
と、家康はつぶやいた。彼は阿福が長曾我部と縁辺のものであることを思い出したのだ。
「おまえは、あの乞食の素姓を存じておったのか」
「はい」
と、阿福はわるびれずうなずいた。窮境におちいるほど冷静となり、ぶきみなまでの沈着さをみせるのがこの女の特徴である。

「あぶないところでございました。あれは女ながら剛力無双のうえに、くさり鎌の達人でございます。八幡も御照覧、あれが生きておるとは、きのうまで存じませなんだ。それがおんまえにひき出されて、千載一遇の好機をつかんだと申しましょうか、やぶれかぶれと申しましょうか、一触即発の兇念を眼中にひらめかすのを見てとりました。それをそらしたのは、わたしの必死の智慧でございます。それゆえ、あれが去ってから、あれをきっと成敗するようにこの捨兵衛めに命じおきましたが」
阿福はみごとにはねかえした。じろりと捨兵衛を見やって、
「その女がまだ生きていて、千姫さまをかどわかしたとあれば、そなた討ちもらしゃったな」
「ふ、不埒な奴めが！」
と、家康はうめいた。捨兵衛を叱ったのか、阿福を責めたのか、曲者をののしったのかわからない。おそらく三人に対してであろう。彼は千姫を襲った運命を思って、両手をねじりあわせた。
「そやつ、いかなるつもりでお千をさらいおったか？　もはや殺めたかもしれぬ……おお、お千をきゃつに殺させてはならぬ！」
事と次第では千姫をも討ち果たせと命じたくせに、矛盾したうめきだが、家康の真実の心理でもある。

「あいや、姫君はぶじ御存生と存じまする。例の女忍者どもも姫を追って姿をけしたとのこと、きゃつらが真田家の者と知り、千姫さまが心の底まで大御所さまをお恨みのことと知れば、盛親の女房は姫に手を下しますまい。されば、拙者どもが」

と、鼓隼人がいった。ぬけめなく、図々しく、おのれらの存在価値をなおさきへつなごうとするのに、

「半蔵を呼べ、服部半蔵はおるか」

と、家康はたちあがって、かんだかい声で呼んだ。それから、ふたりの忍者を恐ろしい眼でにらみすえて、

「両三日のあいだにかならず三匹の女狐を討ち果たすか、お千をこちらにとりもどすと大言したのは何奴か。それを聴いてやったばかりにこの始末ではないか。うぬらの言葉はもはやきかぬ。うぬらにもはや用はない！」

と叱咤した。そして、あわてた顔をみせた服部半蔵に、

「半蔵、きのうの乞食女めがお千をさらってどこやらへ逃げたというぞ。きゃつ、長曾我部の女房じゃと申す。お千を殺したか、謀叛の仲間にひきいれたか、いずれにせよ、まさか江戸にはいまい。おそらくはまだ遠国にはゆかず、この武蔵野をうろついておるに相違ない。黒鍬の者どもをすぐって、即刻草の根わけてもさがし出せ」

と、命じてから、もういちど二人の忍者に怒りの眼をもどして、

「待て、半蔵、うぬの推挙したこの役立たずどもめ、かえって大事な日をむだに過ごさせおったわ。うぬの罪は万死にあたるが、お千らをとらえればさしゆるす。ただそのまえに、こやつらを成敗して参れ」

半蔵は立った。同時に二人の忍者も立ちあがった。

「それは、遠慮いたそうな、捨兵衛」

「うむ、ここで死ぬのはもったいないわ、あたら鍔隠れの精鋭を」

じぶんたちのことをいっているのだ。けろりとして家康の方をみている不敵な笑顔に、家康は憤怒した。われしらず、彼らの妖術をもわすれて、

「斬れ、半蔵」

「御上意だ。神妙にいたせ」

内心の困惑をおさえて、必死につめよってくる半蔵に、ふたりは平気で笑った。

「服部どの、失礼だが、黒鍬者の手ぎわでは、あの女どもはつかまらぬよ。況んや、拙者どもをや」

「いま、拙者らがここで首になりとうはないわけはな、あの女どもを料理できるのは拙者らをおいて他にないことを信じるからです。もういちど、あえて大言する、やつらはかならず討ち果たす！　たとえ大御所さまがいやと申されても、伊賀鍔隠れの忍法の名誉にかけて」

一瞬ふたりの姿がかききえたとしか思われない神速な体術であったが、うしろざまに、跫音もたてず、実に六、七メートルもとびずさったのである。
「待て、隼人、捨兵衛」
　狂気のごとく追いかけた服部半蔵は、陣屋をとび出した刹那、あっと棒立ちになった。ふしまろんで血まみれにならなかったのは、さすがは伊賀者の頭領だ。そこの地面一帯にばらまかれたのは八方にねじくれた釘を突出させたマキビシであった。いま逃げざまに二人が捨てたものである。
「それをのがすな、外縛陣を張れ」
　半蔵が足ずりしながら、しかしこのときそうさけんだのは、陣屋の外の草原に散りみだれた無数の影を、輩下の黒鍬者たちとみとめたからだ。最初の使者の蹄の音にいっせいに眼をさまし、首領の半蔵が大御所に召されたと知って、いちはやく身支度をととのえて出動態勢をつくったのは何といっても黒鍬者である。
　鼓隼人と七斗捨兵衛は立ちどまった。西にかたむいた満月を背に、黒鍬者は横に散開し、両側が突出して急速に円形をえがきはじめた。彼らの影と影との間隔は五メートルもはなれてみえたが、そのあいだをくぐりぬけようとすれば、必ず草の中に埋伏されている刃が湧き出すことを二人は知っている。内部への侵入者をふせぐ「内縛陣」に対して、外部への逃走をさまたげる服部一党の「外縛陣」であった。

「ふびんや、相手を誰かと知らぬでもあるまいに」
と、鼓隼人はにやりとした。同時に一刀をぬきはなって、じっと大地に眼をおとした。
月は地平にしずみかかり、草に墨をながしたように影が接近してきた。数十メートルものびた包囲勢の影である。それを見すますや否や、隼人は刃を地にたらしたまま、その影の尖端を踏んではしった。まるできっさきで大地に巨大な半円をえがくように。
　同時に恐ろしい悲鳴があがって、遠い円陣の影がいっせいにたおれ伏した。ことごとく刃を投げ出し、頸や肩をおさえている。
「これは、男に通う百夜ぐるま。――」
　半円を描きおえて、隼人はうっとりとつぶやいた。
　たおれた黒鍬者たちが血一滴もながれず、傷口ひとつないことに気がついたのは、ずっとあとのことである。その瞬間、彼らはたしかに頸をはしる刃、肩を裂く刀身を感覚したのだ。女の影をもてあそんで、現身をもてあそばれているという幻覚を女にあたえる忍法「百夜ぐるま」は、男の影を斬って、実体を斬られたという幻覚を男にあたえる。むろん、女だって、斬ろうと思えば斬れるだろう。刹那に幻覚とは思わず、たしかに頸の肉を裂かれ、頸動脈を断たれたという灼熱の痛覚、冷たい鋼と血しぶきの匂いまで感じて悶絶しない者があるだろうか。そしてまた影を斬るという恐るべき襲撃をふせぎ得る法があろうか。

外縛陣は破れた。一個所破られたというより、円陣の西半分すべてが寸刻のまに粉砕されたのである。

「服部どの、やがて女狐めらの首土産に帰参仕ると大御所にお伝えを願う」

声はほろばろと、外縛陣のすでに外側にあった。

百夜ぐるまの幻の剣をまぬがれたものの、草に伏して気死したような服部一党が、その声に茫乎たる顔をむけたとき、西の野末に銅盤のごとく赤錆びて沈みかかった満月に、二羽の蝙蝠が舞い立ったようにみえて、そのままふっと消えてしまった。

五

風がひょうと野面に鳴る。秋風の声ではなく、すでにこがらしの音だ。多摩川にさかさにうつる林影は裸で、それをわたる雲はもう冬雲の冷たい色であった。

水のほとりにかがみこんでいた百姓女が立ちあがった。洗ったばかりの米を入れた笊を小わきにかかえてあるき出す。朝の大気に白い息を吐いて、大きくふくらんだ腹も重げだが、顔は薔薇のように生き生きとしている。こんな身重となり、百姓女の姿となっても、まだ華やかさを失わぬお瑤であった。

どこへゆくのか、存外の早足であるいてゆく野は森閑とむなしいばかりのひかりにみちて、人はおろか生き物の気配すらなかった。それなのに、彼女はふと立ちどまったのである。

彼女の影はながく西へのびていた。その影のつきるところに一本の杉の大木があった。彼女はじっとそれを見あげた。

「見つかったようだな、捨兵衛」

「さすがだ。のがすなよ、隼人」

そんな声が杉の枝のなかできこえたとき、お瑤は笊をなげて、飛鳥のように身をひるがえそうとしている。ぱっと宙に白い米が散ったなかに、しかし彼女は釘づけになっていた。笊を放った左手が、そのまま空中に静止して、彼女は苦悶の表情になった。右手がうごいて、帯のあいだの懐剣をぬいて投げようとした。その右手も宙にはたと膠着してしまった。十字架みたいにひろげた両腕の甲に、お瑤はまるで刺しつらぬかれたような痛みをおぼえた。掌を刺す何物もないのに。

さすがの彼女も、地上にのびたじぶんの影の腕を、杉の樹上からなげつけられた二個のマキビシが縫いとめたものとは知らなかった。

「よかろう」

空中の声とともに、二つの影が杉からひるがえりつつおちてきた。鼓隼人はともかく、力士みたいに大兵の七斗捨兵衛が、猫のごとく跫音もたてぬ。——ふたりは、そろそろとちかづいてきた。

「ははあ、こんなところにおったのか」
「黒鍬のばか者どもめ、きょうも越ガ谷あたりの草むらを、洟水たらしてかぎまわっておろう」
「ところで、こやつらの巣はどこかな」
　ふたりはお瑤のまえに立った。眼にみえぬ磔柱を背負ったような女の苦悶の表情を、まるで妖しい花でも鑑賞するようにうす笑いしてながめ入るふたりの眼が、しだいに濁ったひかりをおびてきた。
「真田の女忍者、千姫さまはどこにおる？」
「長曾我部の後家どのはどこじゃ」
　この場合、お瑤は笑った。笑っただけで、返事はない。
「これ、口でいわねば、からだできくぞ」
「これで鍔隠れの忍法がいかなるものかわかったであろう。いままで生かしておいたのは、大御所さまが千姫さまに妙な遠慮をなされて、われらの忍法にもむりなくつわをはめられたゆえだ」
「もはや容赦はない。言え」
　と、捨兵衛はわめいたが、ふいににたりと舌なめずりして、
「この腹じゃが、隼人、しかし、美女だな。おぬしは先夜、千姫さまのお屋敷で、さんざんよい目をみたそうな。こやつは、おれにゆずれ」
　隼人は苦笑した。
「きくことをきいてからにせい」
「なに、女にききたいことをいわせるのは、まずこちらのいうことをきかせてからよ。まずふたりの立ち往生ぶりを見物せい」
　そういうと、捨兵衛はつき出したおのれの腹を、ふくらんだお瑤の腹におしつけた。捨兵衛のからだがすべてにわたって巨大であることを知っている鼓隼人も、やがてそこにくりひろげられた光景には、われしらず舌をまき、眼をとじて、ただ肉の音ばかりきいていた。
　空中に磔になったまま犯されるお瑤の表情に、ひき裂かれるような苦痛と、つらぬくような快感の波紋が交錯し、のけぞったのどから、ついにたえがたいさけびがあふれた。同時に、捨兵衛ののどからも、名状しがたい驚愕のうめきがもれた。
「隼人、はなせ」
　隼人は眼をあけた。捨兵衛とお瑤の立った脚のあいだに血まじりの乳みたいなものがあふれおちていた。しかし、ふたりのからだははなれない。
　七斗捨兵衛はおのれの体液をことごとく吸いあげられる感覚とともに、しかもおのれを緊縛する凄じい肉の環を感じた。「捨兵衛、おぬしの肉鞘をどうしたか」という隼人の狼

狽した声をきいたのは、なかば気が遠くなってからである。
泥から足をぬきあげるような音とともに、ふたりのからだははなれた。捨兵衛はからくもおのれの忍法をとりもどした。皮をあたえて彼の肉はあやうくのがれ去ったのである。
枯葉になお精血はしたたりつづけていたが、やがてそれは緩徐となり、止んだ。おそらく七斗という名詮自性、一夜に百人の女を御するに足る超人的な精血の貯水の所有者でなかったら、捨兵衛は般若寺風伯の二の舞いをふんだに相違ない。
それでも、実体の捨兵衛までが、巨大な水母みたいに半透明になったようなのに、「捨兵衛、大丈夫か」とさけんではしり寄ろうとした鼓隼人は、ふと女をながめ、天を仰いで、
「しまった」とうめいた。
お瑤の手がうごいた。太陽は雲に入り、影はきえていた。しかし、ふたりの伊賀の忍者を見すえたまま、お瑤のうごいた懐剣はおのれののどを刺した。
死を以てみずからの口をふさぐためというより、渾身の「筒涸らし」と「天女貝」の忍法をかけて長蛇を逸した絶望がそうさせたのである。
雲の翳が、曠野に伏した女忍者の姿を黯い紗で覆った。

忍法「人鳥黐」

一

——ぴいんと透徹した冬の大気である。太陽は雲を出た。野はふたたび白日のもとに枯草のひとすじひとすじまであざやかに浮かびあがったが、それはそよともうごかなかった。曠野のすべてが、氷結したようにかがやき、そして静止していた。
草に伏したお瑤はもとより、これを寂然と見おろしているふたりの忍者も死びとのようにうごかない。ややあって、声だけがきこえた。
「あぶないところであった」
「風伯がしとめられたのはこれであったか」
「捨兵衛でなかったら、おれもやられていたな」
と、鼓隼人は戦慄して、やがて一刀をぬきはなって、
「まず、首討とう」
と、お瑤の屍のそばにあゆみよった。服部半蔵に約束した大御所への土産の首だ。
「待て、隼人」

と、七斗捨兵衛が呼んだ。茫乎として立って、彼は巨大な男根をむき出しにしたままの姿であった。それを覆おうともせず、
「せっかくそこにおれの皮がある。それ以上血が混じるまえに――かたまらぬうち塗っておこう」
「ふむ」
と、堤隼人は枯草の上にたまっているおびただしい糊状のものを見おろした。さっき捨兵衛がながした精液である。それは大気にふれて急速にかわきつつ、まるでなめくじの這ったあとのように銀光を発していた。
　七斗捨兵衛がそれを掌でしゃくいあげて、おのれの男根にぬりつけるのを、隼人は笑いもせずにながめていた。それが出来るのは、本人の捨兵衛だけだ。隼人は、この男の精液が風にさらされるや否や、みるみる膠のごとく粘稠化して、それを踏んだ馬の蹄すら釘づけにするほどのものになることを知っている。
　過ぐる日、捨兵衛は、丸橋のくさり鎌の鎖にまきつかれた腕を、皮をあたえてみごとにぬきとった。またいま、お瑤の「天女貝」の虜となった男根を、これまた皮をあたえてのがれ出させた。皮とみえたが、皮ではなかったのだ。それはたえず全身にぬりつけている彼の精液であった。ふつう人間の精液のうち固形成分は十パーセント足らずだが、彼の精液には凄じい膠着力をもつ粘素が、きわめて大量にふくまれているとみえる。液体のうちは異常な粘稠度をもつだけであるが、それが乾くと、皮膚とはいえないなめし革みたいな強靭さをそなえてくるのである。捨兵衛の忍法「肉鞘」とはこれであり、彼がいま「おれの皮」と呼んだゆえんがこれであった。

「よしか」
　捨兵衛が新しい皮膚で剝離のあとをおぎない、身仕度をととのえ終えたのをみて、隼人がふたたびお瑤のそばにかがみこんだとき、
「おい、ちょっと待て」
と、捨兵衛がまた呼んだ。同時にその大きな姿を、すうと草のかげに伏せている。返事よりさきに隼人も身を這わせながら、
「なんだ」
「きゃつが、やってくる。――例の乞食女だ」
「お、長曾我部の女房。――先日、さしものおぬしがいのちびろいした板額か」
　隼人はにやりとした。
「こんどはおれにまかせろ。〝百夜ぐるま〟で地獄へかつぎこんでやろう」
「いや、きゃつ、西の方からやってくるぞ。日は東にある。いかなおぬしでも、影がみえねば百夜ぐるまは廻せまい。――や、きゃつ、立ちどまった。かんづいたか」
　草のなかをいそぎ足であるいてきた乞食姿の大女――丸橋はふとたたずんで、あたりを

見まわした。
「お瑤」
と、呼ぶ。べつに気がついた風情でもない。ただ米をとぎにきたはずのお瑤がいつまでもかえらないので、ひとり様子をみに出かけてきたものとみえる。隼人がささやいた。
「捨兵衛、しばらくここをはずそう。こちらが西へまわるのだ」
むろん、相手の影をとらえるためだ。ふたりは、草の中をはしった。まるで水中を泳いでゆくような四肢のすがたで、魚のような迅速さだ。しかもそれが生物とも思われぬ不思議さは、密生した枯草がひとすじのそよぎもみせぬことであった。
「お瑤」
丸橋はもういちど呼びたて、まっすぐにあるいてきて、また立ちどまった。こんどは二度とうごかない。眼は凝然と地上におとされている。お瑤の屍骸を発見したのだ。――立ちすくんだ影は五、六メートルも西へのびていた。
「お瑤、そなたをこうしたのは何者じゃ」
しぼり出すような声がもれた。
その影の尖端に、依然として草のそよぎもみせず、風のように鼓隼人はしのびよっていったが、ふいに音もなく大きくうしろにとびずさった。突如として旋風がまき起って、あたり一帯の草がなびき伏したのである。丸橋の手もとからたぐり出されたくさり鎌の鎖であった。それが一回転すると、鎖の長さ、六、七メートルの半径をもつ円周内の草はすべて薙ぎ伏せられた。

「………」
隼人はとびさがって、草の中でうめいた。
彼がこの狼狽ぶりをみせた位置はというと、草が薙ぎ伏せられた範囲どころか、実に丸橋から数十メートルもはなれた場所であった。本体から六、七メートルの距離をもつ鎖は、本体と影に正比例して、それだけの長さをもつ鎖の影をえがいた。それは常人にはなんの威力ももたない影にすぎないが、滑稽なことに隼人は、その遠い鎖の影の円周外にたたらをふんだのである。なんたる皮肉、「影」を斬るという破天荒の忍法「百夜ぐるま」は、そのゆえに自縄自縛、いや、相手の鎖のためにかえって金しばりになるという結果を招来したのであった。
しかし、丸橋はべつに隼人の姿を発見したのでもないらしい。その証拠に、一旋回させた鎖を、まるでばねじかけのように袖口からたぐりこむと、そのままお瑤のそばにうずくまって、何やら意味のわからぬ叫びをあげながら嗚咽しはじめた。
「うふ」
草の中で、七斗捨兵衛が笑った。
「気づいたのではない。あの屍骸をみれア、あれくらいの警戒は当然だ。しかし、隼人、

これでおれがあの女に手をやいたわけがわかったろう」
「ううむ」
「さすがの百夜ぐるまも、あの女にはききめがないの。いっそ、おれの方がましかもしれぬ」
「なに。……よし、みておれ、あいつの影を手もとに盗んでくれる」
　と、隼人はうなずいた。
　影を盗む——それは曾て彼が阿福や千姫に対して発揮した妖術である。あのとき阿福の影は遠い土塀に移動し、千姫の影は高い天井に移動した。——しかし、その場合には、相手に彼の本体をみせるか、それとも相手に相手自身の影を意識させるか、いずれかが必要であった。「影と心は一体でござる」と彼はいった。怒りか、愛慾か、心がうごいたとき、心は影となって盗まれ、また影に意識をとらわれたとき、影は心となって盗まれる。これはいわゆる幽霊をみるという人間心理と同様のものであろう。心の恐怖は幽霊という影となってあらわれ、また幽霊をみたという錯覚は、心に非合理な恐怖感情をよびおこす。ただ、影をあるべからざる位置に盗むことは、相手が絶大な精神力の持主でない場合にかぎられたのは当然で、これが果たして丸橋に通用するかどうかは疑問であった。
　丸橋はたちあがった。彼女はお瑤の屍骸を背に負うていた。
「や、ゆくぞ。——捨兵衛、みておれよ」

　と、あわてて隼人が草の中から姿をあらわそうとした。
「待て隼人、もはや百夜ぐるまでもあるまい。見ろ、きゃつ、鎖で屍骸を背負うておる」
「お、それならばなお好都合だ。のがすな、捨兵衛」
「いや、もうしばらく待て。おれはいま別のことを思いついた」
「なにを？」
「あの女をよしや討てたとしても、息の根のとまるまえに、千姫さまのいどころを洩らそうとは思われぬ。それにまだ女狐めらはほかに二匹のこっておるはず。——一人一人では手数がかかってかなわぬ」
　と、七斗捨兵衛はいい出した。
「きゃつがまだこちらに気づいておらぬのがもっけの倖せ。それよりあの女のあとをつけて、きゃつらの巣を嗅ぎ出した方が利口だぞ」

二

「——おかしい」
　最初にくびをかしげたのは鼓隼人であった。
　屍骸を背負った乞食女は、多摩川に沿って、南へ下ってゆく。——うなだれて、とぼとぼした足どりにみえるが、実におどろくべき速度だ。もし正確に観測していたなら、それ

が多摩川の水流とおなじはやさであることに気がついたろう――そして、その流れに、人影もみえぬ苫船が一艘ただよいながれていることにも。

しかし、さすがの忍者もそれには意識がおよばなかった。なぜなら、彼らは丸橋に満身の注意力が集中していたからだ。彼女の速度にあわせてあとを追う。それは大した難事ではないが、ほかに人らしい人の影もみえぬ冬枯れの野に、相手に気づかせないであとをつけるということは、彼らにしてはじめて可能なことではあるが、それだけに他の五感のおよばなかったことは是非もない。

「なんだ、隼人」

「さっき討ち果たした女――あれは米をといでかえる途中であったろう。それはつまり、きゃつらの巣があのちかくにあったということだ。しまった。捨兵衛、きゃつ、こちらに気がついておるぞ。そしてわざとおれたちをまこうとしておるのだ」

「まさか――あの長曾我部の女房が奇妙なくさり鎌をあやつり、大力無双の女じゃということはわかっておるが、忍法を心得ておるとはきかぬ。あの足は、忍者の足法ではない。忍者でのうて、どうしておれたちの姿に気がつくものか」

といったが、七斗捨兵衛もやや自信に動揺を来した顔色だ。なるほど、そういわれれば、いつのまにやら四キロちかくも追ってきた。

そのとき、丸橋はたちどまった。路傍にこわれかかった小屋が一軒たっていた。煤けた

油障子に「わたし舟」とかいてある。太平記で名高い矢口の渡しはもう少し南へ下がったところにあるはずで、それはむかし豊島江戸と鎌倉をむすぶ渡津であっただけに、さらに下流の六郷の橋のかかったいまでも利用するものの多い渡し場だが、これはおそらく近郷の百姓などの往来につかわれる舟つき場なのであろう。冬のことで、いま渡し守もいないのではないかと思われる荒れはてた小屋であったが、その下の流れには二、三艘のもやい舟もみられた。

そのもやい舟のなかへ、ふいに一艘の苫舟がながれついてきたので、はじめて気がついたのである。苫の下からひとりの若い百姓女がたちあがって、

「丸橋さま」

とさけんだ。

「おう」

と、丸橋はこたえて、

「もうよかろう」

と、胸にまわした鎖に手をかけると、お瑤の屍骸をおろしにかかった。舟にのっていた女が、曾て、西城の大奥で、奥女中に化けてまんまと脱出していった女忍者であることに、隼人も捨兵衛も気がついた。同時に、意識の外にあったその小舟が、じぶんたちと平行して川をながれ下っていたこともいまに至ってはっきりと脳裡によみがえり、じぶんたちが

丸橋をつけていたことが小舟からまるみえで、丸橋に何らかの方法で、その女が合図して知らせたに相違ないということをはじめて知ったのである。
「丸橋さま、はやくおのり下さいまし」
「いや、お瑤はこのありさまになりはてたわ。お眉――このままではにげられぬ。にげてきたつもりはない。わざわざここまでおびきよせたのじゃ。やい、大御所狸に飼われておる糞いたちめ、姿をあらわし、ここに出や」
ふりかえって、丸橋に呼ばれるまでもなく、隼人と捨兵衛は真一文字に殺到していた。罵しられたことよりも、いままでのじぶんたちのまぬけさかげんに腹をたてて、ふたりの顔は蒼白にかわっていたが、その鼻づらをかすめて横にうなりすぎた鎖は、さすがに逆上した彼らを鞠のごとくはねかえらせた。丸橋はすでに屍骸を地に置いている。
「や、その顔は、こないだ越ガ谷で、面皮をぬいでにげた化物じゃな。よし、もはやあの妖術はゆるさぬ。この分銅で頭の鉢をくだいてくれる」
さけぶと同時に、鎖は逆に回転して、鉄球が捨兵衛のあたまめがけて薙ぎつけられてきた。
「影――影を盗め、隼人」
あやうく首をすくめて、捨兵衛は悲鳴をあげた。隼人は顔をねじれさせた。
「影は川だ」

丸橋は多摩川を背にしていた。太陽はすでにたかく昇っていたが、依然として東にあり、川は西にあった。丸橋の影は、その川におちているにちがいないが、ふたりの位置ではみえなかった。
「きゃつを、もうすこしこちらにさそい出せ。退こう、捨兵衛」
「いや、待て、それならば」
と、捨兵衛はうなずくと、隼人がその無謀さにあっと声をもらしたほど無造作に、トトトトと前にはしり出していった。その姿を、鎖が横に薙いだ。充分、鎖のおよぶ圏内にあった捨兵衛は、次の刹那忽然ときえていった。いや、消えたのではない。捨兵衛の巨大なからだは、鎖が触れる一瞬前に、大地を蹴って宙をとんでいたのである。
音もなく面を襲った黒い影に、丸橋の鎖はきらめく弧をえがいた。しかし血しぶきはあがらなかった。なんたる大兵の軽快さ、七斗捨兵衛の巨体は丸橋の頭上をななめにとびこえて、すっくと船小屋の板屋根に立っていた。とみるや、そのこぶしから地上の丸橋にびゅっとマキビシがとぶ。同時に、反対側の鼓隼人の腕からも、マキビシの銀光がながれた。
「あっ、こやつ――」
右に左に、からくもこれをかわすと、丸橋は小屋の蔭にはせもどった。上と下、前と後からのはさみ討ちをふせぐためだ。
船小屋の板壁を背にして、女夜叉のごとく立った丸橋めがけて隼人のマキビシはなおと

んだ。彼女はそれをかわしたと思った。それにもかかわらず、このとき彼女の顔が苦痛にひきゆがんだ。隼人のマキビシは、板壁にうつった丸橋の影を、数か所にわたって縫いとめていたのである。

「やった！」

隼人は抜刀して真一文字にはせよってきた。丸橋を動けぬものとみたからだ。彼女が、そのふくれあがった腹を、胎児もろとも串刺しになることはまちがいないと思われた。

「……おおりゃっ」

凄じい声もろとも、しかも丸橋はゆらぎ出した。苦悶に満面を朱に染めつつ、彼女はからだをねじったのである。――隼人にとっては不可能とみたことも、彼女には可能であった。なぜなら丸橋は、たとえ本物の肉体がマキビシに縫いとめられても、なおそれをひきちぎるだけの怪力と気力の所有者であったからだ。が、さすがに両手から鎖と鎌をとりおとし、ねじったからだはだだっと船小屋にぶつかった。

「おう」

愕然としつつ、それとみてふたたび隼人は追いすがろうとしたが、一瞬ためらいをみせたのが不覚であった。丸橋はぶつかりながら、その板壁にこぶしをつき入れた。板は豆腐みたいに穴をあけた。腕が隅の柱にまきついた。とみるまに、まるで杖でも抜きとるようにその柱を抱きこんでとっさの武器と変えていたのである。

「…………」

何かさけんだが、隼人にはきこえなかった。じぶんめがけて飛んできた柱をかわしつつ、隼人も何かさけんだが、丸橋にはきこえなかったろう。柱の一本をもぎられた小屋は、経木細工みたいにたたきつぶされたからだ。それでも凄じい音響とともに、蒼い空に砂けぶりがたちのぼった。

「捨兵衛」

すでに、その位置から十メートルもとびはなれた隼人は絶叫した。小屋の屋根に乗っていたはずの七斗捨兵衛を想ったからである。

三

その一角を覆っていた黄色い砂塵が、やがてうすれかかった。折れくだけた柱や板の上に、捨兵衛と丸橋は二個の銅像みたいにむかいあって立っていた。手ぶらではない。丸橋はふたたびくさり鎌を手にとり、捨兵衛はいつのまにやら一枚の障子を楯にしている。

崩れた小屋の中からとっさに拾いあげたものであろうが、あの恐るべきくさり鎌の猛撃に、破れ障子が何ほどの役にたつものか。――隼人ははせよろうとした。

「寄るな」

と、捨兵衛がうめいた。

隼人は障子のかげで、捨兵衛が巨大な男根をつき出しているのを見た。そこから一条の白濁した噴水がほとばしり出た。――突如、ざあっと障子にちりかかった液体に、さすがの丸橋も面くらったらしい。障子を楯にして、捨兵衛の姿はよくみえなかったから、一瞬に障子の全面をぬらしたものが何かわからず「はてな？」というような眼を見ひらいたが、この男どもが端倪すべからざる妖術をつかうことは百も承知、しかもあえてそれを恐れぬ丸橋であった。

いちど蠟のように半透明になって捨兵衛の影をうつした煤けた障子が、みるみる異様な銀光を放ってきたのに、はっとわれにかえって、

「たわけ、それでこの分銅をふせぐ気か」

笑うと同時に、障子めがけて鎖の分銅をたたきつけた。分銅が紙をつらぬいて、血と脳漿がとびちる光景を彼女は幻覚した。まさにそれは幻覚であった。次の刹那、分銅はまるで獣皮をたたいたようにはねかえってきたからだ。

「おお。これでうぬのへらへら分銅をふせぐ気だ」

障子の向うでたか笑いが起った。破れ障子の穴から眼がのぞき、この奇怪な楯を前にたて、つ、つ、つ――と捨兵衛は寄りながら、また笑った。

「これは、伊賀忍法、人鳥黐――」

丸橋はとびさがった。恐れたのではなく、呆れたのだ。とびさがって、術もなくいたずらに鎖を横なぎにしたのは、その驚愕のあまりである。それでも、通常ならばこの鎖は、桟もろともに障子を微塵に粉砕するはずであった。しかし障子は折れず、鎖は凄じい勢いでそれにからみついて、宙天にまきあげた。七斗捨兵衛はすでに横にとんでいる。

分銅とともに大空に舞いあがった障子から、丸橋は鎖をたぐった。ふつうならば、その鎖は、ほとんど血と神経がかよっているように対象からはずれて、手もとにはねかえるのだ。それなのに、障子を一巻きまいた鎖は、まるで糊づけをされたようにはなれなかった。

捨兵衛ははじめて抜刀した。これこそ彼の待っていた機会であった。彼の全身をぬりつぶした「肉鞘」に通常の打撃は通じない。事と次第ではそれをぬぐこともできる。ただこの大力無双の女の分銅だけは別物であった。またその鎖さばきの神技に、からだの自由をうしなうことをおそれた。まんいち頸などを巻かれたら、いかな彼とて皮をぬぐことはできないのである。しかし、いまや鎖の自由をうしなったのは丸橋のほうであった。

丸橋は鎖と鎌をすてて、ふたたび別の柱をとりあげたが、さすがに狼狽して、

「お眉」

と、さけんだ。はじめてあげた悲鳴にちかい声だ。同時に、

「隼人、いまだ」

と、捨兵衛もさけぶ。返事がないのにふりかえって、はっとした。

この幻怪な死闘のあいだ、鼓隼人は何をしていたか。

彼は、船小屋の下の川に、あの真田の女忍者のきていることを知っていた。知っているのみならず、きわめて気がかりであったが、阿修羅のような丸橋に全力をうばわれて、そちらをかえりみるいとまがなかったのだ。が、いま捨兵衛に促されるまでもなく、丸橋の鎖が障子一枚でその威力を失ったとみた瞬間、もとより彼は行動を起していた。いや、起そうとして、その足がぴたととまったのは、このとき河岸にはじめてお眉の姿があらわれたのをみたからだ。しかも、それがまぶしい日のひかりに雪の精のような全裸の姿であることをみたからだ。

「なんだ？」

思わず、のどのおくでうめいたが、その女がすうとながれるようにこちらにあるいてきたのに、彼はふいにとびのいた。恐れたのではなく、位置をかえて、彼女の影をとらえようとしたのである。この場合に、隼人がこの女の裸身そのものを斬らず、影を斬って悶絶させ、そのあとでその肉身をもてあそぶ気になったのは、いかにも隼人らしい不敵さだが、しかしその実すでにお眉の蠱惑の網にかかっていたといってよい。

きらめく大河を背に、宙を舞う花と枯葉のごとく、音もなくふたりの位置は逆転した。

隼人は西にまわった。彼は笑った眼で女を見すえ、刀身を地にたらした。

――女に影がない！

太陽はいよいよたかく昇っていたが、それだけにものみなすべてくっきりと影を地にお

としているのに、その女の足もとに影はなかった。

そのことに気がついて、隼人は唖然と眼をむいたとき、影のない女忍者は彼に襲いかかった。地にたれた刃のみねにまたがるように、彼にしがみついてきたのだ。――曾て京に出て、堂上の姫君から、伏見、六条三筋町の太夫の影を盗んで、冷然と思いのままになぶりつくしたこともある鼓隼人が、このときまるで美酒の靄につつまれて満身の骨がとろけるような恍惚境におちいった。あやうく刀もとりおとそうとして、なえた腕を必死にとりなおす。

「この、隼人を」

口中にさしこまれた女の舌をかみちぎりながら、刀をその女のうなじにあてて、一気にひき斬ろうとする。――七斗捨兵衛がふりかえって、その姿をみたのはこのときだ。

しかしそれは、ただひとり、両足ふんばり、血まみれの舌をたらし、刃をおのれののどぼとけにあてて横にひこうとする鼓隼人の姿であった。

「危い！」

その声すらも出すいとまもなく、横っとびにとんだ。隼人の刀をはねあげる。間にあったというべきか、おそかったというべきか、このとき隼人はくびに絹糸のようなひとすじをひいて、どうと片ひざをついた。傷は皮一枚であったが、隼人ともあろう者が、まるで麻酔から醒めたように瞳孔をうつろにしている。

その隼人のそばにつっ立って、七斗捨兵衛は、丸橋がむしろ悄然として、こわきにお瑤の屍骸を抱きあげ、もう一方の手にくさり鎌をひろいあげて、岸から川へ消えてゆくのをみていたが、もはや手を出すことは不可能であった。鎖のはしに依然として膠着した障子が、ずるずるとひきずられてゆくのをみていても、隼人がこのありさまでは身うごきできないのである。顔にありありと敗北のいろがにじみ出ていた。

川に苫舟がただよい出した。お瑤の屍をひざにしたまま、丸橋は凝然と川にながした鎖のゆくえを見つめている。そのはしにはまだ障子がねばりついて浮かんでいた。ひざの屍骸より、丸橋の顔の方が蒼白かった。これまた惨たる敗北の表情だ。しかし、その丸橋より、さらに死相を呈しているのは、それとならんで坐っているお眉の顔であったろう。

ふなばたには、一個の小さな普賢菩薩の木像がのっていた。――彼女はそれまでに七体の菩薩像をふなばたに置いた。しかし、それは六体まで水中におちた。舟がゆれたためではない。坂崎一党はもとより黒鍬者すらやすやすとかけた忍法「幻菩薩」が、この伊賀の忍者にはいままで通じなかったのである。それは彼らのもつ超人間的な精神力のためであった。その心の鎧のすきをさがし、見つけ、くいいるために念力を凝集し、消磨しつくしたお眉の顔は、ほとんど屍蠟のようにかわっていた。

苫舟はあやつる者もなく、ただながれた。ようやく岸に立ちあがったふたりの忍者はもう豆つぶほどにみえるが、追ってくる気力は喪失したものとみえる。――ふいに鎖が水中にしずんだ。おそらく捨兵衛が障子にあびせかけた奇怪な液が水にうすれたのであろう。鎖が障子から解きはなされたのはここまではなれてからであった。

四

墨みたいな雲から、霏々として白いものが舞ってきた。ふだんなら、いちばん往来の多い街道だが、時は十一月の末、それに朝からおそろしく冷える日だったから、路に旅人の姿はまったくない。

西の大山はもう粉雪にかすんでみえず、川崎の宿場の東のはずれというのに、その家々の屋根すら、いよいよはげしくなった雪に、もうおぼろであった。――その川崎から、雪にまみれて、トボトボあるいてきた四つ五つの影がある。荒涼とした風物のなかに、ちらちらとなまめかしい紅いものがみえると思ったら、優にやさしい京なまりの声がする。

もっともよくきくと、だからいまの宿場に休んでくれればよかったという不平たらたらのさえずりで、それに対して、江戸まではあとひと息、品川までもう二里だからと、哀願と威嚇と半々の声をかえしているのはただひとりの男だ。

こんなむれは、このごろ毎日のように東へ通る。江戸はあらあらしい男ばかりの町で、女が少なかった。坂東武者のあこがれは京女だ。この需要にこたえて、買われたり、鞍替

えさせられたり、かどわかされたりして下ってくる京女のむれであった。すでに二、三年もまえから駿府浪人の庄司甚右衛門というものが江戸に傾城町をつくりたいと願い出て、大坂のいくさも終ったいまでは、ちかく公許がおりそうだという噂だ。

女衒は、下り女郎衆の不平よりも、雪に閉口したらしい。

「いや、これほどひどうなるとは思わなんだ。そんならそこの地蔵堂のおひさしをちょいと借りてゆこ」

と、路ばたからすこしひっこんだ地蔵堂の方へ、さきにたってかけこんでいった。

雪はますますはげしく、せまい地蔵堂のひさしなど役にたたなかった。そのうえ、格子から中をのぞきこんだ女のひとりが、「あれまあ、これは大けな金勢さまどすえ」とすっとんきょうな声をあげて笑い出したことから、みんな大いに親愛感をおぼえて、ぞろぞろと堂のなかへ入りこむことになった。

金勢さまと女がいったのは、祠のまんなかに鎮座ましました二メートルちかい石の柱であった。それが男根そっくりのかたちをしている。下の方には注連縄がまわしてあった。石には道祖金勢大神霊と彫ってあった。

「へへ、こりゃ江戸入りの戸口で、縁起のいい神さまにめぐりあったものや。よう拝んでいきゃ」

うしろ手に格子戸をしめながら、女衒は笑った。堂のなかは暗くなり、雪あかりに石の

巨根はてらてらと妙なひかりをはねて浮かびあがる。

「ま、どないしたんやろ、この金勢さま、湯気をたてていやはりまっせ」

そういえば、その大陽根に、うすうすと白い水蒸気がまつわりついているようだ。ひとりがふしぎそうにそれをなでた手を、やがてひっこめようとして「あれ」とさけんだ。手がはなれなくなったのだ。あわててもう一方の手をつっぱるとその手も石の表面に膠着した。

「そんなけったいな」

もうひとりの女が、両手をついて、これまたはなれられなくなったのをみて、女衒が、

「いいかげんにあほなまね、よしたらどうや」と眼をむいてよってきて、これも金勢大神霊につかまってしまった。

「うふふふ」

頭上で、ふくみ笑いの声がした。

小さな地蔵堂のこととて、さしてたかい天井ではない。闇でもない。それなのに、そんなところに人間がいたとは、まったく気がつかなかった。が、おぼろなその天井に何やらうごいて、巨大な蜘蛛みたいなかたちに凝集すると、ふわと床におちてきたものがある。音もたてなかったが、それだけで堂の残りの空間がいっぱいになるような大男であった。

「あれ」

と、悲鳴をあげて、のこったふたりの女郎がみなにすがりよろうとして、髪がふれたか、手がふれたか、これも石の性神にねばりついてしまう。

その男もさることながら、この奇怪な石の柱はさらにおそろしかった。まるで蠅とり紙にくっついた蝶だ。むりにひきはなそうとすれば、皮膚はおろか肉までねばりついて、骨も露出しそうな痛みであった。もがけばもがくほど、髪がくっつき、きものがくっついて、みるみる半裸の無惨な姿となった。えたいのしれない恐怖のために、助けをよぶ声すら出ない。

「女郎ども、陽根を以てなりわいのもととするつもりならば、まずこの一物のあだやおろそかにすべきでないことを胆に銘じておけ」

大男根に貼りついて、腰をうねらせ泣き声あげる五人の男女を見やりながら、七斗捨兵衛はげらげらと笑った。栗の花に似て、吐き気をもよおすような濃厚な匂いが、堂の中にみちていた。捨兵衛は急にうすきみのわるいやさしい声で、

「それにしても、さすがは京女、ふんわりと色が白うて、そろいもそろって美形だな。いや、ゆるせゆるせ、寒さしのぎのいたずらがちと過ぎたようじゃが、せっかく思いたったことだ。これから順々に身体を熱うしてもらおうか」

と、唇をなめてちかよってきたとき、地蔵堂の外で声がきこえた。

「捨兵衛、きゃつらをようやく見つけたぞ」

「なんだと？」

「いま六郷の橋をわたって、こっちにあるいてくる四人の女がある。蓑笠つけてはおるが、たしかに女狐めらだ。——おや、捨兵衛、何をしておる？」

「な、なに、くだらぬいたずらだ」

と、七斗捨兵衛は地蔵堂をとび出した。外に立っているのは鼓隼人であった。なお二、三語口早に何かいうのに「よし」とうなずいて、ふたりは雪を蹴たてて東の方へ駆けていった。

きのどくに五人の女郎と女衒は、いつまで金勢大神霊の法力につかまっていることやら。

——武蔵野の曠野にかくれた千姫の一味は、あれっきり渡り鳥にまじって空にとび去ったかのように姿をみせなかった。関八州の関所は厳重にかためられ、懐妊の女はひとりのこらず届け出ることを命ぜられ、黒鍬組は草の根わけて東奔西走したが、彼女らのゆくえは杳として知れなかった。とかくするうちにこの雪の季節をむかえ、江戸城の大御所は予定の滞在期がすぎて、ちかく駿府へかえるという噂もあった。

焦燥しつつ、鼓隼人と七斗捨兵衛は、彼女たちが多摩川のほとりにいるという見込みをあくまで堅持していた。あのとき、丸橋とお眉をのせた小舟は下流の六郷のほうへながれていった。しかし、千姫たちは最初お瑶を見つけ出した付近にやはり潜伏していたのでは

ないか。どちらを追うべきか、しばらく迷ったのも、結果的に両方ともにのがした大きな原因になったように思われる。そして彼らは、もし千姫たちが脱出するならば、彼女たちが以前にいた上方に相違ないと見ていた。そこで隼人と捨兵衛は、交替してひとりはこの東海道を見張り、ひとりは多摩川の沿岸を捜索していたのである。

「この雪にまぎれて逃げる気になったのか」

「そうかもしれん。例の大女もおるぞ」

「ふふん」

笑おうとしたが、捨兵衛の唇がゆがむ。いつかの多摩河原の決闘を思い出したのだ。無勝負ということは、彼らにとって敗北を意味する。それどころか、あの死闘のあとで、彼らはしばらく身じろぎもできないほどの虚脱感にとらわれたくらいだ。――とはいえ、きょうまで血まなこになって探しまわっていたのだから、恐怖の様子はさらにないが、さすが面上凄愴のいろは覆えない。

七斗捨兵衛は、なんのつもりか、背なかに唐傘を一本背負っていた。もとよりそれをひらく気配もなく、隼人とならんで粉雪のなかをひたばしる。

雪にかすんで、東の方から四つの蓑笠をつけた姿がみえてきた。隼人は空をあおいで舌うちした。

「雪の日に百夜ぐるまはまわらぬ。捨兵衛、たのんだぞ」

地に影のないことをいったのだ。捨兵衛はうなずいた。

「おれにまかせておけ」

背から傘をぬくと、ぱっとひらいて前にむけた。――この奇妙な唐傘にはじめて気がついたらしい。心いそぐ足どりであるいてきた四人の女は、はたと立ちどまる。

「この雪花を、優曇華に見たてるは大袈裟か」

唐傘のかげで笑い声が起った。三十歩ばかりの間隔が、急速にちぢまった。傘が、つつつつと雪の上をころがっていったのである。これがただの傘ではない、いつかの船小屋の障子に味をしめた恐るべき楯であることはあきらかであった。

しかし、四つの蓑笠は、凝然としてならんで立ったままである。十歩の距離までちかづいて、かえって唐傘の方がとまった。

薄墨色の空の下、大地に相対した四つの蓑と一つの唐傘、人の肌はまったくみえず、人の声ひとつきこえぬ。そのあいだには雪つむじが白じろと卍をえがいているばかり――まるで判じ物みたいな幻妖の光景だ。

ふいに四つの蓑がいっせいに宙に舞った。人肌がみえぬどころか、粉雪のなかにさくらいろの女体が四つすっくと立った。

「あ。……」

だれが、これに瞳を吸引されずにいられるだろう。思わず傘の上からくびが二つのぞい

て、じっと見つめる。突如、捨兵衛が隼人をひきずりおとした。
「見るな。例の術だ。きゃつらに雪は積らぬ。眼——眼をとじろ！」
が、とじたまぶたの闇にただよう白花の凄じい誘惑に、ふたりは歯ぎしりをした。まぶたをとじても、ながれよってくる女の裸身は眼をあけているのと同様であった。はやくも全身にまといつく女体のうごめきに沈みかかる忘我の一瞬と、それを断たねばならぬという意志力の争闘に、ふたりは身もだえした。しかも、その女体を斬るという行動がふたりにとって最大の危機なのである。
いや、それよりもこう眼をとじていて、れいのくさり鎌は？　と捨兵衛が眼をあけたとき、その頭を風が吹いた。はっと血も寒風に吹かれる思いで、本能的に傘を頭上にかざす。
「や？」
吹いたのは雪風であった。前方に遠く四つの蓑笠姿がにげてゆく。ふたりはようやく幻菩薩の呪法を脱した。
「のがすな、追え」
傘をとじ、雪を蹴たてて隼人と捨兵衛は飛んだ。その足もとに、四体の普賢菩薩がふみにじられて、雪に没した。
ゆくてに六郷の橋がある。その手前で、四つの蓑はたちどまった。橋の上に無数の槍の影が浮かんできたからだ。

六郷川が舟渡しとなったのは、元禄のころ洪水で橋がおちて以来のことで、当時は長さ二百メートルをこえる長橋がかかっていた。それをいま、江戸の方角から粛々とわたってきた行列がある。——雪を透かし、その先箱の金紋をみて、
「しめた」
と、隼人がさけんだ。
「葵だ」
葵の金紋というと、徳川一族だ。徳川一族の何ぴとにせよ、いまとなっては千姫をかばうもののあるはずはない。千姫たちが立ちすくんだのは当然である。
が、次の瞬間、その四つの影は、トトトとその行列のなかへ溶けこんでいった。果たせるかな、そこでただならぬさけびがみだれたった。
「しめた、ではない、隼人、しまったことをしたぞ」
「ここまで追いつめた獲物をうばわれたか」
と、ふたりの忍者はわれにかえって舌うちをした。これが余人ならば万障をおかして奪いかえしたいほどの場合だ。が、葵の紋が相手とあってはそれもならず、それどころかいまではおいそれとそのまえに面を出せぬふたりの立場であった。
「はてな、行列がすすみ出したぞ」
「何のこともない顔をして、こちらにやってくる」

「おかしいぞ。待て、様子をみよう」
ふたりは路傍の雪の上にうずくまった。ひたいを地につけたまま、上眼づかいにじろっと見る。そのまえを、何百かの脚が、雪を泥にかえて通りすぎてゆく。先箱、薙刀、槍、馬、駕籠——それらをつらねる供侍たちは、みな笠と合羽で雪をふせいでいた。
行列は通りすぎた。ふたりは顔をあげた。橋の方には蓑笠はおろか、なんの影もない。
「はてな、きゃつらどうしたか？」
「行列の中にもみえなんだぞ」
隼人と捨兵衛は狐につままれたような眼を見合わせた。すぐに隼人がうめく。
「いま、乗物とならんであるいていた人の顔をみたか」
「うむ、駿府の若殿、左近衛権中将頼宣さま」
「それが——？」
と、いったきり、ふたりはしばらくだまりこんでいたが、やがて同時にささやいた。
「この雪をお徒歩でおゆきなされたとあらば、あの乗物に乗っていたのはいったい何者だ？」

五

——雪のあとの凄いような蒼空であった。箱根をこえると、路はぬかるんでさえいなかった。行列は整々と山を下ってゆく。

陽光にきらめく金紋と、槍、薙刀につつまれて、馬上の徳川頼宣は明るい声で話しかけていた。
「三島の南——半里ばかりのところに泉頭と申すところがござる。むかし、武田の出城があり、のちに北条これをつぎ、いまは石も崩れて廃城となっておりますが、清水池と申す湖にのぞみ、風光佳麗、父上がここに御隠居所をおいとなみになろうとあそばしたのも当然の山水でござる」
まわりは家来ばかりというのに、頼宣はいったいだれにしゃべっているのだろう。馬とならんで葵の紋をうった乗物はゆれてゆくけれど。——
「御隠居所の御作業にとりかかられるのは来年の春でござるが、そのまえに——頼宣が名実ともに駿府の城のあるじとなるのは近日のこと、しばらくお待ちあれ、その日さえくれば、頼宣この身にかえて後楯となって進ぜるほどに」
少年らしいまっしろい歯が蒼空にひかった。徳川頼宣はこのとし十四歳であった。
後年「南海の竜」といわれて将軍家光をすらはばからせた紀州大納言頼宣は、秀忠の弟で、家康の第十子である。
三十六年後の慶安四年、例の由比正雪事件の黒幕との風評が高かったのは、正雪が生前

しばしば紀州邸に出入していたのみならず、事件の発覚後正雪の身辺から大納言自筆の書状が数通発見されたからだ。このとき大納言は江戸城に召喚されて、松平伊豆守以下老中の審問をうけた。頼宣はこの書状をのこらずながめたのち、落着きはらっていった。

「さてさてめでたきおんことにて御座候。もはやお気づかいこれなく候。その仔細は、かの党人ら外様の大名の判を似せ謀書いたし候わば、三代の御恩をわすれ、もし気ちがい候て逆心を企てたりとのおん疑いもあるべきが、われら判を似せ逆心とたばかり候上は、上のお気づかいは少しもこれなく候。さ候えば、ぶじに相すみ申し候」

老中たちは二の句がつげなかった。あとで老中たちが退出する際、酒井讃岐守が、「掃部どの、ただいまの紀伊どのの挨拶おききき候や」と呼びかけたのに、井伊掃部頭はたちどまり、ふりかえり、「あれにてこわがることにて候」と首をすくめてつぶやいたという。

あれだからこわい、と幕吏たちをはばからせた頼宣の叛骨は、しかし少年時代から比類ない英武となってあらわれて、父の家康のもっとも愛するところであった。大坂の役に臨み、兄の忠輝、義直などには五本の戦旗をあたえたのに、この頼宣には将軍秀忠と同様に七本の旗をあたえたこと。家康が駿府にひきあげるのに際し、とくにこの公子を手許においたのはそのあらわれである。そして家康は、さらに三島ちかくの泉頭に隠居して、駿府の城は駿河百万石をそえて頼宣にゆずるつもりであった。これは以前からの予定で、その

ための手はずはととのっていたから、家康も江戸の空にどんな思いののこることがあろうと、ひとたびは駿府にかえらなければならぬ。一足さきにゆく頼宣の行列は、たんなる前駆ではなく、百万石の未来の待ちうけたよろこびの旅であった。

「……その頼宣さまが、千姫さまをおかくまいなどなさるとは」

「大御所さまに弓ひかるるも同然」

「まかりまちがうと百万石を棒にふることになる。信じられぬが」

「しかし、そうとしか思われぬ。千姫さまとあの女狐めらはどこにきえたのか」

高い空でささやきかわす声がした。小暗いまでに枝をさしかわした杉木立の上である。その下を、街道が通っていた。三島と沼津のあいだであった。

「いや、なんといっても思慮の足らぬ年だ」

「所詮通らぬことでも通ると思う。十四の心にはどんなひょんな風が吹くやらしれぬ」

「――や、来たっ」

「よいか、見つかるな」

まったく姿はみえないが、まぎれもなく七斗捨兵衛と鼓隼人の声であった。行列は杉木立のあいだに入ってきた。木漏れ日が黄金の斑のように笠のながれを這う。

乗物の中には千姫がのっているはず、笠と合羽につつまれた供侍のなかに、丸橋とふた

りの女忍者がまじっているはず——というのが隼人と捨兵衛の見込みだが、顔さしこんでいちいち点検するわけにもゆかぬ徳川御曹司の大行列だ。六郷からここまで、あとになりさきになりして追ってきて、ついに何やら妙案を思いついたものとみえる。

杉木立のなかほどまでやってきたとき、ふいにその屋根にビラビラ——と微かな音をたてたものがある。冬時雨かと思って、ふとそれに眼をやった供侍が、

「やあ、これは」

と、仰天した。その屋根にきらきらひかっているのは無数の針だったからだ。

「御乗物をとめよ、狼藉者だ」

「曲者があらわれたぞ」

騒然と乱れたつ行列のなかに、さすがに乗物からいそいで姿をあらわした者がある。若い徳川頼宣の顔であった。乗物の屋根に立った針の方角から、きっと頭上を見あげたが、そこにうごく鳥獣さえもなく、まばらな蒼空がひかってみえた。

「さわぐな、若殿は御無事じゃ」

走りよってきた老臣の安藤帯刀が叱咤して、頼宣を乗物におしこんで、

「いそげ。まずこの杉木立をぬけよ」

と命じた。それをひしとつつんで、行列は急湍のごとくかけぬける。

——針を吹いた位置からずっとはなれた杉木立のなかで、茫乎たるささやきが、風にそ

よぐ葉ずれの音にまじってながれた。

「おい、乗物の中にいたのは若君ではないか」

「そういえば、馬に頼宣さまのお姿はなかったな」

「いつのまに入れ変ったか。——」

「隼人、行列の人数は箱根まで何人であったかな」

「駕籠の中にいる人間をいれず三百七十七人」

捨兵衛はしばらく口の中で何やらつぶやいていたが、やがてうめいた。

「いま、おれは勘定していたのだがな、頼宣さまをのぞいて、三百七十三人であったぞ。四人減っておる」

「なに？」

隼人ははっとしたような声をもらした。

「箱根からここまでのあいだに——その四人はどこで消えたのか？」

——行列が杉並木をかけぬけると同時に、安藤帯刀は鉄砲隊を指揮してはせもどってきた。鉄砲隊は一列にならんで、銃口を空にむけていっせいに射ちあげたが、高い杉木立からむろん鳥一羽すらおちてきはしなかった。

忍法「羅生門」

一

十二月四日、大御所家康は江戸城を発した。そして、十六日に駿府についた。さきに駿府にかえっていた頼宣卿がこれを江尻まで出迎えた。

江戸と駿府のあいだ四十四、五里の行程に十二日を要したのは、出府のときと同様、みちみち放鷹しつつかえってきたからだ。けれど、従臣たちは、大御所の様子にゆきと異る或る変化をみとめた。ひどい陰鬱さと、不安になるくらいの老衰ぶりである。七十五歳の老人にあらためて老衰云々というのはおかしいが、しかしこれほどの衰えは、出府のときには決してみられなかったものだ。どんな事態にあっても、めったにふきげんを面にあらわさず、それでいて、千軍万馬の諸大名を震慄させずにはやまぬ壮気は、家臣たちに「神君」という尊称を心底からささげずにはいられないほどのものであったのに、この帰途の大御所は、路々の鷹狩も、その老衰と苦悩を自他ともにまぎらわす方便ではないかとさえ思われるほどであった。そのうえ、途中、小田原ちかくでは大雪にまで逢って、そのふきげんを倍加した。

駿府の城にかえっても、家康は鬱々と思案にくれていたが、数日たってから、ふいに、

「服部半蔵と黒鍬の者を呼べ」

と命じた。

とるものもとりあえず、服部半蔵は駿府に急行してきた。すでに何やら覚悟をきめたもののあるごとく、冷たい庭前に平伏した半蔵は満面蒼白であった。

「お千はまだ見つからぬか」

と、家康はしゃがれた声でいった。半蔵は汗のしたたるひたいを土につけた。

「恐れ入ってござりまする」

家康はしばらくだまっていた。それから――「死ね」という言葉か、直接成敗の刃が下るものと観念していた半蔵の耳に、思いがけぬ声がふってきた。

「まあよい。あれはしばらく捨ておけ」

これも、事情を知っている側近の家来たちには、大御所の気力の衰えとあとになって思いあわされたことである。

それから家康が半蔵に命じたのは、ただちに泉頭の隠居所の普請にかかれということであった。普請という言葉は、いまではむしろ建築そのものをさすが、当時は土木を意味し、建築のことは作事と称した。土木工事ならば黒鍬者の所管だから、その頭領たる服部半蔵を召しよせたのに不審はないが、それはそれとしてこの場合、いささか唐突な命令ではあ

った。大みそかは数日ののちにせまっているし、泉頭の隠居所の作事はまえから決定していたとしても、それは陽春をむかえてからということになっていたからだ。

「あいや」

と、そばにいた御曹司の頼宣が、びっくりした顔をふりむけた。

「父上、それはなぜでござります。泉頭の御普請は、来春、将軍家の方からなし参らせるはずでござりますが」

「さればよ、それだから将軍家をわずらわすまいとして、わしは半蔵を呼んだのじゃ」

と、家康はくびをふって、そして泉頭の隠居所の本格的普請作事は春のこととして、それまでにできるだけその下準備をしておきたいのだといった。泉頭には北条時代まで城があって、いま城そのものはないが、いたるところ濠のあとや土居の名残り、石垣の崩れなどがのこっている。それをできるだけはやく整地しておきたいと思いたったが、これはじぶんのわがままだから、秀忠を待つまでもなく、じぶんの手でやろうと思う、というのであった。

「頼宣、何やらわしは心いそぐ。そなたには一日も早うこの城をゆずりたい。これも老人の気短かさと思うてくれい」

と、家康は笑った。これも家来たちには、大御所のみじかい余命を虫が知らせたものと、のちになって暗然とされたことである。

大御所の思いたったことをふせぐすべはなく、きけばそれも当然で、駿府城のあとをつぐべく運命づけられている頼宣には、ありがたがらずにはいられない老父の慈悲ときこえるはずであったのに、なぜかこの十四歳の公子の顔には狼狽のいろがあらわれた。

「服部どの服部どの」

ふいに呼びかけられて、黒鍬者一党の先頭にたっていそいでいた服部半蔵はぎょっとした。

鋤、鍬、斧、鉄槌、鉄梃、掛矢、それに滑車やモッコをかつぎ、地車までひいて急行する一団は、素姓が音にきこえた黒鍬者だけに、ありきたりの戦闘部隊よりも異様な凄味があって、ゆきこう旅人もみな眼を見張って路をよけるなかに、ひどくなれなれしくこう呼んだものがある。海鳴りのきこえる東海道、沼津と原宿のあいだの三本松だ。

路傍から、つと立ってきたふたりの男は山岡頭巾で面をつつんでいたが、眼は不敵に笑って、

「いや、おひさしぶりです」

「いったい、どちらにおゆきで？」

と、寄ってきた。

その眼をみて、いよいよぎょっとしたのは半蔵ばかりではない。黒鍬者たちも、いっせいに騒然とした。が、さすがにとっさにひとりも手を出すものがない。

それも当然で、越ガ谷で服部の外縛陣をみごとに破られた超人的な幻法を想い出したからであった。

「いや、服部どの、よく首がありましたな」

と、唐傘を背負った七斗捨兵衛は、依然としてニヤニヤして、半蔵の顔をながめまわす。鼓隼人の方は、冬晴れの蒼い空をけろりんかんと仰いでいる。その実、万一の場合のために、太陽の位置や雲の配置をみているのだが、いかにもひとを小馬鹿にしているようにみえる。

「実はおととい、服部どのがひきつけを起したような眼つきで西へ走ってゆかれたのを、箱根山中で見ておりましてな。そのときは先日の一件もあり、心安う呼びとめることもかなわなんだが、あとになって、ひょっとするとゆきさきは駿府かもしれぬ、いや、ゆくさきは駿府ならぬ冥府、用件は首に相違ないと思ったら急に心配になってな、それで様子をうかがいにここまでやってきたところじゃが」

「それというのも、服部どのを案ずればこそ。――何と申しても服部家は、伊賀の忍者の宗家ですからな」

と、隼人は頭をもとにもどしていった。先夜のことなど念頭にないしゃあしゃあとした顔だ。服部半蔵は絶句してふたりをにらみつけたままだ。

「それが首にもならんで、きょうえらい勢いでひきかえしてこられたは、例の女狐めらを

見つけたとでも仰せられたか」

「その鋤鍬道具はまさか千姫さまが地中におわして、それを掘り出すためではござるまいな?」

真剣と嘲笑と半々にまじりあったようなふたりの問いに半蔵はこたえず、

「おぬしら、いままで何をしておった。越ガ谷で、女狐めらの首、土産にしてかえると大言しておったが」

「されば、首こそ土産にはできなんだが、ひとりはたしかに討ち果たしてござる」

「なに？　それはたしかか」

「服部どのに嘘をついて何になります。したがって、真田の女狐はあと二匹、それに千姫さまと例の長曾我部の後家とあわせて四人、われわれが東海道をさがしまわっておるのは四人の女どもでござるが」

といいかける隼人を、捨兵衛がおさえて、

「はて、服部どのは何も御存じないのか」

「東海道――きゃつらが東海道を上ったと申すか」

と、服部半蔵は眼をかっとむいてきいた。

「関東を出る関所はことごとくきびしくかためてある。なかでも箱根を、臨月ちかい女のやすやす通れるはずはないぞ」

「それにもかかわらず、われわれが箱根の西、このあたり一帯をさがしておるわけは」

と、捨兵衛がいいかけるのを、こんどは隼人が制した。

「いや、それより服部どの、どうやらこれは千姫さま一件のことではないらしいが、どこにおゆきです」

「泉頭の御隠居所御普請の御用だ」

と、半蔵はやや面目なげにつぶやいたが、すぐにせきこんで、

「おい、千姫さまがこの界隈にひそんでおいであそばすとでも申すのか」

「泉頭？」

こんどは七斗捨兵衛の方が半蔵の問いにこたえず、隼人と眼を見かわして、

「おお、三島のそばの城のあと――」

と、つぶやいて、ふいにだまりこんでしまった。そういわれて思い出したことがあるらしく、何やら胸中に反芻している様子である。ふいに隼人がきっとなって、

「ところで服部どの、先日拙者どもに上意討ちのお声をかけられたが、ただいまの御所存はいかが」

「それは」

と、半蔵は相手のひとみから発する妖光に思わず一歩さがって、

「若しおぬしらがあの高言のとおり女狐めらをことごとく討ち果たしたら、大御所さまに

御挨拶のしようもあろうが」

といったのは、この両忍者がとうていじぶんたちの手におえるものではないことを知悉しての言葉だが、そればかりでなく、おのれの推挙した伊賀の精鋭をいかに大御所の命令とはいえ、得べくんば上意討ちなどにしたくないという気持もたしかにあった。

ふたりの眼から殺気がきえ、にやりとした。

「いや、そうあってこそわれらが宗家。たとえ大御所を敵にまわすとも、服部家に敵対いたしとうはない」

と、七斗捨兵衛がうなずいた。おだてるような、神妙な語調がこの男の厚ぼったい黒ずんだ口からもれるとうすきみがわるいが、ひとたび買った大御所の怒りをなだめてふたたび栄達の糸をつないでくれるのは、この服部半蔵しかないという計算はあるにしても、伊賀の忍者と服部家との関係をかんがえると、必ずしも面従腹背のことばではない。

半蔵はせきこんだ。

「そんなことより、千姫さまらのことだ。あの女どもはどこにおると申すのだ」

「服部どの、ふしぎなことがある。実は一ト月ばかりまえ、拙者たちは江戸からこの東海道を西へにげ出した例の女どもを追跡した。それが箱根から三島――三島から沼津への道中、どこかへ消えてしまったのだ。これより西へいったおそれは絶対にない。そのあいだに、甲州とか伊豆とかへぬけたかというに、拙者らほどの忍者の眼にも耳にも捕捉できな

かったから、左様なことも金輪際ないと断言できる。ところが、いまは泉頭という名をきいて、はっと思いあたることがあったのだ」
と、捨兵衛がいえば、隼人も頭をぐるっと三島の方へむけて、
「おれがさっきふと言った、まさか千姫さまが地中におわして、それを掘り出すための鋤鍬ではござるまいな、という言葉は冗談のつもりでござったが、ひょっとすると、それは冗談にならぬかもしれぬ」
眼が、凄じいひかりをおびてきていた。

二

冷たく碧い水面に、白雪をかぶった富士がさかさにうつっていた。清水池は、三島の西南二キロの位置にあり、南北に千百メートルばかり、東西にはひろいところで二百メートル、せまいところで五十メートルほどある小湖である。泉頭はこの小湖のほとりにあった。
「北条五代記」に「見しはむかし、北条氏直と武田勝頼弓矢の時節、勝頼の城駿州四か所にあり、泉頭の城には、大藤長門守、多田権兵衛尉、荒川豊前守を頭とし、足軽大将は市南、高橋などという勇士をさしおかれたり」とあるのはここだ。武田家がほろんでのち北条氏がこれをついだが、その北条もほろんでから二十五年、廃城どころかもはや原形もとどめないが、それでも丘陵に沿うて、自然でない土の堆積やくぼみが散在しているの

は、土居や濠の名残りであろう。あちこちに転がっている巨大な石も、風雨に磨滅してはいるが、たしかに人工の痕がある。
湖岸の水になかばつかったその巨石の上にならんで、釣糸をたれていた六、七人の男が、ふいに背後にちかづいてきたただならぬ跫音に、おどろいてたちあがった。
「これ」
黒鍬組の先頭にたって呼んだのは服部半蔵だ。そのあとにつづく、鉄槌、掛矢までかついだ一団に、釣をしていた男たちは恐怖していっせいに竿をとりおとした。近郷の百姓たちだ。
「うぬら、ここにちかく大御所さまが御隠居所を御作事あそばすことを存じおるか」
「へ、たしか来年の春から——」
「それ知っておって、なぜ池の魚をとる?」
返事のしようもないので、へどもどしている百姓たちの魚籠を七斗捨兵衛がのぞきこんで、
「や、鯉か。鮒もおるな。寒鯉寒鮒といえばいまが食いごろ——」
鼓隼人も笑顔をむけて、
「ところで、その方ら、ここ一ト月ばかりのあいだ、この池の界隈にあやしい者を見受けなんだか」

「あやしい者――といわっしゃると？」
「このあたりの百姓とはみえぬ女など」
「女――女ではねえが、百姓ではない者といえば、二十日ばかり前、十何人かのお侍さま方がやってきて、やっぱり魚をとっていたおらたちを追っぱらわれたことがありますだ。なんでも駿府からござらしたお侍たちで、大御所さまと若殿さまとかが二、三日中に御鷹野においでなさる用意のためだとおっしゃってでがしたが、べつに鷹狩はそれっきりなかったようだ」
隼人と捨兵衛は顔を見あわせたが、何もいわない。服部半蔵にいたっては、何とも判断のかぎりではない。彼が駿府に呼ばれる以前に、城にどんなうごきがあったか知りようはないし、第一彼は隼人と捨兵衛から徳川頼宣という名をいちどもきいたことはないからだ。
「けしからぬ奴が、やがて大御所さまが御賞味あそばそうと愉しみにしておわすに、それをいま盗みとるたわけ者ども、魚はみな放して、はやく立ち去れ。今日以後盗漁するに於ては、その方どもの命はないぞ！」
と、半蔵は叱りつけた。百姓どもは釣竿は枯蘆のなかにそのままにして、ほうほうのていでにげ散った。あと見おくって、
「よし、探せ」
と、半蔵は麾下にあごをしゃくって命じた。百姓たちをおどしたのは、魚のことよりも、

鼓隼人と七斗捨兵衛に示唆された千姫一味の潜伏場所の捜索に、邪魔者を追いはらうためであったことはいうまでもない。
黒鍬者たちは猟犬のごとく湖岸一帯に散った。それから数刻――石垣を覆う枯れ蔦をきりひらく、石を鉄梃でたたく、掛矢で打つ、不審の気のある個所を鋤鍬で掘りかえす――黒鍬者たちはその真面目を発揮してさがしまわった。
西の夕日がおちて、残照が蒼味をおびてくると同時に、湖面を吹く風は氷のような冷たさにかわった。
「おらぬ」
と、服部半蔵がうめいた。ばかなまねをしたという顔だ。
「おりませぬか」
あれほど熱意を以てすすめたくせに、ふたりの伊賀者の忍者はひとごとみたいな顔で、湖の冷光を見わたしている。半蔵はにがりきった。
かんがえてみれば、いかに千姫一味が世をしのぶ身でも、こんな廃墟にひそんでいるわけはないと思う。すくなくとも、いままでここに身をかくしつづけているわけはないと思う。江戸と駿府のあいだという位置は危険でもあるし、食糧の不安もあるし、そもそも無意味なことでもある。
「どうする？」

「何をです」
「とぼけるな、おぬしらの約束——女狐らの首のことだ」
「それは、かならず」
あまり平然としているので、半蔵は少々うすきみわるくなった。とはいえ、これ以上、みれんがましくこの手合にかかわりあうのは、忍者の宗家のこけんにかかわる。痛烈皮肉な語調になって、
「それでは、明日より、この地一帯の普請にかかるぞ。それが終るまでにおぬしら高言を果たさねば、女狐の首のかわりに、おぬしらの首をもって駿府にかえるよりほかはあるまい」
「そのとおりです」
半蔵は憤然として背をみせた。手をふって、輩下を呼びあつめる。三島の宿にひきあげるのである。

三

月も星もない夜であった。清水池だけが、かすかにおぼろな水光をはなってひろがっている。凍りつくような風が、湖をめぐる雑木林と枯草に笛みたいな悲叫をあげさせていた。
「隼人、まだなんの気配もないか」

「まだ——水くらいは汲みに出ることと思うが」
「やはりこのあたりにいるにまちがいはないな」
「うむ。例の鷹野の用意にきたという連中がくさい。あれは頼宣さまの手のもので、おそらくあらためて糧食を補給にきたものとみる」
「おれもそうきいたが、それにしても、あの若殿が千姫さま一味をおかばいだてなさるのは、どうかんがえても腑におちぬな」
「頼宣さまだけならよいが、あれは大御所御寵愛第一番の御曹司であろう。はたして大御所にないしょであのような大それたことをなされたかどうかが、まだわからぬ。ひょっとして、大御所も御存じの上のことだとすれば——」
「千姫さまふびんさからの心変りか」
「左様。さすれば、千姫さま一味をとらえてとくとくと名乗り出たおれたちが一番ばかをみることになる」
「いちど大御所の御存念をたしかめずばなるまいな」
「とはいえ、大御所の御存念がどうあろうと、きゃつらをのがすことはならぬぞ」
「もとよりだ。友康、風伯、一天斎の怨霊がゆるさぬ。またきゃつらの首ひッさげずしてなんの顔あって伊賀に帰れんやだ」
「それよりも——」

と、鼓隼人は闇中で笑った。
「首にするまえ、あの女ども、犯し、瀆し、なぶりぬいてくれねば気がすまぬ」
「おれはなあ」
と、七斗捨兵衛もぶきみなうめきをもらした。
「千姫さまを抱きたい。おれにかかったら、姫、ひょっとするとおれの鳥黐に九穴をつまらせて涅槃に入られるかもしれぬが、体内極楽にあふれる思いでお死になさるだろう。おれも、あの柔肌をいちど抱きさえしたら、大御所を敵にまわしても不服はないわ」
鼓隼人と七斗捨兵衛が、せっかく黒鍬者をみちびきながら、途中から彼らとはなれて知らぬ顔の半兵衛をきめこむにいたった理由は、すべてこの対話のなかにある。すなわち大別すれば二つ、大御所への疑惑と千姫への慾望だ。
ところで、彼らは千姫たちの一味がこの湖畔の廃墟に潜伏していることに確信はもっているものの、その正確な場所は探知し得なかったらしい。――それで、黒鍬者の引揚げにまかせ、ひそかにのこって、獲物の這い出すのを待っているわけだ。
「しっ――」
何かふいにさけぼうとした捨兵衛を、隼人がおさえた。湖岸をあるいてくる跫音をきいたのだ。ひとりではない、しのびやかだが、たしかに数人の跫音であった。
「案の定――」

彼らは灌木のなかからとび出した。月も星もないが、彼らは丘をのぼってゆく四つの蓑と笠の姿をはっきりとみとめた。音もなく、彼らは追跡した。そして隼人と捨兵衛は、その四つの影が、丘のふもとの岩の中へ忽然と吸いこまれるのを目撃したのである。
岩の中へ――むろん、そんなことのあり得るはずはない。事実は、その岩がまるでくるる戸みたいに回転してひらいたのだ。そういうことはあろうとは想像していた。むしろそれ以外にはないと確信していた。しかし彼らも黒鍬者たちもそれをつきとめることができなかったのは、それが露出した丘の地肌の自然岩としかみえなかったからであった。それがうごくと想像するにはあまり巨大でありすぎたからであった。
「ううむ」
ふたりはそのまえに立って、ふりあおいだ。石のあちこちには掛矢でたたいたあとがある。それでなんの反響も感じられなかったから、さすがの黒鍬者たちも見のがしたのだ。それほど大きな岩盤なのに、気をつけてみれば、いかにも自然の亀裂にみえる微妙なすじがはしっていた。
「これか。――」
捨兵衛がかるく押したが、びくともうごかない。制止しようとした隼人は声をのんだ。鍔隠れきっての大力の捨兵衛が、満身ふくれあがって押すのにかかっても微動だにしない石の扉に、捨兵衛同様あきれたのである。

「これは武田のつくった城であったな」
「すると、信玄の案出したからくりか」
茫然(ぼうぜん)として腕ぐみしているふたりの頭上で、闇黒のこがらしが噛う。——そのうちふたりは、ふっと妙なことに気がついた。四つの蓑笠(みのかさ)がここから出ていったのではなく、ここに入っていったことだ。するときゃつらは、いままでどこにいたものか？
「お、うごくぞ。——」
隼人と捨兵衛はとびさがった。
そそりたつ大岩壁がしずかに廻りはじめた。そしてやがてその前に、四つの蓑笠姿ともうひとつの大きな影があらわれるのを見たのである。ふつうの人間ではまったく視力のきかない闇の中だが、このふたりにどうして見まごうことがあろう。その大きな影は、まさに長曾我部の後家丸橋であった。それとみつつ、「……？」ふたりがくびをかしげてしまったのは、丸橋を入れて影がぜんぶで五つあったことだ。
五つの影は、しとしとと岩壁をはなれかけて、ふいに、
「あっお待ち下されまし」
丸橋がさけんだ。
「だれか、闇にひそむものがありまする」
さすがだ。うごきかけた隼人と捨兵衛はむろん、四つの影もぴたととまった。隼人が捨

兵衛にささやいた。
「一人たりとものがしてはならぬ。影が欲しい。火が欲しい。捨兵衛、燃すものはないか？」
「よし、これを燃やせ」
捨兵衛は背の傘をぬきとって、ぱっとひらいた。その音をたよりに、くさり鎌の分銅がこがらしをつん裂いたとき、それより十メートルもとびずさった位置で、めらっと火焔(かえん)があがった。
さすがの丸橋が息をのんで見まもった。燃える唐傘の柄(え)をにぎって、不動明王のごとく七斗捨兵衛は立っていた。とみるまに、その傘から金蛾(きんが)のように火の粉がふきはじめた。傘をまわし出したのだ。まるで縄でもなうように捨兵衛の掌(て)で柄がもまれたかとみるまに、燃える傘は風にのって、びゅうっと大空に舞いあがった。
見よ、闇天にまわる火の環(わ)！　炎の瓔珞(ようらく)を垂れる朱色の天蓋(てんがい)！
思わず「ああ！」とさけんだきり見あげたままの四人は、その傘が風にながれると同時に、じぶんたちの影もくっきりとうかび出て地をながれたのに気がつかなかった。からくもわれにかえったのは丸橋で。過ぐる日、彼女はこの敵の影を斬る妖術のために惨憺(さんたん)たる目にあっている。
「影——影！　おひきなされませ！」

絶叫しつつ、岩壁の方へとびずさる。その言葉の意味もわからず、なお茫としてつっ立つ四人が、突如として疼痛に硬直した。四つの影はマキビシで大地に縫いとめられていた。

　このときはやく、鼓隼人は四人の前に殺到していた。時ならぬ闇夜の日輪は、ひと息つくまに消えるだろう、それと知りつつ、苦悶に金縛りになったままの四つの笠をまずはねのけたのは、いうまでもなく千姫がどれか見出すためであった。

　驚愕のさけびがあがった。隼人の口からだ。

「――駿府の若殿！」

　面を覆ったが、おそかった。夜空にもえる炎の傘は、四人の武士のなかに、痛みと怒りにひきねじれた徳川頼宣の顔を浮かびあがらせたが、鼓隼人の顔もはっきりと照らし出した。火の傘はながれて、一瞬にもえおちたが、頼宣がたしかに見たことは次の叱咤でわかった。

「伊賀の者どもよな」

　影がきえて、奇怪な痛みから解放された三人の家来たちは、抜刀して隼人の前後をとりかこんでいる。捨兵衛の姿はどこかに溶けていた。

　のがれるすべはなかった。隼人らは以前に駿府の城で頼宣に逢っている。江戸城でも挨拶したことがある。抵抗するすべもなかった。相手は徳川の御曹司だ。

「余にむかって推参な！　そこうごくな」

　はじめて隼人は、さっきの蓑笠の姿がだれで、どこからやってきたのかを知った。わからなかったわけだ。それはあの女忍者たちではなく、駿府からやってきた頼宣たちにちがいなかった。――みずからも一刀をぬきはらった少年頼宣のまえに、隼人は膝をつき、狼狽して手をあげながら、

「御無礼、おゆるしを――若君とは思いもかけず――拙者らはただただ大御所さまのお申しつけにより、例の真田の曲者どもを討ち果たさんがため死汗をしぼっておる者でござります。いまの所業は、まったくおん姿をその曲者どもと見あやまったがため――」

「左様な曲者がどこにおる？」

　頼宣がそういったとき、隼人は例の石戸が音もなくひらき、閉じ、丸橋がすうと消え失せるのをみた。

「その曲者は、あの岩壁にはめこまれた石戸の中に」

　隼人はもはやこたえず、さげすむような眼で、じっと頼宣の顔を見つめたままであった。あの石戸が捨兵衛の怪力を以てしてもひらかぬことは先刻みたとおりだ。しかし逆に少年頼宣の眼の方に動揺がはしった。

「左様な石戸がどこにある？」

「よし」

　と、彼はうなずいた。

「過日、沼津近傍で余の駕籠に不敵な狼藉をしかけたのもうぬらであろう。えい、いうな、何もかもわかっておるわ。うぬらの無礼は駿府の城にかえって糺す。立て」

隼人はなおだまって、じろっと頼宣を見つめている。闇に火のように赤いぶきみな眼であった。しかしその不遜な眼は頼宣たちを金縛りにしているようにみえて、例の大岩壁を蜘蛛みたいに捨兵衛が這いまわるのをみていた。その股間から、白い乳のようなものをたらしながら——

やがて、しゃがれた声でいった。

「殿。……若殿よりいかなる御糺明にあずかりましょうと異はとなえませぬが、ただ、拙者らは大御所さまに召されたもの、御成敗は大御所さまお臨みのお白洲にて受けとう存じまするが、これのみおききとり下さらば——」

この無礼ともきこえる申し分に、頼宣はやや顔色をかえたが、それをどうきいたか、

「おお。もとより父に申さいですむことか」

といってから、ぐるりとまわりを見まわして、

「これ、もうひとり仲間がおったが、あれは如何いたした？」

捨兵衛が蝙蝠のように岩壁からとんで、そのまえにひざまずいた。

「恐れ入ってござる。拙者はここに」

隼人ははじめてたちあがった。彼は捨兵衛があの石戸の輪廓を例の精液でなぞりおえたのを見とどけたのだ。「人鳥黐」は膠着し、これから二タ月三月の風雨にさらされたとて、もはや内部からひらくことは不可能であろう。

ふたりは神妙にあたまをさげた。

「いざ、お供つかまつります」

四

——元和二年の正月を、鼓隼人と七斗捨兵衛は駿府城内で迎えた。ことによると、牢くらいには入れられるかもしれぬと覚悟していたが、ふたりが案内されたのは、本丸の一室であった。しかも、数人の美しい腰元をつけて、至れりつくせりの待遇である。前年の夏、彼らが大御所に伊賀から呼び出されてこの駿府の城にきたときも、これほどのもてなしは受けなかった。

これで頼宣が、彼らを罪人としてみていないということはあきらかになった。それではなんのために彼らをこの城につれてきたのかわからない。もっとも、彼らは厳重に見張られてはいた。秘密の囚人であることにまちがいはなく、どうやら西の丸に住む大御所は、ふたりがおなじ城内に閉じこめられていることは知らないらしい。

数日にして、ふたりは給仕の腰元たちを薬籠中のものとした。頼宣もとくに志操のかたい娘たちをえらび、しかも万一のことを警戒して、給仕の際も、四、五人一組になって入

室するように命じてあったのだが、まず音もなく影を犯す隼人の忍法「百夜ぐるま」は、彼女たちを無抵抗に夢幻の恍惚境にひきずりこんだ。ひとたび甘美な「百夜ぐるま」に蕩揺した女は、もはやその軀からのがれることはできない。爾来、その秘室のなかに、隼人と捨兵衛はさもたいくつげなうすら笑いをうかべ、そのまわりに、声をしのび、しかも快美にひきつけたような姿態を纏綿させる女たちの万華鏡に似た光景をみたら、頼宣はどんな顔をしたろう。

　ともあれ、これでふたりは、城内のだれもが、泉頭に千姫たちが潜伏していることはむろん、頼宣がひそかに城をぬけ出してそこを訪れたことすら知らないことをつきとめた。ただ問題は、大御所もはたしてそれに盲であるかどうかである。服部半蔵に急に泉頭の普請を命じたこととの裏面に何やら一物ありそうに思われる。実はこれは隼人と捨兵衛の買いかぶりであったが、若し大御所が千姫をゆるし、また彼女の望みを容認する気になったとすると、事が事だけに、愛児の頼宣のみにひそかに意をふくめて奔走させる可能性もあるとかんがえられるし、また頼宣が大御所に無断でうごいているとすると、事はあまりに重大にすぎる。それがわかれば頼宣は眼前にぶらさがった駿河百万石を棒にふるだけではすむまいと思われるからだ。

　十日めに、ふっと隼人がいった。

「捨兵衛、きゃつらの胎児はこの月うちに生まれる勘定であったな」

「左様、順当ならば」

「ひょっとすると――おれたちにここでむだ飯くわしておくのは――頼宣さま、それを待ってござるのではないか？」

　捨兵衛は隼人の顔をみて、ニヤリと笑った。

「胎児は女の岩戸から出ようと、女どもはあの天の岩戸からは出られぬよ」

　隼人も笑ってうなずいた。彼らが頼宣に飼い殺しにされていて、平然としている自信のもとはここにある。隼人はいった。

「何にしても、いちど大御所の御心底をさぐって見ずばなるまいな」

「されば、大御所さまが女狐めらをゆるす気になられたならなられたで、それで事は分明。さっぱりとうごけるのじゃが。もうしばらく様子を見ようかい」

　ふたりがあごをなでて待っていたのは、岩戸封じの自信もあるが、城も元旦以来、さまざまな正月の儀式に寧日がないからでもあった。江戸からはもとより、京の禁裡、また諸大名や寺々や豪商たちの参賀の使者はひきもきらず、とうていこのふたりがうろんくさい顔を出す余地はない。

　そのなかに、服部半蔵の姿もみえる――ということを、ふと知ったのは一月十三日の朝のことであった。閉じこめられているはずの座敷をぬけ出すのは隼人にとっていたずら半分であったが、その動機もべつに大して意味のないことだったのである。たんに泉頭のそ

の後の様子を、それとなくきいておこうとかんがえたにすぎない。
「服部どの、おめでとうござる」
鎧蔵のそばを、しかつめらしい裃すがたであるいていた服部半蔵は、突然鼓隼人の声をきき、声とは反対の塗込めの蔵の壁にありありとその影を見たが、隼人の本体はどこにもみえなかった。それは承知の上のことだからあえておどろかないが、それより「はてな」と思ったのは、彼がこの城の中にいることだ。
「隼人、大御所さまへわびがかなったのか」
「左様で」
隼人の声はこともなげに笑い、
「その後、泉頭の方は如何です。御普請もだいぶ捗ったことでござろう」
「――そのことだ」
と、半蔵はうなずいた。さっきあるいてくるあいだにも腕ぐみをして、ふかい思案顔だったのである。
「実は、あの地には不審なことがあるな」
「ほ、不審とは？」
「大御所さまがあの清水池のほとりを御隠居所とさだめられたについて、どのようないきさつがあったか、わしはよく知らぬが、何とも心得がたい怪事があり、実はこのむね言上

のためにも参ったのだが、折悪しく、というのも妙だが、時は正月、いまその凶事を申しあげるのも心はばかられて、むなしくひきさがってきたのだが」
ひとりごとのようにいう。よほど屈託していることがあるらしい。
「そりゃ、いかなることで？」
「あれ以来、湖畔ではたらいておる黒鍬の者に、発狂する者がある。発狂といってよいかどうかはわからぬが、とぎれとぎれに三、四人、いや五、六人にもなるか、生まれたての嬰児同然に化した者があるのだ。両手をちぢめ、口は……」
返事はなかった。いつまでもなかった。
「隼人」
ふりかえると、鎧蔵の壁にうつっていた影は消え、松に初春の風が鳴っているばかりであった。
――鼓隼人は、もとの座敷にもどった。このあいだ、彼の足はもとより大地を一歩もふまず、屋根をとび、軒下を這い、壁をつたって、城士の眼にはまったくとまらない。
「捨兵衛、おぬしの人鳥黐は破れておるぞ」
「なんだと？」
愕然とする捨兵衛に、隼人はいまの半蔵の話を語った。それから――曾て彼が千姫屋敷で、同様の怪異に見舞われた坂崎一党のことを語った。

「すると、それは――」
「それはつまり、あの真田の女狐が岩の中から出て、その姿を黒鍬者に見つけられたのだ。それで、その黒鍬者は、きゃつの忍法のいけにえになったのだ」
「しかし、おれの封じた石戸を破るとは？」
「おい、捨兵衛、敵の中にはあの丸橋という女がおるのだぞ。きゃつの人間ばなれした怪力には、多摩河原でおれもおぬしも舌をまいたではないか」
「よし、おれは泉頭へいってみる」
七斗捨兵衛ははねあがった。自尊心を傷つけられた怒りに、巨大なからだがいっそう巨大にふくれあがったようであった。
「おれもゆこうか」
「なに、おれひとりでよい。ふたり消えては、女どもがこまるだろう。泉頭までたった十六里、明朝までにはかえってくるわさ。よし思いがけぬことが起って手をやくことがあるにしても、四、五日うちにはきっと吉報をもってかえる。それまで隼人、何とかここをごまかしておってくれい。たのんだぞ」

五

頭領が駿府へいって留守だからといって、仕事をなまける黒鍬者ではないはずだが、ま

だ夕日があかあかと照らしている野路を、もうそわそわとひきあげにかかっている。泉頭から三島へ入ろうとするそのむれのまえに、路傍で煙管をくわえていた男が、ゆらりと起ってきて、
「おい、待て」
と、呼びとめた。むろん黒鍬者たちは知っている。七斗捨兵衛だ。それにしても朝駿府にいた捨兵衛が、夕焼けの三島に姿をあらわしているということは、鍔隠れの忍者ならではのことだ。空を仰いで、
「やけに仕事じまいがはやいじゃないか」
と、からかうように笑う。ひとりがいやな顔をして、
「いや、これにはわけがござって、お頭のおいいつけでもあります。黄昏から夜にかけてあの池のほとりにうろうろしておると、滅び失せた城の亡魂のたたりか、気のふれる者が数人出まして」
「それは服部どのからきいた」
ふいに、きっと顔色をあらためて、
「服部どのからの命令だ。今宵はおれの指図に従ってもらいたい。いや、この人数は要らぬ。二十人ほど残って、あとはひきあげてよろしい」
半蔵からの命令ときいて、黒鍬者たちは粛然となった。捨兵衛のずぶとい嘘だが、黒鍬

者たちにとっては、余人はしらずこの男にだけはそういうこともあり得ると判断したのである。いうままに、二十人をのこして、あとの連中は三島へひきあげた。

「さて、もういちど泉頭へ参るのだ。廃城の亡魂とやらを見せてやろう」

動揺する黒鍬者たちに、

「おれがついておるのだ」

と、捨兵衛は吐き出すようにいった。その一言で、彼らに首領の半蔵よりも磐石のたしかさを感じさせたのは、しらずしらず、この鍔隠れの忍者の迫力にまきつつまれていたせいであったろう。

捨兵衛が二十人のみをのこしたのは、もとより「廃城の亡魂」に気どられぬためであった。彼は、この二十人をふたたび泉頭へ忍びかえらせ、清水池のまわり約百メートル間隔に埋伏させた。まだ赤い夕日は沈みきらぬのに、この行動中鳥一羽も飛び立たせなかったのは、さすがに七斗捨兵衛の指揮であり、また黒鍬者の精妙のわざでもあった。

湖は朱鷺色にかがやいていた。水ではない。氷が張りつめているのだ。昨夜のうちに張った薄氷であった。その日は晴れているのに風が冷たく、ついに蒼い水はあらわれなかったが、その太陽のせいで、ところどころその蒼みが透いてみえるほど薄くなっていた。

それは湖畔に出て、女がかるく指でおさえただけで、その指の下の氷にひびが入って、水にしずんだことでもわかった。女は、岸に桶をおき、なかからとり出した布を、その水

で洗っていた。

そのうしろに、朦朧と七斗捨兵衛の姿があらわれた。背をみせて、何も気づかぬ風の女をじっと見つめたまま、彼はうごかぬ。

やがて女は、洗い物をおえたとみえて、桶を片手にもどりかけて、丘と岩肌とのあいだに黒々と立ちふさがる捨兵衛をみた。

「よう、あの石戸を出たの」

と、捨兵衛が感にたえたようにいった。女は桶を地においた。

「破ったのは丸橋か。丸橋は健在か。うふふ、ちとなつかしい。おぬしと同様に」

女はそのきものをぬぎすてた。ぬぐというより、一瞬、肌の上からきものが溶けたようであった。お眉である。

七斗捨兵衛は一刀をぬきはらった。歯をむき出した。

「信濃忍法とやら——伊賀と、忍法くらべはこれが最後と思え」

刃をまえに、まっすぐに立てたのに、雪けむりのようにお眉のからだはとんだ。とみるまに、その二本の肢が白い雌蕊みたいにひらいて、捨兵衛の頸にまきついていた。捨兵衛の刃は、彼女の背後に立てられたままであった。ふつうの者なら、その肉の香に眼もくらみ、息もつまるはずである。ただ忍者にかぎり、辛うじてその刃をさかしまに女を刺そうとする気力を失わぬ。曾て、それで黒鍬者のひとりはおのれの胸を刺し、鼓隼人はおのれ

の頸の皮を斬った。

「——その手はくわぬ！」

捨兵衛は絶叫した。同時に、女の裸身をまむかいの肩ぐるまにしたまま、湖岸にはしって、先刻、女が割った氷のあたりへ、びゅっと刃をなげつけた。

戛とそこから鋭い音が発して、その刀身は折れている。捨兵衛の頸にからみついていた裸身はきえて、その湖岸の位置に、折れた刃とともに、これまた両断された普賢菩薩の仏像が宙にとんだ。そして「あっ」という声のきこえたのは、湖面の上であった。

お眉は薄氷の上に立っていた。依然としてきものはつけたままだ。——いま、捨兵衛を襲った影は、湖畔一帯に埋伏している黒鍬者たちにはみえなかった。彼らがみたのは、水のほとりにうずくまっている女の背めがけて斬りつけた七斗捨兵衛の姿だけである。しかし、その刹那、あきらかに見るも重げな腹をしたその女が、触るればくだける氷の上に、羽根のようにのがれ出したのをみて、思わず「——おおっ」と自身の眼をうたがううめきを発した。

おどろくべきことは、次の瞬間、その女の倍はある捨兵衛がおなじくふわと薄氷の上に立ったことだ。とみるや、女は身をひるがえして湖上をはしりはじめた。捨兵衛がこれを追う。まさにこれは人ならぬ蜉蝣の決闘といえた。曲者をとらえるべく配置された黒鍬者たちであったが、このあいだ茫乎として眼を見はっているばかりで、おそらく女がどこか

の岸にたどりついたとしても、全身しびれたようになって手は出せなかったろう。しかし、彼らがいっせいにもらした嘆声は、女の足をはたと湖心にとどめた。

一瞬、同時にたちどまった七斗捨兵衛の股間から乳のようなものがほとばしり出た。白濁した液体は朱鷺色の氷上を矢のごとくすべっていって、女の足もとに達した。

女は、ふたたびうごこうとして、そこに氷結した。悍馬の蹄すらとどめる捨兵衛の精液だ。人鳥黐は、人捕黐であった。

「おんな」

素手をひろげ、ちかづきながら捨兵衛は笑った。

「声をあげて、丸橋を呼ぶがいい。ただし、あの大女は、ここには来れぬな。くさり鎌の鎖もとどかぬ。——もう一匹のこっておるはずの女狐を呼ぶか。きゃつなら忍者、或は氷をわたれるかもしれぬが、くればうぬとおなじ運命だ」

彼は片腕をむずとお眉の腰にまき、片腕でその裾をかきひらきながら、氷の上におしたおし、おり重なった。

「これ、最後にひとめ、この赤い氷の湖をみろ、極楽浄土としか眼にうつるまい？　ことのついでに、うぬに極楽浄土の思いをさせてやるわ」

お眉の背の氷がわれて、そのからだがなかば水中にしずんだ。しかも彼女は底ふかくしずまぬ。その上に四つン這いになった七斗捨兵衛に懸垂されていた。ほとんど言語を絶す

る壮麗な落日のなかに、一は氷上、一は水中、その接点で女を犯しつづける七斗捨兵衛は、奇怪な陶酔に思わずわれをわすれかけて、突如、

「——うむ！」

と、うめくと、そのからだをはなそうとした。お眉の「天女貝」の忍法を感覚したのだ。

心得たり、とその口は笑いかけた。いや、そのからだは完全に離脱したと思った。——しかし、ふたつのからだははなれなかった！

彼の肉鞘はまさに女の体中にあった。しかし、肉鞘をぬいだ彼の男根を、まるで片腕つかんだ羅生門の鬼のように、もうひとつの何物かがつかんだ。冷たい、柔かい何物かが——ひとめみて、捨兵衛の総身に驚愕の波がわたった。それは小さな、あかい嬰児のこぶしであった。

驚愕と同時に、四つン這いになった彼の四肢の下で、氷がわれた。そのひびきをききつつ、彼の手はそのこぶしをつかみ、ひきはなそうとした。しかし、それは章魚みたいにぐにゃりとくびれただけで、彼をはなそうとはしなかった。次の瞬間、きらめきとぶ薄氷の破片のなかに、七斗捨兵衛は女忍者と小さなこぶしでつながったまま、湖底の氷獄へ沈み去った。

湖畔に埋伏していた黒鍬者たちは、この光景をみていた。しかし、ふたりのあいだに何

が起ったのかよくわからなかった。たとえわかったとしても、捨兵衛をたすけにゆくことはできなかった。薄い氷のはりつめた湖は、泳ぐことすら不可能としていたからである。よしまた、そこにたどりついたとしても、湖心にあらわれた人型の蒼い水面はみるみる白濁して、そのゴムに似た強靭な膜は、地上の人を完全に水中と隔絶したに相違ない。

朱金の火粉をまきちらしつつ、日は沈んだ。茫然としたままの彼らは、宵闇のなかに、あの岩壁にほそいひびが入り、みるみる大きな穴となったことに気がつかなかった。そして——二十人の黒鍬者たちは、ひとりとして、ついに三島へかえらなかったのである。

彼らの手足をちぢめ、口をつき出し、ふくれあがった水死体が、つながった男女の屍といっしょに、青みどろにぬるみはじめた湖面にうかびあがってきたのは、ずっとのちの春になってからのことであった。

忍法「夢幻泡影」

一

一月十六日のことである。江戸の方角から三島に入ってきた惣黒漆（そうくろうるし）に金蒔絵（きんまきえ）の一挺（ちょう）の女乗物があった。駕籠者（かごもの）をはじめ供侍（ともざむらい）も十人あまり従っている。まだ日はたかい時刻で、このまま三島は乗打ちしてゆくつもりらしく、町も西はずれちかくまでいってから、

「あ、待ちゃれ」

と、乗物のなかから声がかかった。供侍が、

「何か、御用でござりまするか」

「え、いまそこを通りすぎた魚売りの男をとめてたも」

と、乗物の女の声はいった。そういえば、いま往来を振り売りの百姓らしい男がとおっていったが、天秤棒（てんびんぼう）でかついだ荷は、たしかに魚の尾をのぞかせていたようだ。侍（さむらい）はあわてて、呼びにかけもどっていって、その振り売りをつれてきた。

「鯉（こい）と思うたが、やはり、みごとな。……」

と、乗物の引戸をあけさせて、女はその鯉をながめいった。魚売りの男は、容易ならぬ

身分の女と直感して、冷たい往来に土下座（どげざ）をしている。水をいれた盥様（たらいよう）の桶（おけ）に、はねないように網でくるまれた四、五匹の鯉は、いずれも二尺から三尺ちかくあり、みな生きていた。

「鯉は精（せい）がつくと仰せられて、大御所さまの何よりの御好物。これ、振り売り、この鯉はどこでとれたのじゃ」

「小浜池（こはまいけ）でござりますだ」

と農夫はおどおどとこたえた。

「小浜池とは？」

小浜池とは、三島の西北にあって、富士の雪がとけて地底をくぐり、ここに湧き出すといわれる清冽（せいれつ）な大池で、この地一帯の水田を灌漑（かんがい）する源流だという意味のことを、百姓はしゃべった。

「おお、左様にきよい水に棲む鯉ならば、いよいよ美味でありましょう。膾（なます）にして進ぜようか、鯉こくにして進ぜようか。何にしてもよい土産（みやげ）を見つけたもの。——」

と、女は眼を生き生きとさせて、

「これ、この鯉を盥（たらい）ごめに買いとって、この宿場より人足をやとい、このままいっしょに駿府（すんぷ）にはこばせてたも」

といって、乗物の引戸をとじさせた。——竹千代の乳母阿福（おふく）である。

阿福は、駿府にゆく途中であった。江戸城でのさまざまな正月行事も一応おわって、大御所へ挨拶にゆくところなのである。ただし、むこうからよばれたわけではなく、こちらからおしかけてゆくのだ。大御所から丸橋一件のことについてあらためて咎めはうけなかったとはいえ、あきらかに不興を買ったものとみて、それまで大御所の信任を一身に負うていただけに、いてもたってもおられず、何とかしてその疑心をといておかねばと出かけてきたわけであった。

献上の鯉を供にした阿福の一行は、十九日、興津で、四、五人の従者をつれた服部半蔵とすれちがった。しかし、深編笠をかぶった半蔵を阿福の方では気がつかず、半蔵の方も、鯉をはこぶ女乗物の一行を、ちらと見ただけで、ふりかえりもせずに早足で東へあゆみ去った。

二十日、阿福は駿府についた。しかし、いつもとちがって、すぐに目通りはゆるされなかった。唐代に編まれ、支那では宋以後まで亡佚した「群書治要」を刊行することは、家康晩年の望みの一つであったが、いよいよこの一事にとりかかるため、金地院崇伝、林道春らの学僧儒官をまねいて、ここ数日諮問中だということであった。

「ならば、いよいよお疲れであろう」

と、やや鼻じろみつつ、何事にも拱手していない阿福はうなずいた。

「献上の鯉は台所へ運んでたもれ。それでは、わたしみずから料理して、大御所さまへ進ぜましょう」

そこへ、阿福がきたときいて、京の豪商茶屋四郎次郎が入ってきた。茶屋は代々徳川家の御買物御用をつとめ、朱印船や、上方一円の町人の御礼支配などの特権をあたえられる一方、徳川家の経済顧問ともいうべき家柄だが、これまた数日まえ駿府にやってきたのに、大御所が右の事情のため、手もちぶさたな顔でぶらぶらしていたのだ。

「せっかく生きたままの鯉ならば、生作りが面白うございますな。お、それに先刻、榊原内記さまより大鯛二本、甘鯛三本の献上があったときいた。これを胡麻の油であげて、蒜をすってかける南蛮料理が、このごろ京ではやっております。いや、それではわたしが、じぶんで指図して料理してさしあげましょう」

彼は商人らしく、もみ手をしながらいった。この豪商が無類の美食家で、通人で、そしてじぶんでも庖丁をとるのが道楽であることは有名だ。阿福は彼にまかせることにした。

翌日、家康は近郊に鷹狩に出て、夕刻帰城した。その日の夕食に、この料理が出された。御曹司頼宣、崇伝、道春、それに得意顔の茶屋四郎次郎とともに、阿福もはじめて目通りをゆるされ、陪食の席についた。

四郎次郎じまんの南蛮料理もさることながら、それより家康らを嘆賞させたのは、みごとな鯉の生作りであった。大鉢に横たえられた鯉は、ぱくぱくと口や鰓ぶたをうごかしている。四郎次郎がすすみ出て、庖丁で首ねをみねうちすると、鯉はぴちりとはねた。どう

じに、最初からはなしてあった皮がぱらりとおちて、その下に細作りに切りならべてあった肉が、ばらばらとふりおとされた。

「阿福がくれた鯉と申したな」

と、家康はいった。阿福は面目をほどこして、うれしげにこたえた。

「三島の小浜池の鯉でござります。道中たまたま眼にとまりましたのを、是非生きたまま大御所さまに召しあがっていただきたく……」

なんぞ知らん、この鯉こそ、七日まえ、真田の女忍者と七斗捨兵衛が死闘をくりひろげた清水池からとれたものであろうとは。

鯉を売った農夫は清水池近在のもので、ここ数日、池のまわりに黒鍬者たちの姿がないのに気をゆるして、またも密漁したのであったが、服部半蔵から禁じられたおぼえがあるだけに、阿福にきかれてとっさに小浜池といつわったのだ。ましてや、その清水池の湖底に、ふたりの忍者と二十人の黒鍬者の屍骸がしずんでいようとは、この座にあっただれが知ろう。

僧侶の崇伝をのぞいて、一座の人々はうまがって食べた。なかんずく、あけて七十六歳になりながら、一日の放鷹でこころよく空腹をおぼえていたせいもあって、家康は人いちばい食べた。

鉄蹄に砂けぶりをひいて、服部半蔵がはせもどってきたのは、その晩餐がちょうど終った時刻であった。

二

泉頭の怪異を大御所にうったえようとして、黒鍬者の誇りもあってためらい、ついにむなしく三島へひきあげた服部半蔵は、そこにのこって思案投首の輩下から、例の伊賀鍔隠れの忍者七斗捨兵衛が、半蔵からの命令だと称して二十人をひきいて泉頭に去り、それっきりゆくえを絶ってしまったという事件の報告をうけて仰天した。輩下たちは半蔵からの下知だと信じていたればこそ、そのことについての判断を、急使をはせて半蔵に仰ぐことも遠慮していたのだが、半蔵はそんな命令を下したおぼえはまったくない。それよりも、あの捨兵衛をふくめて、直参の黒鍬者たちがそれほど大量に、いちどに消失してしまったことこそ一大事だ。

もはや、ためらっているときではない。彼はこう決断して、大御所の指図をうけるべく、悍馬をとばせて駿府へはせつけてきたものであった。

「なに、泉頭に――」

と、家康は箸をとりおとした。

半蔵は、その事件に関連して、どうしても例のふたりの伊賀の忍者が、いちどに泉頭を千姫らの潜伏地として目したことがあるという事実にふれなければならなかった。そのとき

は確証はあげられなかったが、いまにして思えば、泉頭に怪異を呼んでいるものは、たんに廃城の亡霊とは思われず、たしかに生きている「何者」かではあるまいかと判断される——というのである。家康にしてみれば、千姫が箱根以西にのがれ出しているということを耳にするのもはじめてのことだ。おどろきをこえて疑惑の眼をそそいでいる大御所に、半蔵は、もしこのことについて御不審あれば、おそらくいまも当城にまかりある鼓隼人をお召し下されたい、といい出した。これまた家康には思いがけぬことだ。

「鼓がこの城におると申すか」

と、さけんだとき、天井から、うすい巨大な羽根をもった蛾のような影が、音もなく下に舞いおちてきて、平伏した男の姿となった。

「鼓隼人、これに」

家康のみならず、一座のみなが片膝たてた。家康はさけんだ。

「隼人、何ぴとのゆるしを得てこの城に参ったか」

「頼宣さまに召されて参ってござる」

と、隼人は不敵な上眼づかいで、頼宣をみていった。頼宣は蒼白になって隼人をにらみかえしている。両者をちらと見かわして、家康はいった。

「頼宣が呼んだとは？」

「こやつ——わたしが駿府にかえる途中、駕籠に吹針を吹きつけおった曲者でございます

る」

「その曲者を何として、美しい腰元までつけて一ト月ちかく扶持あそばされましたるや」

と、隼人はうすら笑いをうかべていった。実は、七斗捨兵衛への信頼から、捨兵衛がかえらぬのに彼は焦れて、いくども泉頭へおのれも飛ぼうと思いたちつつ、もう一日もう一日と待ちぬいたところへ、服部半蔵が早馬を以てかけもどってきたときいて、さてはと様子をうかがいに忍んできていたものであった。半蔵の話に、捨兵衛が討たれたことを確信して、彼の眼は憤怒にうすびかっている。

「吹針を吹いたのは、あの御駕籠に千姫さまがあらせられると思えばこそ——それ、たしかめんがためでござった」

そして、せきこんだ家康の問いに、隼人は多摩河原以来のことを語った。頼宣の行動に大御所がなんのかかわることもないことが判明した以上、おそれることは何もない。

「頼宣」

と、家康はふりかえった。怒りに顔色も声もしずんでいる。

「隼人の申すことはまことか。まことならば、存念を申せ」

頼宣は面をあげた。蒼白になっていた頬の色が美しく紅潮し、眼が恐れげもなくかがやいて老父を見かえした。

「存念は、お千どのが好きであったからでございます」

と、きっぱりといった。

「それゆえ、お千どのの望みをかなえてやりたく存じたまでのこと」

幼い日から頼宣は、大坂の城に嫁にやられた美しい「年上の姪」に、夢のような愛着を抱いていた。その大坂の城といくさがはじまってからは、その城へまっさきかけて疾駆しながら、薄幸な彼女への哀れさが胸をかんだ。すでにこのとき彼は、千姫が父の政略結婚の犠牲者であったことを直感している。十四歳という年齢のゆえに彼はだまっていたが、その年齢ゆえに父をゆるしてはいなかった。雪の六郷橋で、はからずもじぶんの行列にかばいこんだのは、その同情の爆発だ。同時に、老獪無慈悲な父への抵抗だ。それ以来彼は、真田の女忍者からきいた泉頭の廃墟の秘密を利用し、何としてでも千姫をかくしぬき、秀頼の子をのこしたいという彼女の悲願をかなえさせようと苦心してきたのである。

「ちょうどよい機でござる。父上に申しあげたいことがございます」

からだだけは、壮夫のごとき大兵である。そのよく発育した胸をまっすぐにたてて、きっと家康を見た眼は、あけて十五になる少年の、澄んでもえるような眼であった。思わず家康は動揺して、

「何じゃ」

と、嗄れた声でいった。

「お千どのの望みをとげさせておやりなされませ。秀頼どののお子をその手に抱かせておやりなさりませ」

「そうはならぬ。頼宣、そちは、乳飲児の牛若をゆるしたばかりに壇ノ浦でほろぼされた平家の話を知っておろう」

「それは平家が驕ったからです。壇ノ浦以前、石橋山以前に、平家はみずからほろぼしていたのです。徳川は、そうはなりませぬ。この頼宣が、そうはさせませぬ」

「こ、この黄口児めが！」

「左様、乳くさい頼宣なればこそ申すのです。恐れながら父上には、御余命とてもいくばくもありますまい。秀頼の子がたとえこの世に生まれてきたとしても、それが大人となるのは二十年ののち、万一それが徳川家に弓ひくとき、それをふせぐのは父上でのうて、わたしどものはずでござります」

まさに父に弓ひく矢のような痛烈な言葉が、若々しい唇からほとばしり出た。この麒麟児の勇ましさをもっとも買っていた家康だが、しばし唖然として声もない。

「未来の徳川家の運命をになうのは、わたしどもの肩であります。老先みじかい父上ではありませぬ。重荷はいかに重くとも、それをおそれる頼宣ではござりませぬ。しかし、その重荷に罪がつまっていることは恐ろしゅうござる。豊臣家をほろぼしたのは戦国のならい、これは罪ではありますまい。が、その豊臣の子を、腹にいる子まで追いまわして皆ごろしにしようとなさる父上の御所業には、罪の匂いが感ぜられます。父上、父上は何の力

によって天下を御手に入れられましたか。それは律義(りちぎ)な父上七十六年の御生涯が、人々の心をつかんだからでございましょう。それをいまにいたって、何を血迷うておけがしなさりますか。あの義理がたさは化けの皮であった、まことはむごい、非道なおひとであったと烙印(らくいん)をおされては——やがて墓に入られる父上はよろしゅうござりましょうが、あとにのこったわれらが迷惑いたしまする。いかに豊臣の子をみなごろしにしようと、それでは謀反人(むほんにん)は、その徳川家自身の罪の烙印から、うじ虫のごとく這い出して参ること、鏡にかけてみるがごとくでございます」

眼に涙をうかべ、切々という、十五歳の少年の、むしろかなしげな態度から吐き出されることばは、しかし思いきった恐ろしいものであった。家康のみならず、座につらなる金(こん)地院崇伝(ちいんすうでん)、林道春(はやしどうしゅん)、阿福、茶屋四郎次郎ら、いずれも煮ても焼いてもくえぬ面々が、唇を鉛(なまり)いろにしたまま、だまっていた。それは頼宣の言葉が、あたかも天がこの少年の口をかりていわしむるごとく、彼らすべての良心のまとをつらぬいているからであった。

「父上、お千どのは、わたしに委せられませ」

「頼宣」

と、家康はしゃがれた声で、ようやくいった。

「父に叛(そむ)くか。いやさ徳川に叛くか?」

「わたしは徳川家をまもるのです」

「この城と、駿河百万石をすてるか?」

頼宣は微笑した。美しい少年の笑いであった。

「お千どのをおゆるし下されば、百万石が何でありましょう」

家康はたちあがった。暗灰色の顔色に眼が白くひかって、はたと頼宣を見すえた。

「末恐ろしい奴が——駿河はやらぬ。お千もゆるさぬ」

と、さけんで、服部半蔵を見やって、

「半蔵、泉頭にゆけ。もはやお千をとらえろとは申さぬ。女狐ともども殺せ」

「はっ」

「黒鍬の者どものみにては手ぬるい。いそぎこの城より百人ほども狩りあつめよ、鉄砲ももってゆけ。このたびこそは討ちもらすな」

「父上」

と、袴のすそをつかんだ頼宣を、家康は蹴かえした。大御所にはめずらしい狂乱のふるまいであった。それを、この場合に、ただひとりうす笑いしてながめている鼓隼人に気がつくと、かっとしたように、

「うぬもゆけ。きゃつら討たずして、生きてかえるな」

「仰せまでもなく」

と、隼人はまた声もなく笑った。とみるや、その坐ったままの姿がすうとながれるよう

に遠ざかっていったかと思うと、まるで日に雲がかかったときの影みたいに、ふっとかききえてしまった。

家康は去った。崇伝らも退出した。ひとり頼宣は、片腕をついたまま、城の遠くにあがりはじめた騒然たる物音をきいていた。万事休す。

「南竜公遺事」に曰く、「大坂落城のとしの冬、駿河国に百万石をそえ、頼宣卿へおゆずりわたし、権現さまは三島の近所泉頭という古城のあとを御隠居所になさるべしとてお縄張りあり。そのうち年くれて元和二年となりてほどなく、権現さま御他界にてこのこと止め候となり。その後、この儀をうけたまわり、御残り多きことなり。権現さまいま三年御存生ならば頼宣卿を百万石の大身にいたすべきを、御残り多きことなりと養珠院さまひたと仰せられ候」

養珠院とは、頼宣の母だ。彼女すらその真因を知らなかったことは、いかにこの一夜が幕府の秘事となったかをしめす。その夜の一座に侍した男女は、こういうことにかけては口にかきがねをかけて、生涯外にもらさぬ人々であった。しかし、幕閣の内部ではひそかにこのことが伝えられて、のちに頼宣が紀伊に移されたあとも、紀伊どのにはさぞ御残り多くおぼしめさるべしと推量し、どうじにこの猜疑の眼が、例の由比正雪事件にあたって、頼宣の身辺にひときわつよくそそがれた原因となる。

三

鉄砲隊、騎馬などの用意にひまがかかった。それを御先手頭にまかせ、一足さきに服部半蔵のみ馬に鞭うって三島まで十六里、一夜のうちにはせかえってきたのは、たんにいそぐというより、黒鍬者の面目にかけて、手柄を余人にまかせまいとする焦慮からである。すでに半蔵は、千姫一味の潜伏場所を隼人からきいている。その岩壁を露出させた一丘陵の下へ、おびただしい黒鍬者のむれが、まなじりを決してしのびよったのは、一月二十二日の未明であった。

地底にひとしい静寂を、あぶら火のもえる音が縫い、それにかすかな女のうめき声が断続していた。

泉頭の丘の内部にある岩窟である。自然にできたものにしては、壁の岩がなめらかすぎる。人工で作ったものにしては巨大にすぎる。おそらく百人を入れてもなお余裕があるであろう。自然と人工との合作に相違ない。——そして、そのなかに敷かれた緋毛氈、そのうえにおかれた葛籠、燭台、食器、小筐のたぐいは、あきらかにこのごろ運びこまれたものであった。灯はともっているが、奥の岩壁に上方からさす夜明けのかすかな外光がある。それはその部分の天井をふかくくりぬいて、上は丘陵にはえた樟の大木につながっている。

樹々の生いしげった丘の上で、その樟は大むかし雷火にうたれたもののごとく、地上から十数メートルのところで折れているが、その内部が円錐形のうつろになって、下はほそい孔となって根もとまでつづき、この地底の洞窟にわずかに光と風と雨とをそそぎいれた。まして、その木と岩の瘻孔が、外部にちかづく者の跫音を微妙に反響してつたえるとは、だれが知ろう。

むかしこの丘の上にあったといわれる泉頭の城がどんな縄張りになっていたか、すべてが消え去ったいまでは、この地底の岩窟が攻撃用のものか、防禦用のものか、それとも落城の場合などにそなえたものか知る由もないが、たしかに信玄の息がかかっているとしか思われぬからくりであった。

徳川家はもちろん近在の百姓さえ知らぬこの秘密を、お由比が知っていた。なぜお由比が知っていたかというと、それは彼女が真田の女忍者であったからだ。幸村の祖父一徳斎幸隆も、父一翁昌幸も武田の謀将であったから、幸村がこれを知っていたとしてもふしぎではない。

頼宣にたすけられて三島をとおる際、このことを思い出したのはお由比であったが、しかしそれ以後、しばしば腹心のものに、ひそかに身の廻りの道具類、灯油、食糧などをとどけさせたのは頼宣であった。大御所が急にこの地の普請を思いたったのに狼狽して、いちどはわざわざ頼宣自身、急をつげに訪れてきたくらいである。この秘密をかぎつけた伊

賀の忍者は、強引に頼宣が駿府へ拉致していったが、むろんそれ以来、彼女たちは一日もはやくここを立ち去らねばならぬと焦慮していた。ましてや七日まえ、お眉までが討たれてからはなおさらのことだ。もはや一刻の猶予もならぬと思いつつ、彼女たちをそこに釘づけにしたのは、お由比のからだの様相であった。前陣痛ともいうべき分娩の前兆がはじまったのだ。たんなる病苦ではない。生まれ出る子のことをかんがえると、めったにこの地をはなれることはならぬ。

この場合に、千姫の眼は恐怖とよろこびにかがやいた。恐怖もよろこびも、ともに分娩そのものに対してだ。去年の五月、炎の大坂城からもやしつづけてきた一念、江戸、武蔵野、東海道と、この世のものならぬ悽愴な死闘のなかにすがりつづけてきた望み、それの果たされるときがきた。千姫の眼に、せまりくる敵への関心はほとんどなかった。

「お由比。いたむか。わたしに代っての痛み、がまんしてたもれ」

彼女は、うめきつづけるお由比にいった。

が、ただそういうばかりでどうしてよいかわからぬ千姫にくらべて、じぶんも大きな腹をかかえながら、丸橋が甲斐甲斐しく面倒をみた。しかもそのあいだ、彼女の耳はたえずれいの天井の瘻孔に、夜も日もなくむけられていた。

「あ。……」

ふいに丸橋がたちあがった。孔にさすひかりが蒼みがかってきていたが、まだ小鳥の声

さえきこえぬ夜明けまえに、敏感な彼女の耳はどんな物音をきいたのか。
　丸橋は扉の方へかけよった。曾て七斗捨兵衛の「人鳥黐」で封をされ、丸橋の怪力でふたたびひらかれた石の扉が、かすかにうごき、また音もなくとじられた。ふりかえった彼女の顔色はかわっていた。
「例の黒鍬の者どもがあつまっております」
「ここを知ってか」
と、千姫がいった。
「はっきりと」
と、丸橋はうなずいて、そしてさすがの千姫も慄然とさせる報告をした。
「扉のまえに、合薬をしかけておりまする」
　合薬とは、火薬のことだ。土木が黒鍬者の専業であるうえに、元来が忍者だ。彼らが火薬のとりあつかいになれていることはいうまでもなく、ついにそれをもち出したということは、もはや一点の仮借もない背後の意志を読みとるに充分であった。
　息をつめてたちすくむ千姫と丸橋のまえに、しずかにお由比が身を起した。
「奥へ——奥の岩のくぼみに身をおひそめなされませ。やがて扉がくだかれます。扉がくだかれたならば」
　曾て千姫のまわりにいた女忍者のうち、いずれもそれぞれ女豹みたいな野性をどこかに

ひそめているのに、このお由比だけは、まるで深窓に育ったように、つつましやかな気品と優雅さをもつ女であった。その彫りのふかい横顔ときれいな眼が、いま凄じい決意に蒼白い燐光をはなって、
「わたしが相手になりまする」
　といった。
「お由比、胎児は？」
「この敵を討たねば、しょせん、胎児のいのちもありませぬ」
　と、お由比がいったとき、鼓膜もつんざくような轟音が洞窟内にみち、巨大な石の扉に稲妻のごとく亀裂がはしると、それはふるえ、よろめき、そして重々しく外側へたおれていった。そして黒い硝煙と土けぶりの彼方に、黎明の野と湖と、殺到してくる無数の黒鍬者の影がみえた。
　お由比はきものをぬぎすてた。雪化石膏の彫刻のような姿が、くだかれた岩窟の扉の方へあゆみ出ていった。
　黒鍬者たちはいっせいに立ちどまった。傷ついた獣の巣をついに見つけ出した猟犬のように殺気に歯をむき出し、眼を血ばしらせていた黒鍬者たちをも、とっさに制止させる異様な光景が洞窟のまえにあらわれた。

全裸の女がひとり出てきた。それはよい。しかし彼らが息をのみ、眼を見はったのは、刃ひとすじももたぬ女が、たおれた石戸のうえに長ながと身を横たえたことである。夜明けの薄明りに、盛りあがった腹部が繻子のようにひかってみえた。それは俎上に観念した大きな白魚に似たすがたであった。

東の空に濃い紫いろの雲が、まるで波のように重なり、そのあいだの一条の断裂が紅玉のように赤かったが、野はまだくらい。とはいえ、闇にも眼のなれた忍者のはずだが、さすがの黒鍬者たちも、ひとりとして、その女の股間から、このとき蛙の卵塊のごとき白い泡がにじみ出してきたのを見たものはなかった。

雲は凄じい勢いでうごいている。赤かった断裂はなお残っていたが、それはみるみるうすれて、大空が水のように澄んできた。女の股間からあふれ出した白い泡がもりあがって、そのひとつぶふたつぶが、ふっと風にとんだ。

「あっ。……」

どこかで、声が風にちぎれた。たかい空だ。

「あれだ、あれだ！　おおいっ、退け、眼をつぶれっ。……」

黒鍬者のずっと後方の――数十メートルもある欅の大木の枝にまたがっている鼓隼人であった。彼は、かっと眼をむいて、白いおぼろな女忍者のすがたを見おろしていた。隼人ほどのものにして、なお黒鍬者に先をゆずり、形勢を観望させたもの、それは服部半蔵か

らきいた黒鍬者たちを幼児のごとく奇怪な生物にかえてしまったという敵の忍法の謎であったが、その謎はいまや正体をあらわした。曾て隼人が、江戸の千姫屋敷で、やはり同様の運命におちいった坂崎一党の上にみたものがそれであった。空にただよう泡は、みるみる透明な袋のように大きくなった。

ひっ裂けるような隼人の声がよくききとれなかったのか、それともその一声がかえって一瞬の自失をやぶったのか。――黒鍬者たちはふたたびどっとうごきかけた。彼らはこのとき、風にながれる無数の巨大な泡をみた。みた刹那に、しかし彼らの行動は意志を失った。気絶したのでも金縛りになったのでもない。彼らは泡をめがけて吸いこまれるように疾駆したが、それはみずから制止することのできない疾駆であった。

美しい銀灰の泡は、かぎりなく女陰から盛りあがり、風にとぶ。風のなかにそれはちぎれて、一つずつ子宮のかたちにふくれあがり、幾十幾百となくもつれあい、薄明に蒼い虹をまわしつつ、音もなく野面をながれた。それと黒鍬者が相ふれたとみるまに、彼らはその巨大な泡につつまれ、泡のなかで、首をおりまげ、手足をぎゅっとちぢめてうごかなくなってしまう。まるで、子宮の中の胎児そっくりに。

「うっ。……」

たかい裸木のうえで、鼓隼人は身もだえした。いちはやくその奇怪な泡の恐ろしさを知り、見るなと警告を発したくせに、彼自身、樹木からとんで、その美しい泡に身をなげこ

みたい衝動に歯ぎしりした。眼をとじ、必死に木の皮にたてた爪が、ふるえ、はがれて、それみずからまず飛び去ってゆきそうな感じがするほどに、それは凄じい誘惑であった。

泡と黒鍬者が相ふれるのは、黒鍬者の方から泡へ吸引されてゆくのだ。みるみる野には泡につつまれた黒鍬者が散乱し、やがてその泡がふっと消えても、まるくなった黒鍬者の影はうごかなかった。

女陰から分泌された泡そのものは現実であった。しかし、この泡がそのような魔力を発揮するのは、催眠術に於ける水晶球と同様な一種の幻覚作用であろう。しかし、それは飛んで火に入る夏の虫のように、当人にはどうすることもできない本能的行動であった。人はむかし水棲動物であった。暗くてあたたかな子宮は、女体の奥にある海底である。人はその故郷へかえろうとする本能をもつ。性交そのものも、この海底のごとき胎内へかえろうとする象徴的行為だという精神分析学者もあるくらいである。性交、まさにそのとおりだ。先をあらそってその子宮型の海に身をなげいれる男たちは、卵巣からはなれた卵子めがけて突進する精子そっくりの姿であった。幻怪きわまるお由比の忍法「夢幻泡影」である。

樹の下で、異様なさけび声があがった。鼓隼人は眼をあけた。そこに立っていた服部半蔵が、泳ぐように走り出そうとしていた。しかし、同時に隼人は、背後から一閃の黎明のひかりがなげられて、おのれのとまった欅の影が、野を切って女忍者に達しているのをみ

た。

これこそ、彼の歯をくいしばって待ちうけた時であった。

隼人は一刀をぬきはらった。数百メートルはなれた位置で、その刀影はお由比の腹をたてに裂いた。

四

一瞬、石戸の上に横たわったお由比のからだが浮きあがった。さなきだにふくらんだ腹部をささえ、四肢が弓なりに反ったのである。同時に、まっしろな腹に赤い絹糸のようなすじがはしったかと思うと、彼女はみずから血の雨の下にあった。

相手の影を斬る忍法「百夜ぐるま」、また影を以て相手を斬るその変法。――いずれもその痛覚は迫真のものでありながら、しょせんは幻覚にすぎない。しかし、このときお由比の腹は、まさにたてに裂けた。斬った隼人自身が、その刹那茫然となり、次の瞬間、みずからの神技に会心の微笑をはしらせた。まさに神技にはちがいないが、しかしお由比の腹部は、それ以前に事実裂けてもいたのである。子宮が膨大しているために皮下組織が断裂し、ためにいわゆる「妊娠線」なるものを生じる、これは大半の妊娠におこる徴候だ。とはいえ、臍窩から恥骨縫合にかけて、一閃、激烈な痛覚のはしるのをおぼえた刹那、腹壁がさっと斬りひらかれたのを、恐るべき忍法「百夜ぐるま」のわだちの跡といわずして

何といおう。声もなくにやりとした鼓隼人の笑いは、突如凍りついた。血の雨が霽れ、うごかなくなった女体に、何やら模糊とうごめくものがある。つぎの一瞬、そこから、

「おぎゃあ！」

という声がわきあがった。

子供だ！ 子供が誕生したのだ！ 腹壁の緊張がいっきに除かれた衝撃で、子宮壁から卵膜まで裂けたのか、百夜ぐるまの一刀は「帝王切開」と同様の作用をあらわして、血風の中から生まれた新生児のうぶ声であった。

この意外事に、しばし阿呆のようにそれをのぞきこんでいた隼人は、ふいに悲鳴をあげてたかい樹上からころがりおちていた。洞窟のなかから薙ぎ出されたくさり鎌の鎖の一旋が、洞窟の前にあった彼の影を打撃したからであった。猫のように回転して隼人は地上に立った。

「鉄砲組だ、鉄砲組だ！」

ふいに背後にとどろいてきた鉄蹄のひびきに、服部半蔵がふりむいてさけんだ。枯草を蹴ちらし、鉄砲を抱いた百騎あまりの騎馬隊がはしってきた。御先手頭にひきいられた駿府城の鉄砲隊がようやく到着したのである。

太陽は出た。血光をはなち、日はのぼりつつあった。洞窟からはしり出てきた丸橋が、お由比の屍骸にかがみこみ、やがてあかん坊をとりあげる姿がはっきりみえた。鼓隼人は

もういちど欅の大木をみあげた。日はのぼり、木の影はちぢみ、すでにふたりの女の位置にとどかなくなっているのをみてとると、隼人は走り出した。丸橋はあかん坊を抱いて、岩窟のなかへにげこんでいった。

「待て、おれを射つな、穴のまえに女があらわれたら射つのだぞ」

いちどふりかえって、そう絶叫してから、隼人はなお走りつづけた。百挺の鉄砲隊が背後に散開しつつある、という安堵感は彼にない。それ以前に、あの奇怪な泡がきえ失せたいま、丸橋ごとき、彼は恐れてはいないのだ。夜はあけはなれ、彼の武器たる影はすべて地上にある。そして彼は、まだ生きながら千姫をとらえたいという執念をすててはいないのであった。

野をうずめた泡は、夢幻のごとく消え去っていた。隼人の走る足に蹴られて、芋虫みたいにまるくなっていた黒鍬者が、まるで胎中の夢から醒めたもののごとく、「おぎゃあ」「おぎゃあ」と泣き声をあげはじめたのにも、隼人はふりかえらない。

「丸橋、出でよ、うぬもひそんだままならば、千姫さまもろとも、百挺の鉄砲をこの穴に射ちこむがよいか！」

わめいて、お由比の屍骸の横を、洞窟の方へ一足とびにとぼうとした足をふいにつかまれた。つかんだのは、死んだとみえたお由比の手であった。さけんで、ふりちぎり、鼓隼人は数メートルとびさがって、仁王立ちになった。

見えぬ糸にひかれるようにお由比はたちあがった。髪はみだれて肩に波うち、顔は象牙を削いだようだ。だらりと両腕をさげた全裸のすがたは、いうまでもなく下半身血の池から這いあがったように濡れつくしている。青い隈にふちどられた眼だけが、凄愴なひかりをはなっていた。さしもの隼人が、ののしる声も、とどめを刺す気力も喪失したように、刃を片腕にひっさげたまま、これとむかいあった。

鉄砲組はどうしていたか。彼らもこの女忍者の凄じい鬼気にうたれて息をのんだのか。天地にはただ寂莫のみ満ちた。――思えば、伊賀の五人、真田の五人、敵と味方にわかれてから半歳ののち、幻妖凄惨のかぎりをつくした死闘のはてに、最後にのこった二人である。しかし、この勝敗は、たたかわずしてあきらかであった。女忍者は瀕死というより、生きて起きあがったのがふしぎなほどの重傷をうけていた。その傷をみるがよい、腹は大きな柘榴のように裂けている。血はなお音をたてて、足もとの石戸にふりつづいている。

それまでひかっていた女忍者の眼に、すうとうすい膜がかかってきた。しかも、彼女の唇はかげのようにニンマリと笑った。このとき、どうしたのであろう。鼓隼人はおのれの眼にもうすい膜のかかってくるのをおぼえた。現実の眼は吸いつくように女の裂けた腹をみているのに。

そのなかに、四十センチにちかい鮮血にまみれた子宮があった。子宮は口をあけていた。隼人の眼に、それがみるみる巨大な食虫花みたいにひろがって、じぶんを呑みこむような

眩暈感をひきおこしたのだ。あたたかい粘膜があたまをつつみ、海底のような液が皮膚をひたす幻覚が襲ってきた。ふらふらとおよぎ出しながら、彼は遠く伊賀の山できいた幼い日の母の子守唄をきいたように思った。彼の手から、刃がおちた。

騎馬隊は、鉄砲を肩にあてて、ひきがねにかけた指が痲痺してしまった。鞠みたいな姿勢でおよいでいった鼓隼人が、女忍者の腹部にあたまをめりこませたのだ。一個の成熟胎児を出したばかりの子宮は、すっぽりとその頭部を呑んだ。ふたりはその奇怪な構図でしばらく立っていたが、やがて女忍者がからだを横ねじりにして、徐々に石戸の上にたおれた。それでも、隼人の頭ははなれなかった。彼の鼻口は血塊と羊水につまり、その頸にやわらかい子宮筋と子宮粘膜がまといついた。そして、胎児そっくりにぎゅっと手足をちぢめた鼓隼人は、子宮のなかで、曾てこの慓悍児がみせたことのない、円満具足の死微笑をうかべて絶息した。

洞窟の入口に、あかん坊を抱いた丸橋と千姫があらわれた。

「お由比」

千姫は絶叫してかけよった。こんどはお由比も完全に絶命していた。これは無限抱擁の母性の笑いに似た笑顔であった。

御先手頭は白日の悪夢からさめた。いや、あまりにも凄絶たる決闘をうつつにみて、このときから悩乱したといいおう。

「狙えーっ」

と、彼はわめいた。騎馬隊はふたたびいっせいに銃を肩にあてた。

そのとき、背後に狂ったような鉄蹄の音がちかづいてきたかと思うと、「待てっ」とさけんだ者がある。ほとんど逆上気味の鉄砲組を、充分に電撃するに足る大音声であった。

御先手頭はふりむいて、馬からとびおりた。頼宣卿の老臣、安藤帯刀であった。

「待てっ、殺生は要らざること。ただちに引揚げよとの大御所さまの御諚なるぞ」

「あいや、帯刀どの、これは大御所さまの御下知にて――」

「その大御所さまのおん身に大事が出来いたしたのだ。その方ら馳せむかってよりまもなく、昨夜半にいたり大御所さまには御不予とおなりなされ、御危篤におちいりあそばされたのだ。一同、早々にたちかえれとの仰せであるぞ！」

と、安藤帯刀は白髪あたまをふりたてていった。

安藤帯刀直次といえば、たんなる陪臣ではない。元亀の姉川合戦以来、長篠、長久手、関ケ原と、徳川の運命決するいくさにたえず大御所にしたがい、その豪勇と沈着をとくに見こまれて、大御所みずから若い頼宣の手綱役としてつけたほどの人物である。すでにこのとき一万石の大身であった。きのう壮健で鷹狩に出た大御所が、突然危篤におちいったという知らせは余人ならば信じがたいが、酔狂でそれを知らせにくるような帯刀ではない。

帯刀はちらと千姫の方をみたようであった。が、すぐにそ知らぬ顔をして、騒擾におちいった鉄砲隊や茫然たる黒鍬組の生残りをおいたてるようにして、駿府の方角へかけ去った。

最後の伊賀の忍者と悽絶な相討ちをとげたお由比のなきがらのそばに、千姫は石になったように立ちつくしていたが、このとき丸橋と顔を見あわせた。

「大御所不予とはまことでござりましょうか」

と、丸橋がいった。その手に抱かれたあかん坊は、いきおいよく泣きつづけていた。

「あの帯刀が、よもいつわりは申すまい」

と、千姫はわれにかえったようにつぶやいた。

「何と申しても、お祖父さまは七十六……ひょっとしたら」

ふいに彼女はきらきらとかがやき出した眼を、あかん坊にそそいだ。あかん坊は男の子であった。髪の毛がながく、黒い眼がよくひかり、力づよい泣き声をあげていた。

「お祖父さまの生きておわすうちに、この子を、――秀頼さまの御子を、かならず見せてさしあげねばならぬ」

と、いって、千姫は西の駿府城の方へ眼をあげた。そうだ、お由比は死んだが、みごとにひとりの秀頼の子を生んだのだ。それを大御所に見せつけることは、千姫にとってたえがたい凱歌の誘惑であった。が、その子を抱いて駿府城にのりこむことは、すなわちすす

んで死地に入ることである。

しかし、丸橋はまんまんとふくれあがった腹をゆすって、にっと笑った。

「姫君のおこころはごもっともでございます。ゆかせられませ。丸橋はどこまでもお供つかまつります」

五

家康は、二十一日夜半に発病した。猛烈な吐物のなかに、粘液から胆汁、はては血液までもまじえ、吐きに吐いたが、はげしい胃痛はなお去らなかった。ふつうの胃炎とちがう中毒性カタルの徴候である。いちじ脈搏もほそくなり、神経症状をおこし、譫言をもらした。きれぎれに、「お千、ゆるせ、お千」とくりかえした。江戸に知らせる急使にまじって、安藤帯刀が駿府城をとび出したのはこのときである。

暁方になって、嘔吐はやんだが、その日いちにち、夜に入っても虚脱状態はつづいた。

家康が若いころ、秋に信長から桃一籠を贈られた。家康は珍らしいといったのみで、口にしようとはしなかった。これを信玄がきいて、「時過ぎたる桃を捨てたは、さすがに大望あるものよ」と感服したという。また老いてから少しく病んで快方にむかったとき、その食がすすんだのをみて御医師衆が「命は食にありと申しまする。何より以てめでたきこと」とよろこぶと、にがい顔をして「命は食にありとは、人は飲み食いが大事ぞという意

味にして、多く喰えばよいということではあるまい」と諭したという。これほど一生、飲食物を保健的にあつかった家康にして、食い物が命とりとなったのは皮肉である。

七層の大天守閣に荒模様の乱雲がとび、風が蒼白くひかって甍を鳴らす二十三日の夕刻であった。その大手門にふたりの女が立った。

「お祖父さまおわずらいときき、千姫御見舞いに参上いたした。罷りとおりますぞ」

凛然たる千姫の声であった。その胸に、白綸子につつまれたひとりのあかん坊を抱いていた。

門番たちは愕然とした。すぐに数人が城中に連絡にはしった。が、時が時である。城は沈痛な動揺に波うち、指揮系統は混乱していた。城主といえば頼宣のほかにないが、頼宣は一昨夜来、父の病室に侍している。この知らせが、それにほどちかい一室につめていた阿福や安藤帯刀のもとへ達するまでにも二十分ちかい時間が経過した。

「何といいやる。千姫さまがお越しなされたと？」

阿福は顔色をかえてたちあがった。

「ふ、不敵な」

その袖を帯刀がとらえた。

「よろしいではござらぬか。大御所さまにはすでに姫への御勘気をとかれておる」

阿福はややたじろいだ。しかし、すぐにいった。

「阿福はあの仰せを信じませぬ。あれは御悩乱のゆえか、それとも、おん気力衰えさせられたあまりのおことば」

こんどは帯刀がひるんだ。実は帯刀も、おなじ見解なのだ。頼宣の命によって急遽黒鍬者をひきあげさせたものの、心中それが是か非かにまよっている。彼は頼宣を敬愛する老臣であると同時に、徳川譜代の家来でもあった。泉頭で千姫を救いながら、一言のあいさつもなく去ったのはそのまよいのせいで、いま千姫参上の報告をうけて、おどろくと同時に、その無謀さに舌うちしたい思いであった。――阿福はうろたえて、はしり出ていった。

そのあいだに千姫は、いくつかの櫓門、埋門などをとおって、西の丸にちかづいていた。うしろに丸橋が、爛々と眼をひからせてしたがっている。

城内のいたるところには、侍たちが不安げに群れていた。庭のあちこちに、はやくも篝火を焚きはじめている。みんな声をころし、跫音をしのんで、ただ西の丸ふりあおいでいる重苦しい波を、このとき一陣の風がそよいですぎた。「千姫さまだ」「千姫さまだ」と恐ろしげなつぶやきがわたった。いちどこの城に泊ったこともある千姫の顔を知らぬものはない。しかし、同時に彼女が現在どんな立場にあるか、いまとなっては知らぬものはいない。とはいえ、大御所のおん孫であることにまちがいはないし、その大御所は瀕死の床についている。彼らがとっさに身の処置に昏迷したのはむりからぬことであった。

冷然と彼らを無視して入ってゆく千姫につづき、太鼓腹をつき出してあるいていた丸橋が、しかし、どうしたのか、だんだん前かがみになり、肩で息をつき、ひたいに汗をひからせてきた。蓮池門という西城に入る門のちかくまできたとき、千姫が気がついた。

「丸橋、どうしやった？」

「姫さま」

丸橋はにが笑いした。

「どうやら、わたしもあかん坊をひり出しそうな按配でござります」

「なに、子供を――」

千姫がたちどまったとき、鉄鋲のひかる蓮池門のまえに、ひとりの女があらわれた。阿福である。彼女は能面みたいな顔でたちふさがった。背に門はとじられた。

「千姫さま」

「阿福か。――出迎え、大儀、案内しやい」

と、千姫はふりかえって、白いあごをあげた。

「いいえ、ここより入られることは相成りませぬ」

「阿福、わたしはお祖父さまの孫であるぞ。孫がお祖父さまの見舞いに参ったがわるいか。弟の乳母の分際を以て、指図がましい口上、無礼であろう。そこのきゃ」

阿福は蒼白い唇をふるわせて、

「姫はともかく、余人はなりませぬ」
「余人とは？」
「そのお胸の嬰児は何者でござりますか」
「これは、わたしの子」
千姫は昂然と笑った。
「つまり、お祖父さまの曾孫、お祖父さまに初御目見得にまいる」
「もうひとりの女は？」
「わたしの家来」
阿福はたまりかねたように、金切声をたてた。
「何を仰せでござります。そやつが、謀叛人長曾我部盛親の女房であることを知らぬ阿福とおぼしめすか。皆の衆、おききのとおりじゃ、その大女を討ってたも！」
侍たちが、雪崩のようにかけあつまってきた。それを背に、丸橋は千姫をかばって、何事もないかのように門にあゆみ寄る。小山のような迫力に、阿福はおされて横にとびながら、
「何をしていやる。豊臣家の残党を、西の丸に押しとおらせる気か。その門通らせるに於ては、みなの命はないぞ」
と、さけんだ。

鞭うたれたように襲撃に移ろうとする武士たちを、黒い鋼鉄の旋風が薙いで、骨のくだける音ととびちる脳漿があとにつづいた。ふりかえりざま、丸橋の手からたぐり出された鎖であった。ただひと薙ぎで、十人以上もの武士が即死して、血のなかに這った。
そのとき、丸橋の足もとに、ばしゃばしゃと音をたてて、液体がおちはじめた。彼女は苦痛にゆがむ唇に鎌をくわえ、片手で裾をまくりあげた。あふれおちる液体は、胎胞破裂による破水であった。激烈な陣痛のために顔面紅潮し、全身がふるえ出したのをみて、何やらわからぬながら、また殺到の姿勢になった侍たちに、ふたたび鉄の一旋が吹いた。
まくりあげた大女の裾のあいだから、まっくろな胎児の髪の毛があらわれた。彼女はうめきつつ、門の扉に手をあてた。一押し、二押し、内側にはふといかんぬきがさしてあったのに、それが音たててへし折れたのは、決して丸橋の先天的な大力のゆえばかりでなく、ふつうの女でも青竹をつかみわるといわれる分娩時の筋肉力が加わったものに相違ない。
しかし、内側に立っていた数人の門番は、眼前にへし折れるかんぬきをみて、悲鳴をあげて、奥へにげこんだ。
「いざ姫さま」
と、丸橋はひらいた門へ、千姫をうながした。片腕にはすでに肩まで排出したあかん坊をすくいあげるようにしていた。「やるな！」とはせよってきた五、六人が、また鎖のひと薙ぎで顔面を味噌にかえてころがった。

「鉄砲、鉄砲！」
狂気のように阿福が足ぶみしてさけぶまえで、千姫と丸橋は門のなかに消え、扉はとじられた。武士たちは一丸となってそれにからだをたたきつけたが、扉はひらかなかった。
かんぬきのないはずの扉の内側には、丸橋が背をつけて、仁王立ちになっていた。
その姿勢で、彼女は胎児を生みおとした。地上にたまった血と羊水の庭潦におちた新生児が、「おぎゃあ！」といさましいうぶ声をあげるのをきくと、彼女は口の大鎌をとって、おのれと子供をつなぐ臍帯を切断した。
「姫さま……その子を」
千姫はまるで呪術にかかったように、もう一方の腕にそのあかん坊を抱きあげた。やはり大きな男の子であった。血まみれのその子を、白い眼でじいっとみて、丸橋の眼に名状しがたいやさしい笑いがうかんだ。
「おねがい申しあげまする。かならず、若君のよい家来に」
「わかった、丸橋」
外で、「門がひらかぬのは、内で押えておる証拠じゃ。かまわぬ、射て」という阿福のすでに気のちがったようなさけび声がきこえた。
「姫、はやく、大御所のところへ」
と丸橋はいった。

千姫がはしり出すと同時に、背後で銃声がきこえた。いちど丸橋はがくと痙攣したが、赤不動のような足は大地にふんばったまま、大の字にひろげた両腕は、びくとも扉をうごかさなかった。女弁慶のように立ったまま、丸橋の死んだ眼は、なおじぶんの生んだ子の行方を追っていた。

六

遠い銃声をきいて、半死の家康は眼をあけた。
「頼宣」
かすかな声をあげたが、いままで枕頭に侍していたはずの頼宣の返事はなかった。ほかにはだれの姿もない。
灯の色もくらく、冷たい夕闇のみひろがった座敷に彼は幼児のようなおびえに襲われた。七十六年、一日として気力の衰えをみせたことのない、この堅忍不抜の英雄も、全身空洞と化したような肉体的消耗とともに、気力は灰のなかにうすい息を吐いているばかりであった。江戸に急使ははしったが、むろんまだ秀忠をはじめ息子たちが駿府に到着するはずはない。ただひとりこの城にいる十五歳の頼宣に、衰死の老人は子供みたいにひたすらすがりつきたかった。
「頼宣」

もういちど糸のようにほそい声をあげたとき、
「お千どの、御病気見舞に参上してござります」
と、頼宣の声がきこえた。家康は眼をあげた。
そばに音もなく千姫が立っていた。その両腕にふたりの嬰児をしかと抱いて、じっと家康を見おろしていた。老人の眼はひろがり、凝然とうごかなくなった。千姫は一言も発せず、微動だもしない。それは現実のもののすがたであったのか――家康は幻覚的な恐怖におそわれて、
「わしがまけた。ゆるせ、お千、わしをゆるせ……」
と、宙をかきむしるように手をのばしてさけんだ。
その洞窟みたいな眼に、千姫の瞳からもえあがる青い炎がくるくるとまわって、千姫とその両腕のふたりの嬰児の頭上に円光となってかかり、その夢幻の泡のなかに「三人」が暗い天にのぼってゆくかにみえた刹那、家康はまた失神した。
それからこのふたりのあかん坊がどうなったのか、まもなく死んだ大御所はもとより、幕府のだれも知らぬ。生きたのか。死んだのか。生きたとすれば、どんな星のもとに育っていったのか。おそらく千姫と頼宣をのぞいてはだれも知らぬ。ましてや、これを三十五年後に幕府を震駭させた大謀叛人とむすびつけては、作者の牽強にすぎるであろう。

ただ念のために、「慶安の変」の首謀者の名をかいておく。すなわち、首領、その名は由比正雪。副首領、その名は丸橋忠弥。

「くノ一忍法帖」のこと

岸田理生

はじめて『くノ一忍法帖』を読んだのは二十五年をこえる昔のことだ。まだ十代だった私にとって、それは衝撃の書だった。想像力の深淵から立ち現われてくるできごとの数々に、読み終った後、私はほとんど呆けていたような気がする。「ありえないこと」が、もしかしたら「ありえるかもしれないこと」として脳裏の襞に食い込んでくる。

例えば、くノ一の一人お眉は自分が孕んだ豊臣秀頼の胤である胎児を徳川秀忠の嫡男竹千代の乳母お福の腹に移して、窮地を逃れ、更にくノ一の一人お瑤はこれもまた秀頼の胤である胎児を空身となったお眉の腹に移した後、お福の腹のお眉の胎児を自分の腹に移す。めくるめく妖しの世界である。

そうまでして一人の男の胤を守ろうとする女たちは全部で五人いる。お眉、お瑤、お奈美、お喬、そしてお由比。彼女たちは、徳川家が豊臣家を滅ぼした元和元年の戦さの際、豊臣家の将真田幸村によって、生まれた後、徳川家に祟るための運命の子を孕むよう命じられた「くノ一」であり、豊臣家が滅亡したあと、徳川家康の孫であり、彼の野望の贄で

あった千姫と共に江戸にやってくる。

千姫はかつて自分が愛した男の胤を宿している女たちをいとおしむ。そこに嫉妬はない。女たちと千姫は互いに守りまた守られながら江戸城竹橋門内に作られた屋敷の中で暮らしている。女と嫉妬とは切っても切り離せない関係のように人はとらえる。だが、徳川家に祟る、という命題で結ばれた女たちは嫉妬の情とは無縁で、ただ自分たちの「しなければならないこと」をのみ肯って生きている。

だからいさぎよい。私は『くノ一忍法帖』だけではなく、どの忍法帖シリーズにも登場するいさぎよい女たちがとても好きだ。読んでいていつのまにか共鳴現象を起こしてしまう。

五人のくノ一たちと千姫、そして中盤から登場する長曾我部盛親の妻丸橋、彼女たちはまっすぐに頭を上げ、まっすぐに敵に対してゆく。敵は五人の男である。男たちは家康の命を受けた服部半蔵によって選ばれた伊賀国鍔隠れの谷の忍者たちだ。名を、鼓隼人、七斗捨兵衛、般若寺風伯、雨巻一天斎、薄墨友康という。いずれも「剽悍な山岳の気と、うすきみわるい妖気のただよっている点では共通している」男たちである。

仄白い面輪の女たちはためらうことなく、そうした男たちに闘いを挑んでゆく。それは哀しくなる程の健気さだ。

この作品が書かれたのは一九六〇年のことである。女という字を分解すればくノ一となる。「すなわち『くノ一』とは『女』をあらわす忍者の隠語であった」という一節は発表と同時にたちまち流行り言葉となったと聞く。はじめて『くノ一忍法帖』を読んだ十代頃の夜更け、私は密かに「くノ一」という言葉を口の中でころがした。すると畳の目の中から、白い障子の紙からひそやかにくノ一たちが立ち現われて来るような気がした。

女たちは「しなければならないこと」を信じていた。そして「しなければならないこと」のためにいさぎよく散っていった。そんな女たちがかつえて羨ましかったことを私は今もよく覚えている。本当によく覚えている。

散る、と、書いた。そう、女たちは花のように散ってゆく。散りながら自分の死に男たちを絡め取る。

くノ一お奈美は散る。薄墨友康の「伊賀忍法――くノ一化粧――」に落ちて。だが彼女はその時、命を賭けた陥穽を仕掛けている。「信濃忍法――月の輪――」。男の顔には女の血が刻印されている。洗っても洗っても取れぬ血が塗り付けられている。男はその血によって滅ぶ。

くノ一お喬は散る。雨巻一天斎の、一度交わり、二度目に交わると女は必ず死ぬという術に落ちて。だが彼女は自分の死を男の死に重ね合わせる。「信濃忍法――天女貝――」。男と女は体の一点で結びつき、離れることはできない。

お喬は一天斎のからだから、嫋々と垂れさがっている。くび、かた、腰と、すべての関節をはずされて、それは白い花環か瓔珞のようであった。完全に死んで、しかも一天斎を捕虜としている。

文字によって薫蒸された光景が読む者の目の前にくっきりと浮かび上がる。

くノ一お瑤は散る。七斗捨兵衛に渾身の「筒涸らし」と「天女貝」の忍法をかけて長蛇を逸した絶望が自害を選ばせる。

くノ一お眉は散る。七斗捨兵衛の「伊賀忍法——人鳥黐——」に落ちて。その時、お眉の体内では秀頼の胤が産み月近く育っている。胎児は母を助ける。くノ一たちの死の中でも、お眉の死は際立って凄絶だ。

彼の肉鞘はまさに女の体内にあった。しかし、肉鞘をぬいだ彼の男根を、まるで片腕つかんだ羅生門の鬼のように、もうひとつの何物かがつかんだ。冷たい、柔らかい何物かが……ひとめみて、捨兵衛の総身に驚愕の波がわたった。それは小さな、あかい嬰児のこぶしであった。

驚愕と同時に、四つン這いになった彼の四肢の下で、氷がわれた。そのひびきをききつつ、彼の手はそのこぶしをつかみ、ひきはなそうとした。しかしそれは章魚みた

いにぐにゃりとくびれただけで、彼をはなそうとはしなかった。次の瞬間、きらめきとぶ薄氷の破片のなかに、七斗捨兵衛は女忍者と小さなこぶしでつながったまま、湖底の氷獄へ沈み去った。

母と子の紐帯は、ここまで強いものかと十代の私は思ったものだ。ならばいつか私も子を持ちたい、そう考えもした。そして私はこっそりとお眉の死に涙した。お眉の無念にせめて一掬の涙を注ぎたかったのだ。

くノ一お由比は散る。鼓隼人の「伊賀忍法——百夜ぐるま——」に落ちて。だが、その時、お由比は生涯の大事に成功する。秀頼の子を産み落とすのだ。血風の中から生れた子は、勢いよく産声を上げる。

女たちは勝ったのだ。そして丸橋もまた、自分の死と引換えに、亡き夫長曾我部盛親の子を産む。敵たちが押し寄せる門を力一つで閉じ、支え、その姿勢で彼女は胎児を産み落とす。「地上にたまった血と羊水の庭潦におちた新生児が『おぎゃあ！』といさましいうぶ声をあげるのをきくと、彼女は口の大鎌をとって、おのれと子供をつなぐ臍帯を切断した」。

なんという強さだろう。勇気だろう。しばらくの間、私は瞑目してその光景を見ていた。固く閉じた眼の底に、できごとは現実の色合を帯びてあった。

一人、二人、三人、四人、五人、六人と、女たちは散った。女たちは死んだ。だが命は誕生した。千姫は勝利し、家康は敗北した。

片方の腕に秀頼の子を、片方の腕に長曾我部盛親の子を抱いて、千姫は中毒性胃カタルに倒れた家康の前に現われる。千姫は言う。「これは、わたしの子」と。そして昂然と笑う。お奈美、お喬、お眉、お瑤、そしてお由比。五人のくノ一が、秀頼の胤を残すことを目的として秀頼に抱かれた時、千姫はすでに彼女たちと自分とを一体化していたのだろう。五人のくノ一のうち、お眉、お瑤、お由比の三人が孕んだ時、千姫もまた、母となっていたのだろう。そこにあるのは、腹は借物という男たちの身勝手な論理を超えた女たちの結束だ。

十代の頃に出会って以来、不定期の間隔を置いて、私はこの作品を読み返す。登場人物たちの名はすっかり覚えてしまった。彼女たち一人一人の面差しも暗記してしまっている。それでも彼女たちは私に新しい。もしかすると私はどうしようもない無気力に襲われた時、この作品を読むのかもしれない。彼女たちのいさぎよさのほんのひとひらでもわけて欲しくて、彼女たちに会いに出かけるのかもしれない。

時代小説文庫 244

くノ一忍法帖

平成五年九月十日 初版発行

著者 山田風太郎

発行者 佐藤吉之輔

発行所 富士見書房

東京都千代田区富士見一—十二—十四

電話東京三二六一—五三七五（代表）

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 暁印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-8291-1244-1 C0193

青雲燃える 全三冊　山手樹一郎　11—19, 21

宮津藩十万石香極家の若殿・綱四郎に魔薬をなじませて、お家乗っ取りをたくらむ御側用人・那智弦三郎はまず乳母の滝川と魔薬によって内通した。滝川を通じて綱四郎を魔薬のとりこにして廃人にしようとするのだ。そうはさせじと忠義の美女・美和と正義の味方・日下部大伍の活躍ぶりで、息をもつかせぬ娯楽長篇！　（郡　順史）

剣と旗と城 全三冊　剣・旗・城の巻　柴田錬三郎　12—1〜3

黄金五枚で雇われ戦を商売とする眉間景四郎。平家落人部落の蹴鞠党を率い、比叡山の荒法師登天坊飛雲の陀羅尼城を奪うが、天下を窺う津雲秀郷に狙われる。破竹の勢いで台頭した小松重成と秀郷の対決の日が迫る！　景四郎を慕う音羽、忍者猿兵衛、牢人等々力権十郎ら応仁の乱後の乱世を生きる群像を描く戦国巨編。（武蔵野次郎）

最後の勝利者 上・下巻　柴田錬三郎　12—4, 5

秀吉の朝鮮出兵に牢人団に加わって従軍し、帰国後、豊臣、徳川の政権交代にまきこまれる三人の男たち。勝れた剣の腕を持ちながら朝鮮国王の娘朴女との愛に生きる吉岡左馬之介。堺の商人相手に一攫千金を夢みる桜場安吾。左馬之介を恩人と仰ぎながら同じ朴女に思いを寄せる小松次郎太夫らが繰り広げる戦国ロマン。（尾崎秀樹）

日本男子物語　柴田錬三郎　柴錬立川文庫　12—6

幕末から維新への動乱期に、藩魂を貫き壮絶な死闘を展開して今なお人々の哀感をそそる「会津白虎隊」。その他「上野彰義隊」「函館五稜郭」「水戸天狗党」「網走囚徒」「異変桜田門」「大和天誅組」「日本人苦学生」「カラフト隠密」「純情薩摩隼人」等、勇猛果敢に闘った日本男子の義勇譚を痛快な筆致で描く十編の物語。（武蔵野次郎）

毒婦伝奇　柴田錬三郎　柴錬立川文庫　12—7

浅草の海禅寺に放火した罪で磔の刑にされた千人於梅。快盗「むささび」を捕え流行歌にまで唄われるが、運命のいたずらから主家を亡ぼしてしまう勇婦桜子。他に遊女松笠。側妾お万・おもん・お市、四谷怪談のお岩、妲己のお百、高橋お伝、明治一代女のお梅等、十人の毒婦、悪女といわれた女性たちを描いた伝奇小説。（尾崎秀樹）

裏返し忠臣蔵　柴田錬三郎　柴錬立川文庫　12—8

忠臣蔵は余りにも名高い。著者の豊富な想像力は浅野家断絶の背後に横たわる浅野・吉良両家の確執をえぐり、幕閣にある柳沢吉保の謀略をさぐる。吉良上野介には剣技に秀れた双生児の弟吉良右近を配し、両家確執の発端となる浅野長友との決闘から、討入りの夜まで、双生児の存在を巧妙にあやつり独自の物語を展開する。（瀬沼茂樹）

忍者からす　柴田錬三郎　柴錬立川文庫　12—9

三万六千を数える熊野神社の末社を諜報網とし、歴史の裏側に潜む陰の存在として、「熊野の誓紙」を裏打ちする忍者組織、熊野神鴉党。山中鹿之介を始め、戦国から江戸時代にかけて活躍した幾多の歴史上の人物に深く関り、その運命を左右した忍者〝鴉〟の活躍を奇想天外な発想と広大なスケールで描く忍者伝奇小説。（清原康正）

風魔鬼太郎　柴田錬三郎　柴錬立川文庫　12—10

大阪城真田丸に現れた忍者風魔鬼太郎。不敵にも秀頼の面前で淀君を犯すと、真田幸村に予告する。豊田秀吉に毒殺された父、秀吉に犯された母の怨みを晴らす、蒲生氏郷の遺児風魔鬼太郎の痛快な復讐譚等、九編の物語に、忍びの術を駆使する主人公が登場し、それに真田幸村と十勇士が深く関って活躍する忍者伝奇小説。（榊原和夫）

素浪人江戸姿　柴田錬三郎　12—11

黒羽二重の着流しに虚無の色刷く秀麗な顔貌——。元旗本の梅津長門は市井無頼に身をやつしているが、剣を使えば天下に並ぶものがない。北町奉行遠山景元にその剣技を見こまれ、渦中にとびこんだ事件とは……？　美女、怪人物、そして宿敵。能面に秘められた謎をめぐって、宿運の人物たちが剣と愛に命をかける。本格伝奇時代長編。

風雲稲葉城　柴田錬三郎　12—12

残虐非道を重ねて戦国の世に一方の雄となった美濃国城主斎藤道三。この老いた奸雄は手輿で、敵対するわが子義竜の陣に進む。道三・義竜父子の確執を扱った表題作のほか、眠狂四郎の原型を思わせる虚無的な軍師が登場する「戦国旋風記」など、乱世に躍動する多彩な人間模様を描く傑作短篇集。（武蔵野次郎）

復讐・志士　柴田錬三郎　12—13

孤児として養われた家の一人娘との結婚を断わられた腹いせに娘の母親を犯す青年武士。病臥中のその夫は二人の密通の無念を遺書に記す。そして、葬儀の数日後……、復讐が復讐をよぶ愛憎葛藤のドラマ「復讐」をはじめ、幕末維新の奇人変人たちが躍動する諸短篇はバラエティに富み、時代小説の面白さを堪能させる。（武蔵野次郎）

徳川三国志　柴田錬三郎　12—14

徳川三代将軍家光の時代、家光の弟忠長は叔父の紀州徳川頼宣を後ろだてに幕閣に無理難題をもちかけ、将軍家と反目していた。家光の側近松平信綱は忠長と談合すべく伊賀忍者服部一夢斎の孫娘と駿府に旅立つ。三島の宿で待ちうける丸橋忠弥・由比正雪。春日局、柳生十兵衛など多彩な人物が展開する長篇活劇絵巻。（武蔵野次郎）

柴田錬三郎

抜打ち侍

12—15

旗本随一の剣客正木弥九郎は、旗本の身でありながら勤王の志を持ち、そのため目付役は幕府覆滅をはかる危険人物として暗殺の刺客をおくる。刺客は直新流陰流の達人、弥九郎とのあいだに凄絶な死闘がくり返される。窮地を脱した弥九郎をめぐる美貌の女たち、そして弥九郎の出生の秘密とは…。「金四郎日和」「鼠小僧次郎吉」を併録。

柴田錬三郎

柳生但馬守

12—16

慶長十九年十二月、大坂冬の陣は終った。その頃柳生但馬守宗矩は徳川家康から秀吉の愛妾淀君奪取の密命をうけた。故郷柳生に急使を送り策をねる宗矩の奇策を見抜いていたのは大坂城の真田幸村と猿飛佐助の二人のみ。戦国末期を舞台に後藤又兵衛、曽呂利新左衛門など異色の登場人物が躍動する奇想天外、奇趣横溢の伝奇時代小説。

柴田錬三郎

南国群狼伝

12—17

天下泰平の世、豊臣家を裏切って徳川幕府についた大名家の夫人や娘たちを犯し、「ゆめおとこ」の絵文字を残してゆく忍者「影」。彼に従う故真田幸村の老党赤猿佐助。歴史の裏側で暗躍する密輸商、宿運の浪人、美貌の斎宮など男女の愛憎をおりまぜて、舞台は江戸から切支丹一揆にゆれ動く天草へと、剣と野望を壮大なスケールで描く。

柴田錬三郎

貧乏同心御用帳

12—18

時は天保年間、江戸町奉行所の町方隠密同心・大和川喜八郎は剣をとっては幕臣中、右に出る者はない。貧乏にも、いかなる難事件にも、粋な辰巳芸者にも、飄々乎として顔色はかわらない。手下の岡っ引豆六と同居する九人の孤児の少年たちで、大江戸に暗躍する巨悪に敢然と挑戦する。貧乏同心喜八郎の推理と剣技が冴える異色捕物帳。

郡順史

怪盗暗闇吉三

松平右近事件帳㈠

13—1

旗本屋敷の銘刀を狙う怪盗暗闇吉三。その噂で持ち切りの神田佐久間町の小料理屋たちばなに盲目の浪人夫婦が現れる。藩の銘刀を盗賊に奪われ、切腹を数日後に控えた元丸亀藩士平林信之助だった。藩の失態を自ら背負った男に加担し、紀伊五十五万石の御落胤松平右近が破邪の剣を振って難事件を解決する。他五編。

郡順史

はぐれ鳥の唄

松平右近事件帳㈡

13—2

相次いでおこる錺職人の変死から贋金造りの存在を知る松平右近。一方掏り取った小判を持って女主人おさよへの仕返しに、小料理屋「たちばな」へ乗りこむむささびのおらん。その小判が贋金であったことから川越藩乗っ取りの陰謀にまきこまれ、命をねらわれるはすっぱ娘おらんが、右近らの善意で可愛い町娘に変身する表題作他五編。

郡順史

忍法水戸漫遊記

13—3

前の副将軍、水戸光圀は家督を綱条にゆずって隠居生活を楽しんでいた。が、江戸では将軍の跡継問題をめぐって、甲府の綱豊と紀州の綱教との間で争いがおきていた。政道を正さんと江戸へ出立した黄門一行の命をねらい拓植忍者が手を変え品を変え暗躍する。面白さ満載のオリジナル活劇。他、「戦国風来坊」収録。（石井冨士弥）

郡順史

修羅剣魂

13—4

「おぬし、義経公の黄金伝説を存じておるか？」浅井長政は抜刀流の祖・林崎甚助に問うた。織田信長と争っている長政は黄金の隠し場所を発見し、上杉謙信に献上して共同作戦を組む事を企てた。黄金さぐる囮役を引き受けた甚助の前に現われる信長の女忍者や刺客！　著者渾身のロマンとスリルに満ちた大型長篇。（磯貝勝太郎）

松永義弘

柳生一族の陰謀

14—1

将軍秀忠の突然の死で、次代将軍の座をめぐりあわただしく動きだした家臣たち。権謀術数をめぐらし家光を将軍の座に据えようとする柳生但馬守宗矩。一方、駿河大納言を擁立する老中土井大炊頭利勝。両者は凄絶な死闘を繰り広げ、禁中をも巻き込む。徳川三代将軍の座をめぐり柳生一族の存亡を壮大なスケールで描く。（志村有弘）

松永義弘

真田一族の陰謀

14—2

天正九年、真田昌幸は物見楼にのぼり迷っていた。二代仕えた武田がいま滅びようとしていた。真田一族を武田と共に滅ぼしてはならない事だけはわかっていた……。戦国を舞台に小国が生き延びるため親子兄弟、敵味方に別れ、血みどろの戦いをくり広げていくさまを、真田十勇士の活躍、家康や秀吉の陰謀をまじえ描く！（志村有弘）

松永義弘

続・柳生一族の陰謀

14—3

柳生十兵衛の刃に倒れた家光。身体をはって事件を収拾した柳生宗矩も十兵衛の返す刀で斬りつけられ、死を迎えようとしていた。宗矩の遺命をうけた宗冬は、松平伊豆守等とにせの家光を仕立て徳川家の安泰をはかろうとするが、兄十兵衛をはじめ多くの難敵が……。好評「柳生一族の陰謀」に続く長篇伝奇ロマン。（石井冨士弥）

松永義弘

地獄の車輪梅

—埋御門番衆控—

14—4

埋御門番衆——お庭番と似た特殊な任務を持ち、番頭の采領で幕領内の失政や犯罪の調査、摘発する衆をいう。総番頭の寺本石見守は佐渡奉行所配下の者が変死をとげていることに疑念をもった。この世の生地獄、流人、犯罪人のうごめく佐渡の金山を舞台に色と金欲がうずまく地獄に闘いをいどむ藤兵衛。（宮崎芳彦）

松永義弘
おんな太閤記 上・下巻
14—5,6

織田家の一介の足軽から天下を統一して太閤秀吉となる藤吉郎と結婚したねねは、夫の出世を二の次と考える女であった。女好きの秀吉に悩まされ、亡き後は、茶々と秀頼に追われるようにして大坂城を出、剃髪し高台院となったねね。戦国を舞台に北政所の波乱にみちた一生を描いた著者の代表的傑作長篇！（鈴木 亨）

松永義弘
北条政子
14—7

建久十年一月十三日、源頼朝は五十三歳の生涯を閉じた。「これだけは憶えておいてくれ……。鎌倉幕府はまろとそなたが産んだ子だ、と」——仏間にこもり供養の毎日を過す政子は、天下の事を頼む、という頼朝の声を聞いた。頼朝亡き後、動揺する御家人と統率し鎌倉幕府を支えた民将軍の激しい愛と政治を描く傑作長篇。（石井富士弥）

松永義弘
蜂須賀秘聞
14—8

徳島藩・蜂須賀忠英のお膝もと金比羅権現の裏山の木に藁人形が打ちつけられた！二代当主忠英を呪詛したのは誰か？江戸家老の勤めを終え、国元に戻っていた海部郡鞆城城代・益田豊後に嫌疑がかけられた。一介の家臣が主家より独立し大名にならんとしておこった海部騒動の裏には美しい女の命をかけた恋情が……。（郡順史）

榊山潤
毛利元就 全五冊
15—1〜5

安芸郡山城主毛利元就は尼子大内の二大勢力にはさまれた小豪族にすぎず、始め尼子氏の勢力下にあった。後、大内氏と結ぶや尼子二万の大軍に囲まれる。大内義隆自刃の後、元就は陶晴賢の大軍を厳島に潰滅させ、自立の緒を握る。小国ゆえの苦痛に堪えて乱世を生き、着実にその版図を拡げた元就の生涯を描く文芸大作。（尾崎秀樹）

榊山潤
明智光秀
15—6

明智光秀は越前一乗谷城主朝倉義景に仕えていた。だが義景の暗愚さに愛想をつかした光秀は、将軍足利義昭とともに京に上り、織田信長をたよった。信長の家臣として抜群の功績を上げ、異例の出世をする光秀。しかし、信長の激しい感情に翻弄され、不安を募らせていった彼は、ついに…。本能寺に至る光秀の心理を描く力作歴史小説。

榊山潤
戦国無情 —築山殿行状
15—7

幼少にして今川家の人質となっていた徳川家康は、十五歳で元服したその日、主家の娘と結婚した。築山殿と呼ばれたその夫人は、しだいに家康との不和が募り、敵方武田勝頼の諜者と通じて家康への復讐をはかった。家康は築山殿を討ち、長男信長へも討手を向けた！愛憎と策謀の渦まくなか、家康は覇者への道を歩む。傑作歴史長編。

榊山潤
戦国艶将伝
15—8

秀吉は名門の美しい女性を選んで側室にした。その一人淀殿に男児が生まれ、悲劇が始まる。次の関白秀次も若き側室の妖艶さに溺れてゆく。家康と築山殿、信康とお松の方など女人の魔性に魅入られ翻弄される戦国武将たち。あわせて「南蛮絵師異聞」など歴史の襞に見えかくれする波乱の人間ドラマを描く傑作短篇集。（志村有弘）

榊山潤
歴史（正・続）
15—9,10

勤王と佐幕の二大潮流が東北の諸藩に押しよせている慶応四年四月、会津藩に誅伐を加えよと主張する奥羽鎮撫参謀世良修蔵が暗殺された。これをきっかけに奥州列藩同盟が成立し、二本松霞城は薩長新政府軍により陥落した。激動の歴史の波に翻弄される藩士達の姿を敗者の側に立ち描いた新潮賞受賞の代表的力作。（尾崎秀樹）

長谷川伸
一本刀土俵入
16—1

力士になる夢を抱いて路傍を彷徨う駒形茂兵衛と酌婦お蔦の出会い。十年後、博徒に身をやつした茂兵衛は、恩義に報いるべくお蔦の夫の危機を救い一世一代の男の土俵入を果たす。『一本刀土俵入』を始め、『沓掛時次郎』『瞼の母』『雪の渡り鳥』『暗闇の丑松』の五編を収録。演劇、映画に知名度の高い著者の代表作。初の文庫化！（村上元三）

村上元三
大坂城物語 上・下巻
17—1,2

関ケ原役の後も莫大な財宝を秘めて聳え立つ大坂城に、人は夢と野望を託して集まる。豊臣徳川の手切れを策してうごめく黒い影。一方には、戦いを阻止しようと画策する加藤清正の遺児小笛がいた。小笛の下知に従って働く同志を次々と襲う集団との死闘が展開され、やがて同志殺害を指揮する「謎の男」の姿が浮かび上がる。（武蔵野次郎）

村上元三
新選組 上・中・下巻
17—3〜5

旗本の家に生れながら自ら浪人暮らしをする秋葉守之助は、許婚をめぐる争いに破れ、春駒屋一座と共に京都に行くが、老中板倉周防守の命を受け、失意の身を新選組に寄せる。新選組隊士として生き、やがて来る新しい時代に大きく羽ばたいて行く秋葉守之助と、新選組の盛衰を、人間味豊かに描いた著者会心の歴史小説。（武蔵野次郎）

村上元三
戦国一切経 上・中・下巻
17—6〜8

豊臣・徳川の間に手切れの時期がせまる。小豆島の郷士大部十介は、加藤清正の息女小笛の下知に従い、雪川法師らと共に戦いを阻止し、大坂城を戦禍から守ろうとする。一方、筒井一夢の一党は城内に秘められた財宝を狙って暗躍する。大坂冬・夏の陣を舞台に、戦火の中に繰り広げる人々の活躍を描いた華麗な戦国絵巻。（武蔵野次郎）

村上元三
虹の女
17—9

幕末から明治開化期の江戸と横浜を舞台に、愛と事業に命をかける能州屋お雪。彼女をめぐる個性豊かな人物たち――異母妹お絹、その恋人麻生八十郎、青年蘭医鈴木与之助、町奉行同心の加田三七、悪徳業者信濃屋小三郎などが愛憎と明暗をおりまぜながら激動の時代をきりひらいてゆく。変革期の多彩な青春群像を描いた快心の意欲作。

村上元三
切られお富 上・下巻
17—10,11

浅草で生まれ育ったお富は、十手捕縄を仲間の讒言から返上した父親と弟の三人暮し。通りがかりに女掏摸お栄の仕事を見咎めたお富はその後執念深い逆恨みにさらされ、ついには頬を切られる。以来切られお富と呼ばれながら、ふりかかる不幸と災難にうちかち、けなげに生きる美貌の女をめぐる愛憎と義理人情の感動巨篇。（巌谷大四）

村上元三
松平長七郎 江戸日記
17—12

駿河大納言忠長卿の遺子、三代将軍家光の甥にあたる松平長七郎は三千石の捨扶持を貰って織田家に悠々と閑日月を送っている長身の貴公子。黒田家の依姫と見合いの日、依姫は何者かにさらわれた。見え隠れする五三の桐の影。女賊のおれんの手助けで難事件を次々と解決していく。テレビ化された痛快無比な傑作！（武蔵野次郎）

村上元三
松平長七郎 東海日記
17—13

駿河大納言忠長の遺子・家光の甥で新陰流の達人、白皙長身の貴公子の松平長七郎は家来二人を連れ、江戸を出立した。紀州大納言頼宣の後を追って東海道を下るが、道中、京の公卿、五条中納言為信の美しい息女伊曾姫をめぐって魔の手がのびる。そして背後には幕府転覆の陰謀が……。痛快な活躍が楽しい長七郎シリーズ第二弾！

村上元三
松平長七郎 京・大坂日記
17—14

伯父の家光に気さんじに旅をと、ていのいい江戸払いをされ、長七郎は江戸を出立京に上った。清水の桜を楽しむ長七郎に、琉球王族伊野波家の莫大な財宝のありかをめぐって、江戸幕府転覆をはかる六条行平卿と道阿弥の策略がおそいかかる……。お馴じみ長身の貴公子、長七郎の活躍が小気味良いシリーズ第三弾！

村上元三
松平長七郎 長崎日記
17—15

大阪の旅籠で長七郎は長崎勤番の勤めを終え江戸に帰る途中の柿沢惣之進と久しぶりに出会った。旧友を暖めようとする矢先、惣之進の紙入れと印籠を盗まれ、惣之進は殺された！印籠の中の茶色の粉は一体何なのか？事件の核心を追って長七郎一行は長崎に向かう。そこに恐るべき陰謀が……。貴公子長七郎の痛快道中記完結！

早乙女貢
忍法川中島
18—1

天文二十二年、武田勢が葛尾城を攻略した折、敗残の城主村上義清を武田方に売り渡す牢人がいた。武田の軍師山本勘助は牢人を怪しみ、くの一に身辺を探らせるが……。野望に燃える希代の忍者天耳を主人公に、歴史の裏で暗躍する甲斐忍衆黄金虫と、北越忍衆かまいたちの熾烈な死闘を妖美なエロティシズムで描く忍法帖。（清原康正）

早乙女貢
新剣豪伝
秘剣鱗返し
18—2

苛酷な修業に堪えて絶妙なワザを体得した女武芸者を描く七編の物語。『秘剣鱗返し』の主人公宇乃は、上意打ちの役を果たせず逆に斬られた許婚の仇を討つため、居合抜刀術を習い、更に激流の飛沫を斬って秘剣を会得し、遂に仇を討つ。『弦月、雲を斬る』のお久は鎌を武器とし、『蟹眼の大事』のお留以は手裡剣を打つ。（清原康正）

早乙女貢
南海に叫ぶ
18—3

戦国から江戸時代にかけて「日本の小天地壮軀を容るるに足らず」と南海に雄飛した男達の活躍を描く六編の物語。マニラ王の娘を助けてエスパニヤ軍と戦う「若き日の助左衛門」、海賊仁科孫四郎がエスパニヤ海賊と秘宝の争奪戦を展開する「南蛮つむじ風」、他に「山田長政」「天竺美少年」「密貿易二代」「亜媽港奇譚」を収録。（清原康正）

早乙女貢
忍法くノ一 正・続
18—4,5

桜満開の下、家綱の乳母・矢島ノ局は眼を虚ろにし、唇を半開きにして着物を脱いでいく――くノ一忍法《さらし肌》にかかったのだ。大奥で絶大な権力を握っていた矢島ノ局は次期大老職をねらう老中酒井忠清との間に情欲関係をもっていた。大奥の色香と政争を背景に妖艶に暗躍するくノ一と甲賀、伊賀忍者の抗争を描く。（磯貝勝太郎）

早乙女貢
甲賀くノ一 上・下巻
18—6,7

美濃の守護土岐政房の嫡男盛親は父や弟の頼芸にとり入る西村勘九郎（斎藤道三）に疑惑をもち甲賀くノ一・木ノ実を使って過去を探らせる。一介の油売りから身をおこし冷酷残忍な手口で美濃国を手中に収めていく乱世の姦雄・道三と技の限りをつくし死闘する女忍者の運命を浮彫りにしたエロティシズムあふれる長篇力作！（権田萬治）

早乙女貢
死神伝奇
18—8

「生みたい……、ああ、もっと！」〈猿のような子が生まれるぞ〉「お戯れを、あ、あ……」異様に感じた広沢の局は顔をあげた。朝鮮出兵、呂宋遠征の野望に燃えた秀吉は九州名護屋城に兵を進めていた。威嚇された呂宋の大守ゴメス・ペレスは秀吉暗殺を図らんと南蛮妖術者を送り込む。エロチシズムあふれる怪奇幻妖巨篇。（磯貝勝太郎）

早乙女貢
かげろう伝奇
18—9

関ヶ原の戦いで西軍に属した土佐藩主・長曾我部盛親は家康によって所領没収という厳しい処分を受けた。徹底抗戦か恭順かで藩論が真二つに割れる中、抗戦派の前衛となった一領具足の郷士の中に〝影野の鷹〟と呼ばれる剽悍気鋭の若者・神谷新八郎がいた。彼の情熱にあふれる戦いと恋を描いた秀逸伝奇小説。（藤田昌司）

早乙女貢
花笛伝奇
18—10

大川の花火見物の夜、青江弦四郎は奇妙な笛の音を聞いた。川に浮かぶ屋形船で殺された芸者きよ香の心の臓を、一寸の狂いもなく貫いた十方手裏剣！　江戸の夜気を裂いて飛ぶ手裏剣の正体は？　次々と起る殺人事件。被害者は何故か笛を持つ美女達。死を招く笛に秘められた謎とは!?　暴れん坊・弦四郎の剣が冴える。（武蔵野次郎）

早乙女貢
緋牡丹伝奇
18—11

蛇ケ谷で拾われ、養父母に育てられていたお国の踊りの素質と天性の美貌を見込んでお国を引き取って仕込んでいたおりくが、いまわの際に言った言葉と一ふりの懐剣は何を意味するのか？　阿国歌舞伎の創始者として名高い出雲の阿国の悲恋と出生の秘密を通し、時代のビッグ・スターの誕生を描いた傑作長篇。（清原康正）

早乙女貢
猫魔岳伝奇
18—12

「いつまでも……こうしていたい……ああ。」さよの眼に情火が燃えあがった。その時、天井から白猫と三毛猫がぎゃーと声をたて落ちてきた。根子間左近の刀が半円を描き、凄まじい声と血汐がふりまかれた。新妻を殺され公金横領の濡れ衣を着せられた左近が謎を解明するうちに出会った奇妙な集団〝猫一族〟とは!?（影山勲）

早乙女貢
くノ一秘図
18—13

「あ……」小菊は身をひねった。が、両手が縛らされ、もがく拍子にかえって乳房は義鑑の手におさめされた。庭番の父を主君大友義鑑によって蹴殺された小菊は復讐せんとくノ一になる！　九州の名家・大友家のお家騒動に暗躍する忍び達。大友二階崩れにより跡を継ぐ義鎮は九州だけでなく周防の大内氏征圧の野望を進める。（縄田一男）

早乙女貢
妖刀伝奇
18—14

（何故、斬ったのだ、おれは?……）ふいに彼はわれに返った。――伊丹靭負は茫然と闇の中に立っていた。稀有の刀匠が殺気をこめ鍛えた兇刀村正が、天下一の刀鑑定家・本阿弥光悦のもとから盗まれた。以来、江戸の町を血に染め次々と人を斬る。徳川家の災いをなす不吉な刀＝村正の怪奇伝説にせまった傑作長篇！（石井冨士弥）

早乙女貢
まぼろし伝奇
18—15

「ああ……、殿」森蘭丸の弟・力丸をとらえた妖美の恍惚境はまだ体の芯を疼かせている。〈そうじゃ、そなたの殿・信長を殺すがよい〉異様な声にあやつられた力丸は信長の寝所に入って行った……。上杉謙信から信長につかわされた刺客の正体は？　迎え撃つ信長の甲賀忍者とかまいたち黒羽組の凄絶な戦いを描いた長篇。（金田浩一呂）

林　不忘
丹下左膳　全五冊
19—1〜5

片眼片腕の剣士丹下左膳は、刀剣蒐集狂の主君の命をうけ、小野塚道場伝来の名刀、乾雲丸、坤竜丸を狙う。左膳に奪われた乾雲丸を求めて、小野塚道場の高弟諏訪栄三郎は坤竜丸を腰に巷をさ迷う。栄三郎を助ける蒲生泰軒。左膳に味方する鈴川源一郎、櫛巻お藤らも加わり、二刀の争奪をめぐって江戸の巷に血の雨が降る。（尾崎秀樹）

笠原和夫
真田幸村の謀略
20—1

関ヶ原での敗戦後も、真田幸村はあくまでも打倒徳川をめざし、戸沢白雲斎の残した「道名帖」を頼りに十勇士を集め、大坂城に入城する。併し夏の陣を迎え戦い利あらず、大坂方の諸将は次々に討死にする。最後の決戦を挑む幸村は、家康の本陣を襲い、只一騎逃げる家康を追いつめる……。映画にもなった歴史ロマンの力作。（笠原和夫）

横溝正史
髑髏（どくろ）検校（けんぎょう）
21—1

文化八年元旦、豊漁に賑う房州白浜で、鯨の胎内から書状が発見された。書状の主は長崎留学中の蘭学生、鬼頭朱之助。彼が目撃した不知火検校の不思議な行状は、江戸の町を恐怖のどん底におとしいれる怪事件の前ぶれであった……。吸血鬼髑髏検校とこれに立ち向かう蘭学者師弟。善魔入り乱れての結末は？　怪異の極致を描く異色作。

横溝正史
羽子板娘
21—2

音羽のお蝶、神田のお組、そして深川のお蓮――。江戸三小町と讃えられ、羽子板のモデルにまでなった美女たちが次々と殺され、死体のそばには首を切られた羽子板が置かれていた……。下手人の真の狙いは何か？　女にモテすぎるのが玉に傷、美男の目明し人形佐七の初手柄を描く表題作をはじめ、著者自らが選んだ佐七捕物帳傑作集。

西野辰吉
独眼竜伊達政宗
22—1

天正九年夏。三人の男が阿武隈川を舟で下ってゆく。十五歳の少年伊達政宗と傅役片倉小十郎、そして忍者笹間弥三だった。政宗の型破りな好奇心が川下りによる敵地の偵察を思いつかせたのだった――。奥州の一隅から海の彼方の世界にまで目をそそぎ、時代の先々を読む風雲児伊達政宗。乱世を生きぬいた波乱の人生を描く異色時代小説。

坂口安吾
織田信長 23—1

「人間五十年、下天のうちにくらぶれば、夢幻の如くなり……」信長は舞いながら具足を身につけ、今川義元が陣を敷く田楽狭間をめざして出陣、やがて義元の首級をあげて、清洲へと馬首をめぐらす。尾張那古屋城の大馬鹿少年織田信長が、天下の覇者へと成長してゆく颯爽たる雄姿を描く坂口文学の意欲作。（尾崎秀樹）

坂口安吾
道鏡・家康 23—2

孝謙女帝と道鏡の奔放な愛欲生活を描きながら、独自な視点で新たな人物像を築いた「道鏡」。また、斎藤道三、織田信長、豊臣秀吉、黒田如水、徳川家康など乱世の英雄・奇才を史実に拘泥せず、その人間愛と斬新な歴史感覚を駆使して活写した坂口歴史小説の粋をあつめた六篇を収録。（尾崎秀樹）

坂口安吾
明治開化 安吾捕物帖 23—3

歓楽と裏外交が華やかなりし鹿鳴館時代、上流社会を舞台に次々に起こる猟奇殺人事件の数々。このナゾ解きに洋行帰りの男前なハイカラ男・結城新十郎とかの勝海舟の心眼が火花を散らす。坂口安吾の隠れた名作「舞踏会殺人事件」「ああ無情」「万引一家」「石の下」「覆面屋敷」「ロッテナム美人術」「乞食男爵」のベスト七篇。（尾崎秀樹）

土橋治重
武田信玄 24—1

父信虎を駿河に追放して甲斐国当主となった若き武田晴信は天下雄飛の野望に燃え、まず隣国信濃を攻め、諏訪・小笠原・村上氏を倒し、やがて信濃一円を手中にする。そして宿敵上杉謙信と川中島に激突、持久戦の末にこれを破る。戦国末期の不出世の英雄の生涯を山本勘助、真田一党など多彩な人物群を配して描く。（武蔵野次郎）

長部日出雄
津軽風雲録 25—1

天正初め、主家の南部に反旗を翻した大浦弥四郎——津軽為信は民衆の心を巧みにつかみ、戦国の悪党と無頼漢の群れを使い、権謀術数の限りをつくして、津軽を統一していく。戦国から江戸時代の初めにかけ、東北を舞台にくりひろげられる痛快な国盗り物語。著者独特の津軽弁を駆使した傑作長篇。（武蔵野次郎）

長部日出雄
源義経 25—2

——そうか。われは源氏の子か。いくさの神八幡太郎義家の血がわが体の中に……。母・常盤の口から思わずもれた本当の父の名を知り、義経は源氏再興の決意を固めた。意表をつく奇襲、大胆な決断、稲妻のような速攻で中世のヒーローとなり、兄・頼朝に追われた義経の波乱にみちた悲運の生涯と謎の義経伝説に迫る！（尾崎秀樹）

井口朝生
江戸は花曇り 26—1

祖父・貝島素軒と学問上対立し破門された増淵雄次郎は大塩平八郎の乱に加わり、長い間、とよ美の前から姿を消していた。その夫がやつれた旅支度でとよ美の眼前にいた。が、とよ美はすでに囲い女に……。薄倖な女の運命を描いた表題作他五篇。江戸の町にうごめく人々の愛と人情の機微を描いたバラエティー集。（石井冨士弥）

井口朝生
戦国武州むらさき帳 26—2

〝鉄砲を打て〟隆貞が命令した。銃兵は銃を構えた。その時大手門が開かれ、女ばかりの行列が進みでた——。笠戸城主信光の母沙和であった。敵の城主の母を妻に迎えた岩窪城主隆貞。その子小太郎も次第に母の人柄と美しさにひかれていく……。表題作他戦国の世に生命を燃やす武将、雑兵達の清冽な愛と死を描く秀作集。（志村有弘）

井口朝生
真田幸村 上・下巻 26—3,4

秀吉の死によって世は風雲急を告げていた！ 真田幸村の人柄と才気に惹かれ集まった猿飛佐助、由利鎌之助、清海らの真田十勇士と徳川方の服部半蔵、霧隠才蔵ら、忍者の活躍を通し、武門の意地と矜りをもって、激動の時代を生きた戦国の卓越した戦略家・真田幸村の波乱にみちた生涯を描いた著者快心の時代長篇！（山口正二）

井口朝生
武田雑兵伝 26—5

甲斐・白坂の郷主笹尾四郎兵衛頼久の美しい娘ぬいは近々、武田の重臣小山田信茂の家来千場弥五郎に嫁ぐ事になっていた。ぬいを慕う角蔵は軍役が回ってこないのに自ら軍役を申し出た——。歴史の表層に顔を出さず埋没していく数多くの雑兵。その生きざまを詩情豊かに描いた秀逸長篇小説。（磯貝勝太郎）

井口朝生
伊達政宗 26—6

「だーん！」政宗の鉄砲が火を吹いた。畠山義継の卑劣な謀略に父を犠牲にし、悲憤を胸に立ちむかう伊達政宗。永禄十年、米沢城主伊達輝宗の嫡男として生まれた政宗は疱瘡にかかり、右眼を失った。風雲定まらぬ戦乱を背景に独眼竜とおそれられた奥州の雄・伊達政宗の若き日の姿と親子の情愛を描いた力作時代長篇。（竹村篤）

南條範夫
戦国残酷物語 27—1

飛騨国の貝森城主長屋左衛門尉宗綱は鍋山豊前守利景の急襲をうけ滅びた。その子宗之は利景に十年がかりで復讐の後、片眼を焼き指をつぶし、鼻や耳をけずり、片足を折って重労働に従わせた。戦国を舞台に環境次第で、残酷無比になれる人間の業と生きざまを簡潔な文体で見事に描出した作品集。（尾崎秀樹）

武士道残酷物語　南條範夫　27—2

己れの妻と娘とも知らずに修蔵は暗闇に座っている女二人を斬った！ 主君の安高は残虐な笑いを浮べ修蔵に褒美をとらせた。信州矢崎の小大名・堀氏に仕えた飯倉家は切腹、男色、性器切断、娘の妾奉公などあらゆる屈辱や嗜虐に耐えて家を守った。武士道社会におけるマゾとサドを内包した主従関係をえぐり出した作品集。（清原康正）

わが恋せし淀君　南條範夫　27—3

雑誌の編集者・誠之助は長い間恋いこがれていた淀君の取材のため、大坂城の石垣にもたれていた。豊かな黒髪の下に絶望と瞋恚に瞳をひからせた妖しく美しい淀君が火に逐われる姿を夢想している時、石がぐらりと動き、誠之助は慶長十九年にタイムスリップして……。大坂冬・夏の陣に揺れ動く淀君と家臣を描いた傑作！（星新一）

暁の群像　上・下巻　南條範夫　27—4,5

三菱財閥の創始者——岩崎弥太郎は土佐藩下士層のいごっそう。幕末、勤王党に加わらず、時代の波にうまく乗り、土佐藩の経済的実務にたずさわるうちに政商としての地位を固めていく。明治新政府の中枢にくいいるため饗応政策を積極的に行った弥太郎の生涯を黎明期日本の歴史を動かした群像と共に描いた雄大な歴史小説。（尾崎秀樹）

古城物語　正・続　南條範夫　27—6,7

築城が終わると、城の設計者は抹殺される運命にあった。しかし、多聞城と志貴山城の天守閣を築いた中村正清は脱走し、信長に拾われ安土城を完成する。あらゆる術策を用い築城家の不当な運命と闘う正清の一生を描いた「安土城の鬼門櫓」他、城に秘められた人間の野望、怨念、残酷さを描いた城郭ファン必見の短篇集。（鈴木亨）

鉄砲商人　南條範夫　27—8

永禄十一年、織田信長は堺の町に矢銭を課した。堺の会合衆はこれを拒絶し、浪人隊を傭い入れ織田の攻めに備えた。鍛冶職で鉄砲商人の徳左衛門は偵察にきた信長の使者・藤吉郎に堺の会合衆を名乗り、裏で話をつけた。戦国時代を陰であやつった鉄砲商人のすさまじい才智と欲を描いた表題作他、各種商人の活躍を描く。（山田智彦）

妖説五三ノ桐　戸部新十郎　28—1

真田幸村の首があがった。検分に立ち合った家康の高潮した顔から血の気が失せ唇は紫色に変わった……。大坂城落城の際、秀頼と九州に落ちのびた真田幸村は実は猿飛佐助によって〝断末魔の術〟を施され再生した影であった。忍び者、剣豪の闘いを通して、〝秀頼の薩摩落ち〟伝説にせまる妖艶かつ痛快な長篇伝奇。（石井冨士弥）

伊賀忍法帖　山田風太郎　29—1

戦国の梟雄松永弾正は主筋の三好義興の妻女右京太夫に邪恋を抱いた。自分の想いを遂げるため幻術師・果心居士配下の根来僧七人に催淫剤を作るべく美女狩りを命じた。堺の色街一の美女篝火を妻に得て故郷に帰る若き伊賀忍者・笛吹城太郎は最愛の妻を殺され、復讐に燃える！ 奇想天外な忍法合戦の決定版。（縄田一男）

柳生忍法帖　上・下巻　山田風太郎　29—2,3

会津四十万石加藤明成は淫虐の魔王ともいうべき大名。家老の堀主水は毎々諫言をするが、ついに主家を見限って退転し一族の女を鎌倉の東慶寺に託し高野山に入る。怒り狂った明成は幻法を操る会津七本槍を使い女達を捕えようとする。沢庵と柳生十兵衛に助けられ、芦名一族に復讐する女達。忍法対剣法！ 一級の忍法帖。（磯貝勝太郎）

江戸忍法帖　山田風太郎　29—4

四大将軍家綱には中臈お丸の方が生んだ葵悠太郎が秘かに育てられていた。愛妾おさめの方を綱吉に献じ、将軍の子を自分の長子としていた柳沢吉保はその事実を知り、甲賀七忍衆に命じ悠太郎の暗殺を命ず。六代将軍の座をめぐって吉保、悠太郎、水戸黄門、忍者らの死闘と愛がくりひろげられる！ 好評忍法帖第三弾！（清原康正）

忍法忠臣蔵　山田風太郎　29—5

「忠の一字は守らねばなりませぬ。どうぞお許しください」——思わぬ許婚の言葉に大奥御座敷の伊賀者・無明綱太郎は怒り、初伽の時、おゆりを活造りにして綱吉に呈した。女の忠義を憎む綱太郎の前に現われた上杉家の国家老の息女織江。ひょんな事から赤穂浪士の仇討ち騒動に巻き込まれた綱太郎の行く手には……!?（平岡正明）

風来忍法帖　山田風太郎　29—6

天正十八年、北条方の小田原城は秀吉の軍に包囲されていた。武州・忍城の留守を石田三成の水攻めから守る太田三楽斎の孫娘・麻也姫！ 麻也姫を助ける香具師七人。そのリーダーの悪源太に激しい愛執を覚える女忍者、風摩組等の機智、詐術、秘術が入り乱れる忍法合戦の果てにあるものは!?（新保博久）

魔界転生（上・下）　山田風太郎　29—7,8

自分の指を切り女を犯して忍体を変え、その忍体と現世に不満を抱く死者が交われば、生まれ変われる——という超忍法を編み出した天草四郎の軍師森宗意軒！ 小西行長の呪咀に端を発し紀伊の頼宣を巻き込んで次々と魔界に転生する武芸者対柳生十兵衛！ 凄惨と戦慄の連続で息をもつかせぬ忍法帖の最高傑作！（細谷正光）

山田風太郎
海鳴り忍法帖
29—9

宣教師フロイスは怖ろしい日本の魔術を見た——公方・足利義輝の剣術師範、上泉伊勢守の弟子と松永弾正配下の根来忍者の試合を！「公方様、勝った方に何でも与えるお約束の履行を、奥方様か、お方のいずれかを……。」舌なめずりをして弾正は言った。堺の町を織田軍がからみ、美少年厨子丸の復讐が始まる！ (縄田一男)

山田風太郎
甲賀忍法帖
29—10

甲賀弦之介と朧は白刃をひっさげじっと向い合った。朧の刀が弦之介の胸まであがった。と、この時、思いがけない事が起った。……阿福の顔色が一変した。「だれが弦之介を討ってたも。」朧が敗れた！ それは竹千代の敗れた事であった。徳川三代将軍の座をめぐり甲賀と伊賀忍者各十がくりひろげる凄絶な死と愛！ 代表作。(北上次郎)

鷲尾雨工
吉野朝太平記（一～五）
全五巻
30—1～5

楠正成亡き後、南朝の中心となり戦う兄・正行とは性格を異にする正儀は変節漢で、歴史上、謎に包まれた人物。目的のために手段を選ばず、時には北朝方の武将と手を結び、時には愛人を敵方に送りこみ、南北朝合一に命をかけた正儀に焦点をあて豊かな構想のもと、動乱の南北朝時代を描いた歴史大作！ 第二回直木賞受賞。(尾崎秀樹)

鷲尾雨工
織田信長（一～六）
全六巻
30—1～11

尾張のうつけ者と呼ばれた信長は、父・信秀の死後、弟を殺し尾張を統一する。信長は家康と同盟を結び、武田の周囲の斎藤義龍、今川義元、浅井、浅倉、武田の群雄らを次々と破り、長篠に鉄砲を用いて武田勝頼を破り、安土に城を築く。戦国の風雲児・信長の豪放な生涯を文学史上初めて描いた歴史大作！ (尾崎秀樹)

鷲尾雨工
続・織田信長一～三
30—12～14

安土城を築いた竹中半兵衛、黒田官兵衛という知恵袋を家臣にした秀吉を中国の毛利と対峙させた。一方、石山本願寺を攻め、畿内一円を手中におさめ、甲斐の武田を滅ぼした。が、天下統一を目前にして信長は明智光秀の謀反により、炎に包まれた本能寺で生涯を閉じた。不世出の英雄を文学史上初めて描いた傑作。(塩浦林也)

鷲尾雨工
日本剣豪伝
30—15

ピタリ！ 鮮やかな鋩子尖が停まった。北畠卿は鼠を斬るのを止めた。太刀先より速く心が動いて心機が一転したからだ。「お見事！ その心！」襖口で微開えむ塚原卜伝。——宮本武蔵、荒木又右衛門、柳生宗厳、上泉信綱、伊藤一刀斎、神子上典膳、諸岡一羽ら、剣豪にまつわる秘話、剣法の奥儀を描いた傑作列伝。(武蔵野次郎)